日本漢文史籍叢刊

第五輯

目錄

十八

第十八册目録（總第138册）

石川利之 著

群書類従續群書類總目

明治三十五年（一九〇二）東京經濟雜志社鉛排本

據明治三十五年（一九〇二）

東京經濟雜志社鉛排本影印

群書類從

總目錄
書名索引
略解題

續群書類從總目錄幷書名索引

溫故堂塙先生傳幷塙檢校年譜

群書類従入用

上美濃十枚ニ付四匁八分ゟ八厘五六分
六厘ツヽ表紙裏紙仕立料共一冊ニ付壱匁ツヽ
中ニテ入ル　但シ美濃紙ニテ八拾枚ニ付四匁五分ゟ三匁五分
三匁也

上段	中段	下段
神祇　二十一冊　百三拾六匁餘	帝王　拾九冊　九拾弐匁三分	補任　二十八冊　百弐拾七匁餘
系譜　七冊　三拾四匁餘	傳　八冊　三拾七匁餘	官職　五冊　拾八匁八分
律令　十冊　四拾匁餘	公事　四十冊　百七拾八匁餘	装束　十四冊　六拾弐匁餘
文筆　二十冊　八拾弐匁弐分	消息　九冊　三拾八匁餘	和歌　九十冊　八百六拾六匁餘
連歌　五冊　弐拾三匁餘	物語　十九冊　八拾九匁餘	日記　十冊　四拾三匁餘
紀行　十四冊　六拾四匁弐分	管絃　十三冊　五拾七匁餘	蹴鞠　三冊　九匁五分
鷹　二冊　拾七匁七分	遊戯　六冊　弐拾四匁弐分	飲食　五冊　拾九匁餘
合戦　四十冊　百九拾三匁餘	武家　三十冊　百三拾弐匁弐分	釈家　二十三冊　百六匁餘
雑　百十三冊　四百三拾七匁餘	凡二貫九百五六拾目餘　但上美濃之積り	

凡例

一群書類從總目錄は初版には之を第一輯の卷首に收めたれども今その下に輯。卷。及び頁數等を注して本卷に收め以て書名索引。略解題と對照する便に供したり

一群書類從書名索引は本書收むる所の原名の外故檢校の題名を加へたるものあり或は舊來同一のものにして二三の書名あるものあり或は略稱等ありて總目錄のみにては檢索の不便勘からざるを以て今之を作りて本卷に收め原名にあらざるものはすべてその下に「重出」と注し之を區別したり

一索引の配列は五十音順としイとヰ。エとヱ。オとヲは發音相似たるを以て之を合叙したり續群書類從書名索引また同じ

一續群書類從總目錄は群書類從正續參看の便に資せん爲めにまた之を收めたり續群書類從印刷功成るに從ひ讀者各書名の下にその頁數等を注せば其便更に大なるべし書名索引また之に倣へり

一群書類從略解題は書目の下に著者內容及びその年代等を略述したるに過ぎず以て閱讀の栞となし讀者の勞を省くものあらば幸なり

一温故堂塙先生傳及び塙前總檢校年譜は群書類從上木の擧が故檢校一生の大事業たりしを

見るに至るを以てまた之を卷尾に附收したり

目次

附錄

第二輯

帝王部凡三十六種

第三輯

補任部凡廿五種

第四輯

系譜部凡十八種

官職部凡八種

律令部凡五種

第五輯

公事部凡五十九種

群書類從總目録　公事部

第六輯

装束部凡廿一種

消息部凡廿種

第七輯

和歌部

群書類從總目錄　和歌部　十四

第八輯

和歌部歌合凡百八十七種

第九輯

和歌部家集凡九十三種

第十輯

和歌部家集凡四十四種

第十一輯

物語部凡二十種

日記部凡八種

紀行部凡三十九種

第十二輯

管絃部凡二十一種

飲食部凡十三種

第十三帙

合戰部凡六十五種

第十四輯

武家部凡七十七種

第十五輯

釋家部凡七十八種

群書類従総目録　釋家部

第十七輯

雜部　凡三十七種

第十七輯

雜部凡七十種

群書類從總目錄　雜部　　　　四十二

第十八輯

雜　部凡七十一種

群書類從總目錄　雜部　四十四

(以下空)
総計凡一千二百七十種或合或分為六百六十五冊

群書類従総目録畢

群書類從書名索引

ア

イ及井

ウ

エ及ヱ

カ

群書類從書名索引　カ

ク

コ

シ

群書類従書名索引　シ

ス

群書類從書名索引　七

セ

七十二

ソ

群書類從書名索引　タ

七十八

ツ

テ

ト

ノ

ハ

ヒ

フ

群書類從書名索引　フ

マ

ム

メ

群書類從書名索引　ルレロ

群書類從書名索引終

續群書類從目錄

祇神部凡百六十六種

續群書類從目錄　神祇部

續群書類從目錄　神祇部

帝王部凡二十種

續群書類従目録　帝王部　補任部

補任部凡四十九種

續群書類從目錄　系圖部

傳部凡百九十一種

百十

續群書類從目錄　傳部

官職部 凡三種

律令部 凡二種

公事部凡百十八種

續群書類從目錄　公事部

装束部凡十種

文筆部凡五十種

消息部凡七種

続群書類従目録　和歌部　　百二十二

續群書類從目錄　和歌部

卷第四百廿二
永德元年室町第行幸詩歌
寛正五年仙洞三席御會詩歌　文明年中聽製詩歌
文龜三年春日社法樂詩歌
永祿五年一乘谷曲水宴詩歌　畠山匠作亭詩歌
卷第四百廿三上下
後鳥羽院御集
卷第四百廿四上下
順德院御集
卷第四百廿五
光嚴院御集　邦高親王御集
卷第四百廿六
等持院贈左府御集
卷第四百廿七
慈照院准后御集
卷第四百廿八
後福照院殿御詠草　後妙華寺殿御詠草
卷第四百廿九上下
中園相國御集
卷第四百三十
權中納言定賴卿集

百二十四

卷第四百卅一
權中納言爲相卿集藤谷集
卷第四百卅二上下
入道大納言爲家卿集二卷
卷第四百卅三上下
前大納言爲廣卿集[illegible]
卷第四百卅四
前大納言爲廣卿詠草
第卷四百卅五上下
前參議教長卿集貧道集
卷第四百卅六
前參議爲冬卿集
卷第四百卅七上下
前參議時慶卿集
卷第四百卅八
參議時直卿集
卷第四百卅九
藤原爲賴朝臣集　大江匡衡朝臣集
藤原家經朝臣集
卷第四百四十
平忠盛朝臣集　藤原信實朝臣集

連歌部凡六十六種

続群書類従目録　連歌部　物語部　百二十八

日記部凡三種

紀行部凡八種

管絃部凡廿一種

遊戯部凡廿一種

飮食部凡十三種

合戰部凡百廿三種

續群書類從目錄　合戰部

百三十四

續群書類從目録　合戰部　百三十五

續群書類從目錄　合戰部　武家部　百三十六

續群書類從目錄　武家部

續群書類從目錄　釋家部　百四十

卷第七百十九
御質抄
卷第七百二十
後七日御修法出仕作法
後七日御修法部類
卷第七百廿一
永治二年眞言院御修法記
養和二年後七日御修法記
卷第七百廿二
文治五年眞言院御修法日記
建保三年後七日御修法記
永享六年後七日御修法記
卷第七百廿三
維摩會記
永祿六年維摩會日記
卷第七百廿四
晴法深祕抄
卷第七百廿五
祈雨日記（[illegible]）
卷第七百廿六
雨言雜祕記
卷第七百廿七
永久五年祈雨日記
建久三年祈雨日記
卷第七百廿八
祈雨法記（[illegible]）
永久五年請雨經法記
同年請雨經法支度注進狀
同年請雨經御修法支度記
水天供現行記
止風雨法記
卷第七百廿九
孔雀經法記（[illegible]）
建久三年孔雀經法記
卷第七百三十
孔雀經法記（[illegible]）
孔雀經御修法記（[illegible]）
卷第七百卅一上下
安鎭法日記（[illegible]）
卷第七百卅二
安鎭法日記（[illegible]）
卷第七百卅三
普賢延命法日記（[illegible]）
建久二年普賢延命法日記
卷第七百卅四
建保五年普賢延命法日記
熾盛光法日記
六字河臨法記
卷第七百卅五
永仁年中北斗法記
德治二年北斗法記
五壇法日記（[illegible]）
卷第七百卅六
五壇法記（[illegible]）
七佛藥師法現行記（[illegible]）
四天王法記（[illegible]）

續群書類從目錄　釋家部　百四十二

三寶院傳法灌頂私記　佛母心院傳法灌頂記
卷第七百五十三
寛元四年結緣灌頂記[illegible]
卷第七百五十四
建武二年結緣灌頂記[illegible]
卷第七百五十五
永和二年結緣灌頂記[illegible]
卷第七百五十六
延文四年結緣灌頂記[illegible]一回忌
康暦元年結緣灌頂記[illegible]十三回忌
卷第七百五十七
觀音院恒例結緣灌頂記[illegible]
東寺寶泉院結緣灌頂雜記[illegible]四年
卷第七百五十八
宸筆御八講記[illegible]
卷第七百五十九
文永七年宸筆御八講記
卷第七百六十
應安三年禁中御八講記
卷第七百六十一
公武御八講部類
卷第七百六十二
武家御八講部類　等持院御八講記[illegible]一年
卷第七百六十三
大治二年万陀羅供次第
卷第七百六十四
法守親王曼荼羅供次第
卷第七百六十五
應安七年曼荼羅供見聞略記[illegible]
永享十一年曼荼羅供記[illegible]七回忌
卷第七百六十六
永享十二年曼荼羅供雜記[illegible]三回忌
永祿元年曼荼羅供雜記[illegible]三回忌
卷第七百六十七
文龜二年曼荼羅供記[illegible]十三回忌
卷第七百六十八
應安元年禁中御懺法講記　應永十三年禁裡御懺法講記
同廿一年仙洞御懺法講記
卷第七百六十九
諸寺略記
卷第七百七十上
諸寺供養部類

續群書類從目錄　釋家部　百四十四

雜　部凡二百卅七種

続群書類従目録　雑部

百四十八

續群書類從目錄　雜部

續群書類從目錄　雜部

續群書類從目錄　雜部

（原本云）
總計凡二千一百三十種或合或分爲一千一百八十五冊

續群書類從目錄終

續群書類從書名索引

ア

イ

群書類從書名索引　イ　ウ

ウ

オ及ヲ

續群書類從書名索引　オ

百六十四

カ

續群書類從書名索引　カキ

キ

百六十八

ク

ケ

コ

百七十四

サ

續群書類從書名索引　サ

シ

続群書類従書名索引　シ

続群書類従書名索引　七

百八十五

群書類從書名索引　タ　　百八十八

續群書類從書名索引　チ

ナ

フ

群書類從書名索引　フ　ヘ

ヘ

ホ

二百二

ム

メ

ロ

ワ

續群書類從書名索引　終

羣書類從略解題

本書開板のはじめ。目錄を印行して世に頒ちしとき。表紙の裏に記していふ。

一此書の趣意は。本朝の古書多くありといへども。世々の兵亂度々の大火につきて過半亡失す。今其幸に殘れるもの一千貳百七十三種。集めて六百七十册となし。梓に上て以て不朽に傳んことを思ひ。去安永八亥年より　天滿宮に祈誓して。毎朝鹽味をたち。般若心經百廿卷を讀誦し。開板の速にならむことをねがふのみ。

以て本書刊行の苦心を察すべきなり。奥に掲げたる一紙は。以て當時本書の定價を知るべく。また以て本邦豫約出版の先轍をつけたるを見るべし。若しそれ故撿校一世の事に至つては。附錄に收めたる中山信名の溫故堂塙先生傳。塙前撿校年譜等に就てその一斑を窺ふべし。我が社旣に群書類從の刊版を完成し。今略解題を作りて讀者の便に供ふ。思ふに塙撿校の地下に喜ぶところなからざらむや。

第一輯

神祇部

卷第一

皇太神宮儀式帳

一に内宮儀式帳といふ。延曆廿三年八月廿八日。太神宮司大中臣眞繼。禰宜荒木田公成。大内人磯部小繼等進署して。伊勢内宮に供奉する儀式。幷に年中三節の祭。及び年

中神態等を朝廷に注進したるものなり。新宮造營。禰宜内人物忌の職掌。及び神郡神田等の事に至るまで。合せて廿三箇條あり。

卷第二

止由氣宮儀式帳

延暦廿三年三月十四日。太神宮司大中臣眞繼。禰宜神主五月麻呂。及び内人等連署して。伊勢豐受大神宮の儀式。及び禰宜内人物忌等の年中行事を朝廷に注進したるものなり。合せて九箇條あり。皇字沙汰文は本書の參考に供すべし。

卷第三

太神宮諸雜事記 二卷

垂仁天皇即位廿五年。天照大神を大和國宇陀郡に遷し奉りしより。後三條院延久元年に至る。内外兩宮の雜事記なり。一本には久安二年の記事も見えたり。

卷第四

神宮雜例集 二卷

内外兩宮の雜例を集めたるものなり。恐くは外宮禰宜等の手に成りしならむ。卷一に御鎭坐の事。兩宮朝夕御饌の事。御井社の事。神封神田御厨御園の事等を載せ。卷二に神宮の四至。内侍所。心御柱。天平賀。政印。及び年中行事等を載せ。記事は文治六年に至る。

卷第五

二所太神宮例文

また兩宮の雜例を集めたるもの。合せて廿六箇條あり。荒木田。度會兩氏の遠祖奉仕の次第。祭官。祭主。禰宜等の補任。及び恩賞加階の事より。齋内親王。公卿勅使の

參宮次第。正遷宮。臨時遷宮。及び假殿遷宮の次第に至るまで。各々年代を追ひてその例を載せ。記事は永祿十二年を以て最終とす。

卷第六

內宮長曆送官符

長曆二年九月七日の太政官符にして。伊勢大神宮の御裝束。幷に神寶雜物等を送り奉りたる目錄なり。是を送官符とはいふなり。

外宮嘉祿三年山口祭記

嘉祿三年十月十五日の外宮山口祭の日記なり。記事は同年五月十三日の綸旨より。寬喜元年三月廿三日に至る。

卷第七

貞和御餝記

一に御遷宮餝行事といふ。貞和元年十二月。伊勢大神宮御遷宮の時。御裝束等を餝り奉りたる圖記なり。

內宮臨時假殿遷宮記

禰宜　荒木田守晨

明應六年十月の同遷宮記にして。造宮所下知。木作始。御裝束。宣命。及び供奉の人人に至るまで之を具載したり。當時神宮の殿頹を徵すべし。記事は明應五年六月に始まる。

卷第八

治承元年公卿勅使記

三條實房

治承元年八月三日より同月十九日まで。三條實房勅使として。伊勢神宮に參向せし日記にして。實房の日記なる愚昧記中の一節なり。

正應六年七月十三日公卿勅使御參宮次第

權禰宜　荒木田　尚國

正應六年。公卿勅使參宮の時。勅使權中納言藤原爲兼以下神祇官の參列。御拜。着座の次第を始め。祿物。物忌等の交名。裝束の次第及び宣命等を記したるものなり。

卷第九

神鳳鈔

內外兩宮の御領。諸國の神戶。御厨。御園。神田。名田等を記したるもの也。「延文五年三月日。本宮注進本。幷外宮一禰宜晴宗神主之本等。勘之書寫之。注文之內。朱點者延文四年二宮進官注文自本所令合點。墨點者自其以來書入云々。以泰昌神主本書寫之。但今度皆以墨書。氏經」と奧書に見えたり。以て本書の性質を知るべし。

卷第十

古老口實傳

伊勢神宮の年中行事。其他禰宜の勤役。御裝束。宿衞。觸穢。禁法等。禰宜等の心得べき雜事を記したるもの。外宮の禰宜西河原後長官行忠神主の撰錄したる所なり。

詔刀師沙汰文

元弘二年三月。內宮祠官等言上して。諸國參詣輩捧る所の幣物を外宮祠官等が抑留する非儀を停止せんとを訴へるに對し。同年五月。外宮の祠官等また陳狀して。兩宮兼行の事を爭ひたる沙汰文なり。奧書には內宮方人々閉口了と見えたり。

卷第十一

元亨元年十一月廿二日高宮假殿日記

伊勢外宮高宮假殿御裝束。御出。遷御の次第より。假殿用途物分配の事に至るまで。之を載せたり。記事は元亨元年十一月十八日より廿三日に至る。正平廿四年の奥書によれば。禰宜度會神主章尙の父の記す所なり。

卷第十二

高宮御裝束奉餝日記

元亨元年十一月廿二日。高宮假殿遷宮の時。禰宜の懷中したる者なり。記者前に同じ。

小朝熊社神鏡沙汰文

小朝熊社神鏡紛失に關する沙汰文なり。建久十年五月一日に始まり。天福二年正月十二日に終る。

卷第十三

八幡愚童訓 二卷

上卷には先づ異敵の襲來を記し。神功の征韓。應神の降誕より。欽明の朝の託宣。和氣淸麿の宇佐使。其他代々の託宣冷命を載せて。文永十一年の蒙古襲來に及び。下卷には先づ箱崎宮の事を載せ。弘安四年蒙古襲來の事を詳記し。放生會の起り。西大寺思圓上人の事より。八幡大菩薩の神德に及び。佛說を引き國史の事實を交へて。八幡宮の垂跡。名號。遷座。本地。正位。氏人等の事を總述したるものなり。記事妄誕多しといへども。參考に資すべきものまた少からず。

卷第十四

石淸水八幡宮護國寺略記

貞觀五年正月。大安寺の行敎記す所の護國寺建立の緣起なり。貞觀元年。行敎宇佐宮

に參訴し。託宣を蒙りて朝廷に言上し。男山に八幡を奉祀し。宮寺を興隆せし事を記したり。また收めて朝野群載にあり。

宮事緣事抄

石淸水八幡宮の事に關し。類を分て之を記したるもの。本書は僅に敍御前事。燒屋鈴事の二條を收むるに過ぎざれども。石淸水田中俊淸氏の所藏すべて數十卷あり。

石淸水放生會記　　左大史　卜部兼治

明德四年八月十五日の放生會記なり。

權別當宗淸法印立願文

建保五年正月廿七日。石淸水護國寺權別當宗淸の立願文にして。式部權少輔大江周房の草する所なり。田中俊淸氏藏する所の八幡告文部類にその原書を傳へたり。

石淸水御願書　　後伏見院御製

元亨元年十月四日。後伏見院の石淸水八幡宮に奉り給へる御願文なり。持明院統の皇位を繼ぎ給はんことを懇禱し給へるなり。原書は今京都廬山寺の藏にかゝる。

卷第十五

賀茂皇太神宮記

賀茂皇太神の山城國に遷座し給へることより。齋院の御禊。關白の賀茂詣。賀茂の葵祭。五月五日の競馬。十一月の臨時祭。中祀に准じ給ふこと。賀茂行幸の事。延曆遷都の事。賀茂齋院の事に至るまで。その神德を述べたるものなり。記事は王朝の末に至る。應永廿一年の奧書あり。冷泉羽林の筆跡なりといふ。

文永十一年賀茂祭繪詞

文永十一年。賀茂祭の繪詞にして。その繪は龜山院御繪合の時。經業卿の調進する所なり。畫は爲信卿。詞は定成朝臣之を書せりといふ。

加茂社御願書　後伏見院御製

嘉曆三年九月四日。後伏見院の賀茂社に奉り給へる御願文なり。持明院の統量仁親王の。皇位を繼ぎ給はんことを祈り給へるなり。

卷第十六

春日權現驗記

合廿卷。繪は右近大夫將監高階隆兼。詞は前關白基忠父子四人の書する所。承平詫宣の事より。嘉元神火の事に至るまで。五十八箇條あり。延慶二年三月進むる所なり。

卷第十七

春日社記

御殿。若宮。末社。垂跡。位記。造營。遷宮の始より。御八講。臨時祭。十六箇條等の始に至るまで。之を略記したるもの。一に春日小社記といふ。

春日太明神垂跡小社記

神護景雲二年。春日太明神の垂跡遷座し給ふ事を始め。御寶殿。內殿。若宮。末社の事を略記したるもの。長承二年。神宮預中臣祐房。注を加へ清書せし所なり。

春日神木御入洛見聞略記

應安四年十一月春日の神木入洛の事より。仝十二月神木歸座を一段とし。康曆元年八月また御入洛。十二月歸座ありし事の顚末を略記したるものなり。

さかき葉の日記　二條良基

貞治五年八月。春日神木歸座の有様を述べ。八十餘の老法師の言葉によせ。春日明神の由來神德を記したるものなり。

卷第十八

大三輪神三社鎭座次第

大三輪神三社たる奧津磐座大物主命。中津磐座大巳貴命。邊津磐座少彦名命の鎭座次第にして。神階。祭禮。別宮。小社等の事を記したるなり。嘉祿二年の撰とす。

大倭神社注進狀

仁安二年二月。大倭神社の鎭座を注進せしものにして。本社及び相殿別社等の事を具狀したり。後に率川神社記を載す。また注進狀を獻上せる時期述したるものなり。

廣瀨社緣起

天文廿四年九月。卜部兼右が累家祕傳の神抄と。社家緣起とによりて記す所なり。外題は宸筆を染められたる者なりといふ。

日吉社神道祕密記

禰宜　大藏卿祝部行丸

日吉明神の垂迹を始め。洛中所々の神社。社務祝部の系圖。大宮方。二宮方。八王子。十禪師等の圖を載せ。これを說明したるもの。蓋し神祕の說と稱すべきものならん。天正十年十一月記する所なり。

日吉神輿御入洛見聞略記

應安元年八月。日吉神輿入洛の事に始まり。同三年四月。七年六月また入洛ありし事より。康曆二年六月。七社御輿遊從の事に終る。春日神木御入洛略記の著者と同人の記なるべし。

卷第十九

北野縁起

北野天滿宮の縁起にして。北野古縁起と稱するもの即ち是なり。天慶五年七月。託宣によりて北野右近馬場に奉祀せしことを記す。漢文なり。

北野縁起 三卷

前者と區別してまた北野宮縁起といふ。菅公一生の行事等より。左遷の後天滿大自在天神となり。託宣によりて北野に奉祀せられ。その後また屢々託宣の事あるを記したり。和文なり。

兩聖記　右大將長親

無準和尚が夢に菅公の受衣し給へる事を記し。また明德の頃。僧月溪が夢に。ある島の中にて天神を拜し奉りたりしが。天神受衣の御姿の圖と。俄貌衣冠少しも違はざりし事を敍せ。天神無準の兩聖を贊したるものなり。

菅神入宋授衣記

天滿天神宋に入り。佛鑑禪師無準に參得し。親しく僧伽梨を傳へて。西都靈岩神護山光明藏神寺に安置したる流記なり。

卷第二十

天滿宮託宣記

天曆元年三月。永觀二年六月。正曆三年十二月。同四年八月。及び同十一月等の天滿宮の託宣を記したるものなり。

菅家御傳記　菅原陳經

菅原道眞の系統。一生の履歷。及び御託宣の事を。六國史。氏族志抄。新撰姓氏錄。菅原本系帳。公卿補任。及び家記文草等によりて編したるものなり。嘉承元年の作なり。

最鎮記文

貞元二年。北野の寺僧最鎮が。天滿宮の事を記したるもの。元年十一月七日の太宰府安樂寺の例に准じ。氏人を以て北野寺を領知せしむる太政官符を載せたり。その最鎮を以て寺務に補せられたるを以て。後代の爲めに之を記したるなりといふ。

梅城錄　　　　　　　　呆　　　　　　　　巻

天滿宮の聖德を讃したるもの。凡そ廿五章。章ごとに四句。元亨釋書。扶桑略記。聖廟記。菅家後集。其他の諸佛典を引用し。菅公一世の行事を記したり。以て扶桑略記等の缺文を補ふに足るものあり。

巻第廿一

廿二社本緣

伊勢。石淸水。賀茂。松尾。平野。稲荷。春日。大神。大倭。石上。廣瀨。龍田。大原。吉田。住吉。日吉。廣田。梅宮。祇園。北野。丹生河上。貴船等廿二社の緣起を略記したるものなり。

巻第廿二

二十二社注式

廿二社を定められたる次第を始め。廿二社に關する雜事を社別に記載せしものなり。

巻第廿三

大和豐秋津島卜定記

平安京が四神相應の地にして。比叡山を始め四方の山々に。諸神の影向し給ふよしを賛したる宣命體の文なり。

大日本國一宮記

諸國の一宮を列擧し。その國郡を註したるものなり。

延喜式神名帳頭注　卜部兼俱

國史及び風土記等を引用して。神名式に頭註を加へたるものなり。文安三年十二月。注進する所なり。

尾張國內神名牒

貞治三年。讀上ぐる所の尾張國神名帳なり。奧書に文治二年三月の宣命により。國中諸神皆位階を增し給ふとを記せり。本書三位以上の神階に上下の區別あるを以て。或は僞書となす說あり。猶考ふべし。

伊豆國神階帳

康永二年十二月廿五日。在廳より注進したる神名帳なり。

上野國神名帳

すべて五百七十九座。上野國の神名帳にして。中に鎭守十二社を別掲したり。

藤森社緣起　卷第廿四

山城紀伊郡藤森社の緣起なり。

尾張國熱田太神宮緣起

寬平二年十月十五日記する所の熱田宮緣起なり。

荏柄天神緣記

鎌倉荏柄天神の緣起にして。まづ寬弘元年十月。遷座ありし事より。菅公一世の事跡を記し。爾後度々の託宣。及び其他の神德を述べたり。作者は世尊寺行能なりといふ。建久頃の作なり。

宇都宮太明神代々奇瑞之事

文明十六年九月卅日記する所。記事は承平年中將門追討の事より。文永。弘安の蒙古

襲來に終る。宇都宮明神の奇瑞を記したるものなり。

卷第廿五

竹生島緣起

應永廿二年。頭陀普文叡山に登り。舊記を集めて此緣起を錄したるなり。

走湯山緣起五卷

伊豆國走湯山の緣起にして。その垂跡由來より。弘法大師巡禮の事を述べ。雷電及び深秘の說等。面授口傳の事を記したるものなり。記事は永延二年三月の延壽記に終る。

筥根山緣起

建久二年七月廿五日。別當行實の記したる相模國箱根山の緣起なり。

松浦廟宮先祖次第并本緣起

藤原廣嗣の系統を述べ。その一生の事歷を載せたる肥前國松浦宮の緣起なり。

卷第廿六

造殿儀式　北畠親房

先づ寶龜二年二月の官符を載せて。大中小社の差別をいひ。次に造宮の制度を述べたり。その文疑ふべきもの多しと雖も。世に傳ふる久しきを以て。塙氏姑く之を本書に收めたりといふ。

八幡御幸次第

石淸水八幡御幸の次第を注したるものにして。雅俊朝臣付進する所なり。

平野行幸次第

平野行幸の次第を注し。その前例等を勘じたるものなり。

神馬引付

文明五年より天文六年に至るまで。太神宮

其他の諸社に神馬を牽進めたる注文なり。原書明應以上は親元の筆。天文以下は親俊の筆なりといふ。

卷第廿七

太神宮參詣記　坂　士　佛

康永元年十月。士佛が太神宮に參詣したる日記にして。當時內宮外宮の有樣を見るに足るべし。士佛は醫師といひ。健叟と號す。民部卿法印たり。博學にして醫術に達せりといふ。

八幡宮社參記　足　利　義　政

康正二年三月廿七日より廿九日に至る。將軍義政が石淸水に參詣したる日記なり。末に明德二年三月廿八日。應永十年三月廿八日。應永十九年八月十五日。永享十年八月十五日。永享十二年十一月十五日の社參に隨從したる侍の交名を載せたり。

春日社參記　姉小路　基綱

寬正六年九月。左大臣義政に從ひ。春日社に參詣したる記にして。十三首の法樂の和歌等も見えたり。

卷第廿八

東家祕傳　北　畠　親　房

當流陰陽の理を以て。日本書紀の神代卷を解釋したるものなり。

寶鏡開始

伊勢兩宮鎭座本記。其他の書を引きて。寶鏡の事を注し。八咫鏡。無緣鏡以下御正體。幷に御撫物鏡に至るまで。十一種の寶鏡を圖したるものなり。

詠太神宮二所神祇百首和歌　度　會　元　長

巻二十首。夏十五首。秋二十首。冬十五首。戀十首。雜二十首あり。

雲州樋河上天淵記

出雲國仁多郡樋河上天淵の事を記したるものなり。永正年中。太守京極氏遊覧の事より。天淵大蛇の由來を述べたり。

第二輯

帝王部

巻第廿九

神皇正統記　　北畠親房

上は神代に始まり。下は後村上院践祚に終る。神系皇統の由て來る所を論じ。歴代の史實を評す。實に我國文明史の一牀を開きたるものといふべし。常陸國水戸六反田村六地藏寺藏本を尤も古鈔本となす。延元四年の秋。粗略の皇代記により。一巻の文書を齎へずして編述し。興國四年七月。更に修補したるものなり。

巻第三十

續神皇正統記　　小槻宿禰

神皇正統記に續て。光嚴院より後花園院に至るまで。十代の間の事を記せし者なり。一本にある長享二年舟橋秀賢の奥書には。文明年間の撰となす。東見記に續神皇正統記廿巻とあれば。本書はその抄本となす說あれども。未だその當れるを知らず。

椿葉記　　入道無品道欽親王

崇光院の御世より。後花園院永享五年正月天皇御元服に至る間の事を記し。稱光院の崩後。足利義教の議によりて道欽親王の御子後花園院を立つることを述べたるものなり。長講堂領研究の材料となすべし。道欽

親王は後崇光院の御事なり。

卷第卅一

皇代記

天神七代地神五代に始まり。人代神武天皇より後閑繼院康曆二年に至る。天皇御治世の概略を記し。皇子。皇女。及び后妃等を註したり。而して後伏見院の頃以來。漸次書繼ぎたるものなり。

卷第卅二

皇年代略記

天神七代地神五代に始まり。神武天皇より後陽成院慶長十六年に至る。天皇の御年代記なり。後柏原院以後。書繼ぎたるものに似たり。

卷第卅三

踐祚部類鈔

宇多天皇より後光嚴院に至るまで。踐祚の日時。儀式。及び上卿。内弁。宣命使。劔璽使の事等を記したるものなり。

大嘗祀職掌錄

宇多天皇より後花園院に至るまで。即位の大禮にあづかりし職掌の人名を注したるもの。奉行。内弁。外弁以下近衞府の官人に至る。

卷第卅四

本朝世記

本書收むる處は。康和元年及び五年の條中。幾年の條を拔萃したるに過ぎず。その今日に存せるものは。すべて之を蒐錄して。國史大系第八卷に收めたり。また舉世の餘澤といふべし。

庭槐抄

後德大寺實定

治承元年以降壽永元年に至る間。後德大寺左大臣實定公の日記につき。行幸の記事を拔萃したるものなり。

卷第卅五

皇帝紀抄

卷七は高倉院より土御門院に至り。卷八は順德院より後堀河院に至る。歷代の天皇紀を抄出したるもの。皇代曆。百練抄と出入して修史の參考に資すべし。帝王編年記と同書なるに似たり。

卷第卅六

六代勝事記

高倉院より後堀河院に至る。六代の事蹟を編したる和文にして。見もし聞きもせし事の忘れざるはし〳〵ばかり。世の爲め民の爲め。是を記したるものなり。

卷第卅七

五代帝王物語

後堀河院より龜山院に至る。五代の事蹟を編したる和文なり。略體裁前書に似たり。

卷第卅八

元德二年三月日吉社并叡山行幸記

此の卷は元德二年後醍醐天皇叡山行幸の事を記し。後の卷は永仁五年以來叡山の嗷訴其他の事を記したり。

舞御覽記

元德二年三月。後醍醐天皇北山殿に行幸ありて。舞御覽の事を記したるものなり。

卷第卅九

書寫山行幸記

權律師行春

元弘三年五月。後醍醐天皇伯耆國より還幸

の御時。播磨國書寫山に行幸ありし事を記したるものなり。

さかゆく花上

永徳元年三月。後圓融院將軍義滿の室町の亭に行幸し給へる記なり。

北山殿行幸記　藤原經嗣

應永十五年三月。後小松院前將軍義滿の北山の別莊に行幸ありし記なり。

北山殿行幸記 應永十五年三月八日

行幸の次第。供奉の百官。詩歌御會。及び連歌の御會。御進物の品々等を記したるもの。前者は和文。これは漢文なり。

卷第四十

室町殿行幸記

永享九年十月。後花園院室町殿に行幸ありし記なり。

永享九年十月廿一日行幸記

前のは漢文なるに、これは當時の時文體なり。

行幸御例

後小松院永徳行幸の事より。代々行幸の御例なり。また永徳以下行幸御例といふ。

卷第四十一

聚樂第行幸記　楠正虎

天正十六年四月。後陽成天皇關白豐臣秀吉の聚樂第へ行幸ありし記なり。秀吉の命によりて。楠正虎之を誌したりといふ。

天正廿年正月廿六日行幸聚樂第之行列

卷第四十二

聚樂第は時に關白秀次の邸なり。

御幸始部類記

正元三年十二月。新院御幸始。文永十一年二月。院御行始。弘安十年十二月。新院御幸始。正安三年二月。御行始等の記を類聚したる記録なり。

後光嚴院御幸始記　　廣橋兼綱

應安四年三月。後光嚴院北山第に行幸ありし記なり。

高野行幸記　　三條實行

天治元年十月。白川法皇弘法大師の靈廟を拜し給はんとて。高野山へ行幸ありし記にして。藤原實行敕旨を奉じてその概略を記したるものなり。

兩院熊野御詣記

天承元年二月。鳥羽院及び女院御熊野詣の精進以下の事を記したるものなり。

巻第四十三

賀茂行幸記

寛元四年四月。後嵯峨院賀茂御幸の事を記したるものなり。

賀茂御祖皇太神宮御幸記

建長六年十月。後嵯峨院賀茂御祖太神宮へ御幸ありし略記なり。

石清水臨幸記

文應元年八月。後深草院石清水八幡宮に臨幸ありし事を記す。奥書に葉室大納言顯親の自記歟と見えたり。

兩院石清水宮

弘長三年正月。後嵯峨後深草の兩院が、石清水宮に參籠ありし事を記したり。天皇の宸記なり。

石清水御幸記

弘安十一年正月。後宇多院が臨幸ありし事を記せるもの也。

八幡御幸記

延慶三年十月。後伏見院御幸の宸記なり。

龜山殿御幸記　權大納言雅言

文永五年十月。後嵯峨上皇龜山殿に御幸。十一月十六日還御の間の事を記せる者也。

臨幸私記　夢窓國師

貞和二年二月。同三年五年の春。光嚴院が天龍寺に臨幸ありし事。及び觀應元年八月。光嚴光明の兩院が同寺に御幸の事を略記したるものなり。

應永廿二年御幸記

十月廿九日。御讓位行幸御見物として。後小松院御棧敷に御幸ありし事を記したり。又益直記といふ。

第三輯

補任部

卷第四十四

齋宮記

崇神天皇の皇女豐鋤入姫命より。龜山天皇の皇女弉子内親王に至る。七十五代の伊勢齋内親王の御事を列記したるものなり。

賀茂齋院記

嵯峨天皇の皇女有智子内親王より。後鳥羽天皇の皇女禮子内親王に至るまで。賀茂齋院の御事を列記したるものなり。

攝關補任次第

藤原良房より。近衛前久に至るまで。攝政關白の補任を記したるなり。

卷第四十五

辨官補任 首闕

一條天皇寛弘七年に始まり。後鳥羽天皇建久八年に終る。宮内省所藏の元祿の寫本には。南北朝頃は闕けたれども。後光明院承應年間に至るまでの補任を載せたり。他日完本となすべし。

巻第四十六

職事補任

嵯峨天皇以來。後奈良天皇に至るまで。藏人頭及び五位藏人等の補任なり。

巻第四十七

藏人補任 首闕

今存する所嘉祿元年より。弘安十一年に至る。藏人頭以下五位六位の藏人非藏人等の補任を記したるものなり。

樂所補任 首闕

天永元年より。弘長二年に至る樂人の補任なり。聖書また補任の事を記したり。

巻第四十八

將軍執權次第

源賴朝以來。將軍執權及び六波羅探題等の次第を記したるもの。治承四年に始まり。元弘三年に終る。

足利家官位記

足利尊氏以後。十五代の將軍の官位補任の次第を記したるものなり。直義。滿詮。義嗣。義視の事をも附載せり。

巻第四十九

關東評定傳

嘉祿元年以來。弘安七年に至るまで。毎年の條下に執權評定衆及び引付衆等の人々の補任を記したるものなり。

卷第五十

若狹國守護次第

建久七年より。應永廿九年に至るまで。若狹國の守護職代々の補任を記したるものなり。

若狹國稅所今富名領主職代々次第

建久七年より。應永卅年に至るまで。若狹國今富名の領主代々の事を記したるもの。記者は前書と同一なるに似たり。

卷第五十一

類聚大補任

伊勢內外兩宮の祭主。宮司。及び禰宜等の補任なり。今存する所は。初めは闕けて清和天皇より村上天皇に終る卷と。安德天皇より仲恭天皇に終る第七卷と。後堀河天皇より龜山天皇に終る第八卷の三卷のみ。中に神宮に關係せる事實及び天皇攝政の事をも載せたり。

卷第五十二

豐受太神宮禰宜補任次第

度會神主の祖天牟羅雲命以下。禰宜正四位上行能に至るまでの補任にして。下文闕失せり。行能は永久頃の人なり。

卷第五十三

鶴岡八幡宮寺社務職次第

鎌倉鶴岡八幡宮別當の補任なり。記事は宮法眼圓曉に始まりて定雅に終り。永享十年に至る。卷末に八幡宮に關係したる雜事を記したり。

八幡宮御殿司職次第

御殿司職一方系圖

當社執行次第
當社學頭職次第
社家執事職次第

鎌倉鶴岡八幡宮御殿司職。執行職。學頭職。社家執事職等の補任なり。足利の季世戰國時代の始めに至るまでを記したり。

卷第五十四

僧綱補任抄出二卷　僧　深　賢

推古天皇卅二年。僧正觀勒僧綱に任ぜられしより。六條天皇永萬元年に至る僧綱の補任を。忠珍僧都の撰みたる東大寺東南院經藏本より抄出したるものなり。

卷第五十五

僧官補任。

天台座主。西塔院主。横川長吏。無動寺々務。天王寺別當。熊野檢校。園城寺長吏。平等院法務。興福寺別當。大師號。菩薩號。諡號。和尚號。附官位等の十四條に分ち。僧侶の官位補任等を記したるものなり。

卷第五十六

東大寺別當次第

小僧都良弁にはじまり。權僧正隆實（文安四年任。）に終る。百四十三代の東大寺別當の補任。及びその間の事實を記したるものなり。

卷第五十七

天台座主記

義眞和尚以來。二品尊胤法親王に至るまで。百六十七代の天台座主の補任なり。

卷第五十八

東寺長者補任

弘仁十四年。弘法大師東寺長者に補せられ

じより。毎年の條下にその補任を記し。貞治六年に終る。

卷第五十九

仁和寺諸院家記

仁和寺中眞光院。菩提院を始め。すべて七十八院の家記にして。之を管領したる僧侶の補任等を。院々の條下に記したるものなり。記事は德川時代萬治延寶の頃に至る。

第四輯

系譜部

卷第六十

本朝皇胤紹運錄

本書に收むる所は。もと天神七代より後桃園院に至る皇室の御系圖なりしが。本社更に御近代皇統紹運錄等によりて。今上天皇までを增補したり。而して塙氏は後陽成院以前は從來流布の印本を校正し。標注を加へて考證に備へ。後水尾院以下後桃園院までは。近代帝系及び諸家の記錄を以て補はれたるものなり。

卷第六十一

諸門跡譜

まづ僧正。法印。僧都。律師。其他長者。法務。三綱等の初例と。仁和寺の諸院を最初に管領したる人々を載せ。次に仁和寺。青蓮院。隨心院。蓮華光院。淨土寺。平等院。本覺寺。法住寺。安祥寺。妙香院。雙林寺。常住院。如意寺。毘沙門堂。聖護院。梶井殿。三寶院。勸修寺。圓滿院。一條院。大乘院。滋賀院。妙法院。實相院。曼殊院。大覺寺。東南院。上乘院。智恩院等の門跡傳を記したるものなり。記事は延寶頃に終る。

卷第六十二

中臣氏系圖
大中臣氏延喜六年の本系帳により。系附三年頃に至る同氏の系圖なり。別に宮司近代系圖として。承應頃までの系圖を附したり。

卷第六十三

菅原氏系圖
阿波守宇庭に始まり。天文永祿の頃に至る。

大江氏系圖
平城天皇に始まり。永正年間頃に終る。

橘氏系圖
敏達天皇に始まり。足利氏中世に至る。

紀氏系圖
孝元天皇に始まり。足利氏初世に至る。

小野氏系圖
敏達天皇に始まり。小野好古（康保五年薨ず。）に終る。

高階氏系圖
天武天皇に始まり。高師泰の子孫十一代にして。師重に終る。

清原氏系圖
天武天皇に始まり。船橋秀賢の子秀相に終る。

中原氏系圖
中原勝良に始まり。師廉に終る。

小槻氏系圖略
小槻今雄に始まり。伊治宿禰（文明頃の人。）に至る。

和氣氏系圖

垂仁帝に始まり。駿河瑞堅に終る。

丹波氏系圖

後陽成帝に始まり。秀康に終る。

安倍氏系圖

右大臣御主人に始まり。備宣に終る。

加茂氏系圖

吉備麿に始まり。在富在親（天文永祿頃の人。）に終る。

豐原氏系圖

天武天皇に始まり。量秋に終る。

巨勢氏系圖

巨勢金岡に始まり。長有。有傳等に終る。

傳部

卷第六十四

上宮聖德法王帝說

聖德太子の傳につき。諸記諸錄を採錄し。一々之が解釋を附したるものなり。

上宮聖德太子傳補闕記

日本書紀。曆錄。及び四天王寺聖德王傳錄の闕を補ひ。太子の傳を述べたるものなり。

家傳上　大師　惠美押勝

藤原鎌足の傳なり。

家傳下　僧　延慶

藤原武智麻呂の傳なり。

和氣淸麻呂傳

和氣淸麻呂が一生の事を記したるもの。その文は後紀及び扶桑略記と出入せり。

田村麻呂傳記　嵯峨天皇御製

坂上田村麿の傳にして。その深く嵯峨天皇の信任を得たるを以て。崩ずるに及て天皇親ら筆を執りて記し給へるなり。

白箸翁傳　紀長谷雄

當時の隱士白箸翁の事を記したるなり。

卷第六十五

女院小傳

圓融の后東三條院詮子に始まり。崇光院の御母陽祿門院秀子に終る。

三十六人歌仙傳

柿下人丸。紀貫之。凡河内躬恒。伊勢。大伴家持。山邊赤人。在原業平。僧正遍昭。素性法師。紀友則。猿丸大夫。小野小町。藤原兼輔。同朝定。同敦忠。同高光。源公忠。壬生忠岑。徽子女王。大中臣頼基。藤原敏行。源重之。同宗于。同信明。藤原清正。源順。藤原興風。清原元輔。坂上是則。藤原元眞。小大君。藤原仲文。大中臣能宣。壬生忠見。平兼盛。中務等三十六人の歌仙傳なり。

中古歌仙三十六人傳

和泉式部。相模。恵慶法師。赤染衛門。能因法師。伊勢大輔。曾禰好忠。道命阿闍梨。藤原實方。同道信。平定文。清原深養父。大江嘉言。源道濟。道雅卿。增基法師。在原元方。大江千里。公任卿。輔親卿。高遠卿。馬内侍。藤原義孝。紫式部。道綱母。藤原長能。定頼卿。上東門院中將。兼覧王。在原棟梁。文屋康秀。藤原忠房。輔正卿。大江匡衡。安法々師。清少納言等中古三十六人の歌仙の傳を記したるものなり。

卷第六十六

日本往生極樂記　慶滋保胤

我國の異相往生のもの四十五人の操行を記したるものなり。聖徳太子に始まり。加賀

國の女に終る。保胤の傳は元亨釋書に見えたり。

續本朝往生傳　　大江匡房

また續日本往生傳といふ。前書に續きたるものなり。一條天皇に始まり。源忠遠妻に終る。すべて四十二人の行業を記したり。

卷第六十七

仁和寺御傳　　沙門尊海

仁和寺草創の後。寛平法皇南御室と稱し給ひてより。後南御室覺深法親王寛永十一年伽藍御再興の事に至るまで。仁和寺御室の傳記なり。

卷第六十八

明匠略傳

日本の部上に。傳教。弘法以下十五人の傳を收め。下に行基菩薩以下廿二人を收め。且つ八祖以下散在の祖師六十六人の本房等の名字を注し。天竺の部には。龍樹。龍智。善無畏。金剛智。不空の五人。震旦の部には。思禪師以下十七人の傳を收めたり。皆本朝傳法に關係ある人々の略傳なり。

卷第六十九

唐大和上東征傳　　眞人元開

鑒眞和尚の傳なり。戒律を傳へんが爲めに支那より我國に入りしを以て。東征傳といふなり。

天台南山無動寺建立和尚傳

相應和尚の傳なり。

慈慧大僧正傳

天台座主良源の傳也。長元四年の作とす。

道場法師傳

尾張國の一農夫雷神の報を得て生みたる與

皃。後元興寺の僧に師事せしが。鬼と力を爭ひて遂に鬼害を絕せし事を記したるものなり。

性空上人傳

播磨國書寫山上人の傳なり。朝野群載にも出てたり。

南天竺婆羅門僧正碑

神護景雲四年。弟子修榮の撰する所なり。

興正菩薩傳

南都の中興西大寺思圓上人の傳なり。多少事蹟を誇張したるもののあるに似たり。

官職部

卷第七十

官職祕抄 二卷　兵部卿　平　基　親

神祇官以下。令外官に至るまで。補任の例を述べたるものなり。

卷第七十一

職原鈔　北畠親房

歷代官職の沿革。及び補任の次第を述べたる者。蓋し我國法制史の嚆矢と稱すべし。而かも一卷の文書を參考せずして此書を成す。其の博覽强記想ひ見るに足る。此書の名目に就ては。藤貞幹の好古日錄。壺井義則の官職浮說或問に說あり。つきて見るべし。

卷第七十二

百寮訓要抄　二條良基

將軍義詮の請により。百官諸司の官位昇進及び補任等の事を。和文にて略記したるものなり。

詠百寮和歌　尙大夫賢長

神祇伯以下。百官諸司の事を詠じたる者。

ば。故入道大殿のやまと唐土の百官の峯り侍る事をしるされて（百寮訓要抄を指すならむ。）下されたる一帖を。火神にとられし無念至極さに。かき集めたるものなり。

卷第七十三

官職難儀

吉田兼右

春宮。攝政。關白以下。官職の故實名目等に關し。問答躰に之を記したるものなり。

女房の官しなの事

今女房官品と稱す。禁裏。仙洞。執柄家。その外の女房の官品を記したるもの。永德二年の撰なり。

卷第七十四

任官勘例

太政大臣二箇度例以下。諸司百官の任官の例を勘じたるものなり。

任太政大臣記

後京極良經

元久元年。良經太政大臣に任ぜられたる自記なり。殿暦の一部となす。

律令部

卷第七十五

律

大寶二年藤原不比等敕を奉じて之を撰し。後養老年間修正を經たるものなり。今存する所は。五罪。八虐。名例律。衛禁律。（端闕。）職制律。賊盜律等となす。その逸せる處は律逸と稱し。政事要略。法曹至要抄。令集解等によりて集輯注釋せしものあり。日本古代法典に收めたり。

卷第七十六

金玉掌中抄

中原章任

律令。律疏等を引用し。罪條。八虐。六議。其他法曹に肝要なる條項を注釋したるものなり。

裁判至要抄　　坂上明兼

民法に關する裁判の事例を擧げ。律令格を引て之が案文を立てたるものなり。院宣を奉じて之を勘したると奥書に見えたり。建永二年の撰なり。

卷第七十七

法曹至要抄三卷　　坂上明兼

上卷には罪科條六十二條。中卷に禁制條十四條。賣買條八條。負債條一條。出擧條六條。借物條三條。質物條四條。預物條一條。荒地條三條。雜事條十七條。合せて五十七條。下卷に財産處分條十七條。喪服條五條。服假條廿三條。雜穢條十三條。合せて五十七條を載せたり。奥に載せたる長承序によれば。初め不比等。冬嗣。氏宗。時平等各敕を奉じて法曹至要といふものを撰ばれたれども。その繁多なるによりて。省略抄出したるものなりといふ。

卷第七十八

令抄　　一條兼良

令義解に就て。神祇令以下倉庫令に至るまでを抄出して。考證注釋したるものなり。

第五輯

公事部

卷第七十九

內裏式三卷

弘仁十二年藤原冬嗣等勅を奉じて修撰したるものを。天長十年清原夏野等の斟酌取捨せし所。年中の內裏諸儀の行事を記したる

ものなり。

卷第八十

新儀式

今存する所は。第四第五の二卷にして。朝廷臨時の儀式を記したるものなり。

卷第八十一

本朝月令

朝廷年中の行事を。國史其他格式の文を引き。由來及び儀式等を記せるもの。今存する所は。四月五月六月の三月のみ。

卷第八十二

雲圖抄　藤原重隆

朝廷年中の行事を圖にして。その次第を記したるものなり。裏書に御樂次第。女叙位次第以下。內侍所御樂次第に至る。年中行事の次第を載せたり。鳥羽院の御宇。按察中納言顯隆其弟右衛門權佐重隆に命じて抄出する所なり。

卷第八十三

九條年中行事

九條流の年中行事なり。卷首闕逸せり。末に臨時の行事及び宣旨等の事を載せたり。

卷第八十四

小野宮年中行事　小野宮右大臣實資

小野宮流の年中行事なり。また卷末に神事の服事以下。臨時の行事を載せたり。

卷第八十五

建武年中行事　後醍醐天皇

年中の行事を記し給へる中に。故事典例を舉げ給へるものなり。もとはたゞ御祕抄と號せられしといふ。壺井義知の校本には。後醍醐帝の御作にして。建武の頃。同帝復

位の後。北島一位准后入道綸命を奉じて修撰す。官府の故事を採り。法曹の遺例を摭ひ。用捨を審察し。古今を商量して書成りぬといへり。

卷第八十六

年中行事祕抄

朝廷年中の行事を記し。諸書を引てその典例を註釋せるものなり。卷末に諸祭の刻限及び雜事。諸政刻限。廢朝廢務の差別。祈雨請雨及び淸凉殿の行事。天子每日の御拜等の事を載せたり。

卷第八十七

年中行事歌合

年中の恒例臨時の行事を題とせし。貞治五年十二月。當座の五十番歌合なり。判者新中納言爲秀卿。判詞は關白二條良基公。作者合せて廿三人なり。

卷第八十八

神祇官年中行事

神祇官に於ける年中の恒例臨時の行事を記し。雜事の實例を擧げたるものなり。

東宮年中行事

東宮の年中行事を記し。今案を擧げて時に之が典例を示せり。惜むなくは三月以前闕脫したり。

卷第八十九

三節會次第

元日。白馬。踏哥の三節會次第を記し。之が典例を搨錄したるものなり。

釋奠次第　　定家

釋奠儀式の次第を記したるもの。間々之が故事を搨出し。卷末に釋奠の圖を揷みたり。

卷第九十

建久九年五節記　參議資經

建久九年十一月。五節參入の事を記したるもの。寬元二年二月。圓滿院宮より內裏の召ありと稱し御尋あり。淸書して進むる所なりといふ。

綾小路俊量卿記

五節の時の郢曲。其他の雜事を記したるもの、綾小路家の祕說なり。

朔旦冬至部類記

台記其他の記錄を引用して。朔旦冬至の記事を集錄したるものなり。

卷第九十一

後鳥羽院御踐祚次第

玉海の文なり。壽永二年八月廿日後鳥羽院踐祚の次第を記したるものなり。

後光嚴院御踐祚記　大外記　中原師茂

觀應三年八月十七日。後光嚴院御踐祚の事を記したるもの。師茂記の中なるべし。

後三條院御卽位記

治曆四年七月廿一日。後三條院御卽位の御事を記したるもの。又禮儀類典に見えたり。

正親町院御卽位略次第

弘治三年十月廿七日。正親町院御卽位の時の次第を略記せしものなり。

卷第九十二

永仁御卽位用途記

後伏見院御卽位の用途を。永仁六年八月。藏人所より注進したるものなり。

文安御卽位調度圖

文安元年正月。藤原光忠書寫する所の御卽

位調度の例なり。

卷第九十三

大嘗會御禊節下次第

正安三年十月。後二條院大嘗會御禊の節下次第なり。

延慶二年大嘗會御禊記　　從三位　良基卿

延慶二年十月廿一日。花園院大嘗會御禊行幸の事を記したるものなり。

大嘗會御禊日例

平安遷都以後。平城天皇大同二年より。花園院延慶二年に至るまでの例を勘出したるもの。節下大臣。裝束司。次第司。女御代等の人名を列記せり。

卷第九十四

康治元年大嘗會記

台記の一節にして。康治元年十一月の大嘗會の事を記したるものなり。

正安三年大嘗會記　　藤原實躬

正安三年十一月。大嘗會の記なり。端闕けたり。惜むべし。

卷第九十五

永和大嘗會記　　二條良基

永和元年十一月。大嘗會の事を記したるもの。一に御禊記といふ。卷首に十月廿八日の御禊を載せたるを以て此名あるなり。

永享大嘗會記　　中原康富

永享元年十一月。大嘗會の事を記したるもの。康富記の一節なり。

大嘗會延引勘例

大嘗會の闕礙によりて延引せる勘文なり。文正元年十月。兩局より勘進する所。此勘

文によりて諸卿の定め申されし詞をも載せたり。

長元大嘗會御屏風本文

長元九年。大嘗會の悠紀御屏風五尺四帖の本文なり。

巻第九十六

御讓位部類記

御讓位に關する記錄類を蒐錄したるもの。引用する所。野宮公繼の宮槐記。(承元四年十一月。)德大寺相國記。(承久三年四月。)實任中將の継塵記(永仁六年七月。)等なり。

寛元御讓位記　　藥室定嗣

寛元四年正月。後嵯峨院御讓位の事を記したるもの。葉黄記の一節なり。

永德御讓位記

永德二年四月。後圓融院御讓位の事を記す。

實記(德大寺實時公記。)の一節なり。

巻第九十七

天皇冠禮部類記

天皇御元服の事に關せる記錄を集めたるもの。引用する所は。大外記頁業記。(元久元年十月ー十二月。)大外記中原師右記。(延慶四年正月。)継塵記(同年。)等なり。

天子冠禮部類記惣錄

貞觀六年より至德四年に至る。天皇元服部類記の目錄なり。

巻第九十八

天皇御元服部類

左經記。(寛仁元年十二月ー同三年正月。)愚味記。(嘉應三年正月。)管見記。(永享五年正月。)等を引用して。天皇御元服に關する記錄を集載したるなり。

主上御元服上壽作法抄

西宮抄。北山抄。及び元慶六年正月の三代實錄。承平七年正月。天祿三年正月。永祚二年正月。寬仁二年正月の外記記。寬治三年正月の經信卿記。(恐くは外記日記歟。)外記師平記。堀川左府記。爲房卿記。不知記。公定卿記。時範朝臣記。江記。承平七年正月の李部王記。寬仁二年正月の行成卿記等を引き。御元服の時上壽の作法次第に關せる記事を部類したるものなり。

卷第九十九

立坊部類記

寬和二年八月の小記。寬仁元年八月の外記日記。小記。權記。經賴記等の立坊に關せる記事を部類したるものなり。而して目錄には長曆元年八月立坊の事あれども。本書は之を闕逸せり。

東宮御書始部類記

仁安二年の中山大臣記。資長卿記。文永十年六月の經俊卿記。建治二年六月の後深草院御記。經俊卿記。永仁二年六月の後深草院御記。嘉元々年十二月の同御記等を引用したる東宮御書始の部類記なり。

卷第百

上卿故實

西宮記。北山抄。其他日記記錄類を引用して。上卿座以下五十三ヶ條の上卿に關する故實を擧げたるもの。間々今案を附したり。

作法故實　三條實父

朝廷に於ける作法の故實なり。揖拜以下數十條にして。未定稿なるに似たり。

卷第百一

四節八座抄

元日。白馬。踏哥。豐明の四節會に關する参議の行事次第を記したるものなり。

参議要抄 二卷

朝廷年中の恒例臨時の儀式に於ける参議の行事を記し。西宮記。北山抄。其他の記錄を引てその故實典例を示したるものなり。

卷第百二

羽林要祕抄

三位入道資家

行幸行啓節會以下。朝廷恒例臨時の式典に。左右近衞の武官が供奉する行事を記し。且つ記錄等を引用して之が故實典例を載せたるもの。三位入道資家卿の後鳥羽院に進めたるものなりといふ。

卷第百三

新任弁官抄

藤原俊憲

辨官拜任及び辨官の行事を記したるものなり。

結政初参記

結政の時。弁官初参に關する次第を記したるものなり。

卷第百四

貫首祕抄

藤原俊憲

藏人頭の行事に關する常時の先途有識等の談節を錄したるものなり。

蓬萊抄

勸修寺重隆

一に非職事要所役祕抄といふ。職事にあらざる人々が。年中恒例臨時の行事に於ける作法を記したるものなり。重隆は爲房卿の三男なり。

卷第百五

夕拜備急至要抄 二卷

朝廷年中の恒例臨時の儀式に於ける。殿人の行事作法を記せるもの。その至要なるものを抜巾して。備急の用となせるを以て此名ありといふ。

卷第百六

柱史抄　二卷　　藤原孝範

年中恒例臨時の儀式に於ける内記の行事作法を記し。延喜式其他の記錄を引きて之が故實作法を載せたるものなり。上卷恒例の末に載せたる位記例文以下。御即位宣命の文章は。淳範卿の加作する所ならむといふ。又その次に北野臨時祭の宣命及び使參行の例等を擧ぐ。菅原和長の加作する所なり。

卷第百七

内局柱礎抄　二卷　　菅原和長

大內記の心得べき行事作法を記したるもの。上卷には位記の雛形を掲し。下卷には叙位の作法を述べたり。柱史抄其他數多の記錄を引用せり。明應七年の著なり。

卷第百八

清獬眼抄

流人追亡等の凶事に關し。諸記錄を引きて作法典例を示せるもの。國史の闕脫を補ふに足るものあり。

大夫尉義經畏申記

檢非違使の行事。作法。及び裝束等を記したるもの。記事は元曆二年正月。源義經參院の條に終る。

卷第百九

除目抄

除目の式に關する雜件を記したるもの。記錄を引用し。圖を挿入せり。

卷第百十

蝉冕翼抄

除目に關する雜件及び名目等を說明したるものなり。

大間書

保元四年正月廿九日の大間書なり。

卷第百十一

傳宣草 三卷

口宣宣旨等の草案を類聚したるもの。上卷には外記に下す部。中卷には內記に下す部。下卷には辨官に下す部を載せ。且つ諸宣旨の目錄を舉げたり。

第六輯

裝束部

卷第百十二

滿佐須計裝束抄 三卷　雅亮

一に假名裝束抄といふ。調度裝物以下裝束に關する事を記したり。雅亮は安元頃の人なり。

卷第百十三

助無智祕抄

一に年中行事裝束抄といふ。四方拜以下年中恒例臨時の行事に於ける裝束を記したるものなり。

卷第百十四

餝抄 三卷　土御門通方

天子太上皇以下服飾の故實を述べ。歷代の記錄を引き。通方の案文を附したるものなり。通方は內大臣通親の子。正二位大納言に至り。嘉禎三年十二月薨ず。

卷第百十五

後照念院殿裝束抄　近衛冬平

歷代の記錄故實を引き。輪圖を挿みて。裝束の事を記したるものなり。

卷第百十六

裝束抄

西三條實隆（逍遙院。）の撰する所。冠。纓。袍。下襲等に關することを記したり。

卷第百十七

次將裝束抄　京極黄門定家

一に定家裝束抄。又た夜鶴裝束抄といふ。年中行事に於ける近衛次將の裝束を記したるもの。間々實例を擧げて之を說きたり。

三條家裝束抄

一に伏見院宸翰裝束抄といふ。衣袍。下襲。半臂。指貫。狩衣。其他の色様。簾様。時節等を記したるものなり。

雁衣鈔

雁衣の色様。種類。著様。時節等を記したるもの。間々記錄を引用したり。

布衣記

永仁三年八月。伏見院北面日野殿に參仕する諸家の青侍。北面有職の殿參會の節。齋藤助成申合せ。進判を以て定めたるものにして。布衣進退以下。識口出仕次第の事に至るまで。裝束の事を記したるものなり。奧に兵衛尉能兼以下廿人の連署あり。

卷第百十八

連阿口傳抄　藤原長綱

裝束の寸法着様等を記したるものなり。

連阿不足口傳抄　藤原長綱

指貫狩衣の身入。袍袴の身。水干狩襖。臨時祭大嘗會以下の小忌。元服。將殯等裝束

に關したる事を記したるものなり。

裝束雜事抄　藤原永行

淨衣。半尻。布衣以下。裝束の色樣寸法。其他の雜事を記したるもの。應永六年四月の作なり。

物具裝束抄　花山院忠定

卿。平緒。帶。平胡簶。束帶。直衣。禮服。狩衣。裝具。靴。切付。手綱。差縄。車。小忌。隨身。車副等の裝束に關したる事を記したるものなり。

卷第百十九

深窓祕抄

御袍の寸法立様以下。裝束に關する事を記したるものなり。奥書に應仁二年八月日。前參議顯言在判とあれど。顯言卿は寛正三年權中納言にて薨じたれば。恐くは他人の同卿に假托して作りし所なるべしといふ。

撰塵裝束抄

皇太子。親王。諸王。諸臣の禮服。朝服。制服。衣冠。牙笏以下の制を記し。諸書を引用して之を解釋したるものなり。

袷帷着用時節

袷帷着用時節の事を。柳原一品資定卿押名院三條公條公等へ尋ねられたる書簡。及びその返書を寫したるものなり。

卷第百二十

法中裝束抄

もと無名の書なりしを。本書に收めたる時かく名づけたるなり。法中裝束に關し。鈍色以下の事を圖容略に記したり。

法躰裝束抄　藤原永行

是もと無名なりしを。本書に收めたる時

かくは名づけたるなり。法師並に童躰の裝束等に關し。鈍色の著様。文殿以下。十九條の事を記したり。應永三年の作なり。

女官飾抄　　一條兼良

女官の服飾をば。春夏秋冬の時節に從ひて記したるものなり。永正三年春。左金吾某卿の所望より作せられたるなりといふ。

曇花院殿裝束抄　　聖秀女王

女房裝束の事を記し。天文八年。將軍義晴の室に贈り給へるものなりといふ。女王は後奈良院第四の皇女なり。卷末に御厨子棚。くろだな。菓子棚等の圖を添へたり。

卷第百廿一

御禊行幸服飾部類

記錄類を引き。寛治。天仁。保安。康治。平治。仁安。壽永。元曆。建久九。延曆元。

貞應元。仁治三。寛元四。文應元。文永十一。延慶二。文保二。正慶元等の御禊行幸に於ける節下大臣以下供奉の人々の服飾等を部類したるものなり。今二卷を存するのみ。

文筆部

卷第百廿二

懷風藻　　淡海三船

天平勝寶三年冬撰する所。天智の朝より三船の時代に至るまで。凡そ一百二十篇の詩を編輯せるものにして。實に我國詩集の嚆矢とす。編次の體はほゞ時代を以てし。作者等級を以てせず。人ごとに北冢傳を附したり。

卷第百廿三

凌雲集　　小野岑守等

小野岑守。菅原清公。勇山文繼等勅を奉じて。延曆元年より弘仁五年に至るまでの人

人の詩を蒐錄したるもの。總べて九十二首なり。作者廿三人。桓武天皇を始めとし。巨勢志貴人に終る。

卷第百廿四

文華秀麗集 三卷　　仲雄王等

藤原冬嗣嵯峨天皇の勅を奉じて。仲雄王その他の四人に命じて。凌雲集に繼ぎ編輯せしめたるもの。嵯峨淳和の御製を始め。作者廿六人。その詩一百四十八首なり。

卷第百廿五

經國集 闕佚　　滋野貞主等

天長四年。良岑安世勅を奉じて。滋野貞主外四人に命じ。慶雲四年以降。天長四年に至るまでの詩賦文章を編輯したるもの。作者百七十八人に及べり。今存する所は卷一賦。卷十樂府。卷十一雜詠。卷十三雜詠。卷十四雜詠。卷廿策の六卷なり。

卷第百廿六

扶桑集 殘欠

延喜天曆頃の詩集にして。今存する所。卷七哀傷。(挽亡。隱逸。處士。山居。)贈答の懷舊の部。卷九文部。(毛詩。孝經。論語。蒙求。詠史。勸學。及第。落第。年。)武部(弓。)等に過ぎず。

卷第百廿七

本朝麗藻 二卷

村上天皇の頃より。後三條院頃に至るまでの詩集なり。上卷には春夏秋(多闕。)を收め。下卷には山水。神祇。山莊。帝德。法命。法師。賢人。讚德。詩。贈答。餞送。懷舊。述懷部を收めたり。

卷第百廿八

本朝無題詩十巻

一條院の頃より鳥羽崇徳院の頃までの詩集にして。巻一行幸。宴賀。尚歯會。巻二天象。地儀。植物。動物。人倫。雑物。巻三花下。月前。七夕。巻四春。夏。巻五秋。冬。雑部。巻六水閣。泉亭。林亭。別業。巻七山家。野店。山林。野外。河邊。旅館。路次。巻八九十山寺なり。

巻第百廿九

都氏文集三巻　都良香

今存するところ。巻三賦。詩。序。銘。讃。表。巻四詔書。勅書。勅符。牒。状。巻五對策。策問。策判。省試詩判。神仙の三巻のみ。良香の傳は大日本史に見えたり。

巻第百三十

田氏家集三巻　島田忠臣

島田忠臣の詩集なり。忠臣の傳もまた大日本史に見えたり。

巻第百卅一

菅家後集　菅原道眞

菅公貶謫の後の詩集なり。一に菅家後草と稱す。

巻第百卅二

江吏部集三巻　大江匡衡

上巻に天部。四時部。地部。居處部。中巻に神道部。釋教部。帝徳部。人倫部。文部。音樂部。飲食部。火部。下巻に木部。草部。鳥部を收めたり。匡衡の傳も大日本史に出でたり。

巻第百卅三

法性寺關白御集　藤原忠通

法性寺入道前關白太政大臣忠通公の詩集な

り。

卷第百卅四

雜言奉和

天皇の御製及大臣の詩に和したる當代知名文人の詩を集めたるもの。仮嵯峨天皇河上落花の詩より。延喜元年。左大臣時平が大嶽靜行七句を祝せし詩。及此等の和詩なり。

粟田左府尙齒會詩

安和二年。藤原在衡その粟田山莊に於て尙齒會を開きし時の詩なり。

賦光源氏物語詩

源氏五十四帖を題とし。七律を以て之を賦したるものなり。

天德三年八月十六日鬪詩行事略記

天德三年八月。宮中詩合の事を記したるものなり。

善秀才宅詩合

應和三年三月十九日。三善道統の宅に於ける詩合の詩を錄したるものなり。

侍臣詩合

永承六年三月。侍臣の詩合の事を記したるものなり。

殿上詩合

天喜四年六月。殿上の詩合なり。

資實長兼兩卿百番詩合

權大納言藤原資實。平長兼二卿の百番詩合にして。共に順德院の頃の人なり。

卷第百卅五

泥之草再新

藤原時代の文人の詩文に就て。その秀句を拔きしものなり。

續千字文　　三善爲康

周興嗣の千字文に倣ひてその續篇に擬したるもの。首二百四十字缺け。文中また間々缺文あり。奥に藤原敦光以下六人の之に賛したる七律を載せたり。

富士山記　　都良香

駿河國富士山の事を記したるもの。以て其文才を觀るべし。後人この記を石に彫りて山上に建てたりといふ。

狐媚記

康和三年。京都に狐媚の怪ありし事を記したるものなり。

源府君所藏銅雀硯記　　釋義堂

天龍寺の長老春屋妙葩。支那より銅雀硯を得。之を鎌倉の公方足利基氏に獻じたるにより。義堂をして記を作らしめたるなり。

暮年記　　大江匡房

當年の知己漸く物故し。文を識る人一人も存するなく。匡房暮年の感に勝へずして此記を作りたるなり。以て匡房が履歴の一編となすに足るべし。

遊女記　　大江匡房

河陽江口の遊女の事を記したるなり。

傀儡子記　　大江匡房

當時の傀儡子の事を記したるなり。その有名なるもの。及びその歌ひ舞へる手振等を見るべし。

浦島子傳

浦島子が龍宮に遊びし傳説を記したるものなり。

續浦島子傳記

また浦島子の傳にして。延喜二十年の作なり。末に浦島子に代つて詠じたる七言廿二韻及び和歌絶句各十四首を載せたり。

卷第百卅六

玉造小町子壯衰書一首

玉造小町一生の盛衰を叙し。樂天秦中吟に倣ひて。長篇一百卅四韻を賦したる者なり。

新猿樂記　藤原明衡

猿樂の態をば。鳴齊の制にて當時もてはやされたるものを叙し。その見物の中に西京の右衛門尉なるもの。一家擧りて來り集まれるあり。妻三人。娘十六人。男子九人。各各その所能を異にしたる有樣を面白く記したるなり。明衡は本朝文粹。本朝秀句。雲州消息の著者なり。その傳は大日本史。碩鼠漫筆に見えたり。治暦二年十月卒す。

卷第百卅七

作文大體

先づ大江朝綱が十ヶ條の作詩上の注意を擧げ。次に五言連韻の略頌。詩の六義。字對躰。文章の十二對。賦の躰。其他出題。付韻。詩の諸躰。雜筆の大躰等皆江家兩派の家説を記し。此等の作例を擧げて詩文の作法を示したるものなり。當時幷儷躰の漢文の作法を研究するに必要なる材料の一なり。

童蒙頌韻　三善爲康

天仁二年四月。撰する所。上平下平の韻字を集めて。韻ごとに之が頌を作りたるもの。詩文を作るもの〻便にする所なり。すべて二千九百九十五言あり。

第七輯消息部

卷第百卅八

雲州消息三卷　藤原明衡

著者明衡の出雲守たりしを以て此名あり。一に明衡往來。又た雲州往來といふ。上中下の三卷に本末を分ち。すべて二百餘章。和臭を帶びたる消息文の最も古きものにして。本朝往來と稱するものゝ初となす。

卷第百卅九

貴嶺問答　中山忠親

法令有職に關する問答を記したるもの。また當時の消息文を見るに足る。忠親は建久六年薨す。中山氏の祖なり。

十二月往來

正月より十二月に至る一年間の消息往來を集めたるもの。塙氏はまた以て中山内府忠親の撰ならむといへり。

新十二月往來　九條良經

前書にならひて一年間の往來消息を集めたるものなり。

卷第百四十

異制庭訓往來　釋虎關

亦十二月往來の一にして。當時の時文を以て記したれば。其文脉を見ると共に。風俗物產其他の事を知るべし。幕府の頃は手習本として流行したるもの也。世に北畠玄慧の作と傳へたれ共。今定めて虎關の述作とす。

雜筆往來

消息の文句を集めたるもの。永正元年の奥書あり。戰國時代の作なり。

卷第百四十一

尺素往來　一條兼良

元日小朝拜以下諸事百般の事を。正月より歲暮に至るまでの消息文によせて述べたる

ものなり。明衡往來。庭訓往來とこの書を以て本朝の三往來と稱すべし。

卷第百四十二

釋氏往來　守覺法親王

僧家年中の往來消息にして。御齋會。修正其他の事を述べたるものなり。

山密往來　實嚴僧正

眞言宗の儀式行事に關したるものを。往來消息の體に述べたるもの。間々故事典例を擧げたり。

卷第百四十三

後花園院御消息

進退及び述懷の時の御心得を始め。其他學問公事の事などに就て。御敎訓を假名消息にて。皇太子後土御門院へ遣されたる者也。

贈定家卿文　西行法師

歌合の事に就て。西行法師が定家卿に贈りたる假名消息なり。

定家卿御消息

定家卿詠歌の秘傳を述べて。衣笠内府（藤原家良）に贈られたるものなり。

越部禪尼消息

俊成卿の女越部禪尼が。歴代の撰集に就て論評したる假名消息なり。二三首の歌を挿みたり。

東野州消息　東常緣

東常緣が和歌に就て。祇公禪師に贈りたる消息なり。

東素山消息

常昌院東素山が遠藤大隅守に與へたる消息にして。歌道の述懷を記し。祖父常緣が師

範として上洛したる事をいへるものなり。

卷第百四十四

消息耳底祕抄

北院御室

硯銘。消息の禮以下消息慇懃に關する故實作法を記したるもの。奥書によれば。北院御室守覺法親王が三條實房。中山忠親に御尋あり。その說に從て書き集められたるなりといふ。

書札禮

大臣以下書札の樣式實例を擧げ。その書札の例を示したるものなり。

卷第百四十五

書札作法抄

足利時代の書札に關する公家武家僧家等の作法注意を記せるものなり。

細川家書札抄

細川家の書札に關したる作法故實等を記したるものなり。

大館常興書札抄

大館常興がその子九郎に與へて。公家攝家其他幕府の諸司に贈るべき書札の慇懃。及び此等に關する注意を記したるものなり。

第七輯

和歌部

卷第百四十六

拾遺抄

花山天皇

顯昭法橋の註本には拾遺和歌抄といへり。花山法皇の拾遺和歌集より抄出し給へるものなり。

卷第百四十七

後葉和歌集

今存する所は。卷一春上より卷十八雜三に至り。以下闕脱せり。後三條院第三の皇子輔仁親王の「ふるとしに春たつ日」の歌に始まる。近衞院頃の撰なり。

卷第百四十八

續詞花和歌集　藤原清輔

父顯輔の撰したる詞花集に續けたる歌集なり。

卷第百四十九

言玉和歌集

俊成。慈圓。定家。家隆以下當代の鉅匠の歌を集めたるもの。僧侶の撰なるべし。今存する所は。始めに神祇をつらね。天地。時節。草樹等の七卷なり。漢文及び和文の序あり。

卷第百五十

現存和歌六帖

建長九年十二月類聚を畢へ。仙洞に奉りたる歌集にして。草木花鳥虫等を題としたる歌集なり。

卷第百五十一

秋風抄　小野春雄

新古今。新勅撰の二集に入らざりし當時の歌三百餘首を集めたるもの。建長二年四月の序文に。爲家。知家。信實。行能。俊成女。隆祐及び定家。家隆の歌品を評隲せり。

卷第百五十二

雲葉和歌集

後嵯峨院頃の撰なるべし。上は文武天皇。人丸。赤人より。下は平泰時等に至り。僧榮西の宋に渡りし時の歌を以て終る。春夏秋

冬賀羇旅合せて十卷あり。

新和歌集
卷第百五十三　冷泉爲氏

爲氏宇都宮に下向したる時撰する所。故にまた宇都宮打聞新和歌集といふ。新古今時代以後の歌を集めたるものなり。

續門葉和謌集
卷第百五十四

嘉元三年の頃。當代僧侶の歌を集めたるもの。春夏秋冬戀雜釋教神祇合せて十卷あり。

續現葉和歌集
卷第百五十五

後醍醐天皇の頃の撰にして。龜山院以來の歌を集めたるものなり。合せて十卷あり。

臨永和歌集
卷第百五十六

亦た後醍醐天皇の頃の撰にして。龜山院以後の歌を集めたるものなり。之も十卷あり。

藤葉和歌集
卷第百五十七

南北朝頃の撰にして。大覺寺統の御方々を記せるさま。及び年號等によれば。恐くは北朝の撰集ならむ。後醍醐天皇吉野行宮にて御撰定ありたるものなりとの說は取る可らず。此の集も龜山院以後の歌を集めたるものなり。合せて六卷あり。

玄々集
卷第百五十八　能因法師

永延以來寬德以後の歌を集めたるもの。圓融院。花山法皇の御製を始め。凡そ百六十餘首なり。

今撰和歌集

後白河院の頃より。高倉院頃に至るまでの撰なるべし。崇徳院。淸輔。顯輔。寂然。以下當代の歌を類聚したるなり。

柳風和歌抄

冷泉爲相。爲兼時代の和歌を類聚したるもの。今存ずる處は四季及び戀の五卷のみ。

卷第百五十九

新撰和歌　紀貫之

醍醐天皇の勅命によりて。古今和歌集の名什中弘仁以後延長に至るまでの歌を抽て。春と秋。夏と冬といはんが如く。兩々相双べて闘歌の躰と爲す。すべて三百六十首なり。延長八年。天皇崩じて。遂に奏覧する能はざりしものなりといふ。

金玉集　柿本末成

中古歌人の名什を古今。後撰等の集より拔きたるものなり。四季。戀。雜に類別せり。

三十六人撰　四條公任

人麿。貫之以下三十六歌仙の名歌十首若しくは三首づゝを拔きたるものなり。

後六々撰　藤原範兼

和泉式部以下後の三十六歌仙の名歌。十首以下二首に至るまでを拔萃したる者なり。

新三十六人撰

後鳥羽院以來後深草院の御世に至るまで。當代歌人三十六人を拔き。各十首の名什を記したるもの。正元二年中春の假名序あり。

卷第百六十

爲家卿千首　冷泉爲家

貞應二年八月。五日の間に冷泉爲家の詠ずるところ。慈鎭。家隆の點あり。一に中院詠門千首といふ。

卷第百六十一

詠千首和歌　藤原師繼

正二位權大納言藤原師繼の千首なり。

卷第百六十二

詠千首和歌　宗良親王

中務卿宗良親王の千首なり。師繼卿千首と同じく。天授二年夏内裏二御かたの千首の勅題に應じて詠じたるもの。奥に御製。後宮御歌。關白左大臣。師繼卿等の歌各六首を擧げたり。

卷第百六十三

爲尹卿千首和歌　冷泉爲尹

應永二十二年八月。將軍義持の命により詠進したる千首なり。

卷第百六十四

千首和歌太神宮法樂

天文十一年二月九日。太神宮法樂の和歌千首なり。合せて十卷あり。

卷第百六十五

白河殿七百首

文永二年。後嵯峨院の御所禪林寺に於て行はれたる當座の七百首を載せたるもの。作者は院を始め爲家。爲氏等廿一人なり。

卷第百六十六

龜山殿七百首

元亨三年。後宇多院の御所龜山殿に於て行はれたる七百首の和歌を載せたるもの。作者は院を始め爲世。爲藤等廿四人なり。

卷第百六十七

堀河院御時百首和歌

永久四年の百首に對して。一に初度百首。又た太郎百首といふ。康和年中。公實。匡

朋。俊頼。基俊等十六人の百首なり。

卷第百六十八

永久四年百首

前の百首に對して。一に後度百首。又は次郎百首といふ。永久四年十二月廿日。顯仲。仲實。俊頼等七人の百首なり。

卷第百六十九

久安六年御百首

康治の頃題を賜ひ。久安六年詠進の百首なり。作者は崇徳院を始め十四人。仁平三年秋。左京大夫顯廣(俊成の幼名なり。)が部類したるものなり。

卷第百七十

正治二年第二度百首和歌

正治二年冬の百首にして。作者は後鳥羽院を始め十一人なり。

卷第百七十一

内裏名所百首

建保三年十月。内裏に於て諸國の名所を題として詠じたる百首なり。故にまた建保名所百首といふ。作者は順徳院を始め。定家。家隆等十二人なり。

卷第百七十二

弘長百首

弘長年間常盤井實氏及び爲家。爲氏等七人の詠進したる百首にして。一に七玉集といふ。作者の數によせたるなり。

卷第百七十三

丹後守爲忠朝臣家百首

藤原爲忠丹後守の頃。その家に於て催したる百首にして。作者は爲忠。忠成。爲經。仲正。爲業。爲盛。盛忠。賴政の八人なり。

卷第百七十四

木工權頭爲忠朝臣家百首

爲忠木工權頭の頃。その家にて催したる百首にして。作者は爲忠。親隆。顯廣。仲正。爲業。爲盛。爲經。賴政の八人なり。

卷第百七十五

句題百首

時句を題とし詠じたる百首なり。作者は頓阿。良守。良春。頓宗。周嗣の五人にして。頓阿點者たり。また五玉集といふ。

卷第百七十六

俊成卿文治六年五社百首

文治五年より始めて。文治六年春に至つて詠畢し。伊勢太神宮。賀茂。春日。日吉。住吉の五社に奉りしものなり。

秋日陪社壇同詠祈雨百首　　津守國冬

春夏秋冬は雨中の景物を詠じ。戀雜は雨によせて詠じたる祈雨の百首なり。

爲兼卿鹿百首

春日社法樂の百首にして。夢想の事あり。一時に鹿百首を詠じて奉納せられたるものなりといふ。

南都百首　　一條兼良

堀川院百首の題を採び。大和國の名所によせて詠ぜられたる百首なり。兼良應仁の亂を避けて南都にありし頃の作なるべし。

卷第百七十七

道助法親王家五十首和歌

建保六年。道助法親王家に於ける五十首なり。作者は法親王を始め。西園寺公經。常盤井實氏。定家。家隆等廿二人。山題は定

家。點者は後鳥羽院なり。

卷第百七十八

新古今和歌集竟宴倭歌

元久二年三月。新古今和歌集竟宴の和歌にして。後鳥羽院を始め。この竟宴に預りし人々の歌を載せたり。

續古今和歌集竟宴倭謌

文永三年三月。續古今和歌集竟宴の和歌にして。後嵯峨院の御製を始め。之に預りたる人々の歌を載せたり。

文治六年女御入内御屏風和歌

文治六年正月。攝政兼實の女任子入内の御屏風月次十二帖。及び泥繪御屏風の和歌にして。作者は兼實を始め八人なり。

昭慶門院御屏風押色紙和謌

昭慶門院憙子の御屏風に。爲世卿の女爲子(時に權大納言局。)の筆にて。色紙にかきて押し給ひし和歌にして。作者は當時の名匠二十餘人なり。先つ年の百首の内なるべしといふ。

最勝四天王院障子和歌

建永二年。最勝四天王院障子に描きたる諸國の名所を詠じたる和歌なり。

卷第百七十九

句題和歌

大江千里が古句を題とし詠進する所なり。寛平六年四月廿五日上表の序文あり。古今和歌進獻の事も見えたり。末に千里の詠歌を集めて附錄とす。

三月三日紀師近曲水宴和歌

紀師近の家に於て曲水の宴を催ほし時。貫之。躬恒等七人の詠じたる歌を記したるも

の。序は躬恒と覺ゆれど。本書に之を收めず。

三百首和歌　宗尊親王

春七十首。夏三十首。秋七十首。冬三十首。戀七十種。雜三十種。合せて三百首。鎌倉將軍宗尊親王の詠にかゝる。九條前内府の點及び評あり。

七夕七十首　從三位　藤原爲理

七夕を題としたる七十首なり。

第八輯

和歌部

卷第百八十

在民部卿家歌合

在原行平の家に催したる歌合の和歌なり。

寛平御時后宮歌合

宇多天皇の御代后宮の哥合なり。今雜の部缺けたり。

亭子院歌合

延喜十三年三月。亭子院の歌合なり。

陽成院歌合

延喜十三年九月。陽成院の歌合なり。

亭子院有心無心歌合

延喜十六年。七夕を題としたる歌合なり。

卷第百八十一

内裡歌合

天德四年三月。内裡歌合の記事及歌を記したるものなり。その漢文の記事は村上天皇の御記なり。

堀川中納言家歌合

天延三年二月。藤原兼通家の歌合なり。

一條大納言家歌合

天延三年三月。藤原延光家の歌合なり。

大納言家歌合

長元二年四月。藤原濟信家の歌合なり。

賀陽院水閣歌合　藤原資業

長元八年五月。賀陽院水閣の歌合卅番の記事(漢文。)及び歌を記したるものなり。

源大納言家歌合

長暦二年九月。源師房家の歌合なり。

弘徽殿女御十番歌合

長久二年。弘徽殿女御の歌合なり。

祐子内親王家歌合　藤原資業

永承五年六月。賀陽院一宮御方に於ける歌合の記事(漢文。)及び歌を記したるもの也。

皇后宮春秋歌合

天喜四年四月。後冷泉院皇后宮に於て春秋の歌を合せられたるなり。

備中守定綱朝臣家歌合

治暦三年三月。定綱朝臣家の歌合なり。

禖子内親王家歌合

治暦三年九月。六條齋院禖子内親王家の歌合なり。

禖子内親王家歌合

治暦四年五月。同内親王家の歌合なり。

呂保殿歌合

治暦四年十二月。上東門院の歌合なり。日記は出羽弁書く所なり。呂保殿とは香爐峰の圖障子にあるを以て香字をよまず。呂保殿とはいへるなり。麗景殿を計以殿といへるが如し。

卷第百八十二

氣多宮歌合

延久四年三月。國司通宗朝臣が氣多社頭に於ける歌合なり。

攝津守有綱家歌合

承保二年八月の歌合なり。

內裏歌合

承曆二年四月。內裏の歌合なり。源顯房判者たり。

若狹守通宗朝臣女子達歌合

應德三年三月。七條の亭に於ける歌合なり。通俊判者たり。

高陽院七番歌合

寬治八年。高陽院の歌合なり。一題ごとに七番。源經信判者たり。

東塔東谷歌合

永長二年の歌合なり。

山家五番歌合

天仁三年四月の歌合なり。始より左右を分たず。當座に探りて之を合せたりといふ。

散位源廣綱朝臣歌合

長治元年五月の歌合なり。

六條宰相家歌合

永久四年六月。南六條泉亭に於て行ひたる歌合なり。

卷第百八十三

內大臣家歌合

元永元年十月。內大臣藤原忠通家の歌合なり。判者は俊頼。基俊の二人なり。

內大臣殿歌合

元永二年七月。同じく內大臣忠通家の歌合なり。藤原顯季判者たり。

關白内大臣家歌合

保安二年九月。關白忠通家に於る歌合なり。判者基俊の自筆を以て書寫したるよし。奥書に見えたり。

巻第百八十四

永緣奈良房歌合

大治三年二月の歌合なり。判者俊賴の奥書あり。

西宮歌合

大治三年八月。廣田社頭に於て神祇伯顯仲王一家の人々相合して講ずる所。判者は基俊なり。

南宮歌合

同じく九月。上の人々門妙社に於て合する所の歌合なり。

住吉歌合

同じく九月。上の人々住吉社に於て合する所の歌合なり。

中宮亮顯輔家歌合

長承三年九月。顯輔家の歌合なり。判者基俊。和漢兩躰の文を以て判詞を加へたり。

右衞門督家歌合

久安五年六月。中御門の亭に於て合する所。判者は顯輔なり。

太皇大后宮大進清輔朝臣家歌合

永暦元年七月。合する所。判者は通能なり。

巻第百八十五

中宮亮重家朝臣家歌合

永萬二年の歌合なり。判者は顯廣(俊成卿。)なり。

太皇大后宮亮平經盛朝臣家歌合

仁安二年八月合する所。判者は清輔なり。

卷第百八十六

左衛門督實國卿家歌合
嘉應二年五月合する所。判者は清輔なり。

住吉社歌合
嘉應二年十月。住吉社頭の歌合なり。判者俊成。

建春門院北面歌合
嘉應二年十月合する所。判者俊成なり。

卷第百八十七

廣田社歌合
承安二年十月。合する所。判者俊成。

三井寺新羅社歌合
承安三年八月十五夜。三井寺僧等合する所。判者俊成。

右大臣家歌合
安元三年十月。右大臣藤原兼實家に於ける歌合なり。判者清輔。

卷第百八十八

別雷社歌合
治承二年三月。神主重保の催によりて。別雷社廣庭に於て合する所。判者は入道三品釋阿。作者六十人。

廿二番歌合
治承二年八月合する所。判者亮公。顯昭なり。

右大臣家歌合
治承三年十月。右大臣藤原兼實家に於て合する所。判者は釋阿なり。

卷第百八十九

若宮社歌合
建久二年三月合する所。判者は顯昭なり。

民部卿家歌合

建久六年正月。民部卿藤原經房家に於て合する所。判者は釋阿なり。

卷第百九十

御室撰歌合

正治二年二月。守覺法親王の催されたる當座の撰歌合なり。判者俊成。

仙洞十人歌合

正治二年九月。院に於て行はれたる歌合なり。判者定家。

卷第百九十一

老若五十首歌合

建仁元年十月。老若を左右に分ちて合する所なり。

新宮撰歌合

建仁元年三月合する所。判者釋阿。

卷第百九十二

影供歌合

建仁元年八月三日合する所。判者は釋阿なり。而してその歌は衆議に附したりといふ。

撰謌合

建仁元年八月十五夜。月を題として合する所。判者釋阿なり。

影供歌合

建仁二年五月合する所。判は衆議に附したり。

水無瀨釣殿當座六首歌合

建仁二年六月。後鳥羽院定家卿と合せ給ふ所。判者は院なり。院の御作名に藤原親定とあり。

卷第百九十三

水無瀨殿戀十五首歌合

建仁二年九月十三夜。水無瀨殿に於て戀を題としたる歌合なり。判者釋阿。

水無瀨櫻宮十五番歌合

建仁二年九月二十九日。戀を題として合する所。判者釋阿。

八幡若宮撰歌合

建仁三年七月の撰歌合なり。

卷第百九十四

北野宮歌合

元久元年十一月。北野社に於ける當座の歌合なり。判は衆議。

卿相侍臣歌合

建永元年七月。卿相侍臣相分れて合する所。判は衆議。詞は俊維なり。

鴨御祖社歌合

建永二年三月合する所。判なし。

賀茂別雷社歌合

また同日の歌合なり。人數等上に同じ。

歌合

建暦三年八月の歌合なり。判なし。

詞合

建暦三年九月の歌合なり。判なし。

仙洞歌合

建暦三年閏九月の歌合なり。判者定家。

卷第百九十五

禁裡歌合

建保二年七月。當座の歌合なり。廿四番以下闕逸せり。

歌合

建保二年八月の歌合なり。判者定家。

月卿雲客妬歌合

建保二年九月の歌合。判者家隆なり。

四十五番歌合

建保三年六月二日の歌合なり。判は衆議。詞は宸筆なりといふ。

月卿雲客妬歌合

建保三年六月十一日當座の歌合なり。判は衆議。

卷第百九十六。

百番歌合

建保四年閏六月九日の百番歌合にして。判者は定家なり。たゝし或本には。衆議の判にして後日詞をつくるよし見えたり。

歌合

建保四年八月廿二日當座の歌合なり。衆議判。名を隱すと恒の如し。

歌合

同月廿四日當座の歌合なり。衆議判。名を隱すと恒の如し。

卷第百九十七

歌合

建保五年四月廿日の歌合なり。判なし。

右大將家歌合

建保五年八月十五夜。右大將久我通光家の歌合なり。

右大臣家歌合

建保五年九月。右大臣道家の家に於て合する所。衆議判。後日定家判詞を書くといふ。

四十番歌合

建保五年十月の歌合なり。判者順德院。

歌合

建保五年十一月四日の歌合なり。衆議判。

後日定家判詞を書くといふ。

歌合

建保七年二月十一日常座卒爾の歌合なり。

歌合

建保七年二月十一日當座の歌合なり。

卷第百九十八

石淸水若宮歌合

寬喜四年三月の歌合なり。判者は定家。

光明峯寺攝政家歌合

貞永元年七月。光明峯寺攝政道家公の家に於ける歌合なり。判者は定家。

歌合

貞永元年八月十五夜。名所の月を題とし合する所。判者は定家なり。

卷第百九十九

遠島御歌合

嘉禎二年七月。後鳥羽院隱岐の島に御坐し。京都にある人々の歌に御製を加へ。左右に分ちて合せ給ふ所。親から御判の詞を書き給へり。

河合社歌合

寬元元年十一月合する所。判者爲家なり。

卷第二百

院御歌合

寶治二年後嵯峨院の歌合なり。判者爲家。

卷第二百一

影供歌合

建長三年九月十三夜影供の歌合なり。

卷第二百二

十五夜歌合

文永二年八月十五夜。月を題として合する所。判は衆議なり。

龜山殿五首御歌合

文永二年九月十三夜の歌合なり。衆議判。

卷第二百三

攝政家月十首歌合

建治元年九月十三夜。攝政家に於て月を題とし合する所。判者は眞觀なり。

正應二年卅番歌合

伏見院以下當時歌人の卅番歌合なり。

卷第二百四

十五夜歌合

永仁五年八月十五夜。月を題とし合する所。判は衆議なり。

謌合

永仁五年當座卅番の歌合なり。判者爲兼。

新名所繪歌合

永仁三年。内宮の神官等伊勢の名所を題とし合する所。また伊勢新名所繪歌合といふ。判者は爲世なり。

歌合

正安四年六月十一日。當座の歌合なり。

仙洞五十番歌合

乾元二年四月。仙洞伏見院の歌合なり。衆議判。後日爲兼判詞を書くといふ。

歌合

乾元二年五月四日の歌合なり。亦作者を隱して衆議判。後日爲相判詞を書くといふ。

卷第二百五

永福門院歌合

嘉元三年正月。永福門院鎗子の御所に於て戀十首を合する所。判詞及び點は伏見院の宸筆なり。

歌合
嘉元三年三月の歌合なり。

外宮北御門歌合
元亨元年冬。外宮禰宜等の歌合なり。判者小倉中納言入道。

新玉津島宮歌合
貞治六年三月。關白以下の公卿及び室町の將士等の歌合にして。判者は冷泉爲秀なり。

卷第二百六

五百番歌合
天授元年。吉野行宮に於ける歌合なり。

卷第二百七

內裏九十番御歌合
應永十四年十一月。內裏の歌合なり。

仙洞歌合
寶德二年十一月。仙洞の歌合なり。判者は一條兼良。飛鳥井入道祐雅。

卷第二百八

百番歌合
寶德三年八月の歌合なり。判者飛鳥井入道祐雅。

內裏歌合
康正元年十二月。內裏の歌合なり。判者飛鳥井雅親。

卷第二百九

按察使親長卿家歌合
文明五年十一月。藤原親長の家に催したる歌合なり。判者一條兼良。

武州江戶歌合
文明六年六月。太田道灌江戶城に於て行ひ

たる歌合なり。判者心敬法師。

卷第二百十

文明九年七月七日七首歌合

文明九年七月。後土御門院を始め。將軍義政以下廿人。七夕に因みて行はれたる七首の歌合なり。判者一條兼良。

文明十年八月二日歌合

判者は兼良なり。

文明十年九月讒歌合

判は作者の名を隱して。衆議に附したり。

卷第二百十一

將軍家歌合

文明十四年六月。將軍義尙の催したる所。判者大納言入道榮雅なり。

殿中十五番御歌合

文明十八年三月。諸國の名所を題としたる歌合なり。判者榮雅。

三十六番歌合

文龜三年六月の歌合にして。判者は冷泉爲廣なり。

卷第二百十二

蜷川親孝家歌合

大永三年六月の歌合なり。判者三條西實隆。

十五夜三首歌合

永祿六年八月十五夜。月三首を題としたる歌合なり。判者日野大納言資定。

秋十五番歌合

同じく永祿六年八月。秋三首を題としたる歌合なり。判者老法師。

後陽成院御歌合

文祿三年八月の歌合なり。判者三條西內大臣。

卷第二百十三

近江御息所歌合

近江御息所の歌合の歌集二十首を錄したるもの。四條公任の手跡本を寫せるよし奥書に見えたり。以上卷二百十二までの歌合は。みな年月を詳にせりといへども。是より以下二卷はすべて未詳のものを集めたり。

源順馬名合

源順が馬名を題として歌を合せたるものなりといふ。

一條大納言家歌合

一條大納言行成の家にして。石名取題としたる歌合なり。

多武峯往生院歌合

正月庚申の夜。上東門院あたりの女房の歌合なり。

西國受領歌合

西國受領の館に四月のころ庚申しける夜。もの丶名など題として歌を合せたるものなり。

源大納言家歌合

源大納言師房家の歌合なり。一日の中に之を合せしよし見えたり。

播磨守兼房朝臣歌合

兼房播磨守の頃。其任國に於て催したる歌合なるべし。

禖子内親王家庚申夜歌合

六條齋院禖子内親王家にして。庚申の夜行はれたる歌合なり。歌人は皆女房なり。

禖子内親王家櫻柳歌合

三月十よ日櫻の花のさかりなる頃。櫻柳を題とし合せたるもの。歌人は女房なり。

禖子内親王家夏歌合
中務小式部をはじめ。歌人はまた女房なり。
山家三番歌合
梅。池柳。歸雁を題としたる歌合なり。
源宰相中將家歌合
源國信の家にして。戀を題としたる歌合なり。
雲居寺結緣經後宴歌合
判者は基俊なり。
爲兼卿家歌合
春夏秋冬戀の朝夕夜を題とし。爲兼。爲相。經親。藤大納言典侍の四人歌を合せたるなり。末文闕逸せり。
卅番歌合
僧侶六人の歌合なり。判者頓阿。

卷第二百十四

公武哥合
應永の頃。公武の哥合なり。判者南華老人。
武家歌合
足利中世の頃の武家歌合なり。
地下歌合
蜷川親元等地下の歌合なり。判者正廣。

卷第二百十五

前十五番歌合
後十五番歌合
古今。後撰。拾遺等の作者につき。秀歌を抽て之を合せたるものなり。前のは四條公任の撰なりといふ。
時代不同歌合
古今。後撰。拾遺等の作者を左とし。後拾遺。金葉。詞花。千載。新古今等の作者を右

とし。その秀歌を合せたるものなり。

新時代不同歌合二卷

御抄に倣ひて。萬葉集より金葉集に至る作者を左とし。詞花集より新古今集に至る作者を右とし。歌三首づゝを合せたるなり。

卷第二百十六

定家家隆兩卿撰歌合

後鳥羽院隱岐の島に於て御閑居の折。當代の歌人定家家隆二人の秀歌を撰み。之を合せ給ひたるものなり。

閑窓撰歌合

建長三年閏九月。當時名匠數人の秀歌を撰みて。五十番に合せたるものなり。

三十六人歌合

弘長二年九月。當時の歌人卅六人の詠ぜる歌を撰びて。之を合せたるものなり。

女房三十六人歌合

古今集より新古今の頃に至るまで。小野小町以下女房三十六人を撰みて。その名歌三首づゝをとりいでゝ。左右に分ちたる歌合なり。

卷第二百十七

御裳濯川歌合

西行法師が名を山家客人。野徑亭主にかり。非詠じたる歌を撰出して卅六番につがひ。御裳濯川歌合と名づけたるもの。俊成判の詞を附きたり。

宮川歌合

また西行法師が名を玉津島海人。三輪山老翁に假り。その歌を卅六番に合せたるもの。是は家定の判なり。二番の事に就ては古今著聞集に見えたり。

卷第二百十八

慈鎭和尙自歌合

二百首を百番につがひて。大比叡小比叡以下七社の寶前に。各十五番にして奉りたる慈鎭の和歌をば。俊成の判じたるものなり。承久三年五月慈鎭の奥書あり。

日吉社歌合

寳治元年十二月。九條知家入道蓮性が日吉社に奉納の自歌合なり。判者定家。

卷第二百十九

後京極殿御自歌合

後京極攝政良經の自歌合を。俊成の判したるもの。建久九年仲夏二日の奥書あり。

卷第二百二十

後鳥羽院御自歌合

嘉禎二年四月。後鳥羽院隱岐國より御自歌合を家隆に送り。之を判ぜしめ給ひたるものなり。

定家卿自歌合

平生詠ずる中より。彌陀の本願になずらへ。四十八首をぬきて一卷の歌合となし。子孫に遺したるものなり。

家隆卿百番自歌合

家隆詠草の中より百番の歌をぬき。之を合せたるもの。下にその出處を注したり。

隆祐朝臣百番自歌合

藤原隆祐の百番自歌合なり。又たその出處を擧げたり。

卷第二百廿一

永福門院百番御自歌合

永福門院鏱子の御自歌合なり。

慈照院殿御自歌合

将軍足利義政の五十番自歌合なり。栄雅その命によりて之が判詞を記したり。

堯孝法印自歌合

堯孝法印の十番自歌合を冷泉爲尹の判じたるものなり。

道堅法師自歌合

道堅法師の自歌合を凡河内後恒の判じたるもの。判者のしるせる明應六年十二月八日の文に。之を詳にせり。

卷第二百廿二

豐原統秋自歌合

豐原統秋が名所を題として詠じたる自歌合に。一々判者の歌を附せるものなり。明應庚申孟陽の奥書あり。判者はその師三條西實隆なるべし。統秋は體源抄の著者たり。

十市遠忠自歌合

兵部少輔中原遠忠の自歌合なり。判者の名詳ならず。

細川右京大夫自歌合

細川常恒入道の自歌合に。三條西實隆の判ぜられたるなり。

卷第二百廿三

元久詩歌合。

元久の頃。詩歌を左右に分ちて之を合せたるものなり。

內裏詩歌合

建保六年二月の詩歌合なり。

卷第二百廿四

現存卅六人詩歌。

建治二年閏三月。北條時宗結構する所の屏風に詩歌を合せたるもの。閏の作者は俳佪入道。詩は藤中納言資宣の撰む所。歌は右

大弁入道眞観之を撰みたりといふ。

五十四番詩歌合

康永二年の詩歌合なり。

詩歌合　權律師守遍

判の詞も。歌または詩句を以て之を書けり。

卷第二百廿五

文安詩歌合

一番の判詞中に詩歌合の沿革を述べたり。すべて三十六番。判者は一條兼良なり。

詩歌合

文明十四年九月廿八日の詩歌合なり。判なし。

詩歌合

文明十五年正月十三日の詩歌合なり。衆議判。

卷第二百二十六

寛平菊合

寛平の菊合の左右の歌を記したる者なり。

上東門院菊合和歌

上東門院にてせさせ給ひし菊合の歌なり。

朱雀院女郎花合

宇多天皇讓位の翌年。きさきとみかどのせさせ給へる女郎花合の歌なり。

内裏歌合

康保三年八月十五夜。大盤所に於て前栽合し給へる時の歌なり。

東三條院瞿麥合

ある年七月の七日。東三條院詮子の宮にてせさせ給ひし瞿麥合の歌なり。

後冷泉院根合

（永承六年五月五日。後冷泉院菖蒲根合の記事及びその歌合を記したるものなり。

郁芳門院根合

寛治七年五月五日。郁芳門院根合の記事及びその歌合なり。

備中守仲實朝臣女子根合歌

康和二年五月五日の根合の歌なり。

圓融院扇合

圓融院扇合の記事。及びその歌を記したるものなり。

堀河院艶書合

堀河院の頃。内裏にて殿上の人々と女房等との艶書合なり。

正子内親王繪合

永承五年四月正子内親王家繪合の記事及び其歌合を記し。ふ判詞をのせたるものなり。

小野宮右衛門督家歌合

小野宮右衛門督家にて。なぞを題とし歌を合せたるものなり。

卷第二百廿七

顯昭陳狀

その詠じたる歌の判詞に對して。おのれの意を陳べたるもの。以て當時の歌論を窺ふに足るべし。

蓮性陳狀

後嵯峨院の歌合に。みづからが負けたる歌につきて。いさゝか殘念なる事どもつゞりて。その判詞を難じたるなり。奥にその折の歌を擧げたり。

第九輯

和歌部[illegible]

卷第二百二十八

土御門院御集

巡幸の十首。同じく百首。及び詩句を題として詠ぜられたる五十首等の御製を。壬生家隆點及び判詞を加へたるもの。與に他本を以て百六七十首の御製を増補したり。

卷第二百廿九

沙玉和謌集

後崇光院の御集なり。應永十年より同じき廿五年に至る御製なり。

卷第二百三十

元良親王御集

陽成院第一の皇子元良親王の御集なり。

瓊玉和歌集十卷

征夷大將軍宗尊親王の御集なり。春夏秋冬戀雜に類別せり。親王の事は増鏡にも見えたり。

卷第二百三十一

李花集上下

後醍醐天皇の皇子宗良親王の御集なり。類別前に同じ。親王は新葉和歌集の撰者たり。

卷第二百三十二

西宮左大臣御集

西宮左大臣高明の家集なり。高明は冷泉院安和二年事に坐して。太宰權帥に貶せらる。天祿三年京に歸り。同年薨ず。

金槐和歌集

鎌倉右大臣實朝の家集なり。四季及び戀雜に類別せり。

卷第二百卅三

常德院殿御集

征夷大將軍足利義尚の家集なり。義尚は一條兼良を師とし。和歌をよくす。

夏日陪多田院廟前詠五十首和歌

文明十六年五月。將軍義尙多田院の廟前にて詠進したる五十首の和歌なり。また常德院殿御集の中なるべし。

卷第二百卅四

柿本集

また人麿集といふ。柿本人麿の短歌を類聚したるものなり。

家持集

大伴家持の短歌を類聚したるものなり。

卷第二百卅五

權中納言兼輔卿集

兼輔は右中將利基の六男。延喜廿二年始めて參議に任ぜられ。官中納言に至る。承平三年薨ず。

權中納言敦忠卿集

敦忠は本院大臣時平の三男。天慶二年參議に任じ。同六年薨ず。官權中納言に至る。

權中納言朝忠卿集

朝忠天曆六年參議に任じ。官中納言に至る。康保三年薨ず。以上の三集は各その短歌を集めたるもの。中には他人の歌の攙入したるもありといふ。

海人手兒集

實は權大納言師氏の家集なり。群書一覽にその說見えたり。師氏は天祿元年五十八にして薨ず。世に枇杷大納言といふ。

閑院左大將朝光卿集

中には大貳または小一條濟時等と贈答の歌も見えたり。

卷第二百卅六

前大納言公任卿集

和漢朗詠集の著者四條公任の家集なり。長久二年薨ず。

卷第二百卅七

權中納言定賴卿集

四條公任の子。官權中納言に至る。寛德二年薨ず。

卷第二百卅八

權中納言俊忠卿集

鳥羽天皇の頃の歌人なり。

中納言雅兼卿集

同じ頃の人。

成通卿集

蹴鞠の名人にして。詩をよくし和歌に長じ。今樣にも巧みなり。官大納言に至り。平治元年出家して栖蓮といへり。

前大納言實國卿集

入道大納言資賢卿集

按納言集 長方卿

皆平氏の盛なりし頃の人々なり。長方は福原遷都を非とし。ふたゝび舊の都にかへさしめたるよし。源平盛衰記等に見えたり。

卷第二百卅九

權中納言爲重卿集

康曆二年正月十二日。松田丹後守宿所當座三十首を始とし。冷泉爲重の歌を集めたるものなり。

卷第二百四十

亞槐集 十卷

正二位權大納言飛鳥井雅親の歌集にして。卷一には文正元年夏日同詠百首應製和歌を收め。卷二には文明十一年四月住吉社法樂百首及び詠五十首を收め。卷三には春部。

卷四には夏部。卷五には秋部。卷六には冬部。卷七八には戀部。卷九には雜部上として懷舊其他くさ〳〵の歌を集めたる外。別部。旅部等を收め。卷十には雜部下として。哀傷部。釋教部。神祇部。祝部等を收めたり。

卷第二百卅一

為和卿集

永正十四年の歌を初とし。大永享祿を經て天文年間に至る冷泉為和の家集なり。

權大納言言繼卿集

永祿五年以後。山科言繼の家集なり。

卷第二百卅二

明日香井和歌集

飛鳥井雅經の家集なり。後鳥羽。土御門。順德の朝の歌人たり。刊本に飛鳥井集とあるは雅親卿の亞槐集なり。此集と混同すべからざるよしは。群書一覽にも見えたり。

卷第二百卅三

隣女和歌集 四卷

飛鳥井雅有の家集なり。群書一覽には單に隣女集と見えたり。

卷第二百卅四

祭主輔親卿集

伊勢の祭主大中臣輔親の家集なり。假名序あり。

大藏卿行宗卿集

長承元年十二月炎上の後。思ひ出すに隨ひ記すよし。集の初めに見ゆ。

卷第二百卅五

六條修理大夫集 顯季卿

白川院より鳥羽院頃の歌人なり。柿本人丸

の影供を行ひたると著聞集等に見えたり。

左京大夫顯輔卿集

顯季の三男。堀河。鳥羽兩院より近衞院の頃に至る歌人なり。詞花和歌集を撰ず。

卷第二百卅六

從三位賴政卿集

源三位賴政は攝津守賴光の後なり。治承三年高倉宮を奉じて兵を擧げ平氏を討つ。事成らずして平等院に自殺す。俊成も稱美せし歌人なりとぞ。刊本の末には。南禪寺惟肖和尚の作にかゝる賴政肖像の讃を附したり。

卷第二百卅七

紀貫之集十卷

第一より第五までは。延喜五年以來延長四年に至る歌を收め。第六以下のみ部類を分ちたり。

卷第二百卅八

業平朝臣集

在五中將業平の家集なり。多くは古今集に出でたるものたり。

敏行朝臣集(藤原)

宗于朝臣集(源)

公忠朝臣集(源)

賴基朝臣集(大中臣)

猿丸大夫集

紀友則集

坂上是則集

藤原清正集

藤原元眞集

これらの家集には他人の作など混りたるも多きよし。契沖の説あり。その要は群書一覧にも見えたり。

卷第二百四十九

信明集

前右大弁公忠の子天祿元年卒す。

藤原義孝集

義孝は一條行成の父なり。

藤原仲文集

この集多くは俳諧体なりといふ。

源順集

和名類聚抄の作者。嘗て大中臣能宣。清原元輔等と勅を奉じて後撰集を撰ず。世に梨壺の五人といへり。

卷第二百五十

能宣朝臣集（大中臣）

爲頼朝臣集（藤原）

元輔集

兼盛集

皆後撰時代の歌人なり。

卷第二百五十一

實方朝臣集（藤原）

一條院の朝の人なり、後陸奥國に貶せられ任所に卒す。尤も和歌をよくし、其祠加茂橋本にあり。後世和歌を學ぶ者多く之に祈る。

高光集（藤原）

相如集（高丘）

共に拾遺時代の人。相如は一條行成の師なり。故にその作多く朗詠集に入れりといふ。

重之集

源重之の家集なり。卷末に百首を収めたり。

契沖の說によれば。一人にして百首よみたると。古き集にては重之を初とすべしといふ。

卷第二百五十二

藤原長能集

圓融。花山。一條の頃の人。

源兼澄集

源道濟集

共に同じ頃の人。

卷第二百五十三

橘爲仲朝臣集 本末

能因法師の頃の歌人なり。應德二年卒す。

讃岐入道集

藤原顯綱の家集なり。康和二年出家。

故侍中左金吾家集

源賴實の家集なり。美濃守賴國の男。

津守國基集

この集にある「蒲鉾にかく玉づさと見ゆる哉かすめる空をかへるかりがね」の歌よりして。蒲鉾の神主と世にいひ傳ふるよし。群書一覽にいへり。

卷第二百五十四

散木奇謌集 上卷

藤原俊賴の家集なり。契沖の說に。奇謌集の奇字は弃の誤なるべしといへり。これ說恐くは是に近し。

卷第二百五十五

藤原爲忠朝臣集

式部大輔菅原在良朝臣集

共に堀川。鳥羽の頃の人。

藤原基俊家集上下
俊頼と同時代の人。悦目抄。新撰朗詠集。新三十六歌仙等の著者なり。

卷第二百五十六

清輔朝臣集(六條)
清輔は顯輔の子。俊成。西行と名を齊うす。

源師光集
美濃守賴國の男。康治二年に至る。

卷第二百五十七

源有房朝臣集

平忠度朝臣集
ともに平氏時代の歌人なり。

惟宗廣言集
永暦より壽永に至る、日向守基言の男。

鴨長明集
方丈記。瑩玉集。發心集等の著者。後鳥羽院召して和歌所の寄人となす。

卷第二百五十八

藤原隆信朝臣集上下
隆信は氏を法性寺と稱し。後鳥羽院頃の歌仙たり。また繪をよくす。元久二年卒す。

卷第二百五十九

藤原隆祐朝臣集
隆祐は家隆の子。歌をよくす。此集には定家の評を加へたり。

藤原光經集
建保。承久のころの人。

卷第二百六十

源孝範集
宗祇。太田道灌などゝ贈答の歌も見えたり。

常縁集

東常緣の家集なり。世々和歌の家にして。文明の頃。勅ありて歌道を傳授し奉れりといふ。

慕景集

太田道灌の家集なり。

桂林集

月巷源直朝の家集なり。三條西實枝が天正三年の奥書あり。

卷第二百六十一

赤人集

山邊赤人の家集なり。人麿と名を斉うす。

躬恒集

大河内躬恒の家集なり。古今集の撰者。

興風集

相模掾藤原道成の男。寛平頃の歌人なり。

卷第二百六十二

忠峯集

壬生安綱の男。古今時代の歌人なり。

忠見集

壬生忠岑の男。後撰時代の歌人なり。

曾禰好忠集

又た曾丹集といふ。

卷第二百六十三

櫻井基佐集 上下

櫻井中務丞基佐(法名永仙)の家集なり。

卷第二百六十四

出觀集

入道二品覺性法親王の御集なり。四季及び雜等に類聚したり。

卷第二百六十五

北院御室御集

守覚法親王の御集なり。

第十輯

和歌部家集

巻第二百六十六

慶運法印集

慶運は僧浄辨の子。後光厳院の頃の人なり。和歌四天王の一人たり。

堯孝法印集

堯孝は権大僧都堯尋の子。常光院と称し。和歌所の開闔たり。後花園院享徳四年六十五にして卒す。

巻第二百六十七

素性法師集

僧正遍昭の子。寛平延喜頃の歌人なり。

恵慶法師集

播磨講師と称す。寛和頃の人なり。

安法法師集

安法は俗名を源趁といふ。中古三十六歌仙の一人たり。

登蓮法師集

西行法師と同じ頃の人なり。

巻第二百六十八

林葉和歌集六巻

俊恵法師の家集なり。俊恵は木工頭俊頼の子。

巻第二百六十九

寂然法師集

寂然は俗名を藤原頼業といひ。丹後守為忠の子なり。千載集以下の勅撰に入れり。

寂蓮法師集

寂蓮は俗名を藤原定長といひ。叔父俊成に子養せらる。定家生るゝに及び。入道して寂蓮といひ。當時の名匠たり。建仁二年卒す。藻聚類抄を著はす。

兼好法師集

徒然草の作者にして。和歌四天王の一人たり。北朝觀應元年伊賀の國に病歿す。年六十九。

卷第二百七十

元可法師集

元可は橘公義が高野に遁れて出家したりし法名なり。應安頃の人。

宗祇法師集

飯田宗祇の家集なり。宗祇和歌を東常縁に。連歌を猪苗代兼載に學び。遂に連歌を以て名をなし。天皇花の下の號を賜ふ。新撰玖波集以下著書多し。

卷第二百七十一

嘉喜門院御集

後村上院の中宮にして。後龜山院の御母なり。

齋宮女御集

徽子女王の御集なり。式部卿重明親王の女。村上院の女御たり。故に齋宮女御と稱す。

經信卿母集

大納言源經信の母にして。權中納言道方の室なり。此集の末に圓融院御入講の時の事をのせたり。

俊成卿女集

俊成の女の家集なり。また當時の名匠たり。

卷第二百七十二

小町集

小野小町の家集なり。本居宣長は玉勝間に。この集の眞僞を疑ひ。小大君の歌の多く混入せるは。小町と小大君と紛らはしたるならんとて。新古今など誤をうけたるよしをいへり。

檜垣嫗集

檜垣嫗はもと肥後國白河の遊女にして。和歌に巧なりしといふ。後撰集時代の人なり。清原元輔肥後に下りし時の歌も見えたり。

本院侍從集

左兵衛佐棟梁の女なり。

小馬命婦集

攝津守藤原棟世の女なり。

馬內侍集

一條院皇后定子の女房たり。藤原道隆兵衛佐たりし時。馬內侍と契りて歌を贈答したるよしなど見ゆ。

卷第二百七十三

伊勢集

伊勢は七條皇后の女房たり。契沖阿闍梨は拾遺集雜部中務の歌を引て。此集中おぼつかなき事どもまじはりたるが。末にいたりて殊にあらぬ歌も多しといへり。

中務集

敦慶親王の御女なり。集の中に源順と贈答の歌など見えたり。

卷第二百七十四

加茂保憲女集

父保憲は圓融天皇貞元二年卒す。畧その時代を推すべし。

小大君集

三條院の女藏人左近の集なり。

清少納言集

一條院皇后定子の女房。枕草紙の作者。當時の才媛なり。

紫式部集

上東門院彰子の女房。源氏物語を著はす。結構精妙古今に度越すといふ。後人以て詞家の宗となす。

卷第二百七十五

和泉式部集五卷

また上東門院の女房。越前守大江雅致の女なり。

卷第二百七十六

相摸集

中古歌仙三十六人傳には父不詳とあれど。作者部類には、中宮の進源頼光の女と見えたり。初め乙侍從といふ。

卷第二百七十七

赤染衛門集

父は大隅守赤染時用。或は平兼盛といふ。和泉式部と名を齊うす。また上東門院の女房たり。

卷第二百七十八

伊勢大輔集

父は祭主大中臣輔親。また上東門院の女房たり。

康資王母集

一に伯母集といふ。神祇伯康資王の母。高階成順の女なり。

弁乳母集

陽明門院の御乳母。加賀守藤原顯時の女なり。

出羽弁集
加賀守平の季信の女なり。
祐子內親王家紀伊集
紀伊は祐子內親王(後朱雀院皇女)家の女房。平經重の女なり。
巻第二百七十九
二條大皇太后宮大貳集
太宰大貳高階成章の女。母は大貳三位なり。二條大皇太后宮(白河院皇女)の女房たり。
待賢門院堀川集
堀川は神祇伯顯仲の女。待賢門院璋子の女房たり。
小侍從集
石淸水別當光淸の女。母は小大進。大宮小侍從と號す。
巻第二百八十

建禮門院右京大夫集
右京大夫は高倉院の中宮建禮門院德子の女房たり。一條攝政伊尹の後世尊寺伊行の女。
和歌部終
巻第二百八十一
中殿御會部類記
天喜四年の大右記より。享德二年の三條內府記に至るまで。中殿御會に關したる記錄を類聚したるものなり。
巻第二百八十二
晴御會部類記
建保六年八月の無名記より。寶治二年正月の顯朝卿記に至るまで。晴御會に關する部類なり。以下缺けたり。
貞治六年中殿御會記　二條良基
一に雲井の花といふ。貞治六年の春。中殿

に於て和歌を講ぜられたる事を記したるものなり。

卷第二百八十三

柿本朝臣人麿勘文。

壽永二年二月。法橋顯昭が。柿本人麿の種姓。官位。時代。歌仙。家集。滅所。妻妾。及び墓所の事等を。諸書を引いて勘したるものなり。

柿本影供記　藤原敦光

六條顯季人麿の像を圖繪し。その影供を行ひし時の記なり。古今著聞集にも見えたり。

柿本講式

人麿を祭る式の次第。及びその頌詞等を記したるものなり。

柿本像綵色勸進帳

文明八年四月。僧慶範が大和國柿本寺の人丸堂を修め。且つその木像をあらため綵色せんが爲めに。助成を乞へる勸進帳なり。

卷第二百八十四

新撰萬葉集二卷　菅原道眞

一に菅家萬葉集と稱す。然れども恐くは後人の附會假托にして。その撰める時の如き。菅公の風韻に似ず。殊に押韻平仄の亂雜なるものある。一驗してその撰にあらざるを知るべし。

卷第二百八十五

古今和歌集目錄

古今和歌集每卷作者の名。及びその歌の數を擧げ。天皇。親王。大臣。納言。宰相。諸王。庶人。僧。及び皇后。女王。庶女。尼等に分類して作者の略傳を載せ。終りに橘清友。柿本人麿。中臣東人。其他の傳を掲

げ。また讀人不知の歌數をも示したり。

卷第二百八十六

古今集序注

顯昭法橋

貫之等の撰なる古今集の序を注釋せるものなり。四條公任の古註。相公禪門及び淸輔の合註。及び顯昭の案文を載せたり。壽永二年冬成る。

卷第二百八十七

古今集童蒙抄

一條兼良

古今集の注釋なり。文明八年六月書寫し終るよし。兼良の奧書あり。

卷第二百八十八

僻案抄

京極定家

嘉祿二年八月。古今集中の歌を抽いて注釋を加へたるものなり。

三代集之間事

京極定家

古今。後撰。拾遺の三代集に就いて。作者。詞及び和歌の事に關し。且は注釋を加へ。且は異說を擧げたるものなり。

卷第二百八十九

拾遺抄注

顯昭法橋

壽永三年八月。仰に依つて進むる所。拾遺集中の歌を抽き。諸書を引用して之が注釋を加へたるものなり。

卷第二百九十

散木集注

法橋顯昭

散木集中の歌を抽き。之を注釋したるもの。壽永二年十月注進する所なり。

藏玉和歌集

草木の異名幷に月の名をば。和歌を引いて注釋したるものなり。

卷第二百九十一

悅目抄　　藤原基俊

歌道の祕傳書なり。作歌上心得べき箇條を記したるもの。基俊より俊成に傳へ。次第次第相傳の奥書あり。

巻第二百九十二

後鳥羽院御口傳

歌に就ての心得を記し給へるものなり。

近代秀歌　　京極定家

先づ一般の歌論を記し。經信。俊頼以下。近代の秀歌を載せて之を論評せり。

詠歌一躰　　冷泉爲家

歌についての心得を記したるものなり。

よるのつる　　安嘉門院四條

一に阿佛口傳といふ。また作歌の心得なり。

巻第二百九十三

九品和歌　　四條公任

和歌を九品に分ち。その例二首づゝを載せたり。

歌仙落書　　久我通光

俊成の亭に於て。當時歌仙の歌を評したるものなり。

續歌仙落書

是も前書に倣ひたる歌仙の評なり。

正治奏狀　　藤原俊成

撰集の事についての奏狀なり。

定爲法印申文

嘉元々年四月。百首の事に就て奏上したる申文なり。定爲は冷泉爲家の子。

延慶兩卿訴陳狀

敕撰に就て冷泉爲世が奏狀にして。爲兼の

狀に對して辯疏したるものなり。

卷第二百九十四

無名祕抄　鴨長明

一に略して無名抄といふ。和歌に付ての故實及び心得等を記したるものなり。

卷第二百九十五

水蛙眼目　頓阿法師

和歌の故實及び作歌の心得等につき諸說を集めたるものなり。端闕けたり。

卷第二百九十六

今川了俊和歌所之不審條々

今二言抄と稱す。應永十年正月。今川了俊が和歌の故實口傳に就て。和歌所へ尋ねたる條々を記したるものなり。

了俊弁要抄

應永十六年の作にかゝる。今川了俊が作歌上の心得を詳說したるものなり。

落書露顯　今川了俊

和歌連歌について。故實その他の事を記したるものなり。

卷第二百九十七

徹書記物語　正徹

歌道歌人等の事に關せる隨筆なり。正徹歌を今川了俊。藤原爲尹に學ぶ。その門人に正廣。正般。正用等あり。東福寺佛照派の書記たりしより。世に徹書記といふ。

卷第二百九十八

東野州聞書

東常縁が和歌に關したる隨筆にして。文安寳德以後康正の頃に至るまで。當時名匠の談話逸事等の聞書なり。

卷第二百九十九

兼載雜談　　　猪苗代兼載

猪苗代兼載が和歌に關する故事及び歌評等を記したるものにして。弟子兼純に付與したるなり。兼載は明應年間の歌人にして。宗祇の門たり。

卷第三百

西公談抄

西行上人の和歌談議なりと傳ふれども。如何にや。藤原爲兼の奧書あり。

桐火桶

定家の作なりと傳へたれど。伴蒿蹊はその著譯文童諭に之を僞作とし。その例證を擧げたり。俊成の庭訓以下和歌に關する事をしるし。萬葉時代以下寶德の頃に至る歌を評したるものなり。

卷第三百一

愚祕抄 上下

建保五年京極定家の記したるよし。奧書に見ゆれど。恐くはまた後人の假托に出づるならむ。和歌に關する諸傳を擧げたり。

卷第三百二

三五記 鷺本 鷺末

また建保五年定家の記せるものなるよし。奧書に見ゆれども。恐くは僞作なるべし。烏丸資慶卿も既に此書を疑ひて不審なりといへり。鷺本には詠歌十體の例證以下作歌の注意を記し。鷺末には和歌の六義を說きたり。

連歌部

卷第三百三

筑波問答　　　二條良基

後普光園院の攝政二條良基が。連歌の故實

作法風躰等を問答躰に記したるものなり。公また典故に精通し。和歌に工なり。著書多し。連歌に關しては菟玖波集廿卷を撰し。勅撰に准ぜらる。實に連歌撰集の權輿なり。

吾妻問答　宗祇法師

宗祇法師が連歌の作法諸式を問答躰に記したるもの。間々例證を引きて之を叙せり。文明二年三月宗祇の奥書あり。本書を著はせる由來を知るに足るべし。

卷第三百四

さゝめごと上下　心敬僧都

釋心敬が和歌連歌の風躰の變遷を述べて。間々例證を示し。作歌の心得等を記したる隨筆なり。奥書に寛正二年に記せるよし見えたり。

卷第三百五

老のくりと　心敬僧都

心敬が諸國遊歴の記事に始まり。和歌連俳等の沿革を述べ。その心得等を記したるものなり。心敬は十住心院權大僧都と稱す。文明七年叙す。

老のすさみ　宗祇法師

宗祇が古今の連歌を評し。その風躰を論ぜるもの。齒の末のなぐさめなればとて。老のすさみとは名づけたり。文明十一年の作にして。打田太郎左衛門尉に贈れるものなり。

卷第三百六

若草山　猪苗代兼載

相國兼載が連歌に關する事を問答躰に記したるもの。明應丁巳季秋朔日の奥書に。本書は叡覽に入りたるよし見えたり。

連歌本式

猪苗代兼載

明應元年十二月。兼載の作れるもの。中に應安の新式とあるは。二條良基が應安年中救濟周阿と議して。古來の式を潤删したるものを指せるなり。

連歌新式追加並新式今案等

新式追加は二條良基の作にかゝり。今案は一條兼良の作にかゝる。之に兼良の連歌初學抄と和漢篇とを加へ。文龜辛酉の年。牡丹花肖柏が彼是を取捨商量して。一冊となしたるものなり。

漢和法式

連歌新式幷に追加と。新式今案。和漢篇。及び和漢追加等を本とし。和漢聯句の法式を部類に分ちて藏せたるものなり。明應七年三月。著者槐下散班の奥書あり。未だその人を詳にせず。

第十一輯

物語部

卷第三百七

伊勢物語

本書收むる所は朱雀院塗籠本と稱するものなり。在原業平一生の事をしるしたるものにして。作者に就てはその說未だ一定せず。群書一覽に契仲。眞淵の說を載せたり。

卷第三百八

大和物語 上下

作者の事諸說また分明ならず。平安時代の物語をしるせるなり。

卷第三百九

竹とりの翁物語

我國物語の始なるよし源氏物語にいへり。竹取の翁竹の中に美女を得て養育し。家富み榮えて後。美女となり昇天したりし事を述べたり。

卷第三百十

住吉物語。

中納言にして左衛門督かけし人の女。繼母に虐待せられて住吉に落魄せしが。後また立身したりし事を述べたり。然れども今存するものは後世の僞作なりといふ。

卷第三百十一

秋の夜の長物語。

西山の證西上人と。花園左大臣の子梅若君といへる童の三井寺の坊におりしとの事を述べたるもの。また以て叡山と三井寺の關係を視るに足るものあり。

鳥部山物語

武藏國の民部卿といへる法師。都に上りて藤の弁といへるに契りたりし哀なる物語なり。

松帆浦物語

岩倉の宰相の君淡路の島に流されし時。かねて深く語らひし侍從の君といへる兒。慕ひて彼國に下りしに。宰相は已に松帆浦にてうせ給ひしを聞いて。法師となりたる物語なり。

兒教訓　　宗祇法師

當時若衆の振舞を。雨中の徒然さに。七五調長歌もて綴りたるものなり。

卷第三百十二

無名草子

もと宮仕へしたる女房の言に假りて。源氏

その他むかしの物語どもの事を品隲したるものなり。

卷第三百十三

拾遺百番歌合

源氏物語を左とし。夜寢覺以下十種の物語を右とし。その歌を合せたるもの。定家のすさびなるべしといふ。

百番歌合

源氏を左とし。狹衣を右とし。その歌を合せたるものなり。

源氏物語願文

源氏五十四帖を句中に綴りて願文を作りたるもの。紫式部の爲めに佛事を營みし時のものなるべし。

卷第三百十四

伊勢源氏十二番女合

伊勢を左とし。源氏を右とし。その中にある女を合せて。之を品隲したるものなり。

源氏人々の心くらべ

源氏物語中の人物を拔き出でゝ之を合せ。その心々を評したるものなり。

卷第三百十五

源氏物語奧入

源氏物語の文句及び歌を抄出して之が解釋を加へ。文選。長恨歌。樂府等を引いて之と對照したるもの。桑門明融の奧書あり。

卷第三百十六

原中最祕抄 上下

行阿の撰述したるものゝ中より。藤原長親がその典要を取りて抄出したるもの。また源氏物語の注釋なり。故事典例を引きたり。

卷第三百十七

弘安源氏論議

弘安四年十月。東宮伏見院の御方にて。源氏物語の不審を二條づゝ問を出して。六日の間左右に分ちて論議せられたる事を記したるものなり。

卷第三百十八

仙源抄　　長慶天皇御抄

源氏物語の注釈をいろは別に次第したるものにして。藤原長親の奥書あり。

源語祕訣　　一條兼良公

卷第三百十九

一條兼良の著花鳥餘情別注の祕訣を記したるものなり。

源氏物語竟宴記

永祿三年十一月。源氏竟宴の記なり。源氏の卷の名を探題にし。観音法楽として。影前にて三十首を講じたり。また九條稙通の發句にて。連歌百韻あり。

日記部

卷第三百二十

和泉式部日記

長保五年四月より。寛弘三年正月に至る。和泉式部の日記なり。

卷第三百二十一

紫式部日記

寛弘五年の秋より。同七年正月に至る。紫式部の日記なり。

卷第三百二十二

讃岐典侍日記

嘉承二年五月より。翌年十月頃に至る。讃岐典侍の日記なり。堀河院崩御の事。及び典侍が大貳三位とともに御側に侍せし事よ

り。詠閑の間の事など詳かに記したり。

卷第三百二十三

弁內侍日記上下

一本に後深草院弁內侍家集とあり。寬元四年正月後嵯峨天皇讓位に起り。建長四年十月に至る。弁內侍は藤原信實の女なり。

卷第三百二十四

中務內侍日記

弘安三年伏見殿の御懺法より。正應五年二月に至る。宮中奉仕の日記なり。

卷第三百二十五

堯孝法印日記

文安三年正月より。同四月に至る。和歌所法印堯孝の日記なり。

玄與日記

文祿五年七月。黑齋玄與近衛信輔に供奉して。鹿兒島より歸洛の途に上りしより起り。慶長二年三月。庄內都の城に着きしまでの日記なり。

卷第三百二十六

宗長手記

大永二年五月より。同七年十二月に至る。連歌師宗長の日記なり。東國の形勢を觀るに足るもの多し。

紀行部

卷第三百二十七

土左日記　紀貫之

我が國假名紀行文の最も古きものと稱せらる。紀貫之土佐守となり。承平四年の冬。任滿つて京に歸りし時の日記なり。

いほぬし　增基法師

熊野詣を始とし。東國に下りし紀行なり。

卷第三百二十八

さらしな日記　　菅原孝標女

菅原孝標の女の旅行日記なり。間々自傳を交へたり。孝標女は祐子内親王の侍女にして。著書多し。本書の末には。父孝標。夫俊通。及び参議資通の略傳を載せたり。

卷第三百二十九

高倉院嚴島御幸記　　源通親

治承四年三月。嚴島御幸の記なり。四月七日還幸し給へり。

後鳥羽紀熊野御幸記　京極定家

建仁元年十月。熊野御幸の記にして。定家の日記明月記の一節なり。

卷第三百三十

海道記　　源光行

貞應二年四月。鎌倉に下りし紀行なり。光行は千載集の撰者たり。

南海流浪記　　道範阿闍梨

仁治四年正月。故ありて讃岐に配流せられし時の記にして。建長元年七月。赦されて高野山に歸るに終る。

卷第三百三十一

東關紀行　　源親行

仁治三年八月。關東に下りし紀行なり。もと鴨長明の道の記とて。扶桑拾葉集などにも收められたれど。夫木抄によれば。親行の作なりといふ。

うたゝねの記　　阿佛尼

阿佛尼の鎌倉に下りし紀行なり。阿佛尼は安嘉門院の四條とて。冷泉爲家の後妻なり。

卷第三百三十二

いざよひの日記　　同じ人

阿佛尼訴訟の爲めに鎌倉に下りし道の記なり。

都のつと　宗久

觀應の頃。諸國を巡歷して東國より奥州に下りしまでの紀行なり。

卷第三百三十三

小島のくちずさみ　二條良基

文和二年六月。南朝の軍勢京都に入り。主上美濃國小島の行宮に幸し給ひしより。同年九月。還幸の事に至る紀行なり。

住吉詣　足利義詮

貞治三年四月。住吉詣の記なり。

道ゆきぶり　今川貞世

京より長門國赤間關に至りし紀行なり。了俊が九州の探題たりし時のものにかゝる。

鹿苑院殿嚴島詣記　今川貞世

康應元年三月。將軍義滿の嚴島詣の紀行なり。

卷第三百三十四

なぐさめ草　正徹

應永二十五年三月の末。京を出でゝ伊勢に詣でし事より。歸京の後御堂に參りしにつけて。光源氏物語の事ども。なぐさめ草となりぬるを書きしるしたるものなり。

伊勢紀行　堯孝法印

永享五年三月。將軍義教の伊勢大神宮參詣に供奉したる紀行なり。

卷第三百三十五

富士紀行　飛鳥井雅世

永享四年九月。將軍義敎の富士御覽の時。供奉して東國に下りし紀行なり。

覽富士記　堯孝法印

同じく將軍義教に供奉したる堯孝法印の紀行なり。

富士御覧日記

將軍義教が富士見の亭以後和歌の贈答を記せるもの。終に宗長の奥書あり。

富士歴覧記　飛鳥井雅康

明應八年五月。富士歴覧の爲めに東國に下りし紀行なり。

巻第三百三十六

善光寺紀行　堯惠法印

寛正六年七月。信濃國善光寺に參詣せし紀行なり。

ふぢ河の記　一條兼良

一に美濃の紀行といふ。應仁の亂を避けて奈良にありし頃。伊賀近江を經て。美濃國に出でられし時の紀行なり。

正廣日記

文明五年八月。正廣が攝津修理大夫之親と共に。富士を覽んとて駿河にくだりし時の紀行なり。

平安紀行　源持資

文明十二年六月。京都に上りし太田道灌の紀行なり。

筑紫道記　宗祇法師

文明十二年七月。周防國山口に下りしより。長門國赤間關。豐前國門司に出でゝ。筑前國を巡歴し。十月。山口に歸りしまでの紀行なり。

巻第三百三十七

北國紀行　堯惠法印

文明十八年。北國を巡歴したる紀行なり。

廻國雜記　道興准后

世に宗祇廻國雜記と號し。印本五卷に分ちたるものあれど。これは准后道興親王の作にして。宗祇のものにあらず。文明十八年六月。京を出て丶北國に入り。關東より奧州に下りたる紀行雜記なり。

卷第三百三十八

高野參詣日記　三條西實隆

逍遙院内府が高野參詣の紀行なり。たゞ四月の頃とありて。その何年にかゝるかを詳にせず。

吉野詣記　三條西公條

天文廿二年二月。奈良より吉野へ詣でられたる紀行なり。

九州道の記　細川幽齋

天正十五年三月。豐臣秀吉九州進發の時。幽齋丹後國田邊城を出て。船にて山陰道を廻りて九州に入り。歸陣の時は南路によりて。七月下旬大阪に着せしまでの紀行なり。

九州のみちの記　豐臣勝俊

天正の末。豐太閤征韓の師を起し。九州に動座ありし時。供奉して肥前名護屋に至りし紀行なり。

卷第三百三十九

あづまの道の記　仁和寺尊海

天文二年十月。東下の紀行なり。

むさし野の紀行　北條氏康

天文十五年仲秋。武藏野に遊びし紀行なり。されどこの書恐くは後人の氏康に假托して作る所なるべしといふ。

東國陣道記　細川幽齋

天正十八年二月廿九日。尾州熱田に居陣の事より。五月廿七日夜の紀事に終る。

卷第三百四十三

懐竹抄

今横笛篇を存するのみ。笛の所作に關する口傳。及び各人の傳を舉げてその傳統を示したり。大神惟季傳ふる所なりといふ。

卷第三百四十四

胡琴敎錄 上下

琵琶に關する作法故實。及び傳統等を記したるものなり。

卷第三百四十五

舞樂要錄 上下

塔供養その他の法會。及び朝廷の儀式に舞樂を用ひたる例を示し。また法會に於ける調子音樂の例を舉げたり。應和より保元に至る。

卷第三百四十六

舞祕別錄　藤原孝道

玉樹賀殿以下。舞樂の作法を述べたるもの。嘉祿三年の作なり。孝道時に音樂生たり。

舞曲口傳　豐原統秋

永正六年。豐原統秋上意によりて之を撰み進上したるもの。案摩二舞以下舞曲に關する故實作法等の口傳なり。統秋は體源抄の著者にして。當時樂家の泰斗たり。尤も笙に堪能なり。大永四年。七十五にして卒す。

卷第三百四十七

夜鶴庭訓抄

舞樂に關する雜事を記したるもの。書名によるに。管絃の祕事心得等をその子に傳へたるものなり。

殘夜抄　近衛家基

一に迷路抄といふ。初めに管絃の起りを略

卷第三百四十三

懐竹抄

今横笛稿を存するのみ。笛の所作に關する口傳。及び各人の傳を擧げてその傳統を示したり。大神惟季傳ふる所なりといふ。

卷第三百四十四

胡琴教錄上下

琵琶に關する作法故實。及び傳統等を記したるものなり。

卷第三百四十五

舞樂要錄上下

塔供養その他の法會。及び朝廷の儀式に舞樂を用ひたる例を示し。また法會に於ける調子音樂の例を擧げたり。應和より保元に至る。

卷第三百四十六

雜秘別錄　藤原孝道

玉樹翁殿以下。舞樂の作法を述べたるもの。嘉祿三年の作なり。孝道時に音樂生たり。

舞曲口傳　豐原統秋

永正六年。豐原統秋上意によりて之を撰み進上したるもの。案摩二舞以下舞曲に關する故實作法等の口傳なり。統秋は體源抄の著者にして。當時樂家の泰斗たり。尤も笙に堪能なり。大永四年。七十五にして卒す。

卷第三百四十七

夜鶴庭訓抄

舞樂に關する雜事を記したるもの。書名によるに。管絃の秘事心得等をその子に傳へたるものなり。

殘夜抄　近衞家恭

一に迷路抄といふ。初めに管絃の起りを略

叙し。御遊以下打物樂器に至るまで。十三ヶ條に分ちて郢樂の事を述べたるもの。家基は正應二年四月關白たり。

卷第三百四十八

絲竹口傳

管絃に關する口傳を集めたるもの。奥書によるに。嘉曆二年三月。天王寺俊鏡の作なるべし。

木師抄

管絃をなす次第。大法會の所作を初めとし。また當時管絃に關する口傳なり。

卷第三百四十九

秦箏相承血脈

唐の孫賓に起り。嵯峨天皇の御子左大臣源信より後陽成天皇に至るまで。秦箏の道の相承系圖なり。

琵琶血脈

唐の廉承武に起り。藤原貞敏より鎌倉頃まで。琵琶の道の相承系圖なり。

順德院御琵琶合

承久二年三月二日の御琵琶合の判詞を記したるもの。西園寺公相の筆にかゝるならむといふ。

八音抄

琵琶の名物を記し。その製作の方法を述べたるなり。

卷第三百五十

東遊歌圖

堀川右大臣賴宗流の所傳にして。東遊の歌の調べを記したるものなり。

風俗

また同流の所傳にして。風俗歌の詞を記し

たるなり。

郢曲抄

郢曲に關する祕說口傳なり。

卷第三百五十一

新撰朗詠集 上下　藤原基俊

四條公任の和漢朗詠集の體裁に倣ひて。同題の詩歌文章を撰みたるものなり。上卷に春。夏。秋。冬の部を集め。下卷に雜部を集めたり。基俊は悅目抄の著者なり。

卷第三百五十二

梁塵祕抄口傳集

今は卷十を存するのみ。今樣を始め雜曲に關する祕說口傳なり。太政大臣師長の記する所なりといふ。世に妙音院太政大臣と稱す。

蹴鞠部

卷第三百五十三

承元御鞠記

承元二年四月十三日に催されたる後鳥羽院御鞠の記なり。終りに同年四月七日の藤原泰通等の上表文を載せ。院を以て斯道の長者と號し奉ると見えたり。

貞治二年御鞠記　二條良基

一に衣かつぎの日記といふ。貞治二年五月の御鞠會の記なり。

享德二年晴之御鞠記　一條兼良

一に雲井の春といふ。享德二年三月。晴の御鞠の事を記したるなり。

後鳥羽院御記

卷首闕けて題號を逸す。今僅に沓襪を着くる樣と。結緒の二條を存し。承元五年閏正

月の御製の跋文あるのみ。惜むべし。

卷第三百五十四

成通卿口傳日記

合せて三十條。蹴鞠に關する成通卿の口傳なり。

蹴鞠略記　飛鳥井雅經

十二條の蹴鞠に關する故實なり。

蹴鞠簡要抄

蹴鞠に關する諸家の秘說口傳について。その要を簡び集めたるものなり。

卷第三百五十五

遊庭秘抄　御子左爲定

成通卿の三十ヶ條式。源九日記。成平抄。頼輔卿口傳集。革匊記。要略抄等の諸書を引き。蹴鞠の故實秘說を述べたるものなり。

鷹部

卷第三百五十六

新修鷹經　上中下

弘仁九年五月。鷹所より撰進する所。鷹の種類及び調養治狩の法等を記し。圖を挿みて之を說明したるものなり。

嵯峨野物語　二條良基

至德三年十一月。舊記によりて記したるものなり。代々の鷹狩以下鷹に關する故實より。承保頃の行幸の鷹狩の記に至るまで之を載せたり。

白鷹記

嘉曆二年。前關白（房實なるべし）が信濃國諏訪の神平より奉れる白鷹の事を記したる文なり。

養鷹記

朝倉敎景一雙の鷹を得て之を畜養し。その

後逸なりし事を記したるもの。文は淡交にして僧侶の手に成る。

卷第三百五十七

後京極殿鷹三百首

春。夏。秋。冬及び戀。雜。各五十首。鷹によせて詠じたるもの。風格多く平生の作に似ず。疑ふらくは後人の假託ならむ。

鷹三百首和歌　京極定家

恐らくは定家の作にあらじ。蓋し後人の假託に出づるものなるべしといふ。又た定家卿鷹百首と稱するものあり。屋代本には天文八年の奥書見えたり。皆此卷及び小鷹部より抄出する所なり。

鷹百首　慈鎭和尚

別に春夏秋冬の部を立てず。

鷹百首　西園寺公經

同じく部類を立てず。鷹を詠じたる百首なり。

小鷹部

五十首あり。もと定家卿鷹三百首の後に附したれども。員外に屬するを以て。分つて別卷としたるよし。奥書に見えたり。

禰津松鷗軒記

禰津松鷗軒より傳へたる。鷹に關する故實等を記したるものなり。

遊戯部

卷第三百五十八

薫集類抄　上下

刑部卿範兼勅を奉じて抄集する所。薫物の諸方を集めたるものなり。

卷第三百五十九

後伏見院宸翰薫物方

また薫物の祕方を集めたるものなり。

むぐさのたね　　後小松院

梅花。荷葉。菊花。落葉。侍從。黑方等。六種の薫物の祕法を記させ給へるものなり。

五月雨日記

文明十一年五月十二日。東山殿に於て行はれたる六番香合の事を始め。香盤折形。香箸。香づゝみの折形等を圖說し。同年十一月十六日。六種薫物合の事等を記したるものなり。

名香合

志野宗信の家に於て。宵柏。大偶等の香合を記したるもの。事書は文龜二年三條西實隆の作にして。宵柏は牡丹花肖柏なり。

名香目錄

慶長辛丑の年。玩隱永雄といへるもの丶名香目錄にして。簡單なる說明を加へたり。

卷第三百六十

圍碁口傳

碁聖式の中より要をとり記したるもの。

圍碁式

正治元年六月。玄尊といへるもの丶記す所。終りに碁局の寸法を附載せり。

仙傳抄

一に仙傳書に作る。生花等の口傳なり。もと三條家の祕本にして。奥に文安以後天文に至る相傳の次第を載せたり。

卷第三百六十一

君臺觀左右帳記

君臺の左右帳記にある支那人の畫を列記したるもの。佩文齋書畫譜によりて。その人名の誤謬を校したり。末に座敷の飾。茶湯

棚の飾。抹茶壺の圖形其他の事を圖說せり。本書は能阿彌の記にかゝり。文明八年大内左京大夫に進めたるものなり。

御飾記

大永三年。松雪齋の記す所。當時座敷等の飾り樣等を注したるものなり。

卷第三百六十二

作庭記　九條良經

庭園の作り樣及びその故實等を注したるものなり。

卷第三百六十三

洛陽田樂記　大江匡房

永長元年の夏。田樂の流行せし事を記したる漢文なり。朝野群載にも收めたり。

文安田樂能記　貞意大僧正

文安元年六月。伏見宮貞常親王住心院に成らせられ。田樂能等御覽の記なり。

紀河原勸進猿樂日記

寛正五年四月。紀河原の勸進申樂の事を記したるもの。伊勢宗悟の書き進めたるなりといふ。

異本紀河原勸進申樂記

また同じ時の記なり。舞臺棧敷を圖說し。申樂の目錄を載せたり。

粟田口猿樂記

永正二年。粟田口に於て催されたる勸進猿樂の記なり。青蓮院准后尊應等とりてかゝせ給ふとやらむと奥書に見えたり。

卷第三百六十四

飲食部

厨事類記

朝廷の御膳部。及び調備等の厨事に關する事

を記す。いま完本にあらず。

巻第三百六十五

世俗立要集

今巻百五十四を存するのみ。その中七ヶ條また缺けたり。帝王供御膳の事以下。飲食について其の故實を圖説したり。

四條流庖丁書　多治見貞賢

長享三年に記したる相傳書にして。四條流の料理方に關する故實なり。

巻第三百六十六

武家調味故實

首缺けたり。また一に調味記と稱す。武家の料理に關する故實等を記したるものなり。

大草家料理書

大草流の料理に關する秘説故實等なり。

庖丁聞書

料理の名目を解説し。煮方燒方等を略述したるものなり。

巻第三百六十七

大草殿より相傳之聞書

また大草流庖丁の秘傳故實を記したる聞書なり。

巻第三百六十八

喫茶養生記　榮西禪師

榮西禪師宋より歸朝の時。茶種を齎らし來りて。始めて之を筑前國背振山に植ゑたり。我國是より漸く喫茶の風を生ず。本書は自らその養生に利あるを説きしもの。建保二年四月の自叙あり。

喫茶往來　玄惠法印

明衡往來等の躰に習ひ。喫茶の事を記し。

その德を述べたるものなり。

酒茶論　沙門蘭叔

酒を忘憂君とし。茶を滌煩子といひ。互にその德を述べたるもの。馬琴の著などに此篇より脱胎したるものありといふ。當時一種の戯文なり。

亭子院賜酒記　紀長谷雄

延喜十一年六月。亭子院に酒客を集めて酒を賜ひたる事を記したるものなり。

酒食論

先づ上戸と下戸とをして。互に其德を頌せしめ。次に中戸を出して。物はみな中道を離れざるを宜しとすと結論したる戯文なり。或はいふ。一條兼良の作にかゝると。

北野大茶湯之記

天正十五年十月に催されたる大茶湯の記にして。その觸揭の文は。以て秀吉の氣宇曠達當時の風をなせしを想見するに足るものあり。今試に一條を抄すれば。

一日本の儀は不及申。數寄心懸有之もの唐國の者までも可罷出候事。

第十三輯

合戰部

卷第三百六十九

將門記　首欠

平將門が關東に兵を擧げたる事實を詳記したるもの。天慶三年六月の記にかゝり。尤も信を措くに足るべし。また當時の和臭を帶びたる文躰を觀るにもよし。原本は尾張眞福寺の所藏にかゝり。間々古躰の假名を以て音訓を附したり。

純友追討記

扶桑略記載する所によりて之を收めたり。
藤原純友追討の事を記したるなり。

陸奧話記

一に陸奧物語といふ。前九年役の戰記なり。

奥州後三年記上中下

後三年役繪卷物の詞書なり。貞和三年。玄慧法印の記せるものなりといふ。

卷第三百七十

承久軍物語六卷

一に承久記といふ。承久役繪卷物の詞書なり。

卷第三百七十一

梅松論上下

南北朝時代實錄の一にして。武家の初めより筆を起し。新田義貞沒落の條に終る。末に夢窓國師及び安國寺等の事あり。將軍方の人の記する所なり。

卷第三百七十二

伯耆之卷

後醍醐天皇隱岐國より伯耆國へ潜幸し給ひてより。名和長年の一族軍忠を盡せし事に至るまでを詳に記したるものなり。

卷第三百七十三

明德記上中下

明德年間。山名氏淸の亂を記したるものなり。

卷第三百七十四

應永記

一に大內義弘退治記といふ。

嘉吉記

嘉吉元年。赤松滿祐將軍義敎を弑し。細川。

山名等の諸將兵を發して播州に入り。赤松氏を討滅せし事より。その後同氏再興の事に及ぶまでの事を記したるものなり。

卷第三百七十五

新撰長祿寬正記

年を康正元年畠山義就申狀に起し。斯波義敏上洛の事に終る。長祿。寬正年間の記なり。

文正記

文正元年の亂を記したるなり。文を行るよ猥雜。以て當時淡文の躰を觀るべし。

卷第三百七十六

應仁記三卷

應仁丁亥の亂を記したるものなり。

卷第三百七十七

應仁略記

また應仁亂の記なり。

卷第三百七十八

應仁別記

また前に同じ。

永祿記

將軍義輝松永久秀の爲めに弑せられ。義昭逃れて越前に入り。轉じて尾張の織田氏に依る。信長即ち義昭を奉じて京師に入り。征夷將軍としたりしも。後不和を生じ。義昭中國に遷りたる顛末を記したるものなり。

卷第三百七十九

豐鑑　竹中重門

竹鏡に倣ひて豐臣秀吉一代の事を記せり。重門は竹中半兵衛の子。以徹と字す。

卷第三百八十

細川兩家記

一に二川分流記といひ。また正祿間記といふ。細川氏兩家に分れて相爭ひし顚末を記したるものなり。永正。永祿の間の事にかかる。

巻第三百八十一

勢州四家記

北畠。工藤。關。千の四家が。永祿。天正間に於て。伊勢國に相爭ひし顚末を記したるものなり。

內外兩宮兵亂記

長享二年。內外兩宮の爭亂を記したるものなり。

巻第三百八十二

鎌倉大草紙

永和以後文明年間に至るまで。鎌倉の事を初め。關東地方の事を畧記したるものなり。

巻第三百八十三

結城合戰物語

結城氏朝。足利持氏の孤子春王。安王を奉じて。兵を舉げし顚末を記したるものなり。

巻第三百八十四

相州兵亂記

一に關東兵亂記といふ。關東公方の由來。持氏憲實不和の事より。後北條氏勃興の事跡を説き。氏康の時代永祿四年に至るまで。關東に於ける兵亂等を記したるものなり。

巻第三百八十五

豆相記

北條早雲の素生より。天正十八年。北條氏滅亡の時に至るまで。後北條氏の事を記したるものなり。

川越記

天文六年。川越役の事を記したるもの。奥書に西脇の作と見えたれど。未だその人を詳にせず。

深谷記

上杉氏譜代の人々の名を始め。同氏に關する事を記したるものなり。

卷第三百八十六

さゝごおちのさうし

天文十二年の頃。北條氏康上總笹子の城を攻め落したる事を記したるものなり。

なかおゝちのさうし

同じ頃。長尾の城の落城せし事を記したる戰記なり。

房總治亂記

天正十五年より慶長十四年に至る間。安房。上總に於ける治亂記なり。

鹿島治亂記

鹿島義幹の討死せし事を略記したるもの。大永六年の作なり。

卷第三百八十七

江濃記

戰國時代に於ける近江。美濃兩國の事を記したるものなり。

江北記

佐々木氏の事を記したるもの。また戰國時代にかゝる。

船田前記

船田後記

共に汾岩和尚の記する所。明應四年。美濃國齋藤利藤の臣石丸利光船田城に據つて叛し。敗績せし事を記したるものを前記とし。翌年。利光再び殘卒を集めて美濃に入りし

も。遂に敗死せし事を記したるものを後記とす。二書合せてまた端田亂記と稱す。

卷第三百八十八

上野國群馬郡箕輪軍記

永祿の初年。武田信玄箕輪城を攻めたる事を記したるものなり。

羽尾記

上野國吾妻郡なる羽尾氏の事を記したるもの。末に海野氏の系圖を附したり。

卷第三百八十九

蘆名家記三卷。

奥州蘆名氏滅亡の事を記したるものなり。

蒲生氏鄕記

氏鄕一生の事蹟を記したるものなり。

卷第三百九十

伊達日記上中下

一に仙道弓矢之卷と稱し。また伊達成實記といふ。輝宗以來政宗に至るまでの事迹を記したるものなり。

卷第三百九十一

柴田退治記　大村由己

天正十一年。秀吉が柴田勝家を亡ぼせし戰記なり。

富樫記

長享天文の頃。富樫政親同泰高等。一向一揆の爲めに攻め滅ぼされたる事を記したるものなり。

小松軍記

慶長五年。加賀小松城主丹羽長重其城に籠り。前田利長と合戰に及びたる軍記なり。

卷第三百九十二

荒山合戰記

天正十六年。能登國に一揆起り。石動山。荒山等に於て合戰ありし顚末を記したるものなり。

末森記　　岡本慶雲

天正十二年より同十三年まで。前田利家が佐々成政と末森に於て合戰に及びたる顚末を記したるものなり。

卷第三百九十三

赤松記　　定岡

天正十六年記す所。赤松氏の起りより。その浮沈興亡を述べたるものなり。

赤松再興記

長祿二年。赤松家再興の事より。天文八年。政村が將軍の偏諱を賜はりて晴政と改めたる事に終る。

別所長治記

長治一代の事を記し。天正八年正月。その滅亡に至る。

播州御征伐之事　　大村由己

今播州征伐記と稱す。天正八年正月晦日記す所なり。

卷第三百九十四

大內義隆記

義隆一代の事を詳記したるもの。記事は天文十一年陶晴賢の爲めに攻められて自殺したる事に終る。

中國治亂記

天文の比より。永祿十一年尼子義久毛利氏の爲めに滅せらるゝに至るまで。大內。尼子。陶。毛利の諸氏が。互に侵伐攻戰したる事を記したるものなり。

卷第三百九十五

阿州將裔記

平島公方の系圖。三好氏の系圖。及び兩家の關係より。三好氏が長曾我部元親の爲めに討滅せらるるに至るまでの事を記したるものなり。

三好家成立之事

今三好家成立記と稱す。三好氏の事跡を述べてその滅亡に至る。終りに細川氏。三好氏の略系を載せたり。

三好別記

また三好氏の事を記したるもの。その滅亡に至つて筆を止む。始めに略系を掲げ。末に系譜を載せたり。

十河物語

三好長慶の弟十河政泰が一代の事を記したるものなり。政泰後に仙石權兵衛に屬し。天正十四年。薩摩勢と戰ひて討死したる事。及び島津氏が征韓の役に軍功を顯はしたる事なども見えたり。

卷第三百九十六

豫章記

始に河野氏の系譜を載せ。先づ佛說を交へて伊豫國の起り。三島大明神垂迹の事等を述べ。河野氏歷代の事迹を記して應永の始に至る。間々文書を載せたり。終りに天正十五年以後。伊豫國領主の沿革を記したり。

卷第三百九十七

大友記

一に九州治亂記といふ。初に大友氏の系圖。諸木四家。及び九州に於ける大友方の大名を擧げ。大友氏の由來より。義鎮の代に龍造寺島津の二氏と互に攻伐したりし事蹟を述

べたりるものなり。

卷第三百九十八

難太平記　今川了俊

主として今川氏一家の事を述べたるもの。太平記の誤謬多きを憾みて作れるよりかく稱したるなり。

上月記

長祿元年。赤松氏の臣吉野に入り。神璽を取返したる事を述べたるもの。上月滿吉の記す所なるを以てこの名あり。

荒木略記

荒木攝津守村重一家の事歷を略記したるものなり。

卷第三百九十九

親房卿被贈結城書

世に關城書と稱するもの即ち是なり。然れどもその實北畠親房の書にあらず。その書によりて。後人が漢文を以て綴りたるものならん。塙檢校の高足中山信名關城書考を著し。その間の事を委曲詳論したり。

吉野事書案

公武合躰について吉野よりの事書。及び直義の返書なり。南朝の事書恐くは北畠親房の手に成りしものならんといふ。

阿蘇大宮司惟澄申狀

正平三年九月。惟澄軍忠の次第を言上したりしものなり。

菊地武朝申狀

弘和四年七月訴訟について。その朝家に忠勤を輸せることを言上したりしものなり。

上杉輝虎注進狀

河中島役の事を大館伊豫守に注進したるも

のなり。恐くは甲陽軍鑑等によりて。後人の僞作せるものならん。

豐臣太閤御事書

天正二十年五月秀次にあてたる事書にして。征韓の事に關せるものなり。

沙彌洞然長狀

天文五年十一月。沙彌洞然が雜所新兵衛尉にあてたる長狀にして。肥後相良家の事を述べたるものなり。

武家部

卷第四百

御成敗式條

一に御成敗式目といひ。また貞永式目と稱す。貞永元年八月。鎌倉より出せる武家の法令にして。すべて五十一ケ條あり。後世武家法制の模範たり。終りに同年七月の時房。泰時以下の起請文を載せたり。

御成敗式目追加

すべて四十七ケ條。舟橋宣賢の式目抄中より抄出したるもの。貞永式目以後の法令なり。日本古代法典に收めたる式目追加とは自ら別本なり。而して前田家祕藏の本を以て尤も善本となすべし。

卷第四百一

建武式目條々

建武三年十一月。尊氏の諮問に對して是圓眞惠等の言上せし。武家政道の事を述べたるもの。すべて十七個條なり。

建武以來追加

建武以來永享の頃に至るまで。足利氏の法令を集めたるものなり。

卷第四百二

侍所沙汰篇

検断條目を始め。侍所の沙汰に關する法令を集めたるもの。重に鎌倉時代のものに屬すといへども。追加として貞和以後永正に至るまで。足利時代のもの二十餘條をも載せたり。

大内家壁書

長祿三年五月の壁書(端闕けたり)を始め。大内家の制法を集めたるものなり。前田家の祕藏にかゝる一本には。題して書札禮といふ。

政所壁書

永享。文安。文正の頃に於ける政所の壁書なり。すべて十二箇條あり。

卷第四百三

早雲寺殿廿一箇條

法令といはんよりは。寧ろ奉公の心得。武士の心體を示せるものといふべし。

信玄家法上下

信玄が家人に示せる法令訓誡にして。上卷は主に法令と見るべく。五十五條は天文十六年六月の定にかゝり。末の二ヶ條は同廿三年五月之を定めたるよし見え。下卷は主として訓誡といふべく。論語その他の諸書を引きてその出所を擧げたるもの。永祿元年卯月。武田信繁の世子に進めたるものなりといふ。

長曾我部元親百箇條

慶長二年三月。長曾我部氏の領内に布く所。禁令法度を始め。家臣の心得等を委曲したるものなり。

朝倉敏景十七箇條

朝倉敏景が子孫に貽したるもの。治國の要を述べたるなり。

卷第四百四

鹿苑院殿御元服記

應安元年四月。將軍義滿元服の儀式次第より。評定始。將軍宣下。御判始。除目。八幡社參代始。參內始等の事を記したるものなり。

普廣院御元服記

正長二年三月。將軍義教の元服より。大將拜賀に至るまでの事を記したるものなり。

光源院御元服記

天文十五年十二月。坂本樹下の宅にて。將軍義藤（後義輝と改む）元服の次第を記したるものなり。

常德院殿樣御馬召初らるゝ事

今御乘馬始記と號す。文明五年卯月。花の御所にて足利義尙始めて馬を召したる儀式の記なり。

卷第四百五

寶篋院殿將軍宣下記

延文三年十二月。足利義詮將軍宣下の記なり。

普廣院殿任大臣節會次第

永享四年七月。將軍義教內大臣に任ぜられし時。大饗節會の次第を記したるもの。終りに同日出仕の公卿及び少納言弁外記史の交名を載せたり。

普廣院殿左大臣拜賀記

永享四年八月。義敎左大臣に任ぜられ。同十二月。天皇御元服由奉幣日時定の上卿と

して。參內拜賀の儀式ありし事を記したるなり。

鹿苑院殿御直衣始記

康曆二年正月。將軍義滿の直衣始の記なり。

卷第四百六

長祿二年以來申次記

三職。御相伴衆。國持衆。准國持人數。外樣衆。御供衆。御部屋衆の交名を始め。申次に關するすべての事どもを記し。終りに近年申次の人數。及び延德二年六月申次御番定の事を載せたり。本書は文明十八年二月。伊勢貞宗の進上する所にかゝり。永正六年四月。大舘尙氏が安東政藤の家督平六に傳へしものなり。

卷第四百七

殿中申次記

長祿二年。將軍御對面に付て殿中申次の事を記したるもの。正月朔日より十二月八日に至る。終りに申次覺悟之事を載せたり。

年中定例記

正月より十二月に至るまで。殿中にて御對面御祝以下定例の事を記したるものなり。

公方樣正月御事始之記

將軍の正月御事始。この他殿中に於ける定例臨時の儀式の事を略記したるものなり。

卷第四百八

殿中以下年中行事

一に成氏年中行事と稱し。又た鎌倉年中行事といふ。鎌倉公方成氏の時の武家年中行事なり。

卷第四百九

飯尾宅御成記

寛正七年二月。將軍義政が飯尾之種の宅に御成の事を記したるものなり。神山數達が後證の爲めに注し置きたるよし。奥書に見えたり。

畠山亭御成記

永正十五年三月。將軍義稙が畠山順光の亭に御成の記なり。

祇園會御見物御成記

大永二年六月。祇園會見物御成の記なり。

伊勢守貞忠亭御成記

大永三年八月。將軍義晴伊勢貞忠の亭へ御成の記なり。

三好筑前守義長朝臣亭ぇ御成記

永祿四年三月。將軍義輝三好義長の亭へ御成の記なり。

朝倉亭御成記

永祿十一年五月。足利義昭越前に於て朝倉義景の亭へ御成の記なり。

文祿三年卯月八日加賀之中納言殿へ御成之事

文祿三年四月。豐太閤が前田利家の亭へ御成の事を記したるものなり。

文祿四年御成記　松波正隆

文祿四年三月。豐太閤が徳川家康の亭へ御成の事を記したるものなり。

卷第四百十

諸大名衆御成被申入記

足利將軍が諸大名衆へ御成の時。申入れらるゝ事に關する故實を記したるもの。奥書によれば。大舘常興自筆本を抄出したるものなり。

供立之日記

將軍御成の時。供立の故實を記したるものなり。

御供古事

將軍御成に供奉する時の故實を記したるもの。文明十四年七月。伊勢備中入道常喜子孫の爲めに注し置ける所なり。

走衆故實

走衆の裝飾。其他の故實を記したるもの。間々實例を引用したり。

巻第四百十一

大内問答

武家殿上の儀式。作法。故實等を問答躰に記したるもの。永正六年九月。伊勢貞久（法名道照）が龍崎中務丞。飯田大炊助に贈れるものなり。また貞助の奥書ありて。大友義鑑の内衆臼杵四郎左衛門尉に遣はせるよし見えたり。

奉公覺悟之事

武家奉公に關したる一切の故實等について。心得べき事どもを記したるものなり。

巻第四百十二

今川大双帋

弓。馬。鷹。その他太刀等に付て式躰の事を始とし。鏃の式法。陣具。衣類及び馬に付ての式法。輿の御伴次第。鞠の式法。食物の式法。歌道の事に至るまで。武家の故實を記したるものなり。

巻第四百十三

宗五大艸紙

奉公人の心得べき事。御幣まいらする樣。樂器を人に參らする樣。喃の時の事を始め。奏者の事。將軍對面の事。使節の心得べき

事。公私御かよひの事。大酒の時の事。將軍御成の事。人の相伴する事。料理の事。衣裝の事。折紙調へ樣の事。書札の事。其他の雜事に至るまで。武家に關する故實を記し。間々實例を擧げて。終に文明十一年の頃の御相伴衆御供衆以下の交名を載せ。また古人の敎へ申ける事として。武士の心得べき箇條を注したり。大永八年。下總入道宗吾が述作にかゝる。

卷第四百十四

旅中舊記

御所樣より所々への御らはがきの事。御産所の事。正月御こはぐで參り樣。同御齒固の樣躰。同御杖の事。五月藥玉の事。御成の事。御所樣の御やうだい。御よめ入の時の事等を始め。女房衆の扇。衣裝。及び御扶持の事等。幕府御旅中に關したる事を述べ。將軍義政の御臺所妙善院の時の女房衆の事どもを記せるものなり。作者は伊勢貞陸なるべしといふ。

大上﨟御名之事

將軍義政の代の大上﨟の名を記し。次に女房の裝飾以下の故實を載せ。おさな名及び女房ことばを擧げたり。

嫁入記

武家嫁入の故實を記したるものなり。伊勢貞陸の記なるよし。奥書に見えたり。

よめむかへの事

武家に於けるよめむかへの故實を記したるものなり。伊勢貞陸の記なるよし。奥書に見えたり。

卷第四百十五

法量物

大的。丸物。草鹿。笠懸。小笠懸。矢開の事に關する故實書なり。應永廿七年八月の述作にかゝる。

射禮私記

射禮に關する故實書なり。永享五年十二月の述作にかゝる。

大的躰拜記

大的の時の作法。故實等を記せるものなり。永享三年十二月。及び嘉吉三年十二月の御的次第を載げ。終りに射手方の文字讀み樣を列擧したり。

流鏑馬次第

永享八年八月の述作にかゝる。流鏑馬に關する故實書なり。

笠掛記

永正九年六月記す所。笠懸の由來を始め。之に關する故實を載せたるものなり。

鹿足之次第

文明九年十月。齋藤芳運の記す所。かぐ足の次第を述べたるもの。大坪流の馬術の祕傳歟。

卷第四百十六

目安

康永元年二月。小笠原貞宗言上して犬追物の制禁を止め。之が再興を願ひ出でたる目安書なり。或はいふ。文躰等を見るに當時のものに非ざるに似たり。恐くは小笠原家の人。貞宗に假託して作れるならむと。

騎射祕抄

應永二十三年四月の述作にかゝり。犬追物の祕傳書なり。

八廻之日記

矢を沙汰すべき次第の秘說にして。文明十六年八月。中原豐後守高忠が。子孫の爲めに注し置けるものなり。

出法師落書

永享十二年。犬追物の射手十二騎の事を評したる落書なり。終りに永享七年二月。文安元年九月。同五月。寶德二年九月。同三年五月。享德二年四月。同元年十月等の犬追物手組の日記を載せたり。もと落書の篇首にありたるものを。本書に收むるとき奧に附したるなり。

卷第四百十七

就弓馬大概聞書

今は高忠聞書と稱す。小笠原流の弓馬に關する故實秘說にして。寛正五年十一月。中原豐後守高忠が記したる相傳聞書なり。

卷第四百十八

家中竹馬記

永正八年十一月。土岐伊豆守利綱の記すところ。小笠原元長より相傳せる弓馬の秘事。其他舊老の談話及び見聞せる實例等によりて。武家の故實等を述べたるものなり。

土岐家聞書

土岐家の事を本とし。武家に關する故實。實例等を記したるもの。前書と同じく伊豆守利綱の作にかゝるに似たり。

卷第四百十九

矢開之事

今は矢開之記と稱す。矢開の時の儀式。作法等に關する故實書なり。

就狩詞少々覺悟之事

今は狩詞記と稱す。狩詞に解釋を加へ。且つ狩の時の故實等を記したるものなり。

空穗之次第

物に關する故實祕說なり。すべて十七條あり。永正二年正月。元備の記にかゝる。

隨兵日記

文明十八年正月の記にかゝる。大將の出立に關する故實を述べたるものなり。

隨兵之次第事

明應九年十一月の記にかゝる。隨兵出立に關する武家の故實書なり。奧書に八幡殿以來源家の祕說なるよし見えたり。

中原高忠軍陣聞書

出陣の時祝の次第より。軍陣の間に於ける故實祕傳にして。中には足利時代の實例も擧げたり。

築城記

築城術に關する祕傳書にして。もと朝倉氏より出でたるものなるよし。永祿八年十月河村誓眞の奧書に見えたり。

卷第四百二十

御産所日記

永享六年二月。義勝の誕生に始まり。將軍義教。義政。義尙等の御所樣御産の次第等を記したるものなり。

産所之記

産所の作法儀式等を記したるものなり。

卷第四百二十一

建治三年丁丑日記　太田康有

建治三年正月より十二月に至るまで。鎌倉の日記なり。以て吾妻鏡の補遺となすに足るべし。

文明十一年記

武家の日記なり。蜷川親元の記する所か。考ふべし。躰裁花營三代記に似たり。今は正月二月及び八月の三ヶ月を存するのみ。

六波羅御下知

正安元年十二月兩六波羅の下知狀にして。感神院領なる丹波國波々伯部保の下司氏澄の代官良盛と領家の雜掌親圓が。下司職名田畠及び刄傷狼藉等を相論したる件に對し。之を裁許したるものなり。

攝津親秀讓狀

曆應四年八月七日。惣領分以下の讓狀十六通を集めたるものなり。以て當時遺產分配法の參考に資すべし。

卷第四百二十二

齋藤親基日記

寬正六年八月より應仁元年五月に至る日記なり。政事。典儀。武藝等の記事多し。

卷第四百二十三

御隨身三上記

永正九年正月より同年九月に至る。足利將軍家隨身の日記なり。

卷第四百二十四

見聞諸家紋

足利時代に於ける諸家の紋帳なり。二引兩五七桐を始とし。次第不同に諸家の紋を圖說したり。足利將軍の時代に評定所に於て調查したるよし。奥書に見えたり。佐々木本には天文八年の奥書ありといふ。されど中には不審しきものも少からず。

義貞記

武士の先づ存知すべき事より。武藝に付た

る道々を伺ふべき事に至るまで。十餘ヶ條に分ちて。武人の用意及び軍規等を述べたるものなり。新田義貞の制定なるより義貞記とは稱するよし傳へたれど。文章辭句斷じて當時のものにあらず。恐らくは後人の述作ならむ。

武具要說

天文年間。武田信玄が。小幡山城守以下五人に。武具の事を尋ねたる問答にして。天正五年高坂彈正の書き置きたるよし傳ふれども。これまた甲陽軍鑑著者一流の作にかゝるならん。馬。鐙。刀。脇指。刀脇指之柄。鍔。鎗。長刀。弓。鐵砲等十一ヶ條あり。

馬具寸法記

伊勢兵庫頭貞爲自筆の本を原本としたるよし。奧書に見えたり。鞍以下馬具の寸法を記したるものなり。終りに鞍。鐙。轡等を圖し。各その名所を示したり。

第十五輯

釋家部

卷第四百二十五

初例抄

僧官。僧位。法會。灌頂。入講。受戒。諸寺建立等を始め。其他釋家に關したる初例を輯めたるものなり。

卷第四百二十六

釋家官班記

僧官僧位の濫觴より。その昇進次第。及び之に關したる事を集めたるものなり。此書は。青蓮院の門中たる尊勝院の祖師僧正が口說なるよし。三條西實隆の奧書に見えたり。

卷第四百二十七

大神宮御相傳袈裟記

永德二年。別峯禪師が伊勢大神宮に詣でゝ。由良心地上人の緙絲袈裟を感得したる事を記したるものなり。皷山大隨の作なり。

石淸水不斷念佛緣起　大江匡房

延久二年十月記する所。治曆三年十月。始めて不斷念佛を石淸水八幡宮の寶前に修めたる緣起なり。

賀茂社櫻會緣起　大江佐國

永保三年二月記する所。賀茂社に於て。二三月の頃櫻會と號して。法花八軸を開演するよしの緣起なり。

春日社三十講最初願文

弘安十一年四月。後深草院の捧け給ひし春日社三十講御願文なり。

太上法皇御受戒記

寬和二年三月。圓融上皇の御受戒記なり。

後宇多院御灌頂記

德治三年(延慶元年)正月。後宇多院東寺に於て灌頂を受け給ひし記事にして。その時の奉行權右中弁隆長の記す所なり。

七佛藥師御修法記

永久三年正月。禁中に於て七佛藥師の法を行はれたる記なり。

卷第四百二十八

宸筆御八講記

文永七年十月。後嵯峨院宸筆御八講の記なり。

後嵯峨院宸筆御八講記

前帖の漢文なるに對し。和文を以て記したるものなり。

延徳御八講記　藤原基綱

延徳二年四月の御八講記なり。奥に侍従大納言三條西實隆の跋文及び後土御門院御製の長歌を載せたり。

和久良牛の御法

明徳元年四月。足利尊氏の三十三回忌に行はれたる御八講の記なり。

巻第四百二十九

雲井の御法　二條良基

康暦二年正月。後光嚴院七回の御忌に。法花懺法を行はれたる記なり。文龜二年九月菅原和長の奥書あり。

よろづの御法

文明十四年十二月。後花園院十三回の御忌に。清凉殿に於て行はれたる御懺法記なり。

魚山の御のり　堯胤法親王

文明八年十一月。後花園院七回の御忌に。大原三千院に於て行はれたる御懺法の記之。

後光嚴院三十三回聖忌記

應永十三年正月。後光嚴院三十三回の聖忌に。禁裏に於て行はれたる御懺法の記なり。

後土御門院十三回聖忌記

永正九年九月。後土御門院十三回の聖忌に。禁中清凉殿の東面に於て行はれたる法花懺法講の記なり。

陽祿門院三十三回忌の記

至德元年。陽祿門院季子の三十三回忌法會の記なり。

巻第四百三十

仁和寺諸堂記

仁和寺諸院の起り。及び相承等を記したるもの。仁治三年六月の述作にかゝる。

山城州葛野郡楓野大堰郷廣隆寺來由記

太秦廣隆寺の由來。安置の三尊。及び諸堂諸院の事を記したるものなり。

清水寺緣記　藤原明衡

京都東山なる清水寺の緣起なり。

醍醐寺緣記

山城國宇治郡なる醍醐寺の緣起にして。山上山下の諸堂の由來。及び根本の本願聖寶。第一座主觀賢の傳をも記したり。

安樂院行事

京都安樂光院の草創以來の行事を記したるものなり。延文年中再興の事に至る。持明院の沿革をも觀るに足るべし。

楞伽寺記　近衞道嗣

楞伽寺の由來。及び寺家の法度等數件を述べ。寺院と子孫とに遺せしものなり。

勸修寺緣起

南山科勸修寺の緣起なり。

洛陽般舟三昧院記

後土御門院が草創し給へる伏見般舟三昧院の由來を記したるものなり。

卷第四百三十一

天下南禪寺記

南禪寺の由來。及びその堂舍の事を記したるものなり。

天龍寺供養記　大藏卿雅仲

康永四年八月。天龍寺供養の事を記したる

ものなり。

東福紀年錄

東福寺の事を編年體に略記したるもの。嘉禎二年藤原道家の發願より。天正十七年秀吉朱印の事に終る。

京城萬壽禪寺記

萬壽寺の略史。及び寺內十境等の事を記したり。寬正五年住持天祐梵㵎の作なり。

覺雄山大福田寶幢寺鹿王院記

鹿王院の來由。及び至德二年三月供養の事を記し。且つ遺誡を述べたるものなり。開山國師春屋妙葩の記にかゝる。

卷第四百三十二

法勝寺供養記

承曆元年十二月。法勝寺供養の記なり。

尊勝寺供養記

康和四年七月。尊勝寺供養の記なり。

無量壽院供養記

寬仁四年三月。京極御堂の無量壽院の供養記なり。

法成寺金堂供養記

治安二年七月。法成寺金堂新佛開眼供養會の記なり。

藥師堂供養記

万壽元年六月。法成寺藥師堂供養の記なり。

東北院供養記

長元三年八月。上東門院院彰子御願の堂東北院供養の記なり。

東寺塔供養記

應德三年。東寺塔供養の記なり。記事は八

月十八日の上棟より。十月廿日五重寶塔供養の事に終る。

卷第四百三十三

東寺塔供養記

建武元年九月。東寺塔供養の記なり。記事は八月廿七日より。九月廿四日供養の後。十二月廿六日の行幸賞の事に終る。長者道意僧正の記する所なり。

卷第四百三十四

相國寺供養記

明德三年八月。相國寺供養の記なり。

相國寺塔供養記　一條經嗣

應永六年九月。將軍義詮の三十三回忌に行はれたる相國寺塔供養の記なり。

卷第四百三十五

大安寺伽藍緣起流記資財帳

天平十九年二月。大安寺三綱より言上したる緣起流記及び資財帳なり。原本は現今大和正曆寺の藏にかゝる。

大安寺緣起

寛平七年八月大安寺三綱別當等の注進にして。原物は俗別當菅原道眞の書にかゝると傳ふれども。未だ正說を得ず。

藥師寺緣起

藥師寺の來由を述べ。與に塔露盤の銘文を引用したり。

東大寺大佛記

東大寺大佛奉鑄の事を略記したるなり。

東大寺造立供養記

治承四年。平氏の兵燹にかゝれる後。再建

供養の事を記したるものなり。

東大寺金銅碑文

天平勝寶五年。東大寺の塔中に最勝王經を置せ給へる時の聖武天皇の勅願文。及び封五千戶水田一萬町を施入し給へる勅書の銅牌銘なり。今正倉院の御物たり。恐くは後世の追刻にかゝるならん。古京遺文にも說あり。

興福寺緣起　藤原良世

昌泰三年六月。堂舍及び諸會の緣起なり。

卷第四百三十六

多武峯緣起

藤原鎌足の傳を始め。多武峯の來由を記したる緣起なり。奧書に一條兼良の述作なるよし見ゆれども。如何にや。

多武峯略記 上下　僧靜胤

多武峯に關する諸事を類別して。之を略記したるもの。建久八年閏六月の撰なり。

卷第四百三十七

長谷寺緣起文

寬平八年二月。數卷の舊記によりて撰する所。菅原道眞の述作にかゝると傳へらる。

當麻曼陀羅緣起

大和當麻寺なる曼陀羅緣起の繪詞なり。

觀心寺緣起資財帳

承和四年三月。眞雅。實惠等の勘錄する所。河內國觀心寺の緣起。及び本尊等の資財帳なり。

卷第四百三十八

山門堂舍

今山門堂舍記といふ。延暦寺の諸堂舍。及び

安置の佛像。其他の事を記したるものなり

卷第四百三十九

叡岳要記 上下

延暦寺に關せる一切の事を記したるものに於て。最も要を得たる記錄となす。

卷第四百四十

九院佛閣抄

山家要略抄を口受せるもの。元亨四年六月傳ふる所なるよし。識語に見えたり。延暦寺の九院佛閣の事を記したるものなり。

卷第四百四十一

天元三年中堂供養願文

天元三年九月。延暦寺中堂供養の時。座主良源僧正の願文なり。

永正十五年中堂供養記　高階成忠

永正十五年四月。座主堯胤法親王導師として行はれたる延暦寺中堂供養の記なり。

弘安八年大講堂供養記

弘安八年七月。延暦寺大講堂供養の事を記したるものなり。

卷第四百四十二

木下川藥師佛像緣起

嘉暦二年六月。住持義純の記する所。下總國葛飾郡（今は武藏國の內に入れり）木下川淨光寺の藥師如來の緣起なり。

中禪寺私記　藤原敦光

保延七年の作にかゝる。日光山滿願寺の緣起を記したるものなり。

白峯寺緣起　淸原良賢

應永十三年孟秋草する所。讚岐國白峯寺の緣起なり。

聖福寺佛殿記

正平廿三年二月。河南隆仁の作る所。筑前國博多なる聖福寺の事を記したるものにして。正平十年より廿年に至るまでの間に。之を再興したることを述べたり。

高野山燒失記

永正十八年二月。高野山燒失の記なり。

卷第四百四十三

近江國栗本郡金勝寺官符

寛平九年六月。金勝寺の年分度者を定められたる官符なり。類聚三代格卷二にも出てたり。

佛牙舍利記

將軍實朝感得する所の。佛舍利の傳來を記したるものなり。

鹿王禪院如意寶珠記

夢窓國師が鹿王禪院に於て感得したる如意寶珠の事を記したるものなり。

二荒山千部會縁起

日光山三月會縁起

以上の二縁起未だ何の時に作られたるかを詳にせず。

慈惠大僧正御遺告

天祿三年五月。沒後附屬の事を記したる慈惠僧正良源の遺告なり。原本は京都廬山寺にありといふ。

阿彌陀院寶物目錄

仲護景雲元年八月。阿彌陀院の資財寶物等を注顯したるものなり。

觀世音寺資財帳

嘉保年間。筑前國觀世音寺寶藏の雜物を實錄せる資財帳なり。

卷第四百四十四

左記　守覺法親王

右記　同

追記　同

左記には。新修行法の作法故實等を記し。右記には。童形等消息事。老若甲乙消息事の二を收めて。佛家の人々の作法心得を示し。追記には。大法祕法に就て野澤二流用意の事を記し給へるなり。

卷第四百四十五

發心和歌集　選子内親王

選子内親王が法文を題として詠ぜられたるものにして卷首に。寛弘九年漢文の自序あり。

法門百首　寂然法師

春。夏。秋。冬以下。述懷。無常。雜等に至るまで。みな法文を題とし詠じたる百首なり。一首ごとに細註あり。

第十六輯

雜部

卷第四百四十六

古語拾遺　齋部廣成

天孫降臨以來。中臣。齋部の二氏は相並んで祭政に與かりしが。後ち中臣氏獨り盛にして。齋部氏世々に衰ふ。廣成憤怨の餘。十一个條に分つて齋部氏の事跡を述べたるもの即ち是なり。故に多田義俊は訴狀と名づくべきものなりといへり。大同二年の著なり。卷末に日下部勝皐の攷異を附す。

卷第四百四十七

日本國現報善惡靈異記　僧景戒

略して日本靈異記といふ。雄略天皇の頃より。光仁天皇の御代に至るまで。因果應報に

關する靈異の事迹を記したり。卷下序文の上半はもと闕脱せしが。前田家祕本の傳寫を得て之を補ひ。以て完璧としたり。本書には狩谷掖齋の考證あり。

卷第四百四十八

新撰姓氏錄

弘仁六年。萬多親王等勅を奉して撰する所。今存せるものはその抄本なり。左右京以下畿内に於ける皇別。神別。蕃別の姓氏。及びその出由を記したるものなり。

卷第四百四十九

大鏡裏書

大鏡中の事實人物等を。諸書により抄出したるもの。水戸彰考館本の大鏡には。之を本文の分注に加へたりといふ。

卷第四百五十

康平記　　平定家

康平年間。平定家の日記なり。

卷第四百五十一

宇槐雜抄　　藤原頼長

宇治左大臣頼長の記錄にして。保延三年豐明節會。仁平元年敍位。保延二年政始。同年請印政。同年及び同三年臨時祭。同二年賀茂祭。同年大原野祭。同年鳥羽新御堂供養行幸。同三年仁和寺競馬行幸。同月和歌會。同正月拜禮。同二年九月院中雜事。同三年姫宮御同日事。同二年拜賀着陣。同二年及び三年法會。同三年令明侗雜人事。仁平二年觸穢請暇文。及び勘文等くさ〴〵の事を。その日記なる台記より抄出集錄したるものなり。

卷第四百五十二

達幸故實抄三巻　中山定親

朝廷行事の典例故實を記したるもの。正長元年五月の抄記にかゝるといふ。

巻第四百五十三

寛治二年記

寛治二年十二月。攝政師實任太政大臣の事を記したる記録なり。

永久元年記

外記日記。中右記。雅俊卿記。重隆記等の永久元年延暦寺興福寺の參洛に關する條を抄出したるものなり。

醍醐寺雜事記

又た慶延記と稱す。僧慶延が醍醐寺に關する雜事を集めたるものなり。こゝに收めたるは完本にあらず。寛平九年より天承元年に至る。

鳩嶺年代記

巻首闕けて。寛徳二年に始まり。承久三年に終る。石清水八幡宮の年代記なり。改元及び八幡行幸の事を注したり。

巻第四百五十四

文保三年記

文保三年正月十八日東大寺八幡神輿入洛の事。四月山門寺門確執の事より。五月琵琶玄上盗取られて出現の事に至るまで。日記の抄出なり。

劒璽渡御記

元弘元年十月。劒璽六波羅の亭より禁中に渡御ありたる記録なり。

光明寺殘篇

伊勢光明寺より出でたるもの。結城宗廣の手記し置きたるものならむといふ。元弘建

武の間に於ける好史料たり。

關城書裏書

元弘元年以後延元々年にまで。大事件を摘記したるもの。また宗廣の手記する所なり。

建武年間記

一に建武記。又は建武二年記といふ。建武年間の事を記したるものなり。

卷第四百五十五

鳩嶺雜事記

應安以後永和の頃まで。石清水八幡宮の雜事記なり。こゝに收めたるは完本にあらず。

祇園執行日記

康永二年七月より同十一月に至るまでと。貞和六年(即觀應元年)。觀應三年(即文和元年)。及び天文元年正月より同四年九月に至るまでの祇園執行職の日記を抄錄したるものなり。

醍醐雜抄

孔雀經法結願事(治承二年)。報恩院領武士濫妨事(建武三年)。宇治橋事。同河島事。平等院事。離宮兩社事。平家作者事。僧官位事。宮勝介事等の雜事を集めたるもの。奥に隆源といへる僧のしるせるよし見えたり。

卷第四百五十六

快元僧都記

天文元年五月より。同十一年五月に至るまで。鎌倉鶴岡八幡宮の社僧快元僧都が記したる略日記なり。

卷第四百五十七

慶長三年御ゆどのゝうへの日記

禁中女房の假名日記なり。本書收むるも

の。僅に慶長三年にすぎざれども。現今存せるものは文明の頃より始まれり。こゝにいふ御ゆどのゝうへは浴室のとにあらずして。御茶の湯せらるゝ間をさし。常の御所の御次の事なり。

巻第四百五十八

保暦間記

保元より暦應に至る間の事實を記したるもの。筆を保元。平治の亂に起して。後醍醐院の崩御に止めたり。間々曲筆あり。傳説を交へたるものなきに非ずといへども。記事多くは要當を得たり。

巻第四百五十九

花營三代記

貞治六年より應永卅二年に至る日次記にして。義滿。義持。義量三代の將軍の時に當れり。故に花營三代記といへるなり。また武家日記と稱す。

巻第四百六十

如是院年代記

神武天皇元年より。元龜元年に至るまでの年代記なり。年次の下に朝廷武家の大事。及び災異等を注したり。

巻第四百六十一

編御記

菅原爲長

菅原爲長が年號撰進の事に預りたる事を記したるもの。勘文及び難陳等を載せたり。建永より延應に至る。

革命勘文

三善淸行

昌泰四年三善淸行が辛酉革命の事を論じ。改元の事を奏したる勘文なり。

巻第四百六十二

諸道勘文 塙缺

八幡御躰可被造改否御占相論事及び彗星變異事(保延六年。天喜四年。天延三年。康平三年。永長二年。長治三年。天仁三年)に關する諸道の勘文を集めたるものなり。

卷第四百六十三

長寛勘文

甲斐守藤原忠重。及び目代右馬允中原清弘。在廳官人三枝守政等の罪名(長寛元年)。及び伊勢太神宮熊野權現と同躰なるや否や(長寛元年。及び二年)等。長寛年間に於ける諸道の勘文なり。

卷第四百六十四

法曹類林　藤原通憲

仁和寺書籍目錄には二百三十卷とあれど。大抵散逸して今は僅に卷百九十二寺務執行十七。卷二百公務八臘次の二卷を存するのみ。法曹の勘文を類集して。通憲の今案を加へたるものなり。

卷第四百六十五

濫觴抄 上下

帝王。文籍以下二十九條は漢土の事を收め。日本人王。秋津島名以下四百餘條は本朝の事を收め。古書を引きてその名稱事實等の濫觴を記したるものなり。

卷第四百六十六

代始和抄　一條兼良

御讓位。御即位。御禊行幸。大嘗會等。代始に關する事を和文もて記したるなり。文明十年。宗祇法師の所望によりて。兼良の筆したるものなりといふ。

日中行事　後醍醐天皇

一に禁省日中行事といふ。禁中日々の行事を記し給へるなり。

巻第四百六十七

禁祕抄　　順徳天皇

また禁秘御抄といふ。藤貞幹の好古小錄には。此書即ち延暦御記にして。眞名假名交りたりしを。近古悉く眞名に書き更めて。禁秘抄と名け。延暦御記の舊文亡びたりといへり。禁中の故實を記し給へるなり。

巻第四百六十八

禁腋祕抄

紫宸殿。清涼殿。及び臺盤所の事を圖説したるものなり。

名目鈔　　洞院實熙

恒例諸公事篇。同臨時篇。諸公事言說篇。禁中所々名篇。人躰篇。雜物篇。衣服篇。裝服篇等の名目を揭げ。其音訓及び故實等を注したるもの。蓋し未定稿ならむといふ。

巻第四百六十九

世俗淺深祕抄　二卷

朝廷の有職故實の口傳等を記したるもの。上巻に百四十七條。下巻に百三十八條あり。終りに菩提院入道關白の說を載す。續群書一覽に一條兼良の著とあるは誤なり。野宮定基本書に跋して。記者を知らずといひしも。後ち定めて後鳥羽天皇の御製とす。從ふべきに似たり。

巻第四百七十

類聚雜要抄　四

朝廷の臨時恒例の公事に於ける供御。室禮指圖。調度。裝束以下。其他の雜事を記して之を圖說したるもの。丹鶴叢書にも之を

收めて丹鶴圖譜と名け。彩色を加へて印行せり。

第十七輯

雜部

卷第四百七十一

桃華蘂葉　　一條兼良

一條家着用裝束以下。書狀文書。及び一條家家領等の事を記し。文明十二年卯月。その子冬良の爲めに注したる所なり。次に本朝不書の事及び覺悟すべき條々あり。寫本には東山左府兼熙の潮曹抄を附したれども本書收むる所は之を闕く。

卷第四百七十二

弘安禮節

弘安八年十二月定められたる書札禮。及び院中路頭の禮の事。僮僕の員數等を載せたり。龜山上皇洞中の禮に定め給へるものならん。齋非幾知の官職浮說或問を參考すべし。

二判問答

二階堂判官政行が。典例故實に就て不審の條々を。一條兼良に問ひたる問書なり。

三内口決　　西三條實枝

一に三光院内府記といひ。又た故實雜談といふ。綸旨勅書以下有職故實の事を載せたり。奧書によれば。北畠具房に書き進せるものなりといふ。されば本文中北畠親房公の事を記して。御家規模比類なしといへり。實枝後ち名を實澄と改め。剃髮して三光院豪空といふ。官内大臣に至る。

卷第四百七十三

大饗略次第

大饗の次第を略記したる案内なり。

大饗御裝束間事

小右記。六條右府記。土記。大右記。爲隆記等の日記を引きて。大饗の時の舗設裝束等を注したるものなり。

大饗雜事

大饗の時の諸役。裝束以下の雜事を記し。寛治永久久安の頃の記錄を引用せり。

大饗次第

治承二年六月九日の大饗の次第書なり。

大饗次第

延長六年十二月廿五日。宮小路第に於ける大饗の次第書なり。

卷第四百七十四

十七箇條憲法　聖德太子

我國最古の法令文なり。日本書紀。太子傳暦。拾芥抄。及び屋代弘賢藏本を校合し。本書に收めて定本としたるよし。奥書に見えたり。

建暦二年三月廿二日宣旨

神社佛寺の如法勤行。其他當時の過差。及び六齋日殺生。僧侶兵仗等停止以下雜事の宣旨にして。職人民部少輔藤原資頼奉ずる所なり。

意見十二箇條　三善清行

延喜十四年四月廿八日。善相公の意見封事にして。二月十五日の詔に應じて進めたるものなりといふ。

封事三箇條　菅原文時

天暦十一年十二月廿七日。(是年十月廿七日天德と改元す。疑くは誤寫あらむ。)菅原文時が。去る天暦七年七月の綸旨により。上

奏したる封事にして。奢侈を禁じ。賣官を止め。鴻臚館を興すの議なり。

卷第四百七十五

寬平御遺誡

宇多天皇が醍醐天皇に進められたる御遺誡なり。原本錯簡多し。

九條殿遺誡　九條師輔

遺誡幷に日中行事とあり。子孫をして之を座右に張りて遂を用ひしめたるものなりといふ。

澁柿

明惠上人の傳は。以て北條泰時の逸事を見るべく。正治二年正月。文覺の賴家に上れる消息は。以て直言忌彈なき彼の平生を見るべく。建久二年閏十二月。賴朝が佐々木定綱に與へて　その子定重の橫死を訪らひたる一書は。以てその將士を撫したる一般を見るべく。また血氣にはやる人々を戒むべし。而して泰時が六波羅なる時氏に宛てたる一書は。その懷抱せる武士の心得を觀るべし。恐くは後人の假托して作る所あるべしといへども。また當時鎌倉幕府の一面を研究するに於て。好箇の參考に資すべし。

竹馬抄　斯波義將

永德三年二月九日。管領義將の記す所。武士の心得作法を子孫の爲めに書きつけたるなり。

卷第四百七十六

小夜のねざめ　一條兼良

文明の頃。一條兼良が足利義政の御臺にして義尙の母なる妙善院從一位富子に書き進せるものなるよし。大永六年兎園見邦高親

王の奥書に見えたり。歌道世態人事に付て其成敗を記し。女子の心得をいへるなり。

文明一統記　一條兼良

一條兼良が足利義尚の所望により。之を書き進めたるもの。將軍の天下を統べ治むる所以を述べたるなり。

樵談治要　一條兼良

神佛を崇び。諸國の守護廉直を先とし。訴訟の奉行その仁を擇び。近習者の器用を擇び。足がるを停止し。道理に暗からずば。女子たりとも政務を合せ行ふべし。天下主領の人は必ず威勢あるべしと。條を分って將軍政治の肝要を說けるもの。また義尚の望によりて。文明十二年七月。書き進めたる所なり。

卷第四百七十七

乳母のふみ　阿佛尼

一に庭のをしへといふ。阿佛尼が歌道其他女子の心得に就て。紀内侍に贈れる消息なり。扶桑拾葉集載する所のものは更に別本たり。

めのとのさうし

女子の心づかひ身もちを始め。裝飾調度其他の事に就て。心得べき條々を記したる假名文なり。

卷第四百七十八

身のかたみ

風俗儀式作法等に就て心得べき事ども。五十箇條を書き連ねたるもの。天正八年の奥書によれば。疑ふらくは是れまた一條兼良の作ならむといふ。

慈元抄　上下

孝經を本とし。諸書及び和歌等を引用して。故事を述べ。佛典を交へて。孝道に關する教訓を書き集めたるもの。永正七年の著なり。

枕草紙

巻第四百七十九　清少納言

清少納言の隨筆なり。もとは清少納言記と稱せしを。後人の改めたるものなりとぞ。徒然草には枕の草子と見えたり。その才筆は優に紫式部と對峙して相下らずといふべし。今收むる所の原本は。もと後光嚴院の宸翰を以て。一字を違へず書寫したるものにかゝり。流布本と撰を異にせり。

艶詞

巻第四百八十　藤原隆房

大納言藤原隆房の隨筆にして。艶なる詞をつらね。和歌を挿みて戀路のさまを描きたるなり。隆房は安元御賀記の作者たり。

方丈記

鴨長明

長明日野の外山にありて。年來見聞したる事どもを書き連ねたるもの。安元三年四月廿日の大火に始まり。閑居の有様を敍して筆を終ふ。時に建暦の二とせ彌生の晦日ごろ。桑門蓮胤外山の菴にをしるすとあり。

十樂菴記

頓阿法師

佛の十快。神の十善になぞらへて名づけたる。伊勢國國分寺三田村なる頓阿が菴の記にして。その近傍名所舊跡の事等をしるせり。貞治三年二月の作なり。

夢菴記

牡丹花肖柏

肖柏がその攝津猪名野なる夢菴の事を記し

たるもの。背院は弄花軒と號せしとぞ。

三愛記　　牡丹花肖柏

花を弄び。香を執し。酒を愛す。肖柏が三愛記成る所以なり。永正丙子七十四歲にして自書したるよし。奧書に見えたり。

宇津山記　　宗長法師

連歌師宗長。駿河國宇津山邊に草菴を結び。柴屋軒といふ。永正四年十二月の頃。年ごろ見聞きし事ども書きつらね。その發句をしるしたるものなり。

卷第四百八十一

三塔巡禮記　　三條西公條

天文廿三年。叡山三塔巡禮の記なり。

石山月見記　　三條西公條

天文廿四年中秋月見の記なり。記事は八月十四日より。同廿一日に訖る。

嵯峨記　　九條稙通

天正元年十二月。嵯峨に遊びて諸所を巡り覽たりし紀行にして。懷舊の歌など見えたり。

唐崎松記　　尊朝法親王

天正十九年季秋。新たに唐崎の松を植ゑたりし事を記し玉へるものなり。文中その由來なども見えたり。親王は正親町天皇の猶子。筆蹟に工なり。御家流中興に一風を創め。世稱して靑蓮院流といふ。

夢想記　　細川幽齋

慶長の初年仲冬。豐太閤が大阪の亭に於て住吉明神の夢想あり。幽齋即ち筆を染めて祝詞を奉りしものなり。

さか衣　　木下勝俊

豐太閤榮花の様を述べて。昔を忍びたる附

筆なり。

卷第四百八十二

多武峯少將物語

應和元年。少將藤原高光出家して叡山に登りたる事を。近侍の人のしるしたる物語なり。その事は榮花物語にも見えたり。

鳴門少將物語

一になよ竹物語といふ。後嵯峨院仙洞の頃。さる女を召し玉へる事を記したるもの。古今著聞集にも引用したれば。延長以前のものなるべし。

卷第四百八十三

時秋物語

源義光兄義家の軍に加はらんとて陸奥に下りし時。豐原時秋追うて足柄山に至り。祕曲を授かりし物語なり。然れども二人の年代相合はず。この物語にある事實。恐らくは虚傳なるべしといふ。

今物語　藤原信實

仁和寺書籍目錄に廿七冊存すとあれば。もとは數十卷の書なるべし。同時代の歌人の物語。又は文覺上人の歌の事など。當時流傳の雜話を記したり。

卷第四百八十四

野守鏡上下　藤原有房

永仁の頃。藤原有房が歌道の事を論じたる隨筆にして。嵯峨山に詣で丶共に通夜したる一僧の談話によせ述べたるものなり。

卷第四百八十五

吉野拾遺上下　隱士松翁

延元の頃より。正平十三年の頃に至るまで。南朝の事蹟を思ひ出で丶記したるもの。事

多く信憑す可らずといへども。また必ずしも捨つ可らざるものあり。若干の事は新安手簡に見えたり。今收むる所は。流布印本の三及び四の二卷を後人の竄入とし。定めて上下二卷となせるなり。從ふべし。

卷第四百八十六

江談抄　六卷

大江匡房の談話を記したるもの。第一公事。攝關家事。佛神事。第二第三雜事。第四第五詩文事。第六長句事に分ちたり。以て匡房の博覽多識を觀るべし。

卷第四百八十七

續古事談　六卷(第三欠)

古事談の跡に倣ひて。王道。后宮。臣節以下。古事傳說を蒐めたるものなり。

卷第四百八十八

東齋隨筆　一條兼良

和漢の雜事を記したる隨筆なり。本朝隨筆と稱するもの本書を以て始とすといふ。音樂。草木。鳥獸。人事。詩歌。政道。佛法。神道。禮儀。好色。興遊等の項に分ちたり。

卷第四百八十九

大槐祕抄　九條伊通

年中恒例臨時の行事。其他帝王のしろしめすべき事どもを記したるものなり。奥書によれば。伊通の二條院に進めたる意見なりといふ。

おもひのまゝの日記　二條良基

年中の公事どもを。思ひ出るまゝに記したるもの。恐くは前書とともに年中行事の部に收むべきものなるべし。

卷第四百九十

眞俗交談記

延久二年九月。眞俗の人互に交談し。稱號。故實。著作。宗教等に關し。その問答したる事どもを記したるものなり。

驪驢嘶餘

僧家の稱號。所役。裝飾。其他の雜事を記したるものなり。

卷第四百九十一

門室有職抄

門跡僧家の書札禮。車。行列。裝飾。其他有職故實を記したるものなり。

卷第四百九十二

海人藻芥　正宣守

恩命院僧正宣守の記なり。僧家の諸札禮を始め。有職故實に關することを書き集めたるものなり。

卷第四百九十三

駿牛繪詞

牛車の沿革。用牛の撰擇。及び飼養の方法など。すべて輿服の制を詳にし。牛飼の高名者。牛の異名に及び。名譽の駿牛を列擧したる繪詞なり。

國牛十圖。

諸國の國牛を圖し。その特徵を記したるもの。延慶三年五月。河東牧童寧直麿の筆になる。

卷第四百九十四

夜鶴庭訓抄　世尊寺伊行

入木道の祕書なり。伊行その女に書き與へたるものなりといふ。此名ある所以なり。

才葉抄

一に雜跡抄といふ。宰相入道教長の口傳に

して。安元三年七月。高野山の庵室に於て記したるもの。また入木道の祕事たり。

入木抄　　尊圓法親王

御家流の祖尊圓親王が。勅命によりて注進したる所。入木道の事に關し。初心稽古の至要を記したるものなり。

卷第四百九十五

一に仁和寺書籍目錄と稱す。足利義教の命により注進したるものなりといふ。本朝の書籍を類別して。書名卷數を擧げ。その下に著者の名を注したり。

仙洞御文書目錄

文和四年七月。院廳官の注進する所。仙洞御文書の目錄なり。

倭片假名反切義解　　藤原長親

吉備眞備の倭片假字反切といへるものゝ義解にして。本朝音韻學の著書に於て尤も有益なる者の一なり。長親薙髮して耕雲散人明魏といふ。南朝に仕へ權大納言に至り。應永年間薨ず。

通憲入道藏書目錄

又た信西藏書目錄といふ。その家藏の豐富なる想見するに足る。信西の博學多才また因ありといふべし。

諸家點圖

喜多院點を始め。十七種の平古止點圖を集めたるものなり。

卷第四百九十六

桂林遺芳抄三卷　　菅原和長

儒門の官途に關する事ども。記錄を引きて書き集めたるものなり。永正十二年成る。

卷第四百九十七

新撰字鏡　　　僧　昌住

玉篇の躰に倣ひ。漢字の音及び訓義を示したるものなり。昌泰年中成る。類聚名義抄に次ぎ。我國最古の字書なるべし。古本は十二卷ありて更に善本なり。

卷第四百九十八

中正子六卷　　　釋　圓月

孔孟仁義の道。性命死生の理を論じたるもの。我國朱子の理學を論ぜるは之を權輿とす。元弘の末の著なり。

卷第四百九十九

常陸國風土記

和銅年間諸國に勅して獻ぜしめたる風土記の一なり。

豐後國風土記

また前者に同じ。唯その殘缺を收むのみ。

卷第五百

對馬國貢銀記

對馬國より貢する銀の採掘精製の事を略記したるものなり。

伊勢國風土記

後世の僞撰なり。伊勢の人古谷久滿の作にかゝるといふ。

駿河國風土記

日本惣國風土記の中。駿河國を抜きたるもの。また後世の撰なり。

第十八輯

雜部

卷第五百一

安東郡專當沙汰文

伊勢國安東安濃東郡專當の沙汰文にして。

神田の籾餅等勘納の事より。神田の名付并に丁部等の名字。御籾の員數。及び宮中奉納の時運上損定の次第。清酒支配の次第。大餅の事など。伊勢外宮の御領に關する雜事數十條を記したり。元徳元年十一月注する所なり。末に記者の父氏光神主が。永仁六年十月の在地御倉付御籾納帳の端書日記を載せ。また外宮長官以下禰宜上洛の時專當勤務の事を記し。元亨元年二月。正慶元年十一月。康暦元年八月の折の例も見えたり。

康正二年造內裏段錢并國役引付

寺社。權門。武家等に催したる造內裏段錢并に國役の注文なり。

卷第五百二

東北院職人歌合

建保二年の九月十三夜。東北院の念佛に集りし人々。月と戀とを題とし。作者を醫師陰陽師以下の職人に託し。左右に分れて歌合したるものなり。

鶴岡放生會職人歌合

鶴岡放生會の折。東北院職人歌合にならひて。八幡の神主を判者とし。樂人。舞人以下十二番に分ちたる歌合なり。題は同じく月と戀なり。

三十二番職人歌合

前の歌合にならひ。花と述懐とを題とし。千秋萬歳法師が。名を繪解以下三十二人の職人にかりたる歌合なり。判者は勸進聖とあり。

卷第五百三

七十一番歌合 上中下

一に職人盡歌合といふ。番匠。鍛冶より。醫

造り。心太うりに至るまでを七十一番とし。月と戀とを題したる歌合なり。判詞の次に書あり。原本は土佐光信の畫く所にして。坊城和長の書なりといふ。塙撿校本書を刻するに及び。淨書を屋代弘賢に囑したるよし。その奥書に見えたり。

卷第五百四

十二類歌合

作者を十二支の動物にかり。鹿を判者としたる歌合にして。そのゝちまた歌合の會を催し鹿を請じたれども。病と稱して出ざりしに。さきに鹿の從者として來りたる狸。羨ましさの餘りに。自ら山を出て、判者の座に着し。種々の過言どもありしかば。十二支の動物大に怒りて追ひ出したり。狸無念に堪へ難く。萬の鳥獸を語らひて軍議を凝したる由。記したる戯文を以て結尾としたり。

調度歌合

作者を調度にかり。戀を題として詠じたる歌合なり。燒籠すびつの歌以下十番あり。

狂歌合

永正五年正月の狂歌合なり。判は衆議により。後日その詞書を加へたるよし見えたり。

常盤嫗物語

大和國の常盤嫗といへるもの。翁にをくれて老の末をはかなみ。過ぎこしかたを思ひ出て、。臨終正念往生を遂げたるよしの物語にして。また一種の戯文なり。

精進魚物語

精進料理の野菜類と。魚鳥料理の魚鳥類とを稱とし。軍物語に擬したる戯文なり。

柿本氏系圖

柿本人丸の姓によせて。柿の種類を叙し。系

關白に物したるものなり。

後奈良院御撰何曾

永正十三年正月の頃御撰の何曾〳〵なり。

卷第五百五

公武大躰略記

公家武家以下名家諸道等の由來故實を記せるものなり。長祿二年三月吞殘主の奥書あり。

世諺問答　一條兼冬

年中の節序故事を。問答躰に記したるものなり。始め八ヶ條は祖父一條兼良の筆に成りしも未だ功を終へざりしかば。兼冬その日條によりて。正月七日のあつ物の條より。十二月晦日の事に至るまで書き集めたるなり。時に天文十三年の中春。兼冬僅に十六才なりしといふ。兼冬性またに用書妙を得。筆法清雅にして。上代の遺風あり。天文二十二年關白となり。明年薨ず。

卷第五百六

曆林問答集上下　賀茂在方

曆數に關せる賀茂家の秘說を。問答躰に記したるものなり。天地の根元より宿曜の吉凶に至るまで。すべて六十四條あり。其注曆の研究に欠く可らざるものとす。應永廿一年の自序及び跋を載せたり。

卷第五百七

紹運要略

追號天皇。太上天皇。皇太子。廢太子。號太子。女院。攝政關白次第。東寺長者次第。醍醐寺座主次第。天台座主次第。立太子月立。不立太子直踐祚即位等帝。重祚。出家即位。出家立坊。不即帝位天皇號院號等例。付追號。等の項に分ち。皇代記。扶桑略記以下舊記によりて抄出したるものなり。もと嘉曆元

年六月。散位平朝臣の手に成りしものなれども。間々書繼あり。文明年間の事に至る。

卷第五百八

本朝女后名字抄

また貴女抄といふ。伊勢齋宮。、賀茂齋內親王。后宮。及び女院等の事を略記したるものなり。女院の條は追加して東福門院に至る。もと明應七年十一月。菅原和長の抄出したるものなりといふ。

女院記

東三條院以來。女院の事を記す。女院小傳等と交倚出入せり。相待つて參考に資すべきなり。

卷第五百九

本朝謚號略記

天子女院以下攝關公卿等の謚號を注したるものなり。附官附位の事も見えたり。

卷第五百十

歷名土代　山科言繼

應永以來四位五位の官位昇進の土代にして。永祿二年二月山科言繼の抄出する所なり。奧書に本書の由來を述べたり。後增補して慶長年間に及べり。

卷第五百十一

御評定着座次第

貞和五年以來。應永十年に至るまで。室町幕府評定衆着座の次第を記したるものなり。

永享以來御番帳

初めに永正九年冬五ヶ番着到狀を載せ。次に永享頃より文正年間に至る三職御相伴衆御供衆以下の役人を記し。次に永享三年正月伊勢守貞經亭へ御成の節の番頭。及び文

明十二三年ごろの御相伴衆以下の交名を注し。終りに伊勢貞丈の勘物として。年中恒例記。萬書拔條々等を引き。將衆參勤の事を附載したり。

文安年中御番帳

文安年中の公方御番衆以下。申次。詰衆。在國衆等を始め。奉行衆。評定衆。外樣衆。三管領。四職等の交名を注したるものなり。

永祿六年諸役人附

光源院義輝將軍の代。常參衆幷に足輕以下の衆の覺書なり。日附に永祿六年五月とあり。

長享元年九月十二日常德院殿樣江州御動座當時在陣衆着到

將軍義尚が江州動座の時。公家衆中以下。在陣衆の着到狀なり。義尚動座の後の事をも略記したり。明應二年六月。鎌田加賀入道妙長の記し置けるものなり。

卷第五百十二

東大寺奴婢籍帳

天平勝寶元年大宅可是麻呂が。奴婢を東大寺に貢進したる解文を始めとし。天平以來勝寶に至るまでの東大寺奴婢帳にして。安永八年の夏。藤貞幹が東大寺の原本を以て寫し置けるものなり。而して同寺の奴婢帳はこれに洩れたるもの猶ほ多くして。今現に正倉院御物なる東南院文書の中に。原物の存せるもの少からずといふ。

第卷五百十三

常樂記。

永仁三年以來。應仁元年に至るまで。天子公卿以下武家僧侶等の崩御薨卒入滅他界等。死去の日を書継ぎたるもの。また一種の過去帳なり。間々歷史の事實をも記入したり。

卷第五百十四

近江國番場宿蓮華寺過去帳

元弘三年五月京都合戰の破によつて。主上兩院を奉じて關東に下向の間。近江馬場宿一向堂の前に於て合戰あり。六波羅探題仲時を始め討死自害の人々より。建武元年三月阿彌陀峯に於て誅せられたる北條氏の殘黨等の過去帳なり。終りに蓮華寺の住持がその菩提の爲めに。四十八日間常行三昧の念佛を修行し。廻向したる願文を載せたり。

相州鎌倉松岡過去帳

鎌倉なる松が岡にある東慶寺といふ尼寺の過去帳なり。始めに開山以來代々の次第を載せたり。

常陸國茨城郡六段田村六地藏寺過去帳

常陸國田島村傳燈山和光院過去帳

共に永祿の頃より寬永年間に至る過去帳なり。

卷第五百十五

類聚雜例　源經賴

左經記中の一卷にして。長元二年より。同九年に至るまでの日記に就て。凶事に關せる事のみを集録したるなり。左經記一に經賴記。又た糸束記といふ。

卷第五百十六

高倉院昇遐記　源通親

治承五年(養和元年)の春高倉院崩御の御事を記し奉り。その前後の有樣など。優婉なる筆を以て之を述べ。和歌を加へてその哀慟を叙したる和文なり。

四條院御葬禮記

仁治三年正月。四條院御葬禮について。その所役等を注し奉りたるものなり。

龜山院御葬禮記

嘉元三年九月。龜山院御葬禮の記なり。

卷第五百十七

伏見上皇御中陰記　法印慈什

文保元年九月。伏見院崩御あり。御中陰間の佛事等の記錄なり。

後光嚴院御中陰以下諸佛事記　法印經深

應安七年正月。後光嚴院崩御あり。二月二日より御中陰にて。佛事等を行はれたる記錄なり。

卷第五百十八

後小松院崩御記　飛鳥井雅緣

永享五年十月後小松院崩御の御事を記し奉りたるもの。懷舊の思ひ。往事の涙つきずして。詠じ出でたる和歌數首も見えたり。

山の霞　飛鳥井雅康

文明二年十二月後花園院崩御の御事を記し奉り。御葬禮の有樣など述べたるものなり。

山賤記　貞常親王

また後花園院崩御の事をしるし。御中陰の間の事どもを。述べ給へるもの。奥書に文明三年二月下旬に記されて。內裏に進め給へるよし見えたり。

後奈良院御拾骨之記

弘治三年九月。後奈良院崩御あり。同十一月御闍維の後。御拾骨の事をしるし奉りたるものなり。

新待賢門院七七忌御願文

正平十四年六月。新待賢門院(廉子。後醍醐天皇の妃。後村上院の生母たり)七七の御忌の時。一品内親王家の諷誦願文なり。

卷第五百十九

鹿苑院殿薨葬記

應永十五年五月。將軍足利義滿薨逝の事より。茶毘葬送及び初七日等の事を記したるものなり。

鹿苑院殿追善記

足利義滿の中陰追善の記なり。

鹿苑院をいためる辭　飛鳥井雅緣

義滿薨逝の事より。百ヶ日に至るまでの事をしるしたる和文なり。

將軍義尙薨逝記　宗高

長享三年(延德元年)三月將軍義尙陣中に薨逝せし事より。茶毘葬送などの事をのべ。人々追懷の和歌など雜へたるものなり。

卷第五百二十

萬松院殿穴太記

一に略して穴太記といふ。天文十八年六月。將軍義晴。三好長慶の亂によりて。近江穴太に下りたる顚末に始まり。明年五月その所にて薨逝せし後。葬送中陰の事等を詳かに述べたるものなり。其間人々の義晴を悼める詩歌などを錄したり。天文十九年初冬左僕射の奥書あり。原傍注に兼冬とあれど。兼冬の左大臣となりたるは同廿二年の正月にあり。恐くは晴良の誤ならむ。

總見院殿追善記　大村由己

天正十年六月本妙寺の變より。秀吉播州高松城より馳せ上りて。光秀を退治せし事を始め。大德寺にて信長の追善を營みし顚末を記したる實記なり。

卷第五百二十一

あしたの雲

明應四年九月。大内義興卒去葬送の事を記したるものなり。人々の悼歌及び追善の連歌等を載せたり。

宗祇終焉記　宗長法師

文龜二年宗祇法師が箱根山の麓湯本にて終焉せる事を記したるもの。宗長及び素純等が追悼の句なども見えたり。その記は宗祇法師が知音の人々の爲めにとて。宗長が水本與五郎に送りたるものなり。

幽齋翁御葬禮記　米松宗賢

慶長十五年。細川幽齋が豐前小倉に於て卒去葬禮等の事を記したるものなり。

玄旨法印をいためるとば　延陀王丸

細川幽齋卒去の事を追悼せる文なり。ことにその敷島の道に堪能なりし事を叙したり。

卷第五百二十二

吉事次第

崩御の後。入棺葬送茶毘等の次第を記せるものなり。奥書に。仁和寺守覺法親王。入道兵部卿平親に仰せ談せられ葬儀を仕らる內。御自筆本を書寫したるよし見え。建保三年四月。殷富門院入滅の御時の事をも附載したり。

吉事略儀

崩御の後の儀式を始め。入棺葬送茶毘山陵等の次第を記したるものなり。

贈官宣下記

延文三年六月足利尊氏に贈官宣下ありし事(松殿大納言忠嗣卿記)を始め。應永卅五年

正月(師郷記)。嘉吉元年六月(菅原益長記)。同三年七月。文安元年五月(記の名共に欠)。康正三年三月(清原宗賢卿記)。長享三年四月(菅原和長卿記)等の。足利將軍に贈官の宣下ありし記事を集錄したるものなり。

諷誦願文草案

康正三年四月足利尊氏百年忌。嘉慶元年十二月義詮廿一回忌。明德二年十二月同廿五回忌。應永二年四月卅三回忌。同三年卅回忌。同四年卅一回忌。同十年卅七回忌。同十一年卅八回忌。文正元年同百回忌。文明十三年義教卅一回忌。同十四年四十二回忌。同十五年四十三回忌。同十六年四十四回忌。同十七年四十五回忌。同十八年四十六回忌。同十九年四十七回忌。長享二年同四十八回忌。同三年四十九回忌。延德二年同五十回忌等。諷誦願文の草案なり。

卷第五百廿三

文保記

太神宮參詣精進の條々として。六色の禁忌。内外の七言。内外親族の假服。觸穢の日數幷に改葬穢。籠僧等の禁忌を始め。死穢。產穢。月水。痢病。衣裳。路次の解除。宮中禁制物。燧火忌火等の制規を集めたるもの。文保二年二月定むる所なり。中には前前の例をも勘注したり。

卷第五百廿四

永正記上下。

上卷には。内外親族假の事より。鹿食の禁忌幷に猪犬麞猿熊の事に至るまで。すべて三十六ヶ條。服假解穢禁忌火物等に關する制規を載せ。下卷には神明の遺勅。攝家の憲章。及び兩宮の規範として。往昔の例。中古

の趣。當時之儀凡そ百二十餘條を載せたり。また前々の例を勘注し。伊勢太神宮の禁忌觸穢其他の規定に關して。尤も詳密なるものなり。その永正記と稱する所以は奥書に見えたり。文明年間より増補し來り。永正十年二月成る。

卷第五百二十五

婚記 四卷　藤原賴長

卷一は久安四年七月三日より八月八日に至り。卷二は同九日より十二月廿四日に至り。卷三は同五年正月一日より同六年正月九日に至り。卷六は久安六年正月十九日より三月八日に終る。四五の二卷闕けたり。久安六年正月。賴長の養女多子が入内に關する前後の事を集錄したるもの。その日記台記より抄出して。此名を附したるなり。

卷第五百二十六

中宮御產部類記

元永元年五月。中宮待賢門院璋子。崇德院を生み奉りたる事に關せる部類記にして。兼日の祈禱。夜々の次第。御誕生。產養。及び以後の儀式等について。中右記。源礎記。同委記。顯雅記。敦記。祭資記。有成記等を抄出集錄したるものなり。

卷第五百二十七

后宮御着帶部類記

元永元年正月。中宮璋子着帶の事（顯賴卿記。師時卿記。）を始め。康治二年二月（有光記）。治承二年六月（定長卿記）。寛喜二年十一月（定嗣卿記。資賴卿記）。及び寛元々年正月（常盤井入道相國記。資師經長記）等。后宮御着帶の部類記なり。

御產御祈目錄 寛元以來

寛元々年六月。寶治元年八月九月。建長元年五月六月。同六年五月。同八年三月四月。正元二年二月。弘長二年四月五月。同年九月十月。文永二年七月。同年九月。同四年十一月。同七年八月九月。建治二年八月九月十月。弘安二年六月等。御産のたび〳〵に修められたる御祈の目錄なり。

安德天皇御五十日記　中山忠親

治承三年正月五日安德天皇御五十日の儀を記したるものなり。忠親の日記山槐記の一節を抄出したるものにかゝる。

卷第五百二十八

新院姫宮御行始記

延慶四年三月後伏見院の姫宮御行始の儀を記したる日記の一節なり。

北山院御入内記

應永十四年三月。北山院恭子後小松院の母に准せられて院號あり。御幸始として内ありたる事をしるしたるもの。その銘によるに。恐くは第一輯に收めたる明年月後小松院の北山御行幸記の作者と同じなるべし。

卷第五百二十九

安元御賀記　藤原隆房

安元二年三月後白河法皇五十の御賀行は[illegible]給ひたる御事を記したる和文にして。後[illegible]の事に至るまで。委曲にその有樣を述[illegible]たり。

俊成卿九十賀記　近衛基通

建仁三年十一月。後鳥羽院二條の御所に[illegible]て入道俊成九十算の賀を行はれたる記錄[illegible]り。恐くはまたその日記中の一節ならむ。

卷第五百三十

稱名院右府七十賀記　九條稙通

弘治二年四月。稱名院右府三條西公條七十の賀の記なり。七十首の和歌をすゝめて。彼等にして歌人を招き讃賀せしめしとを始め。又の日和漢聯句を張行したりし事どもを記して。その折の和歌聯句等を錄し。また其間に公條と冷泉爲益と爲答の和歌各々十首をも載せたり。

暮春白河尚齒會和歌幷序　藤原清輔

承安二年三月。白河寶莊嚴院に於て講じたる尚齒會和歌幷に序なり。垣下の和歌をも載せ。尚齒會の有樣を婉麗なる和文を以て述べたり。

群書類從略解題終

附錄

溫故堂塙先生傳

門人　中山信名平四撰

溫故堂塙大人。名は保己一。氏は荻野といふ。塙は其師須賀一検校の本姓を冒されしなり。其先參議小野朝臣篁卿より出て。世世武藏國兒玉郡保木野村に家居す。初め篁卿七世の孫孝泰（一說に隆泰。）ときこえし人。武藏守になりて此國に下りしが。其頃のならひとて。任はてゝ後も猶こゝにとゞまりすみ。多くの庄園をたくはへもたれしかば。其子義孝（一說に孝隆。）も是につぎて。多胡郡横山里に家造し。遂に國人となれりしが。家も富りしまゝに。武藏權介になりて。五位のくらゐにさへあづかれし故に。野大夫とも。又横山大夫ともきこえし也。此人の子十人有る中に。太郎資孝（一說に資隆。）は横山黨の始祖なり。三郎時資は猪俣黨のはじめにて。共に一族多く世にもきこえし氏也。八郎義兼は横山源八とよばる。其子新大夫盛兼といふ人。相摸守源有兼といふが女をめとりて。三郎季兼をうむ。季兼外戚の祖父有兼が養子となりて。彼の國に移り住て。字を海老名の源太と改め。永くかしこの國人となれり。是より小野氏を改めて村上源氏の姓を冒す。其子季定（一說に季貞。）も。亦海老名源八とよばる。（一說に源太。又源三に作る。）後に相摸權守となる。横山新大夫季兼（資孝が孫。一說に經兼。）が女をめとりて。あまたの子うませたり。海老名本間國府などいふやからは皆これが末なり。其五郎に季時（一說に季重。又は俊重に作る。）といひける人。初めて荻野五郎とよびて。此氏の始祖なり。伯父小倉二郎經孝（孝兼が子。一說に經隆。）といひける人の女を娶とし

て。子多く儲けたり。治承の亂に。平家の方人して右兵衛佐主を射たりし罪によりて。終に失はれぬ。されども兄弟一族みな鎌倉殿の御家人となりしかば。季時が子ども、皆其員につらなりて。永く鎌倉に仕へき。武藏にはもとよりの因緣ふかく。族も多かりければ。其中にはおのづから移り住者もありけり。これら則大人の先祖也。是移りて元和の亂に。荻野某難波城に籠り。其果て後。郷里なれば武藏にかへり。保木野村に隱れすめり。此人もてりし太刀は。門村と名づけて。難波の役に敵を討ながら切りたるもの也とて。家に傳へたりしが。中頃故ありて他の手に渡りき。其太刀三尺計りありしといふ。又其折用ひられたる釜なりとて。いと古き釜一口あり。今に大人の家に藏す。夫より永く農人となり。世を經て宇右衛門に至る。宇右衛門宇兵衛をうむ。是大人の所生也。宇兵衛生質陰德を好み。人の為にはあへて身をもかへりみず。人もし疫疾痢病などやむ者あれば。

親族さへ病の傳染を恐れて。近づく者も稀なるに。あへて厭ふ事なく。自ら其家に行てもて扱ひ。湯藥を加へしかば。夫が為に助かる者多かりけり。其外の行狀是をもてはかり知べし。此人。加美郡藤木戸村の父老齋藤理左衛門といふ者ゝ女を妻として。延享三年丙寅大人を生めり。幼名を寅之助といふ。五歲の年より眼を病て。七歲の春俄に盲目となる。或人大人の父母に告て云。寅之助が歲星其身にかなはず。むべ歲星の次をうつしなばよかるべしと。是によりて生年二歲を減じ。戊辰の生に准へ。辰之助と改む。又同郡池田村なる驗者正覺坊が子に擬らへて。又の名を多門房と名づけらる。幼少より木草の花を好みて。いまだ盲目ならざりし時。野邊に出て其數種を求て。前栽に植られし事などありき。物みずなりて後も。何に

まれ花さく木草を植置て。人の見悦ぶ事あらば。自らも並ならずたのしめる事常の業なり。十二といふ年。寶曆七年丁丑。眼をうしなひて。うれへ思ふ事尋常ならず。是より漸東都へ出て。業をなすべき心起されしが。或人の語るをきかれしに。常時業とかやいふ者。太平記一部を暗誦し。東都に在て諸家に出入り。名をあらはすときゝて。大人心におもはく。太平記は全部四十巻に過ぎず。これを知るを以て名を顯はし。妻子を養ふ事を得がたかるべき事かは。こゝに至て。東都に出るの志いと切也。庚辰といふ年の春。寶曆十年三月。父に請て。絹商人で此絹商は江戸へ出て弘力の株な買て後。遂に町奉行迄にあがりて。根岸肥前守といひし人なり。さて此つれ立て江戸迄くる途中にて。大人と元に名もあげくらべせんと約せられしとぞ。と共に來り。雨富檢校須賀一が門人となり。彼家に寄留し。名を千彌と改む。須賀一檢校。本氏は滞といふ。常陸國茨木郡市隅村の人なり。雨富といふは。盲人一派のならひに在名といふ者にて。關稱なり。本氏を其儘に在名に用ゆる人もあり。ことに設けて稱ふる者もあり。雨富の家は四谷四念寺横町にあり。盲人一座のならはしにて。此座につらなる者は。又琵琶箏三弦などいふものを習ひ得て。音曲の事を業とし。又は鍼治導引などなりはひぐさとなす事あるも。大人は文よまんと思ふ事。始よりのねざしなれば。心そこにあらず。されど師のいさめやむ事なければ。其節の事どもゝ習ふさまなれ。ともすればひまをうかゞひ。文讀む事のみを旨とす。翌年萩原宗固百花庵と稱す。が門弟となり。物語やうの文どもをよみて。歌よむ業を學ばる。其頃川島貴林稱源八郎といふ人あり。山崎の流をくみて。神道の事に心をよせし人なり。大人これに就て。小學近思録などより初めて。異朝の書籍を習ふ。をりふしには神道の教をも受たり。又雨富が家の隣は。松木乘升[illegible]の家なりける。

此人もふみよむ事を好み。大人の學才の人にことなるをめで。いと懇にして。劇しき務めのひまには。物よみ教へければ。大人もいとうれしき事に思ひ。其家に行き通ひて。契約を立て。朔の寅の刻より卯の刻に至りて。一時がほどはふみよみならはれけり。乘尹は公の務めいとまなき人なれば。一日を濟てつゝもかくは教へけり。一日乘尹同濟に語りけるは。彼瞽人が人となりをみるに。度量大に常人を越たり。彼をして明あきたらんには。かへりて法令をもをかし。其身をもそこなひなん。明なきこそ幸にはありけめ。後に必ず業なりぬべき人なり。かく思ふが故に。常に懇にはすなりとぞいひける。山岡妙阿は。其頃博學なるを以て名を顯はす。大人又此人によりて。律令をよまれ。離經素問などいふ醫書をば。品川東禪寺の僧孝首座に習ふ。十八と云ふ年寶暦十三年癸未。に。一座の衆分となり。名を保木野一といふ。凡盲人一座の長官を檢校とし。次官を勾當といふ。もとより記憶すぐれしかば。やうやく其名を知る者あるにいたる。はじめ大人雨富が室に入し時。其教に任せ三弦をならひけるに。今日習ひ得し物は。一夜の程に忘れて。明日は知らずなりけり。すべて三年の間に一曲も全くは覺へざるのみか。調子さへ合ざりければ。雨富せんすべなくて。針治の術を旨に習はせけるに。醫書よむ方は人にすぐれて。二度よますれば。其次の度には一文字もたがへずよむ程なりけれど。術にかゝれば。人よりもはるかに劣れり。こは文よむかたにひかるればなるべし。雨富餘りに覺えて。せめいひけるは。およそ人の郷里を去りて。他郷におもむく事は。なす事のあらんとて

の意なり。汝父母の家を出で。こゝに來る事もしかなるべしされどもすぎはひとなすべき一つも。ならひ得るものなし。且朝夕汝がなす所業ばかりも我心にかなはず。さはされど。門人の祿となる術を敎ふるは師の職分なり。汝が好まざる事をなせといふにあらず。賊と博とを除ての外は。何にまれ心にかなひたらん物をつとむべし。是より三年が間。汝を養ふべし。三年を經てなす事なくば。速に鄕里に送りやるべしといふ。大人肝にしるして。晝夜となく讀書を勉めしかば。終に名を顯す迄になりにけり。されば大人意を得て後。常にいへらく。我素より讀書を好まざるにあらず。然れども業をなし名をあらはす者は。みな師の賜物之。たゞうらむ所は。師在世の祿かばかりの幸をきかしむる事なきのみことと。大人もと病

多し。雨宮よくやしなふになほいえず。一日雨宮大人に告て云く。なすことあらんとおもふもの病おほければ果すこと能はず。病ある人の旅に趣くときは。まゝいゆることあり。おもふに汝病多ければ。果すこと能はず。我金五兩を與ふべし。我に代はりて伊勢の神宮に詣でよ。雨ふらん日はゆく事莫れ。かならずあしき氣をうけぬべし。數あまりあらば。なほ他方に行。纔日に從ひてかへり來るべしと云ふ。大人その敎を受。廿一と云ふ年（明和三年丙戌）。の春。父宇兵衛と共に海をのぼり。まづ伊勢に詣で兩宮を拜し。師より始めて。さるべき人の平ならんよを懇にのべて。朝熊二見などめぐりありきて。其夜旅宿に歸りけるが。宇兵衛は大人のぬぎおける脚半を見るに。其うらの赤き事蘇枋にて染めたる布の如し。あやしみな

がら水もてそゝぎけるに。水さへいと赤くなりたり。いぶかしとおもへど。大人の物おもはん事もやと。そこにては語らず。日を經てかう〱ありしを告ければ。大人もいかなる祥ならんとおもはれしが。東都へかへりて後にきけば。その日は雨宮の師なりし雨谷といひける檢校の。事にあたりて總祿のつかさとられし日にあたれりとか。神も大人の誠をいだしてのみけるにめでて。かゝる神異を示されしなるべし。又伊勢より京都にのぼりて。神社佛事など詣ありきけるが。北野にまいりてことにたふとくおもはれければ。永く一身の守護神とせられき。これよりさき。大人おもはく。凡人は神明をたのみて心をさだむるにあらざれば。業をなす事を得ず。伊勢石淸水はいふもかしこし。人臣の分にては。北野かもしは豐臣太閤か。北野はもと文筆の家より起り。官は大臣を極め。死せては神となる。上は公家より始めて。下は凡民に至るまで。歸敬事よのつねならず。太閤はもと尾張の賤民なり。一たび起るに及で。天下悉く服從しき。威風異邦にきほへり。ともにして名をなされたり。この二人をのぞきては。又よるべき神なしと。しかれ共こゝろいまださだまらず。或はおもはく。太閤を祈らん。又思はく。北野をたのまん。こゝに至りて。決て北野を祈る。此後は百度詣。千度詣など。年ごとに絕ゆる事なし。それより難波に至り。住吉天王寺を禮し。播磨に渡りて。須磨明石浦傳ひに通ひ。難波にかへり。堺の浦をへて。紀の國にいたり。高野山粉河寺紀三井寺にも詣でしかば。大和に歸り。南都を巡禮す。彌生の程なりければ。吉野

山に行て花もめてつゝ。西行桜にしばらくやすらひけるに。藤門秀齋と云ふ老人。法隆寺町の人。又外に二人。一人は龍田の人。一人は難波の人。これも花見にとてこゝに來り會けるが。かたみに大人はいづくの人ぞなどかたらひ。かゝる花のもとに對面しつるが。興あるわざなれば。當座の歌よまんとて。秀齋より初めてみなよみたりしに。大人は「さかりなばいづれをそれとしらくものかゝるも匂ふみよしのの花」となんきこへし。各めでよろこびて別れにけり。たへて六十あまりの日を積て。東都に歸られけり。果して雨富の言の如く。病はみなたへたり。いとあやしきことになむ。二十四といふ年の春。明和六年三月。歌の師宗固。大人と横田茂語字は孫兵衛。とを招ひていへらく。汝等此年頃讀書詠歌にまめなる事餘人にすぎたり。後にはみなことなりつべし。されども人各得る所有り。彼をまなび。是をまなばんとすれば。人にすぐれん事かたかりなん。これより後。茂語は歌をむねとし。讀書は是につげよ。保木は歌よむ事をやめて。専らふみよむべし。されど。ことにすぐれたらん人によらずば。ことゆくべからず。いま賀茂眞淵は。國學の才名世にしられたり。保木は彼につきて學べよ。但吾にならひたる事かたくかたるべからず。もと學流異なれば。彼人もしくは隔つる心ありなんと。大人其言に從ひ。縣居につきて習ふ。はじめて行きたりしをり。縣居これ迄は何書をよまれしやと問はれければ。ふみよむすべをもわきかねしまゝに。宗祇季吟など云ふ人のかゝれたりけむふみをよみて侍れば。あたらいとまを空しくなし候ふといらへられしに。縣居いたくめで。そ

はよきわざをしつる人かな。今世の學者は大かた人のいひけん齊まなびをのみして。得の善惡をおのれとさとる人はすくなし。おのれとわきまへしるものならねば。業なり難しとなんいひける。又大人の詠出したる歌は「すかるなす腰細をとめ得ましかばあさよひさけずなづさはましを。」今一首の歌は「宮城野の秋の萩原わけぬともひとりしぬればぬるゝ袖かな」とぞありし。大人古體の歌よまれしは多くきこへず。且これははじめにはありける。されば縣居も並ならず感おもはれたり。こゝにて六國史をもとげよまれけり。されど此冬縣居死たりければ。わづか半年ばかりなん教をばうけられたり」。此頃豐一といふ衆分の盲人あり。金若干を貯へもたりしが。俄に死してゆづるべき子もなかりければ。或人。大人をして其家をつがしめなばよかりなんと。雨富にすゝむ。雨富此由をきこゆ。大人うけずしていへらく。「豐一生けりしをり。をのれと心よからず。死したりとて其家をつぐべき筋あるべからず。且彼が家をつがでありとも。さるべき果報のありなんには。かばかりの財たくはへなんこと難かるべからずと答ければ。雨富我もしかおもへりとて。其事やみにけり。さて大人の學業日を追て進みけるまゝに。雨富もいたくめでゝ。一日大人を招てさとすやう。當世一座の樣を見るに。席をすゝむもの。みな金をむねとして。術藝にかゝはらず。かくてありなば。後には一座のうちに藝まなぶ者さへうせなん。汝の學業はやう人にこえたり。しかれども。財を持得されば席をすゝむる事得べからず。われこれを思ふが故に。汝がため

に金百兩をたくわへおけり。宜しくこれをもて序をすゝむ料とすべしとて。出したびければ。ついに安永四年といふ年の元日。階をすゝみて一座の勾當となり。塙勾當と稱し。名を保己一と改む。文選に保己安百年といふによれり。これよりさき。大人此職に昇らん事を天滿宮に祈り日參し。朝ごとに火のものたちて。心經百卷を讀誦み。千日にみてんといふ願をおこさる。こゝにいたりて九百日にして。其望を得たり。この年雨富の家を離れて。番町廐谷の北坂上なる高井山城守が宅地に移りすむ。大人つらつらおもはく。われすこしの財をだに持得ずして。勾當の職にもなりにけり。心經讀誦の功力なるべし。なほ二千日の願をおこしなば。檢校の職にもあがりなん事難かるべからず。しかれどもそは一身のはかり

ごとぞかし。あわれ世のため後のためにもならん事をなしてん。異朝には漢魏叢書などよりはじめて。叢書どもいときこえたり。わが國にはいまだ其例なし。さらばこゝにも。かしこにちらひて。かしこゝちりぼひある一卷二卷の書をとり集めて。かた木にえりおきなば。國の學する人のよきたすけなるべしとおもひとりて。同八年己亥の元日より。天滿宮にちかひ。心經百萬卷の願たてゝなかば讀んほどに。千部の書をあつめ。よみをへなんまでには。上木の功なりねかしとて。これよりあしたあしたには鹽だちし。日每に寅の時より起出。百卷宛の看經怠らず。此年又宅うつりして。土手四番町なる東條信濃守が宅地にすむ。これよりさきにも來り學ぶ者なきにはあらねど。こゝにいたりて門人となる者數多あり。

源氏など講ぜらるゝに。つどひきく人大かたならず。奈佐勝皐。（妣岡の門人。字久左衛門。）橫田茂語などは遊びのともなりけるが。物部やうの者は大人に問聞えけり。屋代弘賢（字は太郎。）も大人の門人となりて。二心なく學びければ。後には世にも聞ゆる人となれり。さて彼あつめてんと思ふ書をば。群書類從といふ名を設けて。こゝにもとめ。かしこにかり得しほど。珍書どもゝ多く出きにければ。やがて上木の功を起じ。年に從ひて若干の卷數出きにけり。天明三年といふ年の三日。おもひの外に檢校の職に移りぬ。翌年（天明四年）兩眼やみて死なんとせしをり。大人をよびていひけらく。われさきに人にかしおける金若干あり。其中に我世にありてすらかへし得ざる人あり。其券契をみな燒きすてたり。さてもと思ふ券契をばこゝに殘し置けり。讓るべき子なければ。われ死せん後には。宜とりて汝の用にあつべしと聞えければ。大人うけずしていらへしやうは。やつがれ鄉里を出しをりは。師ばかりのたくはへなかりしに。師の恩によりて檢校にさへなりにけり。德これよりあつかるはなし。此外に何をか賜はりなんや。其券をばいまだ職をもあづからである門人にたび給へかしとて。かへされたり。これをきく人感ざるはなし。このとし宗岡また大人をよびていふやう。汝先づ我言に從ひ。歌を廢して職事に力を盡して。今既に學術なりにけり。宜これより又歌をかね學むべし。人のこはんをりに。上下つゞかざらん歌よまんも便なければなり。己れ年老にければかなふべからず。日野資枝卿の門人となるべしと聞えければ。これより日野殿の教を

うけらる。萩原宗固翁は。冷泉家にて。爲村卿の門人也。さるを二條家なる日野殿の門に入るべきよしいはれたり。猶も始は二條家にて。烏丸光榮卿の門人なりしが。今泉光和卿亦にあたりて披居ありしの後。爲村卿には從ひけり。これも爲村卿は。もと光榮卿にならひたまひしゆかりあるゆゑなり。されば はじめをおもひて。かくいはれたるものなりしとぞ。この卿薨じたまひしのちは。閑院宮にまなびまいらせ。また宮もかくれたまひては。外山光實卿の門にいられしなり。大人一日屋代弘賢の家をとぶらはれしをり。水戶の文學立原萬字は甚五郎。も。その席にありて。某が秘藏る三年の御願文のことを。弘賢とあげつらひたり。この御願文は奥に太上天皇某とのせられて。御諱はまさしくしるされず。□年は後伏見院。花園院。ともに太上帝にておはししときなれば。いづれともわきかねたりしに。大人かたはらにきゝて。その文はいかにかかせたまふにか。ひとゝふりきかせ給へときかするに。帝禁之闕。寢居無動。姑

射之山。南樹不彫といふ句にいたりて。大人そこにて。よくわかりたり。花園帝の御撰文なり。いかにといふに。まづ帝禁之闕とかゝせ玉へるは。これは御子ながらも。御位におはすればなり。つぎに姑射之山とかゝせ給ひしは。父の帝後伏見院をさゝせ給へる也。されば。花園帝にたがひあるまじといはれければ。萬をはじめて皆感じ合ひたり。はじめ萬大人の名をきき。こゝに至りて名の實とかなへるをしり。日本史の校合をゆだぬるの意を抱す。然れども同僚のうけざらん事をはかりて。まづ參考盛衰記を校正するにことつけて。大人を文公にすゝむ。この故に同五年といふ年。はじめて文公を拜し。月俸五人の分を給はりて。往來のたすけとす。盛衰記の校合の事はてゝ。また日本史の校合にあづかる。

其功勞あるをもて。月俸をましで十人の分を給はる。これよりさき。大人花咲松と云ふ書をあらはす。こは南朝長慶院と後龜山院との御位の事を論ぜり。翁いまだ其說に服はず。問答あまたたびになりて。翁つひに其いふ所をよしとす。これによりて。いよいよ大人をすゝめて。このよせあることを得たり。そのをりに。翁の同僚みないさめていひけらく。國史はわが先君の修むる所なり。瞽者をしてその事にあづからしむる。これ吾等が恥にはあらずや。むべそのことをとゞむべしと。翁うけずしていふやう。その人の盲たるは病なり。學業のいたすところにあらず。然れども常にいはゆる盲人は。世のもてあそびぐさとなる事を勤とす。この故にいやしまれざることかたし。塙は文學を業とし。人多く師の禮をいたして來り學ぶ。其說も又取るべきが多し。さらばいかでか明不明のへだてあるべきや。もし國史の校正にあづかりて補ふ所なくば。翁其罪をかうぶりなんといらへしかば。ついに其事なりにけり。こゝに至りて。大人の名四方にあらはる。たゞ礫川殿にさぶらふのみならず。市谷殿。麹町殿にまうでゝ。貴顯を拜しまつれり。其外諸侯大夫の家に往來するは。わけてもいひがたし。寬政四年といふ年。弁橋のほとりより火出て。東都なかば燒込たりし日。四番町の家もやけにければ。しばし人の家に假居したり。そのをりに。驗者常照院といふ者あり。上野國の人。文學のかたにもこゝろざしありければ。常に大人のかたに來とぶらひけるが。いふやう。今の世は。文の道ひらけて。經書よむかたはいふもさらなり。神道歌道につきて

も。其家々みな定まれり。たゞ歴史律令などよむかたのなきがいとおしさに。あはれ公に請て。さるべき地所給はりて。講談の所さだめ。上のくだりときをしへてんやと。大人もさるべくおもはれければ。翌年の春寛政五年癸丑二月。そのあらましを請しかば。公にもいとよき事におぼして。和學講談所建つべき地給はるべきよし。とみに仰せごとありて。其七月に表六番町なる宅地三百坪をかし給はる。同十一月講談所なりければ。やがて會始あり。翌寛政六年。盲人一座の取締といふ仰を蒙り。秋の頃九月。山道より京上りせられけるが。碓氷の峠にて。「もみぢはのうすひのみさか越してより猶深からん山路をぞおもふ」と詠れたりしが。しらべめでたしとて。人の口ずさみとはなれり。同七年の九月。講談所永く絶まじき料にとて。町屋敷を給はり。年ごとにその納むる金五十兩をもて雜費に當らる。同十二月。白銀十枚を給ふ。これよりさき。群書類從のうちに板なりたるもの若干卷を奉るが故なり。同十年五月。開板のかた木納むべき庫たつべき敷地にとて。品川村のうち。御殿山の下なる地千六十坪をかし給はる。同十一年五月。一座の取締の職辭し申すにより。白銀二十枚を給はせて。其勞苦を賞給ふ。同十二月。このころ學問所にて撰ばせらるゝ所の孝義錄を校正し。假名のつかひざま。詞ののべやうなど。改むべき仰ごとありて。あまねく校へ正して。功なりにたれば。やがて開板なる。又ことなる仰ごとによりて。このとしより。門人を京師にのぼらしめ。諸家にひめもてる名記を寫さしめ。皆改めて紅葉山の御文庫に納む。年を

おひて數百部に及ぶ。其草稿をば家に納むる事をゆるさゞる。當時かくばかり家々の日記を納めたる人總てある事なし。又日本後紀は。世の中に久しく絶て傳らざりしを。さきに京都の名家よりもとめ出されて。かたきにゑらしむ。すべて十卷あり。全部五分の一なりといへ共。猶六國史の員備はる事は。今の御代となりて。此時はじめなり。令義解百練抄などをも。よく校へ正して。ともにかたきにゑりて。世にひろく行なはしむ。此外國史格式などこと〴〵く校正して。猶追て上木の功をくはだてらる。世の國學をいふ者。たやすく奇書を見る事を得しは。多くは大人のいさをなり。享和三年。一座惣錄となりて。本所なる惣錄宅地に移り住む。文化二年正月。表六番町なる賜地を召上られ。其かはりとして表六番町にて。賜地八百四十坪を給はり。講談所をこゝに移したつ。是迄の地所狹きを以てなり。天滿宮を宅地に營み。年頭の宿願を果す。此年一座の總錄の職を辭て。十老の列となり。表六番町に歸り住む。一座の先例。十老に入者必京師に移住む。然に大人はことなる勳あるを以て。公より江戸にとゞめ玉ふ。同五年六月。宇多帝仁和三年より以來。正親町帝慶長八年迄の間。實錄修めらるべき料編て奉るべき由。仰事有て。之を史料といふ。御家に侍ふ人の中にて。門人のさるべきもの數多をさへ添へらる。又其序を以て。武家に係れる者。職名文書兵器などなべてあるべき名目をも類聚して奉るべき由をも命ぜらる。これに依てことに御手當として。年毎に金五十兩を給ふ。同八年。武蜩抄六卷を撰て奉りしかば。白銀五枚を給

はりて賞せられき。同十二年四月。和學の事に付て。公の御事を承はり。いさをある を賞し給ひて。大城に詣で。はじめて兩御所を拜し奉る。これより年每のはじめには。御勝御逆と共に年の始の御悦を申て。拜謁し奉る。大人さきに予弟に語りていはく。一座の職たる者。一臈および て職といふ。必公を拜し奉る事は規模なりといへども。常の例なり。われもし職にいたらざる前に其望を得ば。願ひ足りぬべしと。こゝに至りて其望を遂ぐる事を得玉へり。これより先。脇坂毅朋といふ者あり。心學をとくをもて名をあらはす。またよく人を相するに功なり。大人のいまだ大にあらはれざりし程に。相していはく。大人容貌常にすぐれたり。大に名をのこす事あらん。ことに貴人の爲に愛せらるゝの相なり。願ふ處來して其ところを得べし。且壽あるべしと。當時の相をいふ者の。こと多くは此類なり。こゝに至りて皆其言の如し。

大人年いと若かりし時思はく。なんぞ業をなさんとするもの。忽怒の心ありては。なす事を得ずと。すなはち心に誓ひ。年をかぎりて。その心を起さるゝことをいのらる。一日翅時をすぐ。常部道にありてしきりにあざけり笑ひ。又道をさへぎるものあり。大人笑をふくみてあらそはず。常部いかにもせんすべなく。しりぞきけりとぞ。業なるに及びて。はじめの誓を改めず。その器の大なるもの。みなこのたぐひなり。文政二年。群書類從六百七十卷。かた木の功なる。年來の願望はとげぬ。國開けてより後。かく大部の書上木せし事。これにこゆるものなし。これよりさき。纂集の企ありて。年

を追て部帙多く集り。一千八百部にいたる。前編千二百七十部餘。合せて三千餘部なり。つゞきて上木の功をおこされんとす。大人。物語てふもの。何ならずくらからねど。ことに源氏榮花などをむねとはせられしなり。源氏など講ぜられしをり。よむ者よみたがへたりしをりは。よみつぎなどせらるるに。一文字もたがはず。榮花を標注せられたれど。いまだ板にはのぼせられず。ことし大人とし七十四。其さかりなる非常の人の五十餘程の如し。猶此さきもいかばかりの榮かおはすらんと。いとたのもし。凡大人にしたがひ。教を受る中に。術を得たる人すくなからず。屋代弘賢。松岡辰方。稻山行教。石原正明など。ことに其旨を得し人どもなり。假名類ほどの者は。數多かればいふにたらねど。此年ごろ並ならず教を受しかば。いかで其いつくしみをもむくいんとおもふ程に。このごろ大人集られし群書類從の上木功なりしまゝに。其恩ひくはだてられし始め終をも。人にしらせたき由など。同じ學の友なる人どもに語りしに。同くは大人の行狀も。大やうに筆とりものせよとすゝめられしかば。おのれが術の拙きをもしらで。文政二年といふ年長月もちばかりにしるし侍りぬ。こは大人の隱德の世にひろがりて。此德に榮にいや長からん事を仰ぎ願ふこゝろになん。

塙前總檢校年譜

延享三丙寅。武州兒玉郡保木野村に出生。稱寅之助。父は同村百姓荻野宇兵衞。母は同國加美郡藤木戸村百姓齋藤理左衞門女。

寛延元戊辰年。三歳。肝の病をうれふ。
三庚午五歳。春。肝の病のために盲目となる。故ありて辰之助と改む。一名を多門房となつく。
寶暦八戊寅十三歳。八月。父に俱て東都に出。雨富検校須賀一門人に成。名を千彌と改む。
九己卯。十四歳。萩原宗固門に入。歌書物語の類を學び。又川島源八郎貴林に隨ひて。小學近思錄等を學び。並神道の教をうけ。其後山岡妙阿につきて。律令の類を學。又品川東禪寺の僧孝首座によりて。難經素問等の醫書を學ぶ。
十三癸未。十八歳。兼分にすゝみ。保木野一と改む。
明和三丙戌。廿一歳。常に多病なりとて。保養の爲に。雨富須賀一旅行をすゝむ。平常金五兩を投じて。伊勢の神宮へ詣さす。よりて父宇兵衛と同道を乞て伊勢にまうで。終に京攝より。須磨。明石。大和。紀伊。高野山などをめぐりて。江戸に歸る。病果して平癒す。日数六十日といへり。

吉野山に登りて。西行庵におぼしやすらひしに。ある人の落花の歌よめとすゝめたれば。
さかりにはいづれをそれと白雲のかゝるも匂ふみよしのゝ花

六己丑。廿四歳。宗固のすゝめによりて。賀茂眞淵の門に入。六國史等を學ぶといへども。此冬眞淵死去す。よりてたゞ半年ばかり教をうく。

賀茂眞淵に入門したる頃よめるうた。
すかるなす腰細未通女得ましかば朝よひさけずなつさはましも
宮城野の萩のつゆ原分ぬ花も濡しぬればぬるゝ袖かな

安永三甲午。廿九歳。雨富須賀一諸云。當時一座のものゝさまをみるに。席をすゝむるにみな／＼かねをむねとして。術藝にかゝ

はらず。斯てあらば。後には一座のうちに藝學ぶもの絶なん。汝は學業人に越たり。然れども財寶持得ず。されば席を進む事あたはず。我是を思ひて百兩の金をたくはへたり。是もて席を進めよとて。則百金をさづく。

四乙未三十歲。正月元日。勾當にすゝみ。塙勾當と稱す。名保木野一を改めて。保己一とす。文選に保己安百年。此年。雨富の家をはなれて。番町麻谷高井大隅守の家にうつりすむ。

八己亥。卅四歲。叢書を編集して。開板成就せん事を天滿宮に祈誓す。千日の間。毎日心經百卷を讀誦して。檢校の職にすゝまん事をねがひ。かつは叢書のならん事を願ふ。是より先き。勾當にすゝまん事をねがひしも。有の事千日の祈をたてゝ。心經百卷づゝをよめり。然るに九百日にして勾當にすゝむ事を得たり。是より終身朝四つまで。鹽味をたちて。心經百卷づゝをよめり

此年。居を東條信濃守の宅地に移す。

天明二壬寅。卅七歲。紀伊家の醫師東條清氏の女を娶りて妻とす。此女信州の人。畑氏に嫁し。男子を生む。その男子天保末年番町に家しをあり。その後又其子文久年間加役方に勤仕のよしにて聞ゆる。

三癸卯卅八歲。三月。檢校の官にすゝむ。同月一女出生す。母は清氏女。此年宗固がすゝめによりて。日野資枝卿の門に入て。和歌を學ぶ。資枝卿薨去後。閑院宮の門に入。又後に外山光實卿の門にいる。

五乙巳。四十歲。此年。水戸文公にまみへて。盛衰記の校正にあづかる。月俸五人分を賜ふ。盛衰記の校正畢りて後日本史校正にまたあづかる。其功あるを賞し給ひて。月俸をまして拾人分を給ふ。此年荆妻を離別す。

六丙午。四十一歲。今物語刻成。浮世屋代弘賢。

寬政二庚戌。四十五歲。男子誕す。名を寅之助といふ。八歲にして死す。母は西文次郎の女。これより先に婚姻とゝのふといへども。其年を詳にせず。

四壬子四十七歲。口月。麻布笄橋より火燃出。江戸過半燒失。此とき四番丁の家も灰燼と

成。よりてしばらく御茶水大屋四郎兵衛の居宅に假住す。

五癸丑。四十八歳。舊友上野國人常照院來りて云。當時文明の御世にて。諸藝よむ筋はさらなり。神道歌道につきても。其家々定りあれども。たゞ本朝の歷史律令などよむかたなきは。いぶかしき事となげきて。歷史律令の講談せん所を定んことを。公に願出んはいかにとすゝむ。

二月。國學講談所並文庫取立候地所拜借之儀。寺社奉行脇坂淡路守殿江奉ㇾ願候處。四日御同所に於而。願之通被ニ仰付ー。場所見立候。被ニ仰渡ー。

五月廿八日。裏六番丁小普請組近藤左京支配小泉新三郎上地六百坪之地所之內。三百坪拜借願候處。七月廿三日。願之通被ニ仰付ー。

閏十一月。普請出來に付會談相始。

六甲寅。四十九歳。盲人一座取締役被ニ仰付ー。寺社奉行より成べし。月日を詳にせず。秋九月。一座取締用向に付上京。

七乙卯。五十歳。父宇兵衛死去。

九月六日。和學講談所永續爲ニ御手當ー。小傳馬町三丁目。馬喰町三丁目。龜井町。橋本町壹丁目。川通り上納地壹ヶ所被ㇾ下。尤地面之儀は。町年寄方に而預り罷在。壹ヶ年取立金五十兩宛。町奉行所より御渡相成候旨。松平伊豆守殿。以ニ御書付ー被ニ仰渡ー候旨。青山下野守殿被ニ仰渡ー。同日和學御用筋も有ㇾ之候節は。御同人御指揮に隨ひ。相辨候樣。是又伊豆守殿以ニ御書付ー被ニ仰渡ー候旨。下野守殿被ニ仰渡ー。同年月日。群書類從開板出來之分四拾三冊獻上。

同年十二月。編集之群書類從差上候に付。白銀拾枚御褒美として被ㇾ下候趣。林大學頭

殿被二仰渡一。
九丁巳五十二歲。二月。群書類從之板木入置候土藏取立候場所。拜借仕度段。願書差出。願書之儀留記無レ之。後日調べし。閏月。國史律令。是迄有來之木。誤字脫文有レ之候に付。校正之上。追而は開板も仕度心願に付。公儀御文庫之國史等拜借仕度段。奉レ願候處。八月林大學頭殿。御書物拜借の節。一同拜借被レ致濟一。御同人御宅にて校合仕候樣。堀田攝津守殿被二仰渡一候旨。林大學頭殿被二申渡一。此後拜借校合度々有。略レ之。
十二月。板木藏取立場所。品川御殿山下土取場外二ヶ所見立候旨。願書差出。
十戊午。五十三歲。五月。板木藏取立場として。御殿山下土取場。外空地とも千六拾坪餘。願の通拜借被二仰付一候趣。堀田攝津守殿被レ仰渡一候旨。林大學頭殿被二申渡一。
七月。品川御殿山下土取場板木置場地所。地代金貳兩二分。幷林錢。是迄之通り上納仕候。於二地所拜借の節一。被二仰渡一有レ之處。地代金は上納に不レ及。右地所に附候御年貢。幷三役高掛り物等。是迄仕來之通り差出候樣。堀田攝津守殿被二仰渡一候旨。林大學頭殿被二申渡一。
十月。國史律令開板之儀に付。拜借金奉レ願候處。十二月。願之通。金子百兩拜借被二仰附一候旨。堀田攝津守殿被二仰渡一候旨。林大學頭殿被二申渡一。
十一己未五十四歲。五月。盲人一座取締御免奉レ願候處。願之通被二仰付一。御褒美として白銀貳拾被レ下。寺社奉行にての事成べけれど。其事を詳にせず。
十一月。改板之國史獻上之儀奉レ伺候處。開板次第獻上可レ仕旨。堀田攝津殿被二仰渡一候由。林大學頭殿ヶ御達。後に開板出來の國史等。獻上有之といへども無留記。
十二月。孝義錄校正御試之儀。無□度被二仰

渡ニ。同月。堂上家記類校正書寫。調進仕度段。
願書差出。（例書之儀書留無之。）
此年。日本後紀八卷刻成。
十二庚申。五十五歲。正月。昌平坂聖堂釋奠之
節。裝束心得候間。人定式差出候儀。出來
可レ仕哉之段。御尋に付。差支無ニ御座ニ趣。
御受仕。（此後春秋釋奠之節。爲ニ裝束付一門人三人づゝ差出す。）
六月。堂上家記拾部調進。
同月。家記寫取爲ニ入用ニ。寫料之內江金五十
兩。堀田攝津守殿江御伺濟之趣を以。前拜
借被ニ仰付ニ。
九月。孝義錄校正之儀。備中守殿御下知之
旨。林大學頭殿被ニ仰渡ニ。
十月。右版下淨書仕立候樣。前因所被ニ仰渡ニ。
此年令義解開板成。
享和元辛酉。五十六歲。六月。家記貳拾八部調
進。

十二月。同所貳拾五部調進。
日本後紀二卷刻成。
史料取立御入用積。內々林大學頭殿迄差出
す。
二壬戌。五十七歲。六月。家記貳拾八部調進。
九月。於ニ講談所ニ。和書類開板有レ之候趣。御
沙汰被ニ成下ニ候樣。願書差出。
十二月。家記拾七部調進。
次男道之助生。（翌年死。母家女。）
三癸亥。五十八歲。正月。和學講談所勸學場所
手挾に相成。御用書寫物等にて。講席差支候
儀も有レ之に付。地所替の內願書差出。（願書留無之。）
六月。一座惣錄職に相成。本所一ッ目惣錄
屋敷え轉居。文化二丑年退職。拜借地にう
つる。
十一月。史料調御取立相成候樣。內願書差
出。

百錬抄刻成。
文化元甲子。五十九歲。十月。和學所替地場所見立候に付。願書差出。
十一月。家記拾部調進。
同月。家記御入用前拜借相願。十二月。願之通被仰渡。
十二月。淵妻死。安養院殿。
二乙丑。六十歲。正月。表六番町拜借地御用に付差上。替地表六番町小林權太夫拜領地八百四十坪餘拜借被仰付候趣。寺社奉行水野出羽守殿被仰渡。
三月。三男熊太郎生。後に一橋收役。五味忠次郎養子に相成。五味和三郎と改名。母家女。
五月。家記壹部調進。
十二日。同斷拾六部調進。
一座十老に入。
三丙寅。六十一歲。四月。昨年十老入付上京。

七月。改歸府。
十月廿九日。史料御取立之儀。先試仕立仕候樣。林大學頭殿被申渡。當分御手當として。當暮金五拾兩御渡被下候旨。御同人是又被申渡。
十一月。武家名目抄。史料取立の節。是又編立候樣。林大學頭殿被申渡。
同月。表六番町拜借地東に方ならび之場所貳拾四坪餘。石垣代として。增拜借仕度段。奉願候處。十二月廿九日願の通り被仰付候旨。寺社御奉行脇坂中務大輔殿被仰渡。
同月。家記三拾五部調進。
四丁卯。六十二歲。十月。家記類調の寫料の內。金百兩前拜借奉願處。願之通被仰渡。
十二月。四男次郎生。母家女。和學講談所相續す。忠寶。
五戊辰。六十三歲。六月十七日。史料彌御取立被仰付。御用中御手當として。年々金五拾

所被レ下候旨。堀田攝津守殿被二仰渡一候旨。林大學頭殿被二申渡一。

同日。史料御用助筆七八人も出來候節に候間。御家人幷醫生相撰び可二申上一候旨。御同人被二申渡一。

同日。御用出役三人。手傳四人。名前申上候處。七月出役手傳等。願之通り被二仰付一。御賄料筆墨代銘々被レ下候趣。林大學頭殿被二申渡一。出役幷手傳の事、さまぐの次第あれども。多端によりてこゝに略す。別に錄すべし。

六己巳。六十四歲。十一月。大納言樣御婚禮御祝儀御能開口文句。相考候樣被二仰渡一。

七庚午。六十五歲。二月。伊勢林崎豐宮崎兩文庫の書籍の內。史料御用見合と可二相成一類。寫取度。依レ之其筋え御沙汰の段奉レ願。願濟之事無記留。

十二月廿七日。史料宇多天皇事記貳拾貳冊調進。

八辛未。六十六歲。□月。和學所別御手當として。來申年ゟ拾ヶ年の間。學問所書籍御開刻御用御貸附利金の內より。百五十兩宛被レ下候趣。堀田攝津守殿へ御伺濟に付。大學頭殿被二申渡一。

此年。編集の螢蠅抄六卷獻上の處。御褒美として白銀五枚被二下置一。

九壬申。六十七歲。十二月。史料醍醐天皇事記五十七冊調進。

十一甲戌。六十九歲。四月。京都本國寺異寶物の內。史料御用可二相成一書。開帳中淺草法恩寺にて開帳有之。差障に不二相成一樣寫取度。依レ之本國寺に御達之儀奉レ願候處。松平右京亮殿ゟ御達有レ之。右異寶物五月中書二寫之一。

八月。群書類從開板之儀に付。拜借金奉レ願候處。同九月格別之譯を以。金三百五拾兩。願之通拜借被二仰付一候趣。堀田攝津守殿以二

御書付ニ被ニ仰渡一候趣。林大學頭殿被ニ申渡一。
十二乙亥。七十歲。正月。多年御用相勤候に付。御目見被ニ仰付一被レ下候樣仕度段。內願書差出候處。四月七日。多年御用向相勤。書物類校正差上骨折候に付。御序之節。御目見可レ被ニ仰付一趣。於ニ躑躅之間一。土井大炊頭殿被ニ仰渡一。同月廿八日。御目見被ニ仰付一。
七月。身分之儀。御目見醫師之振合に心得候樣。被ニ仰渡一。
十二月。香島香取兩社之古文書爲取。中山平四郎。中津金十郎。願之上罷越。平四郎には旅御手當被ニ下置一。
此年。日光御神忌に付。御能開口文何相考候樣。被ニ仰渡一。
十三丙子。七十一歲。二月。史料見合に可ニ相成書籍爲ニ取出一上京。五日歸着。
十四丁丑。七十二歲。十一月廿四日。和學所開板入用之ため。大坂町人增本屋安兵衛差出金千兩。御代附被ニ成下一候趣。被ニ仰渡一。
十二月。朱雀事記三十七冊調進。
同月。大坂町人增本屋安兵衛差出金川向相兼。史料見合書籍取出しの爲上京。翌年春歸着。
文政元戊寅。七十三歲。正月。二老に相進。在京可レ仕ニ座法一之處。和學御用も有レ之候に付。其儘在府可レ仕旨。寺社奉行松平和泉守殿。惣錄野田檢校に被仰渡。
三月。大坂町人增本屋安兵衛差出金御代付に相成候內。金貳百兩拜借仕度段。願之通御下被レ下候趣。堀田攝津守殿被ニ仰渡一旨。林大學頭殿被ニ申渡一。
十月。御書物奉行宅寄合之節。出席之儀申來候事も。今□之段。林大學頭殿被ニ申達一。
二己卯。七十四歲。四月。梶井妙法院御門跡。并

東寺。智積院。叡山。大原等之古文書等爲ニ寫取一上京。六月歸着。（此時尾州名古屋へ立寄眞福寺の古書等書寫。）

三庚辰。七十五歲。官板扶桑略記校正淨寫成。此年刻成。

類聚符宣抄校正淨寫成。（二三年を經て刻成。）

四辛巳。七十六歲。正月上京。二日。惣檢校職目の儀。所司代松平和泉守殿被ニ仰渡一

五月出府。織日爲ニ御禮一御目見仕。同月御暇被ㇾ下候に付。金貳枚。時服貳拜領被ニ仰付一。（上京すべき處。病によりて江戸にとゞまる。）

八月。病氣に付惣檢校職隱居奉ㇾ願候處。願之通所司代松平和泉守殿被ニ仰渡一

八月十八日俄臥病。九月十二日差重。（塙檢校實はこの日沒す。下文明年七月三日となすものは。當時要路にあらざる人。多く明年の官祿を得んが爲めに。ことに一歲を延すと慣例となりたるを以てなり。讀者その心してよ。）

五壬午。七十七歲。三月。村上事記五拾冊。名目抄草稿拾八冊。家記八部調進。同日群書類從獻上終り。即百六十九冊。幷續群書類從目錄獻上。（已前之類從獻上記無之）

同月。御買上分群書類從殘冊差上。（此代料。先年御渡し之時金部見込代金三拾五兩御下げに成。此度殘金拾三兩餘御下げに相成。代金貳歲之儀に付。猶可ㇾ然事あり。）

六月。編集の群書類從全部差上候に付。白銀三十枚御褒美として被ㇾ下候旨。内藤紀伊守殿被ニ仰渡一候趣。林大學頭殿被ニ申渡一

七月三日。病氣に付織日書差出。

同月九日。死去

右に收めたる塙先生傳及び其年譜は。以て撿校一生の間の事を知るべきのみならず。又群書類從上木について。その苦心の如何に慘憺たりしかを見るに足るべし。

本書再版功成る。之が校正等に與れる者の意中。又中山信名が當時本書の校正等に從事し。此頃大人集られし群書類從功成りしまゝに。其思ひくはだてられし始め終をも。人にしらせたき由など。同じ學の友なる人どもに語りしに。同じくは大人の行狀も。大やうに筆とり者せよとすすめられしかばとて。塙先生傳を草したると相似たる者なくんばあらず。之を識錄したる所以也。今左に檢校が編纂著述もしくは校正にかゝる書目を擧げて結尾とすべし。猶ほ檢校の逸事等は。一話一言。百學小傳。事實文編拾遺及び三淼雜紀等に見えたり。世の檢校を傳せんと欲する人は。話之を併せ觀よ。

一　史料　宇多帝より後一條帝に至る實錄なり　四百五十卷
一　群書類從　從前刊寫にて傳へる古今三卷以下の書を叢す　六百六十五卷
一　螢蠅抄　皇國と外國との關係を審かにす　六卷
一　花咲松　長慶院後龜山院との事を論ず　壹卷
一　椒庭譜略　后妃　七卷
一　家記　幕命を奉じ縉紳家所藏の譜類を輯錄す　百七十八卷
一　徒然草拾遺　本書中の名目稱呼を考證せるもの　卷數不詳
一　松山集　家集歌數凡五百五十種有り初め總隱集と云後此名に改むるは卷頭に松山の歌あるを以てなり　上下二卷
一　武家名目抄　武家に係る職名を初め一切の名目　凡七百卷
一　續群書類從　同上　凡一千二百卷
一　雞林拾葉　朝鮮の皇國に關せる事蹟の考證　拾七卷
一　皇親譜略　皇子皇女　七卷
一　假名曆略註　曆の註解　壹卷
一　榮花物語標註　卷數不詳
一　衣の色目　裝束色目を裝束抄より抄出せるもの　卷數不詳
一　令物語　初これを校訂上梓せり後に群書類從の中に編入す　壹卷
一　孝義錄　太田覃撰する所孝子の記錄命により校正す　卷數不詳
一　令義解　校正上梓す　拾卷

一類聚符宣抄 幕命により校正す官版　七巻

一盛衰記 水戸文公の囑托により校正す　巻數不詳

一律 同上　壹巻

一日本後紀 校正上梓す　拾巻

一扶桑略記 官版上木に就き幕命により校正す　巻數不詳

一百練抄 大治承安文册十七巻延長元十一巻　貳十八巻

一大日本史 同上　巻數不詳

大人校訂にあづかれるもの。こゝにとゞまらざるべけれども未だ之を詳にせず。

附

錄

畢

明治三十五年七月十一日印刷
明治三十五年七月十五日發行

發行者　東京市京橋區彌左衛門町十七番地
合名會社　經濟雜誌社

右代表者社員　東京市本鄕區湯島新花町三十九番地
西島政之

印刷者　東京市京橋區西紺屋町二十六七番地
株式會社秀英舍內
青木弘

印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
株式會社　秀英舍

堤朝風 輯　英遵 補

近代著述目録

天保七年（一八三六）江戸萬笈堂刻本

據天保七年（一八三六）
江戶萬笈堂刻本影印

本朝諸家著述目録

序

[illegible]

序

今蒐輯スル處ノ各家書
目ハ予カ見聞ノ及フモノ
悉クコレヲ編録セルナリ
校訂スルニ辨疑書目録
仙鶴堂書目ヲ以テス猶
遺脱差誤等ハ看人宜ク
補正シタマヘ此編ニ遺漏シ
タルヲハ重テ輯録スヘシ

堤朝風

万笈堂梓

水戸家御編集書目

書名	冊數
大日本史	二百五十本
烈祖成績	二十一本
成憲摘要	二本
禮儀類典	五百十五本
新撰年中行事	一本
神道集成	二十五本
釋萬葉集	五十本
萬葉目安	一本
扶桑拾葉集	三十五本
續扶桑拾葉集	十三本
新撰近代帝系	一本
源流綜貫	十五本
歷代大臣考	一本
	一
記錄年代考	一本
諸記年月考	三本
日次記考證	一本
有職備考	十七本
南朝事蹟	一本
田村丸事蹟考	一本
楠正成記事	一本
近代諸士傳略	三十本
本朝姓氏類纂	一本
諸家系圖纂	七十三本
花押叢	七本
續花押叢	六本
水府系纂	九十二本
參考源平盛衰記	五十本
參考保元物語	三本
參考平治物語	三本
參考太平記	四十一本
新撰文集	八十三本
新撰詩集	四十一本
和漢梅松百題	一本
同採餘	一本
扶桑鐘銘集	三本
文苑雜纂	六十八本
聯句纂	一本
舜水文集	三十本
朱氏談綺	四本
常山文集	二十五本
常山聯句	一本
常山詠草	五本
西山隨筆	二本
甲寅紀行	一本
鎌倉日記	一本
	二
桃源遺事	二本
西山遺事	一本
山吹日記	一本
薙露遺響	二本
西行雜錄	一本
南行雜錄	一本
續南行雜錄	一本
新續南行雜錄	一本
草露貫珠	二十二本
同拾遺	一本
四體集要帖	五帖
三國筆海全書	二十五本
書法纂要	七本
書學指南	一本
西山奇方	八本
救民妙藥集	一本

釋奠儀註諺解 一本
祠堂時祭諺解 一本
葬祭諺解 一本
喪祭儀略 一本
慎終日録 三本
常陸國誌 三本
新編鎌倉志 九本
諸國土宜備考 二本
倭名纂要 一本
和蘭譯語 一本
都氏文集 抜 三本
難太平記 抜 二本
惺窩文集 抜 十本
洪武三[illegible]韻 抜 九本
古篆彙選 抜 五本
拾遺往生傳 抜 二本
三
後拾遺往生傳 抜 一本

近代著述目録索引

伊

伊藤龍洲 初丁
伊藤仁齋 同
伊藤東涯 二丁
伊藤蘭嵎 四丁
伊藤伊榮 同
伊東藍田 五丁
伊勢安齋 同
今大路道三 十丁
稲生若水 十一丁
稲生負彦 同
稲葉迂齋 同
齋宮靜齋 十二丁
入江東阿 同
入江幽遠窟 同
入江南溟 十三丁
市河西野 同
石川六々山人 同
石川安貞 十四丁
石出常軒 同
石田梅巖 同
石野廣通 同
石原正明 十五丁
石塚龍麿 同
岩垣龍渓 十六丁
乾長孝 同

波

羽倉春満 十七丁
羽倉在満 同
羽倉蒼生 同

三

林羅山　十八丁
林鵞峯　二十四丁
林梅洞　二十六丁
林讀耕齋　同
林信篤　同
林[illegible]　同
林文會堂　二十七丁
林諸島　同
原狂齋　同
原南陽　同
原田東岳　二十八丁
服部南郭　同
服部[illegible]翁　二十九丁
速水房常　三十丁
萩原元克　同
馬塲信武　同
二
馬塲信意　三十一丁
伴閑田子　三十二丁
仁
丹羽佚齋　三十二丁
丹羽桃丸　同
西道智　三十三丁
西湖學　同
西川求林齋　同
西川国華　三十四丁
西村遠里　同
保
穂積以貫　三十五丁
細川幽齋　同
細井廣沢　三十六丁
細井平洲　三十七丁
北條氏長　同

四

堀北渚　三十八丁
堀田麥水　同
星野熊嶽　又三十八丁
登
戸田茂睡　同
戸田旭山　三十九丁
戸崎淡園　同
冨永仲基　四十丁
土肥經平　同
常盤潭北　四十一丁
豊島由巳　同
千
千葉歳胤　初丁
千葉芸閣　同
留
三
留守希齋　二丁
遠
小幡景憲　二丁
小笠原昨雲　同
小田成胤　三丁
小野竹叢　同
小野[illegible]山　同
尾崎華陽　同
小沢蘆庵　四丁
小山儀　同
小川[illegible]七　五丁
荻生徂徠　六丁
荻生金谷　九丁
荻生観　十丁
岡龍洲　同
岡本玄冶　十一丁
岡本一抱子　同
岡島冠山　十三丁

五

岡島竹隝館	同
岡嵜盧門	十四丁
岡西一時軒	十五丁
岡部縣居翁	十六丁
岡田磯波翁	十七丁
岡田新川	十八丁
和	
和田一華堂	十九丁
渡辺支考	同
渡辺蒙菴	二十丁
加	
加藤槃齋	二十丁
加藤仙菴	同
加藤謙齋	二十一丁
加藤竹里	同
	四
加藤靜舍	同
加藤芳宜園	二十二丁
賀川玄悦	同
香川一本堂	同
香月牛山	二十三丁
香西成資	同
貝原益軒	同
貝原恥軒	二十六丁
柏嵜永以	同
桂川月池	同
桂川桂林	同
河口靜齋	二十七丁
河野界浦	同
河瀨醉露軒	二十八丁
河合忠藏	同
河村秀穎	二十九丁

六

河村秀根	同
河村殷根	三十丁
河村益根	同
片島深淵子	三十一丁
片山兼山	同
片岡如圭	三十二丁
神田白龍子	同
神田玄仙	三十三丁
亀田鵬齋	三十四丁
葛西健藏	同
與	
吉見泰軒	一丁
吉益東洞	同
吉川祐三	同
吉川惟足	二丁
吉田篁墩	同
	五
吉田正三	三丁
芳村恂益	同
横井也有	同
横地楚山	四丁
太	
多田秋齋	四丁
多紀藍溪	又五丁
多紀櫟窓	同
田中榛木翁	六丁
田中道齋	同
田中江南	七丁
大道寺悠山	同
太宰春臺	同
谷重遠	九丁
谷本教	同
谷素外	十丁

八

宇治五十槻園	六丁
鵜飼石斎	七丁
上田鵜之屋	同
梅沢西郊	八丁
雲林院知非斎	同
為	
井沢蟠龍子	九丁
井上金峨	十丁
井上蘭臺	同
井上通女	同
井口文炳	十一丁
井田潜龍堂	同
乃	
野間静軒	十二丁
野々口立圃	十三丁
野呂実夫	二丁
八	
於	
大高芝山	十三丁
大和田氣求	同
大内熊耳	十四丁
大田南畝	同
大枝流芳	十六丁
大岡春卜	同
大沢弘	十七丁一
大槻盤水	同
大窪柳蛇	同
大田錦城	十七丁二
大塚倉梧	十七丁三
久	
熊沢了海	十八丁
熊沢淡菴	十九丁
熊阪台州	同
黒岩慈菴	同

十

黒川梅林	同
栗山潜鋒	二十丁
窪井崔汀	同
朽木矦	同
也	
山崎闇斎	一丁
山鹿素行子	三丁
山岡而慍斎	五丁
山岡明阿弥陀仏	六丁
山縣周南	同
山形柳荘	同
山脇東洋	同
山口実斎	七丁
山宮雪樓	同
山本静観房	同
山本北山	同
九	
山田図南	九丁
保井春海	十丁
梁田蛻岩	同
赤	
真野時綱	十丁
松永逍遙軒	十一丁
松永講習堂	十二丁
松下西峯	同
松下烏石	十三丁
松田一楽	十四丁
松岡恕菴	同
松岡士升	十五丁
松井幸陸	同
松井羅州	十六丁
松井材菴	同
松崎井白	同
松崎観瀾	十七丁
松宮観山	同

十一

松平君山　十八丁
槇島駒谷山人　同
前田東溪　同
前野蘭化　十九丁
増穂残口　同
増谷大學　二十丁
万尾時春　同

不

藤原惺窩　二十丁
藤井懶齋　二十一丁
藤井見隆　同
藤井無仏齋　同
藤野木槿翁　二十二丁
藤田雄山　同
冨士谷成章　同
冨士谷成壽　同

十

古林桂菴　同
古林見桃　二十三丁
古谷久語　二十四丁
古屋愛日齋　同
古川古松軒　同

巳

小瀬甫菴　二十五丁
兒島廁齋　同
五井蘭洲　同
後藤梧桐菴　同
後藤芝山　二十六丁
後藤養菴　同

江

江村如圭　二十七丁
江村北海　同

天

出口延佳　二十八丁
出口延經　同
寺島良安　二十九丁
手島堵菴　同

安

安東省菴　一丁
安藤年山　同
安藤有益　二丁
安積澹泊齋　同
安達清河　同
新井白石　三丁
新井黄州　七丁
雨森芳州　八丁
雨森牛南　九丁
浅見絅齋　同
朝倉景衡　十丁

廿丁

跡部光海　十一丁
秋山玉山　十三丁
秋里籬島　同
赤松大庾　十四丁
赤井得水　同
青木昆陽　十五丁
芥川丹丘　十六丁
有賀以敬齋　同

左

佐藤剛齋　十六丁
佐久間洞巖　十七丁
榊原篁洲　同
榊原香山　十八丁
奈藤主税　同
寒川辰清　同
酒井南向亭　同
沢[illegible]　十九丁

沢田東江	同
芁	
木下長嘯子	二十丁
木下錦里	同
木村世美	同
木村蒹葭堂	二十一丁
木内石亭	同
祇園南海	二十二丁
北村拾穂軒	同
北山壽安	二十四丁
清田儋叟	同
菊池[illegible]渭	同
菊岡崔下菴	二十五丁
北静廬	同
岸本由豆流	同
由	
湯淺常山	同
美	
十二	
水島卜也	二十八丁
三宅尚齋	二十九丁
三宅道乙	同
三宅觀瀾	同
三宅帯刀	同
三宅滄浪	三十丁
三輪執齋	同
三熊海棠	同
三浦瓶山	同
三浦洞仙	三十一丁
宮川一翠子	同
宮川南谿	同
宮崎安貞	三十二丁
宮瀬龍門	同
宮部義正	同
皆川淇園	三十三丁

之	
白井白雲散人	三十四丁
下河辺長流	同
下津春抱子	三十五丁
清水春流	同
篠崎東海	同
渋井大室	三十六丁
司馬江漢	同
比	
人見卜幽	一丁
日向陶菴	同
日夏繁高	同
平住專安	同
平[illegible]齋	二丁
平賀鳩溪	同
平瀬光雄	三丁
平野[illegible]黙軒	四丁
平沢左内	同
十三	
平沢旭山	同
久川玄圃	五丁
毛	
毛利貞齋	六丁
森儼塾	七丁
森東郭	同
森服軍藏	八丁
桃井白鹿	同
望月鹿門	同
望月長好	九丁
本居鈴之屋	同
本居藤垣内翁	十一丁
諸葛氏	同
本木仁太夫	十二丁
最上定炬	同
世	
十四	

名	丁
瀨尾用拙齋	十二丁
閑自由亭	十三丁
開松窓	同
寸	
鈴木正三	十三丁
鈴木龍洞	十四丁
鈴木澶洲	同
鈴木松江	十五丁
僧	
僧鳳潭	一丁
僧靈空	二丁
僧義瑞	四丁
僧六如	同
僧日遠	五丁
僧元政	同
僧泊如	六丁

十四

名	丁
僧通玄	七丁
僧亮汰	同
僧覚彦	八丁
僧契仲	十丁
僧盛典	十一丁
僧諦忍	十二丁
僧行願	同
僧白隠	十三丁
僧大典	同
僧玄光	十五丁
僧興隆	十六丁
僧面山	十八丁
僧大潮	十九丁
僧無隠	二十丁
僧潮音	同
僧高泉	二十一丁

十五

名	丁
僧恵空	同
僧闡證	二十二丁
僧文雄	二十三丁
僧法忍	同
僧大我	二十四丁
僧性均	二十五丁
僧雪巌	二十六丁
僧酉順	同
僧似雲	二十七丁
僧佚山	同
僧恵岳	同

十五

十六

近代著述目録
堀朝風原輯
萬笈堂英遵補定

㊀伊

伊藤龍洲　名元基　字子[illegible]　又号宜齋
四書通辨　八
三餘清事　三
居閑集
源家傳統錄

伊藤仁齋　名維楨　字源佐　諡古學先生　又号棠隱
大學定本　一
イ　一
中庸發揮　一
論語古義　十
孟子古義　七
童子問　三
語孟字義　二
文集　六
詩集　二
周易乾坤古義　一
春秋經傳通解　二
仁齋日札　一
極論　一
讀近思錄鈔　一
和歌集　一
送水野侯國字序　一
文式

伊藤東涯　名長胤　字源藏　一号慥慥齋　諡紹述先生
周易經翼通解　十八
文集　二十
詩集　十
復性辨　一
[illegible]遊志　一
三寺一覧　一
古學指要　二
經史博論　四
辨疑錄　四
古今學變　三
天命或問　一
聖語述　一
經史論苑　一
イ　三
讀易私記　一
讀易圖例　一
周易義例卦變考　一
論孟古義標註　四
中庸發揮標釋　二
大學定本釋義　一
語孟字義標註　二
童子問標釋　三
周易傳義考異　九
四書集註標注　六
通書管見　一
太極管見　一
用字格　四
助字考　二
刊謬正俗　一
作文眞訣　一

書名	注	冊
名物六帖		三十二
帝王畧譜		五
和漢紀元録		一
後漢官制		一
本朝官制沿革畧考		六
三韓紀畧		六
朝鮮官職考		一
釈親考		一
釋親考續編		一
盍簪録		四
盍簪餘録		二
東涯漫筆		二
閒居筆録		三
春秋胡氏傳辨疑		二
漫筆	初年作	二
經説		二
		三
己丑筆記		一
庚寅日録		一
東涯談叢	以上六部未成稿故不敢傳于世	二
鄒魯大旨		二
訓幼字義		八
學問關鍵		一
制度通		十五
唐官鈔		三
秉燭譚		五
輶軒小録	以上七部國字之書	一
古今教法沿革圖		一
唐官品畧		一
明官制畧		一
經學文衡		三
歷代官制沿革図補		二
家世私記		

十九

書名	注	冊
姓林全書		
文體辨畧		
紀聞小牘		三十
四書集註大全	校正	
五經集註	同	
春秋左氏傳	同	
文章軌範	同	
論語集解	同	十
詩經正文	同	二
詩經説約	同	二十八
大禹謨辨		一
異學辨		一
[illegible]字考		一
訓蒙用字格		二
古學先生行狀		一
東涯先生消息		一
		四
伊藤蘭嵎	名長堅 字才藏 仁甫季子 紹述文季子	
書反正		
伊藤氏	名伊榮 江戸染井人	
地錦鈔		八
廣益地錦鈔		十六
草花絵全書		三
長生花林鈔		五
花壇地錦鈔附録		四
本艸高蒔繪		二十

二十一

二十一	
百色紅葉集	一
伊東藍田	
韓文公論語筆解考 名亀年 称金蔵 字亀年	二
論語徴正文	一
祖徠先生学則并附録標註	二
藍田文集	十
同二稿	十
湯武論	一
文章軌範 校	五
続文章軌範 同	三
西游紀行	
歴代通紀	三十
心賦考註 閲	一
イ	五
講義	一
伊勢安斎 姓平 名貞丈 称平蔵	
菅像辨	一
愚得随筆附考	三
武器考證	二十二
軍器考首書	
同標疑	二
同補正評	二
同考餘評	一
同畄式補	
駁馬故實評	一
武林原始首書	
安多武久呂 是ハ近藤寿俊作ニテ刊本也	五 附考

二十二	
源家八領鎧考	一
古鎧色目	一
鎧具足辨	一
鎧直垂色目	一
甲冑威毛色目	一
甲冑名考	一
梅檀鳩尾問答	一
宝剣宝鎧記	
刀剣問答	
諸鞍日記考註	
鞍鐙工記	
鞍具鏡畄類	
五六掛鐙考	一
鐙類	
烏帽子考	一
古代折烏帽子畄	
イ	六
保呂衣推考	一
調度懸問答	一
空穂考	一
尻籠考	一
源平盛衰記鬪書	
松島日記注	
鳴弦蟇目考	一
三種神器名考	一
位記口宣注	
斎宮斎院記	
禁色考	一
姓氏辨附説	一
駅路鈴考	一
新伊問答	一
今昔物語聞書	
赤鳥	一

二十三

書名	冊數
纐纈	一
漫録	一
三木三鳥考	一
長烏帽子	一
洗革	一
葵作	一
後院	一
位袍	一
舳艫訓	一
日蔭之蔓	一
武藏鐙	一
ましなき	一
田樂考	一
二見浦	一
幼學問荅	一
鞆考	一
イ	七
鳥紫考	一
春艸	二
夏艸	一
秋艸	三
冬艸	一
革類考	
綾文考	
紬長考	
擐甲畧說	
神道獨語	一
平義器談	二
要訓	一
射法妄說集	一
武門故實百箇條評	五
解嘲百箇條評	一
舊事紀剔偽	一

廿四

書名	冊數
神代巻獨見	一
五武器談	二
鐙色談	一
武備根元	一
三識一統辨	一
烏帽子折問荅	一
安附記錯簡考	一
尉子五藴解	一
比那問荅	一
源氏ひとりあち	一
狩衣考	一
平禮考	一
引剣考	一
脇指考	一
鎊鈒木也考	一
矢羽文考	一
イ	八
直垂折附録	一
鎧着用次第	一
正三記	一
和字衆說	一
俗說辨母衣說辨	一
蝦夷鐵先考	一
呵純	一
軍職志	一
軍神問荅	一
鎊馬画問荅	一
笠懸蟇目問荅	一
押字考	一
三社託宣考	一
道風像考	一
逆頬箙考	一
辨慶七道具考	一

二十五

書名	巻数
棗物考	一
煙艸集説	一
殘儀兵的辨	一
鏡鞍記	一
求身抄	一
和歌三神考	一
二上峯	一
小車錦	一
火打袋	一
非參議四位	一
雜説問答	一
同後編	一
諸篇拔萃	一
考説	一
漫筆	三
安齋問答	三
イ	九
ゐろすし	一
百敷草拾遺	一
王代品畧	一
大祓詞解	一
勢語聽斷別勘	一
世継物語考	一
徒然草大意	一
今川壁書解	一
武具要説考	一
見聞私記辨僞	一
南嶺子評	一
南嶺遺稿評	一
秋齋閑語評	一
酌並記	四
家流問答	一
庭訓往來扶翼	二

二十六

今大路氏 名字未詳 有眾竹養道三 一溪等号 男 玄朔号延壽院道三

書名	巻数
啓迪集	八
医燈配劑	二
出證配劑	二
切紙	五
日用食性	一
医方明鑑 玄朔	四
延壽撮要 同	一
註能毒	二
天正記	二
續天正記	一
聖功方	二
十五指南	三
宜禁本艸	二
脈論	一
イ	十
小兒方	一
常山方衍義	十二
黄素妙論	一
師語録	四
全九集	七
病因諸治例	五
濟民記	三
製劑記	一
恵徳方	三
本艸歌	三
養生月覧	一
異名記	一
サスノ〻コ	一
安智心法傳	三
袖中集	二
提耳談	三

三十七

雑稿　三
別集　一
續集　四
文集　十
名正直　字名正作　号三郎齋
稲葉迂齋

かゝらのみ
古言梯　一
萬葉集千歌　一
名兼秀　下総猿島人
稲生氏

食物傳信纂
いろゝ乃　丸人著　二
胡枝華餅
十二
孝子友傳　一
炮炙全書　二
採薬獨斷　二
物産目録　一
食物本艸　三
詩經小識　五
庶物類纂　十
本艸別集　三
本艸品彙　二
本艸綱目校正　四十
名宣義　字彰信
稲生若水

衆方規矩　三
恵徳方増補　七

三十八

久保之取蛇尾　三
異名分類抄　四
名昌章　大坂人　俗称平次郎
入江幽遠居

經論殊機
武經本義
經濟補要
論語説藪
撰文筆法　一
古今天學家傳　一
天經或問注解　六
天經或問注解　序文欠　三
俗称平馬
入江東阿
十二

五明略　一
音例　一
静齋文集　四
初學作文法　二
孝經纂氏傳　二
名松門　字大礼
齋宮静齋

墨水一滴　同　一
先達遺事　五倍著　一
學語　三十八
續和書集　五
和書集　五

萬葉類聚抄補闕　十五
目録一巻　詞部七巻　名所部七巻

入江南溟
名忠囿　字子園　称幸八　一号滄浪

唐詩句解　十二
大學衆老編　三
北山遺稿　一
滄浪居文集　四
滄浪緒言

市河西野
名世寧　字子静　称小左エ門　一号寛齋

古五絶　六
仝　上三
全唐詩逸　二
日本詩紀　五十
詩家法語　一
北里歌　一
寛齋百絶　一
三家妙絶　一
寛齋摘草　二

石川六々山人
名凹　字丈山

詩仙　一
朝鮮筆語集　一
本朝詩仙注　三
詩法正義　一
覆醬續集　三
覆醬全集
首巻二人見友元作ノ年譜ヲ附ス正集四巻續集十六巻附録三巻此中又行状アリ

東溪翁隷法　一
祝壽長篇　一

石川氏
名安貞　字　号　称　尾張人

唐太宗金鏡注　一
陸宣公奏議注　十
唐宋八大家文楷　三
勤學俗訓　一
讀昏正誤　一
代宴雑抄　二

石出常軒
名吉深　称帶刀

仝　十四
几右抄　五
所歴日記　五
春雨抄　千
奉悼家光公辞　一
温古知新抄名窺原抄　百

石田梅巖
名興長　字勘平

都鄙問答　五
齋家論　二
商家童問答　一
要訓　一

石野氏
姓中原　名廣通　從五位下　遠江守

三十一

書名	冊数
上水記	十
憲法部類	二十
和歌感應抄	二
澤水	二
大澤文稿	四
沢蘆集	十
兼好家集曙雲抄	十
源語演説抄	十
初學假字要意	一
冷泉為村卿詠作類聚	三十
假字文字違	一
佐諺雑録	二
佐渡事畧	二
霞関集	二
五百四十首	一
絃そろり	一
イ	十五
し有事	一
連歌師之系	一
大澤随筆	八
蹄涔随筆	二
石原氏　名泰臨　後更正男　称喜左衛門　京人	
制度通考	
名目鈔箋	
百寮補歴	
律解	四
百人一首抄	一
随筆	
勢語章句	九
江戸職人寄合	二
臣連二造考	
冠位通考	
宰相通考	
尾張の家つと	
石塚氏　名龍麿　称安右衛門　遠江国敷智郡細田村人	

三十二

書名	冊数
古言清濁考	三
かおつりし奥の山道	
ちい葛系	
岩垣龍渓	
論語集解標記　名国明　官長門介　字亮卿　京人	二
十八史畧補正	七
松蘿館詩集	
乾氏　名長孝	
大道微言	三
孝經	一
イ	十六
大學変通	一
乾注中庸	二
乾注表記	一
乾注樂記	一
繫辭不言解	
尚書論	
詩説	
春秋知微	
老子真語	
乾注荘子	
法華意注	
無量義經	
楞嚴畧解	
神代上下	
神武本紀全注	

三十三

書名	巻数
(波)	
羽倉氏 姓荷田宿祢 名春満 称齋宮	
萬葉集童蒙抄	八十
伊勢物語童子問	十三
出雲風土記考	一
春葉集	一
江談 校正	
偽類聚三代格考	五
羽倉氏 名在満 称東之進 春満姪	
大嘗會具釋	九
大嘗會便蒙	二
貞観儀式 校	十
延喜式 校	五十
國歌八論	一
本朝度制略考	一
家記所繋考	一
賤東景	一
白猿物語	一
長月物語	
古今集左注論	一
律疏 校	四
令三辨	一
羽倉氏 荅生 在満女	
古今和歌集 校	二
荅生子家集校の[illegible]	二

三十四

書名	巻数
林羅山 名信時 称道春 謚文敏先生 後更忠 字子信	
東鑑綱要	二
群書治要補	三
大學要略抄	一
大學大旨	一
四書五經要語抄	三
論語摘語	一
孫子諺解	一
三略諺解	一
寛永庚午御即位記	一
貞女倭字記	二
陣法抄	一
儒門思問録	三
姫君瞥礼記	一
御入洛記 又有和字記一巻 称帝参内記	一
倭漢法制	三
荒政恤民録	二
無極大極説	一
聖蹟啚諺解	一
東照新廟記	一
東照廿五年御忌記 又有和字記一巻	一
東照宮三十三回記	二
増上寺法會記	一
大樹寺法會記	一
武州王子社縁起	一
神代系啚	一
皇代系啚大綱	一
鎌倉将軍家譜	一
京都将軍家譜	二
織田信長譜	一

書名	數
豊臣秀吉譜	三
中朝帝王譜	十三
本朝編年録 自神武至宇多	三十三
寛永諸家系圖傳	三百七十
御元服記 正保二年四月	一
日本大唐往来	一
仙鬼狐談	五
怪談	二
老子抄	二
大學抄	一
聖賢王談	一
愚悪王談	一
貞觀政要抄	十
漢魏六朝唐宋百人一詩	一
歴代三十六名臣畫賛	一
右四十四部應　教而所作也	
八	十九
大學解	二
論語解 自学而至里仁	四
中庸解	三
三徳抄	一
孟子養氣知言解	一
理氣辨	一
六義考	九
渾天儀考	一
春秋劈頭論	一
周易手記	六
性理字義諺解	八
經典題説	一
經典問荅	一
古文孝經抄	一
通鑑綱目首卷手抄	二
格物端緒	一

二十五

書名	數
歴代系圖	一
歴代一覧	一
危言抄	二
童觀鈔	二
格言隨筆	
攻堅從容録	三
任筆百問	一
經籍倭字考	一
長恨琵琶抄 歌行露雪	二
白氏文集首卷注	一
文選序表考	一
孫呉摘語	一
呉子抄	六
司馬法抄	五
尉繚子抄	九
六韜抄	六
八	二十
太宗問荅抄	三
軍書題説	一
叙術諺解	一
百戰奇法抄	一
棠陰比事抄	三
欽恤録并摘語	一
公言抄	一
折獄抄	一
袖裡唐絶	一
一人一首 自初唐至万暦	一
百川學海抄	十一
本艸序例注	一
本艸綱目序注	一
多識編	五
南人言稿	二
古文真宝抄	十

三十六

三十七

書名	巻數
蒙求鼇頭	三
聯珠詩格抄	五
後素説	一
陽明攢眉	五
明人集畧抄	三十
漫筆	一
羅山渉獵抄 編月或曰蝶洞隨筆或曰倭漢骨董或曰盤遊飯或曰武陵雜種或曰硯北抄総号羅山渉獵抄	百
梅村載筆	三
日本考	四
朝鮮考	一
朝鮮來貢記 元和三年	一
八	二十一
同 寛永元年	一
異國往來	一
東照神君年譜畧	一
駿府日記	一
慶長以來法度	一
二條城行幸私記	一
武家十九條法度註	一
禁中故吏	一
装束記	一
神社考	三
神社考詳節	一
神書私考	一
中臣祓抄	二
神道傳授抄	二
神道秘訣	二
伊勢内外宮勘文	二

三十八

書名	巻數
寺社謚文	三
筑波山縁起	一
河越天神縁起	一
日本祖師傳	五
五山文編	一
本朝一人一首 載于本朝詩選	一
倭漢詩歌合	一
詩文撰錄	一
野槌	十三
職原抄神祇大政官注	一
職原鼇頭	一
惺窩問答	一
惺窩集 一名北肉稿	五
倭鑑集章	一
宇多天皇紀畧 以三代實錄後	三
源平綱要	一
八	二十二
明德軍志	一
軍陣行列	一
鐘銘纂	一
庖丁書	一
日本吏蹟考	
倭雅	一
武門姓氏考	一
二十一代和歌集年月考	一
源氏物語諸抄年月考	一
禅林家集年月考	一
近代雜記	
寛永私記 名夕顔巷夜話	十二

右百三部併應　教者總百四十七部之中施小園者四十三部罹丁酉之災皆無副本云

三十九

書名		冊
戰國策	同	十五
國語	同	十
穀梁傳	同	七
公羊傳	同	七
書經集注	同	六
周易本義	同	七
五經	同	十二
四書集註	點	十
羅山集附錄		
羅山詩集		七十五
羅山文集		七十五
論語抄		二十
二禮諺解		二
七書講義私考		八
駿府政事錄		八
蒙求官職考		二
八、		二十三
武仙		一
儒仙		一
詩仙		一
寸鐵錄		二
春鑑抄		一
百將傳抄		七
武將傳		二
韓使贈答聯句		一
癸未紀行		一
丙辰紀行		一
有馬溫湯記		一
性[illegible]全書		五
本朝書籍考		一
道統小傳		二
老子經頭書		二
四書集註抄		三十

四十

書名		冊
易啓蒙私考		四
禮記私考		
春秋私考		
書經私考		
詩經私考		
周易私考		十三
歷代叙畧抄		六
歷代全室年錄		九
泣血餘滴	文集ノ内ニ有	一
雨夜問答		一
大復物語		二
心經諺解		二
古文孝經諺解		三
奧羽軍記	校	四
駿府抄聞書		八
五代一覽		七
八、		二十四
周易本義首書		七
本朝一人一首		十
鵞峰文集		三百四十
評林一卷　前編四十卷　續編二百卷 序目錄三卷　提要三十卷　附錄五卷		
本朝通鑑		
文總先生		
[illegible]		
林鵞峰年		
神道秘傳折中俗解		十九
五經大全	同	
古文真寶	同	三
老子口義	同	二
孝經	同	一
儀禮	同	三
周禮	同	三

四十二

弓書　一
孟子諺解　三十五
兩朝時令　三
歷代紀畧　唐土代々ノコトヲアラワシトエルセリ　三
大學諺解　一
諸家系圖傳
七武　文集ノ内ニモ入　一
日本百將傳抄　五
睡餘操筆
本朝甲子會紀
本朝人鑑畫說
論語諺解　三十一
本朝言行錄
關東行實錄
西銘私考　一
本朝稽古編　一名本朝千字文　五
八　二十五
國史實錄　八十
牧民忠告諺解　二
會津風土記　二
東國通鑑　校点
續本朝人鑑
公私雜纂
改元物語　一
本朝事蹟考　一
山迹七字城　一
本朝近代一人一首續集
職原抄會通　十六
周易程傳考
周易經傳翼
周易新見
感興詩私考　一
唐百人一詩

四十二

異朝百將小傳
本朝三十六將小傳
和漢軍談　七
自叙譜畧
管春錄
吉田社勘文
林梅洞
名慤・字孟著・一号勉亭　称春信・春斎嫡子
梅洞文集　四十
史館茗話　一
興來一儀　一
勉亭詩集　四
八　二十六
林讀耕齋
名守勝　後更靖　字彦復　称春徳　通春次男
讀耕集　三十一
本朝遯史　二
林氏
名信篤　大學頭
鳳岡林學士集
林東溟
名莪卿　字周助
詩則　一
國字牘　二
明官古名考　一

四十三

原南陽

狂齋雜錄　五
古詩十九首解　一
狂齋詩鈔　一
狂齋集
藝海蠡測　一
同外篇　二
原子　二
名公道　字飛卿
原狂齋

三代八百首　二
古五百首　一
二十七
紀記歌集　二
名善之　稱和助
林氏

扶桑名賢詩集　七
扶桑名賢文集　七
文法授幼鈔　五
文林良材　七

名恕　字九成　平安人　稱九右衛門
林文會堂

明詩礎　一
明月編　三

四十四

左傳白文　校　七
名元喬　字子遷　稱小右衛門　一号芙蕖館
服部南郭

來奈詩　一
唐詩正聲箋註
詩學新論　三
復民文異名　三
卧遊漫鈔　一
席上腐談　一
經說拾遺　二
東山華曝　六
東岳學的　二
名直　字溫夫　稱吉右衛門
原田東岳
三
澗泉從話　三
此君堂草　一
叢桂偶記
寄奇方記
解毒奇功方
百金鑑
西遊雜記
藥語
叢說
脚氣篇
痘瘡纂
經穴彙解
醫事小言
三喜直指篇　二
瘍術備考　一
名昌克　字子柔

十五

書名	注	冊數
郭注莊子	冂	十
張注列子	冂	四
新刻蒙求	冂	三
十八史畧	冂	七
唐詩品彙七律	冂	五
同絶句	冂	四
唐詩選	冂	七
唐詩事畧	冂	二
明詩選	冂	十三
南郭文集		六
同二編		六
同三編		六
同四編		六
同絶句		一
文筌小言	附注本八冊 正德ノ作也	一
大東世語		五
八		二十九
燈下書		一
遺契		五
儀禮圖抄		
服部嘯翁	名元喬 字伯和 又称蘇門居士 京人	
碧巖方語解		一
蘇門文抄		一
燃犀録		一
同續録		一
同別録		一
同餘録		一
落草談		一
放言		一
赤縲々		一

六

書名	注	冊數
中山傳信録	校	六
速水氏	名房常	
增補諸家知譜拙記		五
增補前王廟陵記		二
本朝年號便覽		一
職原抄	校	二
職原須知		一
萬世雲上明鑑		二
本朝紹運續録		一
裝束問荅		一
荻原氏		
八		三十
	名元克 称平吾 甲斐人	
甲斐国名勝志		五
道の志をり		三
馬場氏	名信武 始称尾田玄吉	
五經圖解		十二
書經天度辨		四
書經天文圖説		二
周易指掌大成		
周易一生記		五
周易日用掌中指南	一名本卦指南	五
梅花心易掌中指南		五
八卦掌中指南		四
易學啓蒙圖説		一

四十七

朝鮮太平記　三十二
両國盛衰記　十六
中國太平記　一名赤松記　十
北國七國志　十二
北国太平記　十
武家勲功記　十八
本朝三國志　三十五
義貞勲功記　十五
楠一生記　十二
南朝太平記　三十五
北條太平記　三十一
曽我勲功記　十五
曽我物語評判　十二
義経勲功記　三十二
源氏一統志　十六
一名信長記
三十八
馬場氏
同續編　十八
續後三国志　十八
諸説辨断　三
當世良材　十
[illegible]頭　一
[illegible]龍占　一
[illegible]鈔大成　九
初學天文指南　五
關帝靈籤占　五
[illegible]一筆金和解　一
卜筮[illegible]鈔　九
斷易指南　一名[illegible]　十
同説統　四

四十八

[illegible]の咄説　二
[illegible]乃道艸　十五
一名龍丸
丹羽氏
英雄軍談　五
六道士會録　五
河伯井蛙文談　三
天狗藝術論　四
[illegible]好談　四
田舎一休　四
雜編　六
内編　四　外編　六
田舎荘子
三十二
二
丹羽佚齋
（二）
門田の早苗　一
閑田[illegible]　次筆五　五
大和物語抄補輯
閑田耕筆　四
續近世畸人傳　五
[illegible]　一
勝地吐懐編　校正　二
近世畸人傳　五
譯文童喩　二
國文世々の跡　三
伴閑田子

四十九

四十二國人物圖 二
天文義論 二
數理曆談 三
曆書曆象俗解 二
名忠英 字子顯 別名正休
西川求林齋
古學軌範
古學叢書
歷史便覽
詩經古義
重刻孝經 一
同續編 二
假友人書 二
名小角
二 三十三
西湖學
大系圖 三十
太平記大全 六十
平家物語大抄 三十四
平治物語大全 六
保元物語大全 九
徒然訓金抄 十二
源氏物語綱目 十
古今集頭書 六
名直昭
西武
湖傳抱貝記 十

五十

數學夜話 二
同外編
同續編
同後編 五
呂行子 三
名玄通 字權一 號十竹
西村氏
外村上池秘錄 四
蓬萊詩集
同續編 四
上池秘錄 四
名 字 號元章
西川國華
二 三十四
紫注辯語 一
運地手針考 一
天人五行解 二
右旋有光論 二
氣運論 一
斡枝數原 二
水土解辨 二
天學名目鈔 一
天經或問 別正休訓點 三
天文知歌注 一
日本水土考 附兩儀集說 一
百姓囊 五
町人囊 七
長崎夜話草 五
怪異弁斷 八
增補華夷通商考 五

五十二

書名	数
天文俗談	五
天學指要	三
須曆畧注	一
言葉の塵	四
萬國夢物語	
(係)	
穗積氏	
名以貫　字伊助	
經學要字箋	三
助語字俗解	二
唐土王代一覧	六
悉曇摩多體文綱要	一
四書國字解	
五經國字解	
ホ	五十九
世說国字解	三
文法直截真訣鈔	一
助語科注考録	
助語考略記	
細川幽齋	
名藤孝　一号玄旨　長岡太輔　叙二位法印	
百人一首抄	三
伊勢物語闕疑抄	五
名所類字和歌集　一名類字　小名寄	四
詠歌大概抄	三
耳底記	三
道之記	一
大原千句	一
大原山家記	二

五十一

書名	数
幽齋聞書　大名和哥受用	二
幽齋家集	一
源氏物語辨	
同泝江入楚　年ノ摘本也	五十四
哥仙解難抄	三
新古今集鈔	四
職原抄聞書	二
座右	七
細井廣澤	
名知慎　字公謹　一号思胎庵　又號蕉林庵　称次郎太夫	
紫微字様	二
篆隷異同歌	三
詩牌譜	三
千字文	二
ホ	五十六
觀鵞百譚	五
赤壁賦	二
公子行	二
主人帖	一
竹樓記	一
長恨歌	一
筆法釋名	
奇文不载酒正編	八
地域畫法大全	四
字林長歌	一
君臣歌	二
撥鐙真詮	一
諸陵記	一
萬象千字文	一
唐詩十九章	二
蘭亭帖	一

五十三

八仙歌　一
君王帖　一
越王帖　一
元亨帖　一
酔翁帖　一
大和文　猶墨帖數品不可勝計也　一

細井平洲　名德民　字世馨　一号如來山人　称甚三郎
詩經古傳　五
嚶鳴館詩集　三
遊松島記　一
獻芹録　一名野芹　三
詩經大訓
詩經小訓
ホ　三十七
詩經夷考
毛鄭同異考
小語
つらつらぶみ
嚶鳴館遺稿　十
北條氏
姓平　名氏長　小幡景憲門人　從五位下安房守二級任ス
雄鑑鈔
雄鑑抄
士鑑要法　一
微妙至善之巻　二
兵法問答
雑格問答

五十四

堀北渚　名　字　称元厚
隧輸通考　十
灸炳要覽　一
醫學須知　一
医經名數　六
烟酒録　一
宄名總目　一
医案啓蒙　一
痘疹弁義　一
納音箒　一
五行相生相尅弁　一
呕吐噦乾嘔弁　一

堀田氏
ホ　三十八
名字永詳　称参丞　加賀人
慶長中外傳
琉球属和録
南島変
三州奇談
昔日抄花
越之白浪

五十五

解言ちかき人　一

養淡安心の手引　三

ちくしの一

和歌新式大意集　四

名蘇光

戸田茂睡

㊎

四書考證

大學考證

十　又二八

大學證

名葉字子華　勢州人

巨野熊嶽

五十六

老子正訓　二

讀呂氏春秋補

讀韓非子補

讀荀子補

論語徴餘言

徂徠先生學庸解證

戰國策考　五

國語考

左傳考

詩經考

書經考

楚辭傍辨解

周易古斷

周易約説

名哲字允明　称三郎太宰

戸崎淡園

十　計十

文會録　一

病名補遺　八

刪補中條流産科全書　一

牧生堂圖説　一　五

小成温疫録　三

同下編　三

非藥選上編　三

名瀚字倉年　号宮四子

戸田旭山

隠家百首　一

ちらの跡

君かへつる

嵐の一こと　三

庄九らか物語

五十七

五十八

五十九

年中吉事鑑（附今案百解十門）　一
標箋句子全書　十
孔子行状圖解　一
標箋孔子家語　五
章注國語　十
郭注莊子　校正　十
芸閣文集　十
文章小成　六
詩經通解　一
頭書詩傳　六
四聲韻選　三
詩學小成　四
唐詩選講釋　七
唐詩選掌故　七
十　一
[illegible]
千葉芸閣
附一　葉儀術
改曆加減集　一
同續編　一
皇倭通曆餘考　三
天文陰陽自然開合　一
[illegible]
千葉氏
（千）
[illegible]補文
堤　關　簡　輯
近代著述目録

六十

軍法侍用集　十
小笠原[illegible]書
合戦巻
龍虎豹三品
結要品
甲陽軍鑑末書
軍鑑後集　三
軍鑑前集　三
意表書
兵書　二
假書　二
[illegible]到来　二
東到来　二
十一
武備軍要
武教要録
中興源記　十一
[illegible]
小幡氏
（[illegible]）
和漢文會録
和學通　二
語録字義　一
補呼辨正　二
[illegible]
[illegible]
（卯）

日本紀假字類聚　一
[illegible]
小野東山

千代見草　三
竹叢腹遺草
溫故隨筆　四
竹園小傳　一
考評紹運錄　一
信玄年譜　二
古今名將傳　三十五
新編城主記　七
改撰武家盛衰記　十
中[illegible]編上下要錄　六
同後編　五
中興武林雜記　五十
[illegible]
小野竹叢

神道八卦圖　一
天津罪圖說　一
大八洲圖說　一
[illegible]
小田氏

武士道初有抄　三
諸家評定抄　三十
軍法鏡鑑抄　八
軍法師鑑抄　九

六十三

増補松葉名所和歌集　八
和歌新呉竹集　一
和歌呉竹集　校　二
當中明題集　一
續和歌明題部類　一
増補和歌明題部類　二
伊勢物語[illegible]
古今集両序解言　二
古今集[illegible]　六
大坂人 [illegible]
尾寄華陽

フ　五

玉の[illegible]　一
詠古録　二
濱の[illegible]　一
[illegible]　一
河北[illegible]
[illegible]
小川氏

六十四

射書類聚解　二
紀効新書抄
刑律考　八
明律國字解　三十七
素書國字解　二
呉子國字解　五
孫子國字解　十三
讀呂氏春秋　四
讀韓非子　三
讀荀子　四
孟子删
論語徴　十

中庸解　二
大學解　二
辨名　一
木
フ
辨道　一
[illegible]
荻生徂徠

群書一覧　六
枕詞補註　二
新續撰吟和歌集類題　二
續撰吟和歌集類題　六
類題證歌集　八
本草花集類題　三
千首類題　二
當中題林抄　一

六十五

書名	數
西洋火攻神器說国字解	一
案問評	一
譯則	
譯文筌蹄	六
訳筌後編	三
孟浪之篇	
草堂答話	
經子史要覧	二
南留別志	五
答問書	三
續答問書	一
度量考	二
葬禮考	一
滿文考	一
樂律考	
樂制篇	一
ヲ	十
幽蘭譜抄	一
琴學大意抄	一
廣象基譜	一
明十三省考定畧	一
琉球聘使記	一
鈴錄	二十
同外書	三
政談	八
太平策	三
經濟總論	二
憲廟實錄	三十
四家雋	十二
古文矩	一
文變	
文罫	一
韻槩	一

六十六

書名	數
唐後詩	七
絶句解	三
絶句解拾遺	三
柏梁餘材	
皇朝正声	一
詩語自在抄	十二
詩題苑	三
徂徠集	
詩 自一至七四本　文 自八至十九八本	
尺牘 自二十至三十 附補遺共八本	
徂徠先生外書	三十六
蘐園錄稿	二
同遺編	二十
同隨筆	五
甲州府志	二十
ヲ	八
晋書 点	
宋書 冂	
南齊書 冂	
梁書 冂	
陳書 冂	
射學正宗 冂	
射學正宗指迷集 冂	
六諭衍義 冂	
管子考	
晏子考	
樂語瑣言	
翰墨事畧	
弁髦編	
井地解	
歌題集	
文考	

書名	卷數
論語弁書	四
荻生金谷　名道濟、字大寧	
魯論愚得解	一
書十一篇傳訓	一
洪範筮法	一
入易門庭	一
讀易雜抄	四
讀易草	一
国語校草	一
管子校草	一
管子疑義	一
滄浪疑義	一
弇州疑義	一
杜律講草	一
文理三昧	一
文解　一号文戒	一
儒解	一
文集	二十
風流使者記	二十
漢儒傳經圖	一
漢官圖譜	一
異邦服制	一
三器考草	二
藥物仆函	一
樂律考證	四
素問國字解稿	五
近思録序考	一
博奕心鑑序解	一
二十一史華抄	二

六十七

書名	卷數
忘憂餘深	一
讀遯史	一
膳炊書	一
灸痛方	一
明律疑義	一
讀野語	一
荻生氏　名觀　字林達　称惣七郎	
七經孟子考文補遺	三十一
建州始末記	一
清客問荅　林達問　朱佩章荅	一
衡考	一
岡龍洲　名白駒　字千里　称太冲	
周易解	十
書經二典解	二
詩經毛傳補義	十
孔子家語補注	十
孟子解	七
荀子觽	二
魏武注孫子　校正	一
左傳觽	十
史記觽	十
世說觽	二
世說海潮音	四
箋注蒙求	三
雜纂譯解	四

六十八

六十九

書名	巻数
刪字訣通	三
改字說	一
本興録	二
開口新語	一
烈婦匕首	一
小說精言	五
小說粹言	五
小說奇言	五
儒林傳	
岡本氏	
名　字　号　新玄治法印	
燈下集	二
ヲ	十一
玄治配劑口解	三
玄治方考	三
家傳預藥集	三
增補濟民記	六
通俗医海腰舟	一
傷寒衆方規矩	六
岡本一抱子	
名爲竹　字	
運氣論諺解	七
原病式音書	四
医學三賦弁解	六
医學講談發端辨	二
十四經絡詳解	七
衆方規矩指南	七

七十

書名	巻数
秘傳藥性記弁解	三
修治纂要秘訣畧解	
病因指南	五
妙藥集大全	
薛氏医案和解	五
和語本艸綱目	二十二
脈法指南	六
医療指南	五
咊語医療指南 平假名	五
本朝古今医統	十
万病治法指南大全	八
方意辨疑	二
藥性記弁解	三
医學切要指南	三
同續	五
溗洄集和語抄	七
ヲ	十二
正傳或問諺解	七
大成論和語抄	七
古今養生論和解	
阿是要決	五
經穴密語集	三
鍼灸拔萃大成	七
万病回春指南	五
医學至要抄	四
格致論諺解大成	七
難經諺解大成	十三
素問諺解	十八
灸法口決指南	五
針法口決指南	一
年中運氣指南	一
北條時賴記	十
百味主能諺解	五

七十一

書名	冊
局方發揮諺解	五
臓腑經絡詳解	五
雷真君活人方	二
十四經和語抄	五

岡島冠山　名明敬後更璞　字援之後更玉成　称弥太夫

書名	冊
唐話纂要	六
唐音雅俗語類	五
唐訳便覧	五
唐語便用	五
四書唐音弁	二
尺牘弁解	五
ヲ　元明軍談	二十五

十三

書名	冊
三体詩唐音	二
字海便覧	七
太平記演義	五
通俗水滸傳	二十
唐音和解	一
康熙帝遺詔 拔	一

岡島竹隖館　名順　字中甫　一号安甫　又號口山人　羽山子之男也

書名	冊
増注大學	一
増注中庸	一
國語訂字	一
古尺牘	一
續古尺牘	一
唐詩選故事	七

七十二

書名	冊
唐詩要解	七
絶句解諺注	一

岡崎廬門　名信好　字師古　称平太

書名	冊
廬門文集	五
麗沢詩集	
詩学道標	一
唐詩詠物選	一
題画詩選	一
尺牘道標	
唐詩貫珠選	一
唐詩聯材	一
唐詩熟字格	一
ヲ　唐明詩格 五言	一

十四

書名	冊
同 七言	一
詩林砕玉	
詩苑摘芳	
詩学字苑	一
詩工推鑿	二
詩韻含英	四
詩語叢	二
詩鏡	二
龍詩類選	一
平安風雅	一
本朝律詩選	一
本朝絶句選	
扶桑鐘銘集	三
扶桑碑銘集	三
古今銘彙	一
古今讃彙	一

七十三

書名	冊数
日本詩礎	
勝地詩帖	一
李頎詩集 校	一
儲光義詩集 日	二
医祖神廟碑	一
連字解	一
投壺録	一
明朝楽譜	一
春秋紀要	
戰国紀要	
史籍論叢	
九流緒論	
諸子小志	
岡西一時軒	
ヲ	十五
名惟中	
枕艸紙旁注	十二
徒然草直解	十
砂金艸紙 旧名一時軒随筆	三
續無名抄	二
和歌秘密抄	二
真字徒然草	六
誹諧蒙求	二
近来風体	三
いつれ都[illegible]	一
次郎太郎千句	二
誹諧三部抄	三
十百韻	二
渋團扇返答	二
名所題林	五
式子内親王家集 校	一

七十四

書名	冊数
岡部縣居翁	
姓賀茂縣主 始称三四 名真淵 称衛士	
古事記私記	一
古事記訓考	一
假字[illegible]古支記	
神代紀訓考	二
山問文神代巻	二
万葉新採百首解	
万葉考	
二三之今の十二 四今の十一 五今の十三 六今の十四の巻のなり 各別記あり此中一二の巻と上の別記ハもとそよ之本せり	
古今考 附別記	
古今新採百首	一
古今集私記	一
ヲ	十七
古今集序傳説	一
古今集打聞 門人筆記	二十
伊勢物語大意	六
伊勢物語古意	六
源氏物語新釈	
百人一首古説	四
百人一首初學	五
神楽歌考	一
催馬楽考	一
さいはらしの譜	一
不比真奈倍	一
延喜式祝詞解	六
かき[illegible]のえあひ	一
祝詞考 前稿	五
同 再稿	三
冠辞考	十

七十五

語意考　一
歌意考　一
文意考　一
書意考　一
國意考　一
古器考　一
古箭考　一
外宮考　一
十二月考　一
雜問答考　一
縣居歌集　一
家集　二十
東歸　一
西歸　一
竹採翁長歌考　一
真淵雜錄　一
ヲ　十七
東服拔萃　一
田安奉對案　校種
法華参講奉対案　一
淨土三部抄言釈　二
應問稿　一
十歳筐　墨帖　一
本言
今義解　校　十
金槐集　同　三
雅亮装束抄　同
落久保物語頭書
岡田硯波翁
名正利　一号盤斎
舊支紀古支紀事跡鈔　八

七十六

神代巻須津艸　五
神武紀二葉草　二
日本紀支跡抄　五
中臣祓除艸　一
五部書抄　五
神名秘書質書　一
神學承傳記
事解抄　一
かし八传　一
潮翁語類　五
古今序抄　一
いとかえ草　一
選輩畧　一
享保紀行　三
神代巻日蔭草　一
附神武紀日蔭草口決
ヲ　十八
岡田新川
名挺之　字　称彦左エ門
鄭注孝經　校　一
孝經引證　一
劉向列仙傳　跋　二
東穂錄　二
同二編　二
彼此合符　二
常語藪　一
下學廣集　二
日下新咏　一
驊騮偶詠　二
牧數稱謂　一
畸人咏　一

七十七

書名	備考	巻数
新川集		
暢園文艸		
同詩草		
同咏物詩		
同節序詩		
同題畫詩		
同祝壽詩		
同類雅		
表海英華		
先友詩抄		
楚游篇		
堂亭名		
茸谷志聞		
(和)		
ワ		十九
和田一華堂	名以慌	
伊勢物語集注		十二
大和物語首書		五
源氏綱目		九
源氏弁引抄		二十
藤河百首抄		三
女庭訓		三
渡邊氏		
	新文亭 有獅子庵 蓮二房 渡辺狂 東花房 西花房 見竜 妙式等号	
誹諧古今抄		五
誹諧十論		三
十論為辨抄		三
新撰大和詞		二

七十八

書名	備考	巻数
和漢文藻		九
本朝文鑑		五
百花賦		一
ほんくの説		八
杷のそ途		
蓑の首途		
笈日記		三
葛の松原		一
渡辺蒙菴	名操 字友節	
老子愚讀		
國語解刪補		二
(加)		
カ		二十
加藤槃齋		
	名 字	
新古今集増抄		十三
徒然草抄		十三
伊勢物語初冠		五
伊勢物語抄		十
三部抄増注		十三
謠増抄		十三
貞徳首書百人一首抄		三
方丈記泗説		二
枕草紙抄		十五
加藤氏		
	名字未詳，称仙菴 始五須不音	
扶桑見聞私記	一号大江廣元日記	七十一
盛長日記		五十

七十九

雨夜物語たミ詞　一
土佐日記注　二
姓藤原　名宇万伎　称大助
加藤静舎

[illegible]　二
名所はいかり　一
須ゝく　一
和哥聾瞶集　五
和歌虚詞考　二
名言彦　大坂人　字中章　称新太郎
加藤竹里

金匱通玄類證
傷寒通玄類證　三
カ
薬品手引艸　二
古方活用　二
病家示訓　一
方的　一
張氏医通纂要　五
和韓人参攷　一
治痾経驗
傷寒論手引艸
同初編　二
同續編　二
同下編　二
同中編　二
医療手引草　二
号息斎道人
加藤謙斎

八十

医事説約
小刻金匱要略　一
小刻傷寒論　一
行餘医言　三十
續薬選　一
薬選　三
名修徳　字太仲　一号香[illegible]
香川一本堂

産家養草　門人佐々井[illegible]　一
産論翼　二
産論　二
名　字子玄　称玄悦
賀川氏
大歌所御歌　一
三十七
カ
月並消息　一
東歌　以朱直幹　三
[illegible]　八
万葉新採百首　一
新百人一首　也紀翁　一
[illegible]　二
古今和歌集序　略註　一
香取日記　一
万葉集略解　三十
姓橘　名千蔭　称又左衛門
加藤芳宜園

假字用格　一
静舎雑著　一
静舎歌集　一

八十一

書名	巻数
養菴先生行状	一
香月牛山　名則真　字啓益　称貞菴	
巻懐食鏡	一
巻懐灸鏡	一
婦人壽草	六
小児必用記	五
螢雪餘話	五
運氣筭法	一
遊豊司命録	一
医学鈎玄	三
老人養草	五
国字医叢	五
習医先入	三
薬籠本艸	六
力	二十三
牛山方考	[illegible]
牛山活套	三
香西氏　名成資　称左右エ門	
武田兵術文稿	三
南海治乱記	二十一
甲越戦争記	七
貝原益軒　名篤信　称久兵衛　字子誠　一号損軒	
小学備考	六
近思録備考	八
自娯集	六

八十二

書名	巻数
慎思録	六
大疑録	二
大和俗訓	八
家道訓	六
初学訓	五
文武訓	六
家訓	一
楽訓	三
童子訓	五
養生訓	八
五常訓	五
神祇訓	
和字解	一
点例	二
心画軌範	一
千字類合　点	一
力	二十四
鄙事記	八
三禮口訣	二
日本釈名	三
格物餘話	
日用良方	
和学一歩	
三紀聞	
自警篇	二
女大学	一
和漢名数	一
増補和漢名数	二
続和漢名数	三
初学知要	三
初学詩法	一
本朝詩仙抄	六
歴代詩選	五

八十三

書名	冊數
扶桑紀勝	五
大宰府天満宮故實	二
筑前續風土記	二十九
筑前名奇	二
有馬名所記	四
嚴島之圖	一
松島之圖	一
天橋立圖	一
吉野山圖	一
京城勝覽	一
和州巡覽記	一
諸州巡覽記	七
西北紀行 二　南遊紀行	二
續諸州巡 二　南遊摺載録 一　戊文遊嚢	一
五嬬路記	一
岐蘇路記	二
カ	二十五
日光名勝記	一
花譜	三
菜譜	三
大和本艸	二十五
和名本艸	四
頤生輯要	五
朱子文範点	五
四書集註 同	十
五經 同	十一
小學句讀 同	四
孝經大義 同	一
古文前集 同	二
古文後集 同	二
両葉支鑑	五
黒田家譜	
和漢古諺	二

八十四

書名	冊數
本草綱目 和名入本 校正	一
貝原恥軒	
名好古 字 称市之進	
日本歳時記	七
和爾雅	九
諺草	九
和漢事始	十三
八幡宮本記	八
柏崎永以	
本姓北島 名良允	
國朝舊章録	十
事蹟合考	五
事れついで　カ	二十六
神祖泉堺記事	一
日本風土輯説	
古今沿革考	
桂川月池	
名國瑞 字世民 称甫周	
翻譯地球全圖	一
同畧説	四
漂民御覽記	一
北槎問畧	十三
桂川桂林	
姓中原 名中良 字虞臣 初号万象 称甫粲 初称森島甫斎	
紅毛雜話	五
紅毛智恵洋	二

八十五

西洋奇譚 五
萬国新話 五
軻對談 二
琉球談 一
万象雑俎 十
農工力車 五
地名便覧 一
和名類聚抄 校 五
桂林漫録 二
同二録 二
古今沿革考 補校 二
擬集古録 校
月下清談 五
田舎芝居 一
類聚紅毛語訳
玉の枝 五
カ 二十七
海外異聞

河口静齋 名光遠 字子深 称三八
斯文源流 一
静齋文稿
静齋詩稿
静齋筆記 一
文譯 一

河野界浦 名清通 一号健寓 称齋宮
御覧韻鑑古義標注 二
字彙巻末解 二

八十六

韻学津梁 二
應師就經音義韻譜 十
玉篇指南畧釋 一
切韻指南標注 一
經緯玉露 二
韻鑑佩觽 一
顧氏玉篇韻譜 五
韻鏡標注補遺 一
切韻指南大義 一
七音畧輯釈 一
乎古登点譜 一
両朝甲子會記 一
和漢年代即鑑 一
和漢編年畧珍 一

カ 二十八
河瀬醉露軒 名忠雄
和歌ゆきゝな草 二
拾補和歌をちかた人 九
和歌拾題抄
百人一首玉葛
春風抄
類葉抄
醉露軒和歌集 三

河合氏 名元 字 称忠蔵
論語室 二
論語堂 五
孟子選 二

八十七

書名	巻数
詩精	一
新刻古文	二
詩活様	四
騰廻録	一
河村氏　名秀穎　初名秀興　称七郎　尾張人	
日本紀撰者辨	一
首書神祇令集解	一
令備考	二十四
楽寿筆叢	十
歴代徒刑考	二
河村氏　力　名秀根　秀穎弟　称復太郎	二十九
書紀集解	三十
續紀集解	四十
後紀補集解	四十
續後紀集解	二十
文徳天皇實録集解	十
三代実録集解	五十
古事記集解	三
舊事本紀集解	十
古語拾遺集解	一
姓氏録集解	二十
万葉集集解	二十
律集解	四
三代格集解	七
令義解集解	十
神宮儀式集解	二

八十八

書名	巻数
延喜式集解	五十
儀式集解	二
類聚国史考	一
三朝鈔録	七
禁秘御抄集注	一
職原補註	一
公事根源集釈、補	一
名目抄解	七
狭衣入紐	四
葎菴夢載	七十
葎庵咏藻	十一
字母纂會	四十七
河村氏　名殷根　秀根子　力	三十
河水問答	五
殷根遺艸	一
河村氏　名益根　殷根弟　称培次	
帝號通覧	一
宰輔通覧	五
載籍通覧	十
国郡通覧	八
姓氏通覧	十
匯載	百
乾堂集	二十
益根詠藻	二十

片島深淵子
名武矩
武士和訓 七
武藝訓 五
武家劄像傳 六
武田三代記 二十二
明君文武蹟 六

片山兼山
名世璠 字叔瑟 称藤藏
合刻四書 四
古文孝經標注 一
古文孝經參疏 三
大學古義 一
中庸古義
力 三十七
大學解廢疾
中庸解廢疾
論語正文 点 二
論語徵膏肓
孟子正文 点 七
孟子説
毛詩正文 点 三
古文尚書正文 点 二
古文尚書考疑
尚書類考
周易正文 点 二
左氏独得
老子類説
讀荀子袪
荀子楊注正誤
荀子一適

呂子一適
古詩連珠 一
文選正文 点 十二
千字文 同 一
蒙求標題 三
五行古義
樂刺
仁字解
聖字解
聖學弟子問
山子垂統前編 三
同後編 三
禮記正文 同 五

片岡如圭
力 二十二
名[illegible] 字[illegible] 称平助
易術夢断 一
同補 一
易術傳 十
周易解 五
啓蒙解 五
易林畫解 二
龙傳占例考 一
易術明畫 二
易術便蒙 一
易術手引艸 一
易術妙鏡 一

神田白龍子
名勝久 称杢

七書俚諺鈔　三十
七書評説
續七書　七
本朝武備志
本朝明將語類
本朝諸家名數
和漢武家名數　五
武家俗説弁　六
武家童子訓　十
武道訓
武用集要
武門類聚
武門劇談
教戦夜話
雜話筆記　十五
三獸演談　三
カ
兩車録　八
新刀銘尽　六
豊臣實録　三十
豊臣勲功記　四十
太閤記大全　四十
北條五代成功記　二十
浪速戦記大全　三十五
古今女勲功記　六
近代諸士勲功記　十五
近代百人武將傳　五
本朝武家小學
武教故事
膽心精義録　十八
神田氏　名玄仙

日東魚譜
本草考
靈柩經註
難經原好
十四經注
疹痘口訣
眼科方彙
婦人方彙
龜田鵬齋　名興　字子龍
論語撮解　一
大學私衡　一
膚注蒙求　三
カ
五數辨　一
律數解　一
葛西建藏　名質　字休文　号因是道人
通俗唐詩解
天聖明道本國語続考證
老子輔注　二
源氏兩夜風話評
國姓爺合戦評　一

近代著述目録
堤朝風原輯
萬笈堂英遵補定

與

吉見恭軒 正四位下左京大夫名幸和又号風水翁尾張國名古屋東照宮神主
宗廟社稷問答 二
難雜事記 一
两宮辨 一
國字卉 一
増益辨卜鈔俗解 一
温泉紀行
五部書説辨 十二
ヨ 一

吉益東洞 名為則 字周助
類聚方 一
方極 一
藥徵 三
醫断 一
医事古言 二
医事或問 二
医方分量考 一
建殊録 一
遺稿 三
古方便覧 二
藥徵續編 三

吉川氏

卜易通商考 名祐王 一
増補周易通商考 一
周易卦爻象解 二十
周易風俗通 一
周易象解 一
卜筮眼目 一
卦変問答
易林独歩
八卦鬼眼睛 一
鎮宅霊符詳説 一

吉川氏
日本學則 名惟足 一
ㄕ
神祇要編 四
吉川惟足傳 二

吉田篁墩 初名坦 字資坦 後更名漢官 字学生 後又更字曰学儒
論語何晏集解 植字本 二
論語集解考異 同上 四
墨子 同上 四
孝經真本 一
經籍通考
足利學校書目附考 一
近聞寓筆 八
清朝創業事畧 五
徳門律師行状記 代山師 一
活板經籍考 二

留蠹吞屋儲藏志　十

吉田氏
正三
赤表先生御伽話　三
和産石類譜
橘栰譜
本草和品考
女科可寧方
六書督古編
腧穴可寧正

芳村氏
名惟孟　有北山天仙子
五〻亭　寺号
ヨ　三
内経綱記　百四十
医学正名　百
手澤嚢　二十
灸科須知　三
二火弁妄　五
温泉考　二
北山医話前集　三

横井氏
也有
鶉衣　三
同後編　二
同拾遺　一
蘿葉集　三
野夫談　一

小皮籠　一
[illegible]　一

横地楚山
名正務　字　称玄常
医経嘉会編　百
傷寒論自序広義　一
医学的　二
医要談　三

(太)
多田秋齋
姓源　名義俊　字政仲
一号南嶺子　称兵部
夕　田
旧事紀偽書考　一
古事紀本義
日本書紀義解　三十
同或問私考
古語拾遺本義
延喜祝詞式私説
中臣祓本義
中臣祓気吹抄　植松次郎作　三
創禊辨　一
神吏類聚抄
神明憑談　二
義俊口授次郎筆記
几右雑記
春塘随筆
羽書稿
遊和艸

書名	卷數
同續編	
蕁草紙	
神史考	
御昇壇記	
古源愚考	
鳥追歌注	一
宮川日記	
職原聞書	
孫呉異見	
武門故實百箇條	五
南嶺子	四
南嶺遺稿	四
秋齋閑語	四
半宵談	一
和歌物語	
日本紀神代卷口義	十
夕	五
神代卷秘要抄	二十
神代卷講述筆記	一
中臣祓辨疑	
三紀弁	一
神璽辨	一
直字弁	一
葵祭記	一
神拜恐惶抄	一
三種神器辨書	一
獸肉論	一
故實纂要	四
三十箇條故實辨	一
以呂波聲母傳	一
以呂波訓義	一
本語口傳	一
職原鈔弁講	二十

書名	卷數
多紀藍溪　姓丹波　名元惪　稱永壽院	
廣惠濟急方	二
醫家初訓	一
醫方絜領	二
醫學平言	一
養生訶	一
多紀櫟窓　藍溪男　名元簡　字廉夫　初号桂山	
櫟窓類抄	五十
素問識	八
靈樞識	六
傷寒輯義	七
金匱輯義	六
脈學輯要	三
挨穴輯要	一
夕	又五
扁倉傳彙攷	一
痧疹輯要方	一
觀聚方	九
聿修堂架藏志	
文集	三
擔中鏡	二
日光駅程聞見記	一
聿修堂讀書記	二十
病名纂	
素問解題	一
屠蘇考	一
本朝經驗方	
救急選方	二
醫賸	三
疑脚氣論	
病名沿革考	

書名	注記	冊數
医略抄	校	一
本草和名	校	二
奇方彙編		
田中様木翁	名道麿	
撰集万葉抄		四
萬葉名所歌抄		
万葉東語栞		一
万葉集荅問書		二
田中道齋	名　字文平	
道齋随筆		五
道齋先生尺牘承詢續編		一
道齋奇字		
尺牘称謂辨		
續稱謂弁		
傘州尺牘紀要		一
滄溟尺牘辯疑		
印字選		一

書名	注記	冊數
通言考		
唐文式		
夜話集		
文章孤白		
田中江南	名慶清　一名菊滿　字子鯉　号揚日耳谷園　投壺黨　日優游社　称三郎右エ門	
補正投壺新格儀節		
投壺損益儀節		
投壺矢勢畫解		
投壺指揮		
投壺說		
投壺名目		
婦人投壺花濃圖		
大道寺悠山	名	
落穗集		十六
靈岸夜話		十二
武道初心集		五
落穗集追加		十
雷鳴論		一
岩淵夜話集		
同別集		一
靈巖夜話大意弁		一
太宰春臺	名純　字徳夫　称弥右エ門　一号紫芝園	

古文孝經孔安国傳 校正音注 一
古文孝經正文 一
論語古訓 十
論語古訓外傳 二十
論語古訓正文 二
孔子家語增注 十
詩書古傳 三十四
朱氏詩傳膏肓 二
周易反正 十二
易道撥乱 一
易占要畧 一
春秋三家異同
春秋擬釈例
老子特解 二
修刪阿弥陀經 一
和讀要領 三
聖學問荅 二
六經畧説 一
律呂通考
親族正名 一
春秋暦 一
倭楷正訛 一
斥非 二
弁道書 一
亂婚傳 一
獨語 五
独言
産語 二
国字書 一
紫芝園漫筆 八
經濟録 十
經濟録拾遺 二

三王外紀 三
二王外紀 一
和漢帝王年表 三
新選唐詩六体集
近體詩韻 一
紫芝園前稿
同後稿
文論 一
詩論 一
興観集
群書雑抄
放生會記

谷氏
名重遠 称丹三郎
神代巻鹽土傳 四
中臣祓鹽土傳 一
土佐國式社考 一
元亨釋書抄 一
保建大記打聞 三
俗説贅弁 三
同續編 二
謚法 一
泰山集
東遊草

谷氏
名本教 称楠右エ門
田園類説 一
縣令須知 一
地方一様記辨解

谷氏
誹諧名所方角集　名素外　号一陽井　江戸誹諧林七世　二
同古今句鑑　四
同古今句鑑拾遺　四
同類句弁　二
同柏手千句　一
同江戸川　一
同五色梅　一
同一物連歌　一
同孩おみの志ほり　二
同繪本詞德抄　二
同根源集
玉池雜藻
夕　十
谷口氏
稱曾四郎
武家系圖　四百五十
諸將連續記　五十
尊卑分脈　十五
谷川淡齋　名士清　伊勢洞津人
日本書紀通證　三十
和訓栞　自阿至世　世字刊行　十三
句互考　一
漢百年　名世寧　字士達　稱大六

天朝史鑑　六十六
天朝史畧　三
天朝鬼神論
經典餘師
四書之部　十
四書之序　一
孝經之部　一
小學之部　五
孫子之部　二
詩經之部　八
弟子職之部　一
忠經之部　一
六經用字例
玉木葦齋
名正英　又号五十鈴湖翁
中臣祓安心抄　一
夕　十一
同風水草管窺　二
同風水艸抄畧　一
橘家神休觀請傳　一
玉方陳解　一
蟇目秘傳　五
鳴弦傳　三
同極秘　一
玉籤集　八
神代卷藻鹽草　五
神武紀藻鹽草　一
神道日陰艸　一
寄道極秘笥守　一
原根錄　三
神拜次第　一
同抄　一
十種神寶問目　一

名昌訓

立野達生菴

明文選　四

梅莊遺稿　一

滄溟尺牘解　一

滄溟文選　一

唐詩合解　九

管子全書　校　十五

感喩　一

初氏藤田 名宗 字士明 号玄徹　稱三郎 後更氏武田 名敬儀 字聖謨

武田梅龍

ク　十六

拾遺和漢名數　二

文訓翁百首　四

同續　三

孝子良民傳　二

孝經便蒙釋義　三

名定直　字　稱勘太夫

竹田春菴

同蒙卿集　八

素問靈樞要語集註　十三

古今養生録　十五

名　字　号　稱通菴

竹中氏

寒葉齋畫譜　五

頭陀物語

西山物語　三

誹諧明題集　五

同蕉句集　一

同[illegible]　一

同百夜問答　二

同東風流　一

同二夜問答　一

片歌乃[illegible]　一

[illegible]　一

詞草小苑　一

歌文要語　一

同考異　一

舊本伊勢物語　二

初氏喜多村 名久域 字孟喬 号涼袋 寒葉齋

ク　十三

建部寒葉齋

授時暦日抄　六

大成算經　十

極星測算圖考　一

研幾算法　三

名賢弘　稱彦次郎

建部氏

揚子法言　同　十

何氏文集　同　三十五

續日本後紀　同　二十

續日本紀　同　四十

同續別勘

職原抄別勘　三

草廬詩集　三
金蘭詩集　二
帝京編　一
典詮　一
名詮　二
龍草廬
神武考集解　二
神代考評註　四
神国決疑編　三
神道要決　二
同言餘抄　二
古語拾遺抄　五
中臣祓直解抄　二
十四
神代考頭書　二
龍氏
[illegible]
從編[illegible]　一
同續編　十
古野物語　十
同後編　五
漫遊記　五
[illegible]　二
[illegible]　一
漢画指南　二
孟喬雜画　五
唐氏画苑

鹿葺書屋集　一
三乃逕　一
癸甲問答　一
聽雨窗遺稿　一
鶴聽書
唐詩材　一
漫吟集　十
[illegible]　一
[illegible]　一
[illegible]　一
論語闕
論語彙
日本詩測
毛詩鉄　一
十三
仄韻礎　一
唐国史補　三
謝茂秦詩集　二
唐詩材　一
大和河内遊之記　一
豊貞志
海子叢草　五
呉竹翁談　五
廬詩集　一
節儉論
大塔王傳　一
生駒山人傳　一
廬山詩　一
草廬文集　三
同二編　三
同三編　五

高瀨學山 名希朴 字仲敦 称松菴
明律訣義 十四
明律詳解 三十
非聖學問答 二
非斥非 一
考工記諺解
袁中郎尺牘 四

高屋牧騶窩 名近文
神代巻剳義箋 二
徒然艸輿義抄 八
夕 十六

高井蘭山 名伴寛 字思明 称文左エ門
和漢年中時候童蒙辨
野馬臺詩國字抄
四大錦字詩国字抄
音訓國字格 二
訓蒙天地弁 三
三字經抄 一
諱字節用 五
名乘字引 一
和漢朗詠集國字抄 八
算歳捷徑
繪本三国妖婦傳 十五
改正古状揃抄

改正歌字尽
食事戒
婚事戒
撫箏雅譜大成抄 二
鼓暦合刻
名乘字引後集

鷹見爽鳩 名正長 字子方 称三郎兵衛
詩筌 二
爽鳩遺稿 一
或問珍 六

橘為證菴 名三喜 肥前平戸人
夕 十七
一宮巡詣記 十三
中臣祓集說 三
神道四品縁起 三

橘後素軒 名守国 称惣兵衛
繪本故事談 九
同通宝志 十
同直指宝 十
同写宝鑑 十
同鷹宿梅 七
同玉の臺 五
謡曲畫誌 十
画典通考 十
運筆麁画 三

古言字證
古今字證
古叙辞證
九経辞例
詩経人物證
尚書人物證
論語人物證
本方風雅集
段𥴩文考證
文字考
字義或問
易学折問理證
反声音釋證
古三墳解　一
詩経證　三
老子證解　七
夕　六千七
論語證　四
中庸證　六
孝経證　五
尚書證　一
名関慎字正卿　豆州文人
高橋文護良助

畫志　同　三
繪本野山艸　同　五
繪本詠物選　保圓　五
有馬勝景甫　一
南部名所畫　一
唐土訓蒙圖彙　十五
方咸武勇繪鑑　三
扶桑畫譜　五
本朝畫苑　六

膳所鉦牛疑私考　六
名献知　字千安　称善左衛門
壺井産所詞

大和小學　六
女四書　七
名兆甫
辻原氏

同附録續編　一
同續編　一
同五編　一
同四編　下巻別字山崎源　二
同三編　一
ツ　十八
同二編　一
療治茶談　一
名　字　号　称玄仙
津田氏
〇〇

爾雅證
續文淵遺珠
法華経註例
攝経旅際
経元搜義
聖賢語解
経註解義

源氏男女裝束抄頭書	三
枕草紙裝束鈔	一
裝束要領抄	三
官職秘抄 校	二
職原抄通考	二十一
紫式部日記傍注	二
官職浮說或問	二
本朝古今刀劔錄	
官職知要	三
昔傳拾葉	二
昔傳拾葉提要	一
故実秘要抄	二
鄙雀問荅	一
延喜式裝束抄	二
職原抄解	十
建武年中行事畧解	五
ツ	
裝束文飾推談抄	一
直垂考	一
位署式私考	一
廣陵考	一
雜辨	一
衣文愚童訓	一
當時諸家官位昇進次第	一
塚田大峯	
名虎 字叔雛 称多門	
家注孝經	一
孝經和字訓	一
家注論語	十
論語群疑考	十
家注家語	十

冢注詩經	五
家注尚書	六
家注六記	六
家注老子	二
家注孔叢子	十
孟子斷	二
荀子斷	四
國語增注	六
聖道合語	二
聖道弁物	二
聖道得門	一
皇極和談	一
滑川談	一
入官身一儀	一
解愠	一
発字便覧	一
ツ	二十
大學国字解	一
中庸国字解	一
大峯詩集	
大峯文集	
月岡氏	
称丹下	
汝月百人一首	一
古今百人一首歌仙織	一
諸礼教訓文庫	五
繪本源氏物語	三
同蘭奢待	五
同姫文庫	五
同深見草	二
同諸礼訓	三

書名	注	冊數
同女武勇杜競		三
繪本和歌園		三
同和歌園詞の花		三
同泰平樂		三
同名取川		二
同高名二葉艸		三
同武者競		二
同武者團		三
同勇見山		三
同源氏山		二
繪本百將全傳		五
同操艸		三
同壽艸		三
同東國名勝志		五
浪花往古圖		一
繪本冨士牧狩		一
ツ		二十一
同宇治渡		三
㊍		
那波活所		
	名方　後更節　字道円	
通俗四書註者考		一
活所遺稿		二
活所備明錄		十七
老圃集		三
帝王暦數圖		
倭名類聚抄	校	二十
白氏文集	活字本	
那波魯堂		
	名師曽　字　称主膳	

書名	注	冊數
春秋左傳	校正	三十
東遊稿		一
學問源流		一
奈良氏		
	宗哲	
傷寒方彙		二
袖珍仙方		一
治身論		一
医門俗說弁		三
奈佐隅東		
	姓日下部　名勝奉　称久左エ門	
古語拾遺考異		一
十		二十二
疑齋		一
藥師寺撩銘釈		一
山吹日記		二
いちゐしら		一
示蒙抄	校補	一
名古屋丹水子		
	名玄匡　字寛甫　一号宜春菴	
易經集注抄		二十四
素問假名抄		二十
杜律抄		二十
難經注疏		六
民間歳時記		一
首書難經本義		五
食物本艸		二

三焦命門弁　一
纂言方考　三
刪水家訓　二
医学随筆　一
怪痾一得　二
刪水子　二
医学愚得　三
養生主論　一
医方間餘
續方考
脉要源委
堪輿輯録
脉要訓蒙
必用灸穴
秘訣授調
病家要論　三
十　二三
金匱要畧注解　十
医方規矩　三
藥方規矩　三
婦人房中補益論　一
医方摘要　二
源泂集抄　七
摸蘇録

中江藤樹　名原　字惟命　称与右ェ門
孝経啓蒙
大學啓蒙　一
大學解　一
大學考　一
中庸解　一

論語解　一
郷黨翼傳　三
藤樹規　一
原人
持敬圖説　一
文録　一
書翰　一
詠草　一
鑑艸　六
春風　一
翁問答
太乙神經
日用要方
小医南針
神方奇術
医筌
十　二十四
捷徑医筌　六
藤樹先生遺稿　二
同年譜　一
同行状　一
同知止歌小解　一
藤樹先師學術旨趣大畧　一
心学文集　二
江西文集

中井竹山　名積善　字子慶　称善太
　弟積徳　字處叔　号履軒
　称徳次
詩律兆　四
非徴　七
やてにはかゝり　先人書云　一

書名	注	冊數
淀陰志		
逸史		十三
通語	積徳	
幣帚	同	一
中山花陽軒		
	名忠義　称三折	
增補医方口訣集		三
切要方義		五
病家要覧		八
遂生雑記		三
醍醐随筆		四
飛鳥川		三
蹄涔集		一
保児三方		三
十		二十三
中村惕齋		
	名欽　字敬甫　称七左エ門	
四書鈔説		十二
近思録鈔説	活字本	十四
周易程傳鈔説		四
西銘鈔説		一
性理字義鈔説		一
孝經示蒙句解		一
四書示蒙句解		二十八
詩經示蒙句解		十八
小學示蒙句解		十
近思録示蒙句解		十四
筆記周易本義		十六
同易學啓蒙		四
同讀易要領		四
同書經集傳		十三
同詩經集傳		十六
同春秋胡傳		四
同禮記集説		十五
同四書集註		
同大學或問		一
同通書解		一
同西銘解		三
同太極圖説解		三
同律呂新書		三
同敬齋箴		一
易學啓蒙翼傳		一
學規假字直解		一
家礼訓蒙疏		五
慎終通考		七
追遠通考		五
六		二十六
慎終疏節		二
追遠疏節		一
親尊服義		二
入學紀綱		一
講學筆記		一
朱子為學要言		九
增補訓蒙圖彙		十五
古今州郡圖		六
學制考		一
本朝學制考		一
百官稱呼		一
韻學私言		二
文集		十三
日鈔		三十
天文考要		三
五緯行度圖譜		一

書名	注	卷
三器通考		六
三器考畧		一
医方三器通制		一
律尺考驗		一
姬鑑		三十一
四書	点	
五經	円	
小學	円	
律呂新畧	円	
孝經集解		一
中村蘭林	姓藤原 名明遠 字子晦 一号盈進齋 称新藏	
學山録		六
講習餘筆		四
十		二十七
讀易要領		
讀詩要領		一
孟子考證		一
諸子考證		
大學衍義考證		十
學規口解		
通俗解翼義		
謝上蔡語録附考		一
宗廟考		
幹文考		一
盃怪録		
寓意録		
餘冬贅語		
群居總論		十
衆説彙編		五
閑窓雜録		四

書名	注	卷
喪服私擬		
喪祭畧		一
百官抄		二
南唐昏畧		十
弁詩傳膏肓		一
医方綱紀		三
五綸		一
群籍綜言		
舊唐畧纂		三
李退溪畧牘纂		四
大東世語評		一
中村三近子	一号絅錦齋 称平五	
南方紀傳	校	七
象貢献		一
十		二十八
四民往來		四
俗字指南車		一
悉皆世話字彙		一
刪補以呂波韻		一
一代書用筆林宝鑑		一
滿字節用錦字選		一
文通書用字便蔵		一
年中用文章		五
華用文林富貴蔵		一
和國通用書翰箱		五
百家文章自在箱		五
文章指南調法記		五
艶玉百人一首		一
謡曲画誌	画中図	一
兒戲笑談		四
司外蕭		四

六諭衍義小意　三
昏札調法記　六

中根白山
姓平　名璋　字元圭　一号律襟軒　称丈右エ門
皇和通暦　三
三正俗解　二
天文啚解発揮　三
律原発揮　一
異躰字弁　二
算法不作集　三
同七乗巾演式　二
古暦備考　四
筌蹄集　二
韻鏡明解　四
十　二十九
暦算啓蒙　五
天元蒙幼　二
増補多識編　六
字彙直横啚諺解　四
割圓八線表解義
律龍暦
暦學私言
授時暦俗解　四
授時暦啚解発揮　三
日月去地面實數　一

中根氏
準　字彦循　称保之丞
竿頭算法　一
勘者御伽雙紙　三

闕方盈朒術　一

中西氏
名敬房　字如環
暦學法數原
櫻花譜　一
晴雨便覧
風雨賦國字解
懐中長暦

中西淡淵
名維寧　字文邦　称曾七郎
淡淵集　十
二家詩品　校一
十　二十一

永冨嘯菴
名鳳　字朝陽　一号独嘯菴　長門荻人
漫遊雜記　一
吐方考　一
嚢語
黴瘡口訣　一

永田觀鵞
名忠原　字俊平　一号東皐
儒林姓名録　一
大東詩家地名考　一
詩語砕錦　二
嘯社吟稿　一

擬集古録　十
攝津志　自四十九至六十一　四
和泉志　自四十四至四十八　二
河內志　自廿七至四十三　三
大和志　自十一至廿六　七
山城志　自一至十　九
名永　字宗永
並河五一居士

蝦夷松前圖　一
天文管窺抄　一
地球萬國圖說　一
唐土古今沿革圖　一
十　三十一
大清廣輿圖　一
禮記王制地理圖說　一
同郡村入　一
改正日本輿地路程全圖　一
大日本地理志
赤水雜錄　一
赤水草年　一
安南國漂流記　一
長崎行役日記　一
東奥紀行　一
名玄珠　字子玉
長久保赤水

時賢名人錄　一
蘇門山人傳　一

名常伯　一作丈伯
苗村氏

室町殿物語　十
室町殿日記　二十
名長教　號永醉　稱市郎左門
楢村氏

神武卷　一
神代卷校　二
大八洲記　十三
日本逸史　四十
陸奥守　正三位　名祐之
梨木桂齋
十　三十二

[illegible]　一
[illegible]　一
絕句解拾遺　一
題跋記　一
飛鳥山碑文詩歌　一
名信遍　稱道筑　又名鳳卿　字歸德
成島錦江

[illegible]記　一
松山晤語　一
天民遺言　三
名亮　字簡亮　五一弟
並河天民

正德成問增補頭書　三
俗解纂方集　八
錦繡段熟字訓解　一
貞永式目頭書　一
庭訓往来繪入　四
同首書　二
節用集首書　三
女重宝記　五
理窟物語　六

内藤氏　名希哲　字師道
医経解惑論　六
傷寒類編　十三

十　三十三

南宮大湫　名岳　字喬卿　称弥六　一号積翠館
古文孝経指解補注
大學考
中庸古註　校
書今文定本
同纂言
禹貢地理指掌圖考
春秋三傳比考
小爾雅
歴代備荒考
大湫集
守成編
勸學編
芸窓放言

漁翁私言
病餘瑣言
講餘独覧
移居帖
獨笑
茶説

十　三十四

近代著述目録

堤朝風原輯
萬笈堂英遵補定

(武)

室鳩巣

周易新疏 名直清 字師礼 一字汝玉 一号滄浪 称新助　十
周易講義
四書講義
大學新疏　二
中庸新疏　二
西銘詳義　一
太極圖述　一
六諭衍義大意　一
五常五倫名義　一
ム　一
前編鳩巣文集　十四
補遺鳩巣文集　十一
後編鳩巣文集　二十
朝鮮客館詩文稿　一
士説　一
楠正成諸士教　一
駿臺雑話　五
国喪正議　一
献可録　二
義人録　二
不亡抄
神儒問答　一
鳩巣小説 一名逸話　三

村田氏
名通信

詩林良材後編　十
鞄菴雑録　一
明君誓古畧　一
通俗唐玄宗軍談　二十

村田氏
姓平 名春海 字士観 称平四郎
假字拾要　二
歌苑古題類抄　二十
かなの色合 校　一
涼月遺草 同　二
與稲掛太平書　一
重與稲掛太平書　一
作文通弊 旧名時文摘紕　一
和學大槩
ム　二
齋明紀童謡考後按　一
五十音辨誤　一
字合稱呼考　一
椿太諸記　一
神道志
假字大意抄　一
字鏡考證
琴後集　十五

村士玉水
名宗章 称剛蔵
二禮儀畧　四
六藝名義　一
文會社約　一

村井氏
名昌弘 称大輔

單騎要畧六編　三十六
被甲弁　五　家業弁　七
軽卒弁　四　兵格弁　二
製作弁　五　成功弁　十三
神武講習家訓　二
耶蘇天誅記　二十
伊勢治乱記　十二
八陳合考　三
武門畜會　五
武學先入　三
邊地指南　三
同後編　三
武林字藪　五
神武迪精　十
神武迪精標題　一

ム　三

村井平柯
名新　平安人　字中漸　號目林邸盛外史
落楓稿
三器徵
算法童子問　六
開商點兵算法　二
滄溟尺牘国字解　三
別霍篇　一

㊁宇
宇都宮遯菴
名的　又三近子　字由的　一号頑拙斎
鼇頭四書集註　十
小學詳解　十四

近思録首書　十四
忠經首畧　一
蒙求詳説　十六
蒙求爵位考　三
文選音註　二十一
杜律集解首畧　六
杜律集解増益首畧　十二
杜律詳説　十七
千家詩首書　二
千家詩俚諺抄　五
三躰詩詳解　二十三
古文前集首畧増益校正　八
古文後集首畧増補　七
錦繡段首畧　三
錦繡段首畧抄　十
錦繡段詳注　三

リ　四

遯菴詩集　六
三五韻　二
花見記　一
職原抄首書　五
日本古今人物史　七
詩林廣記前集点　十

宇野明霞
名鼎　字士新　称三平
論語考　六
左傳考　三
姓氏解　二
名字解
語字解
唐詩集解　八
唐詩正律　二

書名	注記	冊数
七絶聲律		一
七才子近體詩考		二
蘐園名公四序評		一
明霞遺稿		四
宇野東山	名成之 字	
詩經古注標註		二十
詩經國字解		十
古文尚書標註		十三
書經諺解		六
左傳箋疏		六十
同魯曆考		一
論語集解國字辨		五
四書國字解		十
ウ		
列子國字解		四
呉子国字解		三
新刻蒙求国字弁		六
蒙求啓		三
宇林玉篇大全		一
医宗金鑑	傷寒部	八
筆法闕疑拾遺		三
唐詩選解		三
唐詩選便蒙	附注	三
朱注詩經標解		六
宇佐美灊水	名恵 字子迪 称惠助	
絶句解	点	一
同考證		三

書名	注記	冊数
絶句解拾遺	点	
同考證		
辨道考		一
辨名考		二
古文矩文変考		二
南留別志	校刊	五
王注老子	再校	二
訓點千字文		一
輔儲編		四
蘐園録稿		二
宇治五十槻園	名久老 姓荒木田 内宮神主	
万葉考槻乃落葉	三之巻附記附	八
日本紀歌解		三
續日本紀歌解		一
ウ		六
竹取翁歌解		一
肥前風土記	校正頭注	一
同豊後風土記		一
同出雲風土記		一
和名類聚抄	古本校正	十二
祝詞考	校訂	三
祝詞考追考		一
古言清濁弁論		一
難波旧地考		一
酒之古名區志之考		一
迩飛麻那微	校訂	一
歌意考	同	一
文意考	同	一
古器考	同	一
古事記歌解		二
播磨下向日記		一

鷄飼石齋
名信之　字子直　始号石巷　男名平　名直昌　次男名真泰
古文後集諺解大成　二十
草字韻會增補　点　五
運氣論句解　五
明清闘記　十一
編年小史　五
和漢珍書考　三
朱子語類大全　点　百四十
朱子學的　同　一
淮南鴻烈解　同　十
白虎通　同　四
風俗通　同　四
武備志　同　百
杜詩集註　同　二十四
韓文　同　四十
ウ
七
柳文　同　三十六
類經　同　四十
法曹至要抄　同　三
萬姓統譜　同　百四十
歷史綱鑑補　同　四十
四書大全　校訂　官板　二十三
通鑑綱目　金平点　百十
魯齋全書　同　七
自省録　二
詩林廣記後集　十
宋名臣言行録　真泰点　十二
四書存疑　点　十五

上田鶏之屋
名秋成　称餘斎
冠辞考續貂　七

落久保物語　校　六
伊勢物語古意　校　六
よしやあし屋　一
縣居歌集　校　一
静舍歌集　同　一
万葉集見安補注　池永秦良筆記　五
靈語通　一
古今集打聽　校補　二十
大和物語　校　二
梅沢西郊
名甫　字惟文　称与十郎
本朝名臣言行録　二
同拾遺
建國功臣傳
韓非子集考
王知編
ウ
八

雲林院知非齋
名了作　平安人
傷寒論国字解　六
傷寒論分量考
金匱要畧国字解　五
千金方拾字解　二
龍玉方　五
万病回春抄解　二
本草備要便覧　一
丹家本艸增注　三
問證録　一
（印）

井沢蟠龍子　名長秀　称十郎左門
俗説弁　七
續俗説弁　三
新俗説弁　五
廣益俗説弁　二十一
同後編　五
同遺編　五
同附編　七
同残編　八
同終編
武士訓　五
廣益武士訓
武士男子訓　五
明君家訓　二
大和女訓　三
井
女訓鵙鳩草　二
神道訓
神道天瓊矛記　二
本朝諸社誌大成
本朝俚諺　十
和名考
漢字和訓　二
同後編　五
難字訓　二
西海紀談
肥後国地志畧
菊地佐々軍記　十
武家高名故事　五
舊説拾遺物語　四
今昔物語　改正纂補　三十
十訓抄校訂　十

井上金峨　名立元　字純卿　称文平
孝經集説　一
大學古義　一
易學弁疑　一
經義折衷　一
經義緒言　一
霞城講義　一
讀學則　一
師辨　一
匡正録　一
金峨文集　七
三礼断
論語集説
考槃堂漫録　一
井　十
病間長語　一
左氏傳箋説　一
答問録　一

井上蘭臺　名通煕
周易古註校　十
詩經古註　同　二十
左傳異名考　一
七才子詩集解　三
三韓世表　一
畾南稿
騶象俗談　一

井上氏
通女　讃岐丸亀人

書名	注	卷數
狂犬咬傷治方	名実夫　字元丈	一
佛足石碑銘		一
(於)		
大高坂芝山	名季明　字清助　又有喬松子貴衆岡等号	
喬松子		
南學傳		二
適從録		
存一稿		六
餘花編		二
唐錦	季明妻藤氏	八
高氏家譜	男義明撰	
才		十三
大和田氏		
	名氣求	
說文解字	校	五
玉篇釜引		十一
漢玉字引		一
字彙頭書		十五
和字彙		九
篇海類編	附求字篇　校	二十一
伊呂波集韻		四
袖珍字考韻畧		一
簠簋首昏		六
方丈記泗説		三
徒然草古今抄		八
大和家礼		八

書名	注	卷數
大内熊耳	名承裕　字子綽　称忠太夫	
明四先生文範		四
熊耳文集		十六
太田南畝	名覃　字子耜　称直次郎	
撮壌編		
蘇廉の苞		
一話一言		二十二
群昏一斂		十
續群昏一斂		十
三十輻		十六
才		十四
續三十輻		十
百瀬川		
百禾香		
改元紀行		二
壬戌紀行		二
芦の若葉		三
同附録		二
遡游從之	太田覃問　藪慶望答	一
石楠堂随筆		二
昌平餘業		一
仰高日録		二
惟林一葉		二
泗上呵筆		一
宛丘傳		一
蜀山餘録		二
流鏑馬頬考		一

書名	冊數
浮世繪類考	一
街談録	四
家傳史料	五
南畝叢谷 前集卅冊	後集卅部
百舌草莖	二
大學抄稿校	
四才のあり	二
七観	一
万載狂歌集	二
後万載狂歌集	二
狂歌才若集	二
狂歌新玉集	二
狂歌福神双六	一
寝惚先生文集	一
小説土平傳	一
東風詩草	一
才	十五
通詩選七言古	一
同諺解	一
同笑知	一
狂詩十才子名月集	一
不老不死仙家長壽臺	五
狂歌百物語	一
瓊浦雜綴	三
同又綴	二
調布日記	二
玉川餘波	一
同遺佩	二
瀬田問答 太田覃問 瀬名貞雄答	一
明詩擢林	一
観光集 日光從行詩	一
高雄考	一
沿海異聞	四

書名	冊數
廣三十輻	一
杏園閒筆	四
大枝氏	
名流芳	
香道おく花志をり	四
同瀧の糸	二
同彩の玉あ	二
同千代の秋	四
同秋の光	四
附録香志	
抛入岸の波	二
雅遊漫録	七
貝尽浦の錦	二
大岡氏	
才	十六
名春卜	
畵本手鑑	六
畵史會要	六
和漢名畵苑	六
畵品	三
欄間圖式	三
甲州廿四將圖	一
名花十二種	一
和漢名筆画品	三
似錦集	二
丹青錦囊	六
画功潜覧	六
明朝紫硯	二
鹿画便覧	三

北征集	
卜居集	二
一名行 字天民 號詩聖堂 又號詩佛 稱柳太郎	
大窪柳塘	
環海異聞	十六
沿海遊志	二
中山聘使錄	三
暎涯漫錄	十二
磐水漫草	二
溫泉參考	二
奇々次第	四
泰西新話	三
既濟撥法	一
蘭譯要訣	一
蘭說夜話	二
才	十七一
度野迦考證	一
泰西醫說	六
大西藏瘡方	三
蘭說摘苔	七
耋烏錄	二
六物新志	二
蘭學階梯	二
名茂質 字子煥 稱玄沢	
大槻磐水	
熙朝樂事文譯	一
児語聯	一
海亭名詩	一
名弘	
大沢氏	

稽古錄	八
直見編	一
中庸考	二
中庸說	二
論語名義考	一
論語作者考	一
大序十謬	一
壁經辨正	十二
易解	
疑問錄	二
大學考	二
論語大疏	二十
三論異同	一
六義考纉考	二
三經微管	二十
梅本增多原	十二
才	十七二
繫辭詳說	二
名元貞 字公幹 稱才佐	
太田錦城	
詩聖堂詩集	
詩學自在	二
同二編	
同三編	
詩聖堂詩話	一
詩聖堂百絕	一
比頭集	
再遊集	
龍潮集	
西遊集	

九經談　十
錦城百律　一

大塚蒼梧　姓橋 名嘉樹 字敏卿 稱市郎右衛門
裝束拾要鈔校正　二
深窓秘抄傍註　一
良家子說　一
正從濁音考　一
文飾私考　一
白馬節會拜見記　一
歷代將軍略譜　一
紫古今同異考　一
古称數目　一
閏月称後月考　一
曾公真影畫飾考　一

十七　才

寬政改元雜叓　一
六位藏人臆斷　一
度地一步考　一
引兩字義　一
流內流外畫解　一
関東坂東考　一
神前帶劔考　一
位署式補義　一
位署式補義或問　一
古今左右尊卑辯　一
撿非使篇別註　一
大刀契考　一
服飾正誤　一
服飾類聚　三
中書侍從帶劔考　一
麴塵黃櫨染考　一

国郡大小名義差別　一
歲時故実大槩　一
代與世差別　一
狩衣種類　一
直垂私考　一
叙爵称謂　一
乗輿品目　一
足衣制作　一
几帳制度　一
末額物品　一
慶賀笏記　一
事物異称　一
勘解由字義　一
刀劔畧說　一
十二階與當位同等椄　一
傳奏次第　一

十七四　才

角大師真影讃談　一
僧侶官位志并附錄　一
百寮官位相當畧　一
立蔭解　一
女帝子為親王解　一
京師條路圖解　一
魚綾考　一
釵子考　一
尺度考　一
綾文考　一
凶事衣冠考　一
喪服互異考　一
六等九級三十階考　一
伊雜伊蕪兩宮考　一
儀同三司考　一
尉斗目名義考　一

笏考　一
端午幟旹考　一
俗称年忌厄年考　一
国司国造考　一
年賀贈物名目考　一
鈎點引墨考　一
馬車旧義　一

㊇

熊沢了海　名伯継　字次郎八　一号蕃山　又息游軒
大學小解　一
中庸小解　二
論語小解　七
ク　十八
孟子小解　七
孝經小解　二
易經小解　附卦原　七
大學或問　一号經濟弁　二
孝經外傳或問　二
夜會記　八
集義和書　十六
集義外書　十六
源氏外傳
宇佐問答　二
紫女物語
葬祭弁論　一
神道大義
二十四孝評　、
女子訓或問
何物語　三

もたむけ草　一
三輪物語　、十五
熊澤淡菴　名　初名雄八　後称猪太夫
武家砕玉話　一号武将感状記　十
應兵記
随筆
勢真國美論
熊坂台州　名邦　字子彦　称宇右ヱ門
西遊紀行　二
同別録　五
信達歌　二
ク　十九
白雲舘文罫　一
合鍚紀支　一
詩眼式
文眼式
黒岩慈庵　名字未詳
除患録　一
君臣要畧　八
黒川梅林
名玄逸　字道祐
本草弁疑　五
本朝医考　三

菅家後集　校　一

雍州府志　十

藝備國郡志

有馬志

日次記事　十二

栗山潜鋒

名愿　字伯立　称源助

保元大記　二

敝帚集　二

神功皇后論　一

窪井雀汀

名惟忠　字良祐　称源兵イ

ク　二十

初學正論　二

古訓輯要　三

名義集覧　四

朽木侯

增補改正珍貨孔方鑑　二

增補改正孔方圖鑑　一

新撰錢譜　初刊三巻　再刊五巻

古今泉貨鑑　不分品　六七八　三

同獻勝品　九一十二　三

同背文錢　十二十三十四　三

同近代和泉　十五　一

同古文錢　一

泉貨分量考　一

西洋錢譜　二

彩雲堂藏泉目録　一

泰西輿地圖説　六

ク　五十一

近代著述目錄

堤朝風原輯

萬笈堂英遵補定

㊥

書名	冊數
山崎闇齋	
文會筆錄 名嘉稱嘉右エ門 後更垂加 字敬義	二十九
垂加文集	八
同續	五
同拾遺	三
四書序考	四
大學啓蒙集	七
孟子要畧	四
朱易衍義	三
小學蒙養集	三
ヤ	一
孝經外傳	一
闢異	一
孝經詳畧	二
中和集說	一
仁說	一
逐錄	一
逐鹿評	一
大家商量集	一
讀書要	一
夜寐箴	一
刑經	一
武銘	一
張書鈔畧	一
程書鈔畧	三
明備錄	一
朱書抄畧	五
沖莫無朕說	一
孟浩錄	一
本朝改元考	一
垂加草	一
經名考	一
大和小學	五
孝經刊誤附考	一
雲谷記	一
溫泉遊艸	一
敬齋箴	一
不自棄文	一
江府紀行	一
遠遊紀行	一
再遊紀行	一
會津風土記	一
責沈文	一
ヤ	二
朱子輯要	四
中臣祓風水草	一
日本書紀註	十五
神代卷風葉集	十
本朝事蹟異稱考	一
白從抄	一
四書 点	十四
孝經 同	一
小學 同	二
近思錄 同	五
五經 同	十一
周易本義 同	十
易學啓蒙 同	二
太極圖說 同	一
周子書 同	一
文公家礼 同	四

論孟精義　同	二十八
學規　同	
社倉法　同	
拘幽操　同	一
朱子奏劄　同	一
朱子訓子帖　同	一
朱子訓蒙詩　同	一
山北紀行　同	一
神代巻　同	二
古語拾遺　同	一
洪範全書　同	六
城南雑録　同	一
五友詩　同	一
山鹿素行子	
名義臣　字高祐　甚五左エ門	
武教本論	一
武教小學	一
武教總要	七
武教全書	六
武教要録	五
同續集	一
同別集	一
武教餘録	二十
武教三等録	三
武類全書	四
武事記	五十
聖教要録	一
手教要録	四
備教要録	十
治教要録	三十一
治平要録	二十
備要録	十
四書句讀大全	二十
七書諺解	三十八
孫子句讀	
孫子口義	
兵法神武雄備集	五十二
雄備奥儀抄	五
戰略考	三
古今戰略考	十二
兵法或問	二
師弟問答	三
足軽左右	五
百結字類	百二十
中朝事實	二
自得奥義	三
結要品	七
弁或論	一
掌用集	一
一騎武者受用	一
大星大事目録	一
三重極意傳授	一
八箇條一子相傳之極秘	一
子孫傳録	一
修身受用抄	一
職分記	三
謫居童問	三
謫居問答	三
配所殘筆	
山鹿語類	四十三
古戰折本	
武具短歌	

神道 書
神武雄畧
修身要録
本論
士談

山岡而慍齋
名元隣 字徳甫
大學明徳之啇 一
四書詳論
歷代異考
源氏家傳抄
百人一首新抄 三
伊勢物語言餘抄
徒然艸鉄槌増補 六

ヤ 五

徒然艸別傳 二
方丈記抄 一
小杯
増補食物歌本草 七
宝蔵 五
水鏡抄 二
誰身上 五
百物語評判 五
誹諧仕様 一
随葉集大全 七
諸国独吟 二
身楽千句 二
腰越状抄 一
風月往来抄 一
今川抄 一

山岡明阿弥陀佛
名浚明 字子晃 称左次エ门
本朝類聚名物考 四百余
文のたより 七
逸著聞集 二
源氏物語逸文考
筆のまし
跖婦[illegible] 三
伊香保口号 一
嵯峨釈迦像考 一
示蒙抄 一

山縣周南
名孝孺 字次公 称少助

ヤ 六

文集詩集 十
為學初問 一
養子説 一
講學日記 一
作文初聞 一

山形柳荘
名昌貞
院政紀畧
省私録
柳子新論
天経発蒙

山脇東洋
名尚徳 字 称道翔 江戸医官

養壽院医則　一
臟志　二
外臺秘要　校
方函

山口寳齋
名　字
内經素靈精義　八
難經管窺　二
傷寒論講義　卜
時疫治方神昬　二
銅人引經演義
日用修治集宜　一
医學水土辨　二
医學温故辨　二

や　七
山宮雪樓
名維信　字仲淵　称勘兵衛
八朝紀聞
薫風編

山本静観房
称善五郎
角田川鏡池傳　五
當世下手談義　五
續下手談義　五
教訓雑長持　五
増續江戸鹿子　十二
秩父圓通傳　五
荊萱道心行狀記　五

當風辻談義　五
銭湯新話　五
蓮生法師傳記
山莊太夫事跡考
新撰因果物語
疱瘡咒咀秘傳集　一

山本北山
名信有　字吉六　孝經樓　学半堂　奚疑塾
孝經樓詩話　二
較定孝經　一
經義掫說　一
經義掫說緒餘　四
孝經樓漫錄　六
答問書　三
文藻行潦　三
や　八
作文志彀　一
作詩志彀　二
文事考　五
程朱異同　一
今古究原　六
學術淵源考　二
作文率　四
文用例証　三
文用例証續編　三
詩用例証　三
文事正誤　七
助字率　十
詩率　一
尚書後辨　十
神主考　一
北辰考　一

書名	巻数
孝經樓文集	五十
古文尚書考	十
中庸辨	一
經說	十
大學弁	二
論語正義	
笑堂福聚	毀板
詩藻行潦	
以て洛もおし	
むしのりふと	一
いてえ物語	
日本外史	
日本事類集成	千
避暑漫抄	五
奚疑塾随筆	七
秋間漫筆	三
詩用虚字	四
孝經集覽	二
經義含	一
弁范	一
韓文公書牘	二
袁中郎尺牘	一
三家絶句	一
三家詩醇	
學庸正義	
神儒實學矩	一
義士雪冤	一
竹堤園詩話	一
文事原始	三
温泉記	一
王鄭異同	一
正謬說	三
易象義解	五
書叢	十
衣冠弁	八
錢考	二
養老考	一
書画談	二
古今彼我經濟區別	十
鈴杉雅咏五十首 今扉雅咏五十首	合一
古今学沿考	二
古文尚書勤王師	三
春秋孔志	一
李鼎祚易解義疏	十六
官職通解	五
	又九
三礼古器考	三
作文例證	一
文事證拠	五
學半堂雅談	一
論語說	五
廣文藻行潦	七
小道可觀	三
尚書勤王師	

山田畠南　名正珍　字宗俊　姓菅原

書名	巻数
傷寒考	一

權量揆乱　一
内外経古傳
胃度弁誤
桑韓華語　二
傷寒論集成　十
天命辨　一

保井氏
姓源 名春海 字算哲 称助左エ門 保井又作安井
私謚土守灵社
貞享暦　七
貞享暦法通暦　五
天文瓊統　八
分野畧　一
星象畧　一
春秋杜暦考　一
ヤ　十
昏詩禮暦考　一
日本長暦　三
瓊矛集
春秋述暦　一
新蘆面命　一
梁田蛻岩
名邦美 称才右エ門 字景鸞
文集前集　八
學範　一
答問書　二
文集後集　七
清詩選

(末)
真野氏
姓藤波 名時綱 称健助

古今神學類聚鈔　百
神国篇 六　神道篇 五
神階篇 十二　諸院篇 六
祭物篇 四
以上五篇三十三巻梓行余寫本也
津島牛頭天王祭記　一
神家常談　三
神代巻畧解　一
中臣祓或問　三
六根清浄祓風葉抄　二
本朝學原浪華抄　七

松永道遊軒　名貞徳 晩年称長頭丸
御かうくさ　十
マ　十一
百韻注　一
歌林雑話　一名貞徳戴恩記　二
徒然草慰艸　八
百人一首抄首昏　三
消息　或称文集　二
和句解　六
沙川油りす　二
堀川百首抄　一名肝要抄　五
逍遥愚抄　六
源氏覚宴　一
歌林樸樕　二十八
前車集　七
紅梅千句　一
貞徳家集　三
万水一露　校　六十二
徒然草長頭丸抄　二

書名	注記	巻数
松永講習堂	名遐年 字昌三 一号春秋館 又号尺五堂 男昌易 二子永三	
五經集注首書		五十七
四書事文実録		十四
古文後集首書		五
三體詩首書		六
彝倫抄		一
古文後集抄	昌三	七
小學集說抄	永三	六
春秋胡傳集解	点	三十
本朝文粋	同	十五
莊子抄	昌三	十
蒙求抄	同	十
滿贏子孫教		二
マ	く	十二
松下西峯	姓橋 名諸生 字見林	
習医規格		一
運氣論疏抄		十三
本朝學原		一
異称日本傳		十五
前王廟陵記		二
國朝佳節録		一
評閲神代卷		二
公事根源集釈		三
神国童蒙先習		一
職原抄参考		五
見宜翁傳		一
太玉命社記	古語拾遺句解ニ附刻ス	一
三代實録	点	五十

書名	注記	巻数
松下烏石	姓葛 名辰 字君嶽	
艸書禮部韻	校	六
草決百韻歌		一
新草决百韻歌		一
艸訣辨餘歌		一
百詩帖		三
行書唐詩選		三
廣金石韻府	校	六
消間印譜		二
書法小例		一
書法群碎		一
筆法帖		二
蘭花帖		一
マ		十三
孝經		二
六躰千字文		六帖
圯上漫筆		一
定本正續書譜	校	一
中書楷決	同	一
唐詩聯選		二
七才詩集	校	一
新千禄字書		一
拾遺千字文		二
春臺碑帖		一
烏石山人傳		一
朗詠集		二
百人一首		一
書學大槩		一
沿誕井銘		一

書名	冊数
松田一楽　名秀任	
武者物語	三
同抄	七
三将軍解	八
古今得失論	三
松岡恕菴　名成章　字玄達　又号怡顔斎	
用薬須知	五
同後編	四
同続編	三
本草一家言	
本草彙言摘要	四
マ	十四
日用食性捷径	十五
食療正要	四
庖厨正要	二
怡顔斎桜品	一
梅品	二
広参品	一
介品	二
蘭品	二
菌品	
苔品	一
詹々言	二
結毦録	三
千金方薬注	四
松岡氏	

書名	冊数
姓丹治　名辰方　字士辛　称平次郎	
装束織文図会	一
装束織文図会附録	一
女官装束織文図会	一
装束図抄	一
続装束図抄	一
十二單着用図	一
小袿着用図	一
張着着用図	一
皇統略図	二
官位相当圏図	一
武田小笠原略系図	一
武鑄并化粧略記	一
武家装束皆具略記	一
右十三部印刻絶板	
服忌便覧	一
マ	盡
右掖官禁	
手綱服帯図式	一
貞須豹文書色目考	一
令式服色図考	一
冠図	一
位階便覧	一
親王諸王考	一
続諸門跡譜	一
涼暗愚抄	一
成化門院御送葬抄	一
御火屋之図	一
続々皇胤紹運録	一
松井氏　名幸隆　称帯刀	一

愚問賢注六窓抄　五
古今和歌集類題　一
三玉和歌集類題　七
韋隆和歌集類題　一
雨中吟未来記聞書　一
溪雲問答　一

松井四維州
姓源　名暉度　一号耕讀園　称甚五郎
文章軌範　校　三
續文章軌範　同　三
莊子因　同
讀示作文譜　点　十二
附父師善誘法

マ　十六

松井氏
名　字　号　称材菴
脚氣方論
龍門一家言
傷寒綱目
脉學啓蒙
假名難經　三

松崎井白
名祐之　字多助
新編私考歴史徴　七十
古押譜　七
史論奇抄　七

松崎観瀾
名堯臣　字子允　君準時　字子默　一字君脩　号觀瀾　称才藏
文集　十
詩集　六
窓のすさみ　三
同拾遺　一
最要抄
正言　二
五論　一
乾坤小説
觀瀾紀事　一
觀海集
儒學傳　子允
三勇傳　同

マ　十七

松宮観山
姓菅原　称主鈴　名俊仍　字旧貫
學脉弁解　一
學論　二
同二編　二
同三編　二
三教要論　一
續三教要論　一
国字論
聲母傳
国星傳
分度餘術　六

和漢奇文　一

増谷氏
姓荒木田 内宮神主 名末壽 称大学
内宮外宮弁詳解 二
一号もとさの海
五部書説弁正義
三角挙要門諺解 四
暦算全書法原捷解

萬尾氏
名時春 称六兵才
井田畝考 二
規矩分等集 二
勧農固本録 二

マ 二十一

(不)
藤原惺窩
名粛 字斂夫 一号北肉山人
四書大全頭書 二十二
惺窩文集 羅山林子編集 五
男為景編集ノ文集ホ十巻アリ
後光明天皇御製ノ序ヲ附ス
惺窩續集 玄同菅子編集 三
文章達徳録 写本 百
假名性理 一
千代もと草 一
列子点 四
文章達徳録綱領 十
文章達徳録 百

藤井懶齋
名臧 字季廉 一号伊蒿子
始云真鍋忠菴玄逸
大和為善録 五
国朝諫諍録 二
本朝孝子傳 三
本朝孝子傳平假名 六
閑際筆記 一号和漢太平廣記 六
睡餘録 四
二礼童覧 二
竹馬歌 一
蔵笥百首 六
徒然草摘義 三
ときて本 一
讀否餘吟 一

フ 二十一

藤井氏
名見陰
医療羅合 十二
幼科発揮 一
眼目精要 二
難病方彙 一

藤井無佛齋
名貞幹 字子冬
古尾譜 一
国朝書目 三
好古小録 二
好古日録 二
好古雜録
逸号年表 一

集古圖
六種圖考 六
衝口發 一
金石遺文 一

藤野木槿翁 名氏恭 字東圃
大和學的 一
正續疑孟 一
秋風錄 三
笑話出思錄 一
詩品

藤田雄山 名貞資 字子證 称權ア 男門弥 名嘉言 字子彰 号龍川
フ 二十三
精要算法 三
改正天元指南 五
神壁算法 嘉言編 二
再訂算法 同上

富士谷氏 名成章 字仲達 称専右ヱ門 京師人 皆川伯恭弟也
かざし抄 三
あゆひ抄 六
六運圖畧
北辺集
北辺七躰七百首 一

富士谷氏 成章男 名成壽
百家部類抄 十
百家類葉 二
歌道非唯抄 一
哥袋 八
詞葉新雅 一
同二編
いましこと 一
古事記燈 二

古林桂菴 名正温 字見宜 号壽仙房 一
青嚢真方 六
正温方 五
詩活
詩活首尾 三
妙藥速効方 一
フ 二十三
外料單方 五
配剤 二
医學入門假名抄 十二
日記中揀方 五
假名雲林神穀
撮要方
難經或問 五
医學童子抄 十
香具畫 二
白文入門 六

古林氏 見桃
宝餌正規 一
教訓忍草 三

杏林華談 二

古谷氏 名久語

南朝略史

古谷草紙 一

勢州海道新古考 一

勢陽雜記拾遺 三

伊勢国風土記残編 一

古屋愛日齋 名昭 字

周易說

尚書說

ワ 辛酉

毛詩說

春秋說

礼記說

孝經說

論語說

毛詩品物考

字考

子說

雜說

古川古松軒 名辰 字 称市郎兵衛

東遊雜記 十

西遊雜記 七

九州勝景圖 一

四神地名録 八

㔾

小瀬甫菴 名道喜

前関白秀吉公御檢地帳之目録

朝鮮国御進発之人数帳

政要抄 右三部合一本活字本

信長記 十五

太閤記 二十二

童蒙先習 二

太閤軍記 四

大正軍記 七

兒島黼齋 名恭 字尚善

毋子艸 三

毋子方鑑

コ 二十五

五井蘭洲 名純禎 字子祥 称藤九郎

古今通 二十

源語詁 桐行ノ源語評釈ハ是ヲ盗剽セル也

質疑篇 一

瑣語 二

茗語

非物編 七

兵論

勢語通 二

新題百首 一

後藤梧桐菴

訓□　名光生　字私淸
物品目録　二
和産目録　三
合鑒本草　三十五
河豚祥　一
春秋七草　一
尺八志　一
經學策　二
都老子　四
同後編　四
龍宮船　四
梧陰閒談　五
珍刀畫　一
大便經　一
震雷記　一
古今沿革考　一
コ　二十本
隨觀寫眞　二十
後藤芝山
名世鈞　字　称弥兵衛
元明史畧　三
官詞百首　一
和漢年鑑　一
左傳音釈　一
四書集註　点　十
五經　同　十二

後藤養菴
名達　字有成　称三一郎　号竹庵
□甫　字良之　称行助
良山文集
傷風約言　一

芥灸通説
病因考　一
一家稿

江村氏　名如圭
詩經名物辨解　七
周易本義国字解　五

江村北海
名綬　字君錫　称傳左衛門
北海詩抄　二
同二編　三
同三編　三
エ　二十七
北海文抄　三
日本詩史　五
同續編　一
日本詩選　七
同續編　七
刪定日本詩選
日本文選
日本經學考
日本史畧
樂府類解　五
杜詩刪注
唐詩訓解刪注
七才子詩集訳説　二
蟲諫　三
授業編　十

(天)

出口氏　正四位下　信濃守　外宮神主　度會　名延佳

鼇頭舊事紀　十
鼇頭古事記　三
神代卷講述抄　五
中臣祓瑞穗抄　二
同追考　二
二所皇太神宮遷宮次第記　五
同遷幸要畧　一
太神宮司神支供奉記　三
太神宮參詣記首書　一
太神宮或問　一
神宮秘傳問荅　一
神宮續秘傳問荅　一
〆　二十八
神代畧　一
神異記　一
陽復記首書　二
類聚神祇本源
神名帳考證
太神宮殿舍考證　二
伊佐波登美神考證　一
三輪考　一
書簡
隱顯集
大成經破文

出口氏　延佳男　名延經

首書延喜太神宮式　一

二所皇太神宮神名畧記　一
神支随筆　一
齋宮部類　五
弁卜抄　一

寺島氏　名良安

和漢三才圖會　八十一
三才諸神本記　五
滌生宝　五

手島堵菴　名信　近江屋源右エ門　後更嘉左エ門

子弟訓　蓋岳先生著　一
〆　七十九
商人夜話草　同上　三
壓ゆらり　同上　三
知心辨疑　一
坐談随筆　一
前訓　一
眠さまし　一
身体柱立　周防由房著　手島先生附録　一
腑隠去　周田敬鵬光著　手島先生附録　一
町人身体ホし　一
家休ゑ　三
安樂問弁　一
朝倉新話
目ざまし用心揃　一
會輔　一
明徳和賛
講義旨趣　一

近代著述目錄

堤朝風原輯

萬笈堂英遵補足

(安)

安東省菴　名守正　稱魯中納　字

安藤年山　名為明　姓平　水戶　號為章　称新助

安藤氏 名有益
筭法改正録
奇偶方數 一
宣明暦抄 七
東鑑暦考 一

安積澹泊齋 名覺 字子先 称覺兵衛
澹泊齋集
湖亭渉筆 四
老圃詩䐢 一
朱文恭遺事 一
大日本史論賛 十
大日本史賛藪 五
ア 二
神祖遺事 一

安達清河 名脩 字文仲
市隱草堂集初編 五
同二編 五
同遺編 一
安談録
孟浪之言
詩準
詩典
向風艸初編 二
同後編 三
相中紀行 一
東毛紀行 一

新井白石 名璵 後更君美 字在中 一号天爵堂 從五位下筑後守 称勘解由
東雅 二十
東音譜 一
花押藪 先生自撰 四
本朝軍器考 十二
本佐録考 一
列朝実録
小牧戰話 一
藩翰譜 二十
藩翰譜系圖 六
神祖法意解 一
折焚柴記 三
古史通 五
ア 三
古史通或問 三
讀史餘論 三
方策合編 十
百家編 十
五色筆 二
新令句解 二
癸巳三月議 三
進呈案 一
續方策合編 八
長崎御用昏物 八
以酊庵事議艸 一
將軍宣下三十一度儀不同次第 一
經邦典例
田制考 二
貨幣考 二
車輿考 二

書名	注	數
袴服考		三
樂舞考		二
職官考	以上經説典制也	九
聖像考		一
人名考		一
三家考		二
決獄考		一
木瓜考		一
文字考		三
俳優考		
玉考		一
樂考		一
樂對		一
地名河川両字通用考		一
殊号事畧		三
外国通信支畧		一
ア		四
本朝宝貨通用事畧		一
高野山事畧		一
琉球事畧		一
蝦夷事畧		一
鎌倉事畧		一
九州事畧		一
金幣事畧		一
火器事畧		一
骨董録	即五事畧也	三
白石詩艸		一
白石餘稿		三
停雲集		二
白石艸集		
新井家譜		一
新井家系		一
古器圖		一

書名	注	數
集古圖説		二
孝德天皇白雉衛		
黄白問答		
黄白問答後編		二
車服制度手記		三
山料殿白石問答		
高倉殿白石問答		
倭地形類		一
那須国造碑考		一
五十四郡考		一
奥羽海運記		一
江戸遺聞		
日本行程考		一
蝦夷志		一
南島志		二
西洋圖説		
ア		五
采覧異言		五
殊方通信録		
西洋紀聞		三
西洋人物集		
西學推問		
西學考畧		
和蘭紀事		二
阿蘭陀風土記	又号阿蘭陀考	
坐間筆語		一
江關筆談	朝鮮趙泰億撰	一
朝鮮之詔		四
朝鮮礼聘事		二
聘事文案		三
国晉復号紀事		一
国晉文通考		一
詩經圖		一

經說
史論　六
史疑　二十二
大極畜述　二
孫子兵法擇　十三
同副言　二
文公家礼考　三
五服畜　一
鬼神論　四
弁疑録
語助集解
舜水解疑
珊瑚網　百川学海ノ抜萃也　四
說苑粋　一
鷄肋稿　一
天爵堂漫抄　一
ア　六
畫工便覧　一
一帆集
空華集
屛風賛　一
品華威考　一
日本紀神代巻考　二
日本紀論　一
岩松氏系譜考　一
朝鮮信使進見儀注　一
昏契文談
同文通考　四
姓名考　五
淮后考　一
義家朝臣古畜考　一
高子観遊記　一
奉命教諭　一

朝鮮信書式　一
應接事議　一
聘事後議　一
鴻臚軼談　一
陶情集　一
市舶議　一
市舶新例　一
改貨議　三
改貨後議　一
真珠船　十五
蔽園録
雜録　十
退私録　四
紳書　二
紺珠　二
白石遺文　三
ア　七
白石遺稿　一
續善隣国宝記　一
本朝河功畧記　一
畿内治河記　一
新安手簡　三
同續募
白石手簡　贈土肥氏父子　一
同　贈室鳩巣　九
同　贈小瀬復菴　二
同　贈南森芳洲　一
同　贈佐久間洞岩　四
同　贈遣弥六近顕　一
教諭諺解　一
國郡字考　一
新井黄州
冬前登　外白織　宇識書　及古[illegible]部等[illegible]

古易断 十
同外篇 十
古易時言 四
同外篇
古易精義 一
古易一家言 一
同一家言補 一
古易通
周易精蘊
滄溟尺牘児訓 三
易学類編 三
易学小筌 一
梅花心易評注 一
古文孝経発 三
唐詩選児訓 律之部 四
同絶句之部 三
ア 八
同文通考 補拔 四
牛馬問 四
聖学自在 三
老子形気 五
小学読
書経通考 同字箋
左国易説
蒙求発
論語彙某考
詩経解
広易学必読
日本国名解
雨森芳洲 名俊良 字伯陽 称東五郎
橘窓茶話 三
たはれ艸 三
朝鮮略説 一
隣好始末物語
橘窓文集

鶏林聘事録 五
交鄰提醒
雨森牛南 名宗真 字名門
瘍治大槩 五
松蔭医談 一
脉候本義 一
詩訟蒲鞭 一
万日紀行 二十
松蔭春秋 三
論語貫説 五
歳時問答 二
雨森子筆京 二十
冬窓呵筆 三
傷寒論講義 十二
ア 乙
菜石外編 十
雑鳩
姑存集
浅見絅斎 名安正 称重次郎
物之説 一
精一集説 一
父母存説 一
明徳説 一
論性諸説 一
三綱八目知止能得 一
敬義内外説 一
大極図説解 一
童子習 一

忠士筆記　一
靖献遺言　八
同講義　二
聖學講義　一
氏族弁證　一
白鹿洞掲示考証　一
四箴附考　二
拘幽操附考　一
辨大學非孔書弁　一
批大學弁断　一
宗廟啚　一
聖學啚　一
宗法啚　一
六族啚　一
九族啚　一
擯介啚　一
ア　十
大戴禮記　点　二
朱子文集　円　百
詩藪　円　十
小學講義　六
喪祭小記　一

朝倉氏
姓日下部、名景衡　称孫右門
鎧着用次第　一
愚得随筆　八
定西法師琉球物語
本朝軍器考啚式　四
遺老物語　二十
備前老人物語
三河之物語
故諺記

東照宮御遺訓
同附録
石谷土入昏
本佐録
豊臣秀吉出生
太田道灌自記
福島正則遠流記
永禄以来出来初
蝦夷乱紀吏
遠州三方原合戦
閑田雜記
島原記
油井根元記
介石記
見聞集抄出
打出抗
ア　十二
老談一言記
越後騷動根元記
水野家記
松平陸奥守家騷動記
三河記脫漏　以上共四種

跡部光海
姓源　名良賢　称宮内　後改良顯
神學發明　二
神代混沌草　附録一巻　五
三種神器集説　一
中臣祓清浄艸　一
排仏説　一
南朝編年録
玉鉾道艸　一

伊香保紀行　三
夢窓説　一
三種神器秘傳抄　一
菌黒弁　一
神代講談畧　五
神武紀葵艸　二
古語拾遺示蒙節解頭畧　二
御鎮坐次第記要波艸　一
御鎮坐傳記日輪艸　一
十種瑞宝秘傳畧　一
国号傳　一
正神邪神論　一
神道喪祭家礼　一
安坐傳　一
心御柱和訓傳　一
日少宮傳坐死説　一
ア　二
混沌傳考畧　一
土金三種大祓　一
土金秘訣傳　一
三種神器傳来考　一
土金蘊古並五行弁書　一
垂加翁神説　一
夷大黒記　一
庚申待傳　一
猿楽傳　一
七夕考　一
天文暦道抄畧　一
龍雷傳　一
和字傳来考　一
自従抄口訣　一
誕生墓目傳　一
古今三个大事

光海翁筆録

秋山玉山　名儀　字子羽　一号時習館　称儀右二門
詩集　六
遺稿　六
墨子全書　校　六

秋里籬島　名舜福　字湘夕　京師人
都名所畫會　六
同拾遺　六
都林泉名勝畫會　六
ア　十二
京之水　二
附　花洛往古畫　一
大内裡畫　一
大和名所畫會　七
河内名所畫會　六
和泉名所畫會　四
攝津名所畫會　十二
伊勢路名所畫會　六
同後編　六
東海道名所畫會　六
播州名所畫會　五
木曾名所畫會　七
住吉名所畫會　五
須广明石名所畫會　六
誹諧早作傳　一
誹異　一

榊原香山　名長俊　称一学
本邦刀劍考　一
中古甲冑製作弁　三
東鑑異本考　一
江戸誌　潮名貞雄同撰　卅
駿河国志　四
東鑑部類索引　十

齋藤氏　名　称主鋭
武馬必用　五
馭馬大元記　三
兵家古戦傳　五
軍器要法　二
漢楚秘訣評林　五

廿
十八

寒川氏　名辰清　称伊太夫
武射必用　四
近江輿地志
本朝四民本傳　三
同續編
異説弁証
脱漏支始
故実集義便蒙
近江国式社考

酒井南向亭　名忠昌　称助之進
續談海
南向茶話　一
求涼雜記　一

澤村琴所　名維顕　字伯暘　称宮内
八陣本義
桓公問對
冨強録
琴所稿刪
閑窓集
井家新令
吾藩諸牒政蹟

廿
十九

沢田東江　姓源名鱗　字文龍　称文次郎
書則　一
啓話　三
文草
詩草
春宴帖　一
同續　一
百人一首　一
書述　三
書府　一
文淵遺珠　二
歴代名家姓名録　一
法帖考　五
金石考　五
印章畧　一

集古印選　三
校正玉堂禁経　一
來禽堂集
日章齋碑帖　一
明月帖　一
古文孝経　真　一
赤壁賦　行　一
和漢年代歌　真　一
書範　初年作　一
書学筌　同　一
古今集序　一
千字文　真行草
尺牘帖　二
(幾)
木下長嘯子
十　廿
名勝俊　一号天哉翁
四生うた合　一
うかひ松　一
衣の哥合　二
攀白集　已上四部门人山本春正輯　十

木下錦里
名貞幹　字直夫　称平之允　始称順菴　諡恭靖先生　男名寅亮　字汝弼　号蔡溥　一号竹軒　称平三郎
錦里文集　十
班荊集　二

木村氏
名高敦　字世美　称弥十郎

武徳編年集成　九十三
武徳安民記　三十一
四戦紀聞　校正　四
昭代実録
武家閑談　七
續武家閑談　二十
武野燭談　三十

木村蒹葭堂
名孔恭　字世肅　称吉右衛門
弇山園記注　一
銅器来由私記　一
大同類聚方　学校正本　一
周易鄭氏注　三
易乾鑿度　二
十　上下
尚書大傳　五
儀礼逸経傳　一
訂正爾雅　十
匡謬正俗　八
甘氏印正
集古印則　二
四声発音考　一
奠茶要訣　一
沈氏画塵注
國姓爺合傳　二
木内石亭
名重暁　字　称小繁
雲根志　六
同後編　六
同三編　六
同拾遺
諸国漫遊奇石譚　五

諸国産石誌
曲玉問答　一
矢之根石考　二
舍利之弁　二
龍骨之記　一

祇園南海　名正卿　称与一　後吏瑜　字伯玉
詩學逢原　一
明詩俚評　一
一夜百首　一
同後編　一
咏物集
鍾秀集　一
キ　二十二
危言
題咏主意
鏡花水月集
賔館繡紵集　二
詩決
南海詩集初編　五
湘雲瓚語　三

北村拾穗軒　名季吟　一号呂庵　称再昌院
源氏物語湖月抄　六十
枕艸紙春曙抄　十二
土佐日記抄　二
百人一首拾穗抄　四
伊勢物語拾穗抄　四

大和物語抄　六
万葉集拾穗抄　三十
八代集抄　百八
歌仙拾穗抄　五
女郎花物語
徒然艸文段抄　七
増補題林抄　八
ねりしき　二
埋木　一
歌仙発句　一
山之井　五
續山之井　七
師走月夜　三
新続犬筑波集　十
いなご集　二
岩清水　二
キ　二十三
七十二物諍　一
十會集　一
廿會集　一
諸国独吟　二
續連珠　十
三物記
室咲百韻　一
尤千句　三
誹諧合　六
両吟集　二
和漢朗咏集注　十
次嶺經　八
六々私抄　三
假字列女傳　八
古今教端抄
堀川百首追考

疏儀莊記　一
和歌詞之抄　十五
徒然吟和抄　五
北山氏、
名壽安　長壽人
刪補衆方規矩　八
首書纂言方考　三
首書大成論抄　十
首書医方口訣集　三
名医方考繩愆　七
北山医案　三
清田儋叟
名絢　字君錦　一号孔雀樓主人　称文平
キ　二十四
五經旁訓　十四
史記律　六
通鑑三編批評　十
唐詩府
唐土行程記　一号通俗漂海録　四
藝苑談　二
藝苑譜　一
孔雀樓文集　四
同筆記　四
五雜組注
菊地氏
名守未詳　称弥門
柳営秘鑑、　十
同後編　十二
同拾遺　八

同脱漏　十三
同残集　十一
同温知　十三
同新益　十一
柳営儲孫君事録　十三
柳営婦女傳叢　十八
栗岡雀下菴
名治涼
日本行程記　一
江戸砂子　六
續江戸砂子　五
諸国里人談　五
藻塩袋　五
奇占支談　五
キ　二十五
近代世支談　五
俳諧後編　三
懐宝規矩　一
誹諧烏山彦　三
本朝俗諺志　五
北静廬
名慎言　字有和　号梅園
續古事談注　五
宇治拾遺物語抄　三
寛平以来公卿系表　一
四時雑識　十三

書名	巻数
嬰兒遊戯考	、
東鑑不審問答補正	一
五雜俎訓纂	十六
傷寒論後條辨解	二
水滸傳新譯	十二
四書笑門譯	一
譯語正偽	六
俗語類譯	二十
雪窓呵筆	二
静廬雜抄	四
梅園日記	四
キ	二十五巾
岸本 名由豆流 称讃岐 号椎園 又号棣棠園	
土佐日記考證	二
鳴門中將物語	一
多武峯中將物語	一
堀河院百首考證	三
永久四年百首考證	二
十六夜日記考證	二
契沖雜記考證	二
同雜々記考證	二
皇朝風土記鈎沈	
江談抄考證	五
故事談考證	六
諸國土産考	八
曾丹集考證	一
草山和歌集考證	一
風葉集校本	十
新らうゞむ屋物語考證	五
濱松中納言物語考證	四
契沖俳諧哥考證	一
棣棠園雜稿	五
八代集増注	五十
椎園類纂	三十
題畫歌選	十
和泉式部家集標注	四
日本紀竟宴和歌標注	一
古今餘材抄校本	二十
古今序考	一
徒然草考證	五
漢故事和歌集考證	一
續漢故事和哥集	十五
古事記裏書校	一
キ	二十五巾
太秦牛祭画巻 校	一
日本現在書目録 校	一
椎園儲藏志	十
讀書爲宗	百
㊀由	
湯淺常山 名元禎 字子祥 称新兵才	
常山樓文集	五
常山紀談	十二
常山樓筆餘	三
東江筆記	一
西帰筆録	一
備藩典刑	一

文會雜記　二
兩夜燈　一
熊沢先生行状　一
左傳解
同兵車圖　一
湯土問答　湯武元禎問 土肥經平答　二
幼學指掌
焚餘稿
烈公遺事　一
君則　一
(美)
水島氏　名元成　称卜也
四季法礼
女子轉礼
水島記　二十六八

三宅尚齋　名重固　称丹二
狼疐録　一
白雀録　一
為貧説　一
慎術説　一
祭祀来格説　一
默識録　二
三宅氏
名道乙　字子燕
通鑑綱目　点　百六
祭礼節解　二
二十九
小學集説　点　六
三宅観瀾　名緝明　字用晦　称九十郎
中興鑑言　一
支機閑談　一
復讐録
三宅氏　称帯刀
和漢歷代備考　十
大唐年代記　政廿一至今寳十二
官職備考　島篠村八水作　七
職原抄追加抽解　一

本朝年代記 九

三宅滄浪
名方隆 字文甲 称南山

俳諧古選 …

同新選 二

宇治大納言物語 校正 三

かゞみ草 二

通俗酔菩提傳 五

俳諧瓢單集 一

和漢嘉話宿直文 五

三輪執齋
名希賢 字善藏 又号躬耕廬

易手記 二

日用心法 一

堯典和釈 一

〻 三十一

古本大學 校 一

傳習録首書 三

救餓法 一号社倉大意 一

雜著 四

陽明學名義 二

四言教講義 一

三熊海堂
名思孝 称主計

續近世畸人傳 五

雨月菴記 一

東北院歌合 校訂 一

三浦龍山

名　字　称五太夫

開窓自適 一

徂徠學則解 一

明七子尺牘 一

三浦洞仙
名晉 字安貞 一号梅園

詩轍 六

寓意 一

教訓

梅園詩集 二

宮川一翠子
名　字

〻 三十一

訓蒙要言故事 十

和語圓機活法 十一

詞林意行集 八

西湖八景詩大全 二

ちくの友 五

拾遺意行集 三

宮川南谿
姓橘 名春暉 称石見介 致仕称梅仙

傷寒論分註 一

同外傳 一

同逆言 一

痘瘆水鏡録 一

同玉環方

葉方小牋 一

東遊記 六

書名	冊数
同後編	五
同三編	
西遊記	五
同後編	五
北窓瑣談	二
宮崎氏 名安貞	
農業全書 附録ハ貝原楽軒ノ作也	十一
敬艸	二
宮瀬龍門 姓劉 名維翰 字文翼 称三右ヱ門	
龍門文集初稿	六
、	[illegible]
同二稿	六
同三稿	六
東槎餘談	一
古文孝経国字解	一
劉氏無尺蔵	
李王七律解	二
鴻臚傾蓋集	一
宮部氏 名義正 称孫八 高崎家国老 妻曰万女 男曰義有 共ニ古作哥	
三藻類聚	三
義直詠艸 以上二種三藻類聚	
萬女詠艸 上巻ノ中ニ収	
三藻日記	四
同五百首	一
同千首	一
歌へのうら	一

書名	冊数
同春集	一
皆川淇園 名愿 字伯恭 称文蔵	
周易繹解	十
易原	二
易學開物	
蓍卜考誤并正	一
書経繹解	六
詩経繹解	十五
詩経助字法	二
左傳助字法	三
史記助字法	二
儀礼繹解	八
大學繹解	一
、	三十二
中庸繹解	一
論語繹解	十
孟子繹解	十四
老子繹解	二
荘子繹解	
列子繹解	
荀子篇旨	二
名疇	六
問學挙要	一
虚字解	二
同後編	二
実字解	八
習文録	二
同後編	二
唐詩通解	六
唐詩所絶句選	二

杜律評註　六
淇園詩話　一
同詩集　三
同文集　三
同文訣　二
同荅要　三
唱和吟　一
医案類語　五
游記類語　五
春秋非左　点　二
歐陽公全集　円　九
歐蘇文彈　一
王道昆尺牘註　二
虚字證解　十一
習文錄　三編　二

㊄之

シ　三十四

白井白雲散人　名宗因
神代巻私説　八
神社啓蒙　八
神社便覧　一
中臣祓白雲抄　二
職原抄句解　十二

下河辺長流　本氏小寺　名具平　称彦六
万葉集名寄　四
枕詞燭明抄　三
續歌林良材　一号和歌秘宗集　二
累塵藻水艸
晩花集　一

林葉累塵抄　十
萍水和歌集　十
百人一首三與抄　二
歌仙抄　二
曾根好忠家集　校　一

下津春抱子　名壽泉　字
篆言要方　十
医方詳解　十二
痘疹医統　五
奇疾便覧　五
婦人方彙　一
小児方彙　一
参考衆方規矩　三
本朝名医類案　五

シ　三十五

清水春流　名　字
儒家十牛圖　一
釣虚詩集　一
百絶詩艸　一
心詩百詠　一
續徒然艸　四
釣虚散人法語　一
懺悔物語　二
三教同旨　一
徒然艸新注　四

篠崎東海　名維章　字子文　称金吾

東海談　二
和學弁　四
不問談　一
續不問談　一
故実拾要　十五
詳畧日本史
なゝゐ悪一　校注　五
朝野雜記
三韓紀畧　校
懷卷秘章
唐音雅俗語類　校　五
復性弁　同

謚井大室
名孝德
シ　二十六
国史
建官考
扶桑名勝　二
讀易會意　三
雜畜　三
韓非子正誤　一

司馬江漢
名峻　字君岳　一号春波樓
天球全圖　銅版　一
和蘭天說　一
地球全圖　銅版　一
同畧說　一
西游旅譚　五
東都八景　銅版

春波樓畫譜
和蘭奇工
シ　二十七

近代著述目録

堤朝風原輯

萬笈堂英遵補定

(此)

人見卜幽

名壹　字道生

五經童子問

莊子口義棧航　九

東見記　二

林塘集　二

土佐日記附註　三

日向陶菴

名俊英　字

ヒ

本草校異　二十

本艸釣衡　十八

日夏氏

名繁高　称四郎左衛門

本朝武林源始　七

兵家茶話　十二

參松傳　十五

本朝武藝小傳　七

續兵家茶話　三

平住氏

称専安

唐土訓蒙圖彙　十五

分類故事要言　十

本草雋　一

孔門必讀　五

袖珍医方大成　一

平間風觀齋

名長雅

長雅集　三

百人一首秘注　二

咏歌大本　五

題讀曲切紙　一

風塵記　三

片岡山　五

冨緒川　二

平賀鳩溪

ヒ

名国倫　字士彝　称源内

放屁論

同後編

痿陰隱逸傳

天狗髑髏鑒定縁起

里のをだまき評

飛んだ噂の評

以上六部集ト云

仙法奇場 菩提樹之辨　一

當世ちよ瓦　五

同後編　五

仙術夊のある木

虚実山師之弁　五

當世野夫論　五

遊里大和詞

諸国自慢

金神論
秘術工夫箱
風流出来料理
世間腦の捷
賢愚氣性競
當世袖の振合
產物出眼鏡
蛇腹青大通
導通一人案内
飛花落葉　一
祢る一多　五
同後編　五
風流志道軒傳　五

神霊矢口渡　一
荒御魂新田神徳　一
弓勢智勇湊　一
七　三
忠臣伊呂波実記　一
前太平記古跡鑑　一
源氏大艸紙　一
嫩松葉相生源氏　一
万國圖　一
大淵布晒説　一
物類品隲　六
秘傳花鏡　校　六
実生源氏金王櫻　一
浸枕褥合戰　一
こつな文選　一
秘術工夫箱　三
平瀬氏
名光雄
射學要録　二
射學精要　二
射學的中
射法本紀詳説

射法示教
射法弁疑
射法砭病
射礼家訓
堂射小教
弓矢制作録
弓器量式

平野窮黙軒
名昌傳
圓規啓蒙　一
測圓術解　一
輿地各国積解　一
歳差里差両晝和解　一
和蘭暦交食考　一
七　四

平沢氏
名随貞　称左内
卜筮経驗　十二
卜筮卦爻問荅　三
増補旨節　一
医道便易　一
卜筮旨節大全　三
増續卜筮旨節　仲徳校訂　二
卜筮白虎傳

平沢旭山
名元愷　字俸庚　称五助
漫遊文艸　五

華陽皮相　三
璵浦偶筆
文集

久川玄圃　姓大江　名資衡　字穉卿　称數負
孝經古點
大學古点
古点考
間合早學問　二
學翼　二
女學範　二
唐詩紳　一
唐詩覓　四
唐詩旒
七　五
唐詩戴　一
唐詩履
盛唐詩格　四
三体詩解　三
詩聯光彩數量牋　二
詩聯雙對通用牋
江吏部集　校閲
問佩集　一
詩集　五
文集　五
續文鑑録
書家畧
名媛墨妙集　三
菅公手植梅銘　一
觀月帖　一
應制詩帖　一

消息帖　一
臨米元章十字文
琴録
琴學入門
古琴葯彙
梅花樓琴譜
江家次第箋注
装束類纂
和歌職原捷徑　二
詩礎国字解　一
詩語国字解　一
日本詩故事選　二
歴朝詠物詩選　校訂　四

㊀毛

毛利貞齋
名瑚珀　字廬白
七　六
四書俚諺抄　十
四書集註俚諺抄　五十
孟子井田弁　一
孝經增補首書　二
孝經評畧大全　四
易學啓蒙合解評林　七
老子直註　二
莊子俚諺抄　二十
蒙求標題俚諺抄　一
蒙求俚諺抄　十五
蒙求大綱抄　三
蒙求諺解首書　九
通俗戰国策　十八
五代史軍談　二十五
歴代要覧纂考　五
事類全書　点　三十一

類字箋解　十二
年中故実　一
陳平六奇考諺解　二
顔体俚諺抄　名千金宝　十五
韻鏡袖中抄　十一
増續大廣益會玉篇大全　十二
字数早鑑大成　十二
増補円華集　二
詞補三重韻　一
助語辞頭書　二
助語辞諺解大成　五
初学指南抄　一
歌行詩首書　三
古文俚諺抄　二十
古文後集合解評林　十
古文備考　四
七　十
錦繡段首書　二
錦繡段詳解　五
九相詩首書抄　二
句雙帋首書　四
護法論備考　四

森儼塾
名尚謙　字利渉　又号不濡居士
護法資治論　五
同後編　五
儼塾集　十

森東郭
名鉄　字大年　称彦右ヱ門

易道撥乱乍　一
非辨道　一
非辨名　二
黄庭経　校訂　一

森腸氏
称箪斎
神代巻一覧　二
大祓詞詁訓　一
神国立教篇　一
史昏発叔考　一
勢記要語抄　一
神道学語　一

桃井白鹿　七　八
名　字　称源蔵
世説考　二
荀子遺秉　三
説苑考　二

望月鹿門
名　字　称三英
明医小史　一
医官玄稿　三
初医抄　二
三世方　一
痎癧神方　一
医学五則　二十
医門多疾　十
又玄餘草　六

望月長好
名長丈　後改長兵衛　号小狭野屋
廣沢輯藻　四
桂雲集類題　一

本居鈴之屋
壮年名宣長　後更中衛　号舜庵
古事紀傳　四十四
訓改 新刻古支紀　三
神代正語　三
神代紀髻華山蔭　一
七　九
歴朝詔詞解　六
大後詞後釈　二
出雲国造神壽後釈　二
馭戎慨言　四
玉くしげ　一
同　写本　二
直毘霊　一
葛花　二
鉗狂人　一
附水子のうへの物語
天祖都城辧々　一
はうき木の辧　一
国号考　一
真暦考　一
漢字三音考　一
字音かなつかひ　一

初山路　一
訓改 萬葉集　二十
万葉集玉の小琴　追加三　一
万葉集追考　一
古今集遠鏡　六
後撰集詞のつかね緒　一
美濃の家づと　五
同折添　三
古今選　三
草菴集玉箒　七
玉かつま　一
詞の玉の緒　七
玉あられ　一
紫文要領　二
源氏年紀考　一
玉の小櫛　九
七　十
手枕　一
鈴屋集
近調哥三　古風哥一　長哥一
文詞哥二　續二
手向艸　一
仰聰図薄長歌　一
櫻三百首　号枕の山　一
玉鉾百首　一
菅笠日記　二
紀美能米具微　一
狭ひもてふる枕の系案　一
地名字音轉用例　一
玉賀都萬　巻数不定
初刻　二　二刻　三
三刻　三　四刻　三
呵刈葭　一

答問録　一
本居系图　一
家の昔かたり　一
国歌八論并斥非評語　一
石上私淑言　二
疑齋辨　一

本居藤垣内翁　名大平　称三四右エ門　始稲掛十介茂穂
玉鉾百首解　二
八十浦の玉
名くはし浜ちと
巳未紀行　一
和屋紀行　一
古言類聚
姓氏録考
十一
答村田春海書　一
有馬日記　一
稲葉集

諸葛氏
名　字
鬘髮山人集初編　十五
平氏春秋　二
焚書收燼　七
讀論語　十
大學考　一
易筮探賾　一
律量全編　四
唐詩格　二
經學或問　三

鄭華畧言　二
孝經考　一
墨子箋　三
印則　一
古碑考　一
諸葛詩傳
政語
李王文解
涵月樓雜記

本木氏
名　字　称仁八夫　長崎人
和蘭候象器附解　一
新制天地二球用法記　七
海經　一
十二
最上氏
名定矩　字德内
蝦夷草紙　三
度量衡説統　二
藻塩草　一
㊊世
瀬尾用拙齋
名維賢　字俊夫　称源兵衛
用拙齋文集
本朝忠義雜説　三
八居題咏　二
熙朝文苑　七

開自由亭　名孝和　称新助

發微算法　一

同演段諺解　建部賢弘　三

括要算法　大高由昌編　四

算學玄訓

算脱正限法　一

演段例　二

開松窓　名脩齡　字君長　称宗一郎

周易音義　校　一

尚書音義　同　一

国語畧説　四

戦国策高誘注補正　六

セ　十二

(寸)

鈴木氏　名正三

盲安杖　一

万民徳用　一

驢鞍橋　六

草庵雑記　五

麓の艸分　二

念仏双紙　二

因果物語　三

破吉利支丹　一

でうすを物語　一

二人比丘尼　二

自巳安心　一

鈴木龍洞　名行義　字子述

古文中臣祓正文　一

中臣祓筆解　二

同諸注集覧　十

旧事記大疑　二

卜筮論　一

二呑弁　一

同追考　二

射具本語考　二

神道呑目集覧　一

穂積艸　四

好古軒随筆

好古軒讃語　五

ス　四

龍洞随筆　四

仁齋徂徠得失弁　二

大宰氏弁道呑正誤　二

大學諸注集覧　四

中庸諸註集覧　四

論語朱氏新注正誤　十

鈴木澶洲　名煥卿　字子煥　称嘉蔵

扮海一得　二

經史摘語　二

形容字考

治道要解

尺牘筌　一

論語考

經史成語解

助語辭訳文

鈴木松江　改雅五盈　名玄淳

唐詩平仄考　二

和漢年代歌　一

又　十五

近代著述目録

堤朝風原輯

萬笈堂英遵補定

㊝

僧鳳潭　名濬

華嚴經五教章傍注　三

同匡真抄　十

華嚴字輪毘盧遮身觀　一

華嚴探玄記玄譚

同畧匡真鈔　二十

倶舍論冠注　十四

倶舍論新抄

四教儀集注增暉記

楞嚴經千百年眼髓　五

十不二門指要鈔隠𥳑　四

因明大疏瑞源記　八

三論玄義首書　二

万国掌菓𡈽　一

梵網戒本疏紀要　六

同龍鳴斥謬　一

維摩經発朦抄　五

圓覚經集注日本訣　五

仏門衣服正儀編　三

戒脉禳芳訣　一

圓宗鳳髓　二

紅爐反唾劄　二

編界紅爐雪　三

鉄辟雲片　三

觀音義玄記　二

圓門境觀還源策 一
兩部神道心鏡錄 五
金剛經會本 二
金剛錍逆流批 三
金剛搥論 一
起信論義記會本 五
同幻虎錄 五
同僞解謗 一
同講義斥謬 一
同註疏詳畧 一
布鼓集 二
密軌問辨破書
菩提心戒義破文
一喉劄返破
念仏明道劄 二
指迷顯正訣索印 二

蓮門禦衣篇雪鴉箋 一
蓮門脚掃篇牙旂 一
淨土折衝篇雷斧 二
僧服正檢却撓訓 二
紅爐一叉唾劄 二

僧靈空

名光謙字靈空号幻々庵

法華文句講錄 二十五
止觀講錄 二十五
妙宗鈔講錄 四
指要鈔詳解謗注 四
和語雜錄 四
和語續錄 又続一 三
止觀大意講錄 一
法華入疏講錄 十二

法華經開題無量義經
艸堂雜錄 同續又續 三
法花弘傳序集說 一
內外境觀二境弁 一
問話錄 三
彈拾遺 五
二千酬 六
喩蔵錄 二
四十二章荅 一
始終心要畧解 一
同戒要畧解 一
台宗綱要 一
觀音疏講錄 四
天台淨名疏會本 十
畧教誡經講錄 一
觀心誦經講錄 一

觀心食法畧釈 一
清僧詩選 一
因明俗詮 二
一枚起請勞觀記 一
楞嚴文句講錄 六
法華會義講錄 二
彈忌錄畧咸細評 一
相輪㰏銘畧釈 一
仁王般若經合疏講錄 三
妙宗抄講錄拔雲決 三
仏心印記箋要講錄 二
十如是畧解 一
遺教經解俗談 一
教行樞梳 一
圓學經集注俗談 二
般若心經釈要俗談 一

- 金剛經破空論俗談　一
- 金剛經天台疏講録　一
- 阿弥陀經要解俗談　一
- 法花經入疏講録決正　六
- 境觀要門箋要講録　二
- 十不二門詳解諺注　四
- 即心念佛安心決定談義本　一
- 同或問　一
- 同或問餘説　一

僧義瑞
字　号

- 法花經畧疏　十

四

- 弁内外二境弁　二
- 境觀拾遺　三
- 二百難　五
- 即心念仏談義本弁偽　一
- 即心念仏談義本弾妄録　一
- 天台四教義直解　四

僧六如
名慈周　字六如　号白樓
号無著菴

- 金剛般若瑞應編　三
- 放生功徳集　三
- 葛原詩話　二
- 同後編　二
- 六如詩鈔　前後　三
- 閲藏知津　校正　二

僧日達

- 三大部随聞記　三十八
- 玄義　八　文句　十三
- 止観　五　追加　二
- 法華經大意　三
- 法華經音義　一
- 教王備考　二
- 不二門義　一
- 文心解要文　一
- 顕性録要文　一
- 四教儀鈔　三
- 十如是私記　一
- 自鏡慚恥集　九

五

- 聚雪抄　二
- 無碍道論　一
- 安国論抄　二
- 童蒙発心抄　五
- 廻向通不　一
- 嘉會宗義集　二　一
- 千代見草　二

僧元政
俗姓石井平之丞　元政仕于彦根
侯名日政　号妙子　或号不可思議
住于深艸瑞光寺

- 小止観鈔　三
- 衣裏宝珠抄　一
- 釈門章服義　点　二
- 如來秘藏録　六
- 釈氏廿四孝　一

書名	注	巻数
釈門孝傳		一
龍華傳抄		三
龍華歴代師承傳		一
本朝法華傳	此ハくうか本八冊	二
扶桑隠逸傳	二版有	三
身延山七面記		一
身延行紀		一
温泉遊草	有馬ニテノ詩文和哥也	一
称心病課		一
草山集		三十
草山要路		一
艸山和歌集		一
宝物集	校	七
谷口山詩集	艸山集ノ中ヨリ詩ヲ拔出タル也	六
食医要編		一
以空上人方丈記首書		
六		
法花珠林	点校	百
刪定止觀	点 梁蕭氏	五
元元唱和集		二
聖凡唱和		一
袁中郎全集	校訂	四十
僧泊如		
運敞僧正		
秘藏宝鑰纂解	内一巻ハ或問也	七
三教指帰刪補		七
性霊集抄	貞享中著	十七
性霊集便蒙	再治	十
付法傳纂解		五
寂照堂谷響集		十
同續集		十
瑞林集		十
退隠唱和集		一
同續集		一

書名	注	巻数
大日經疏啓蒙		五十六
同釈啓蒙		四十一
同疏釈䟽義		四
大疏續啓蒙		一
大阿字		
閑窓編		二
同辨疑		一
却心義章		三
僧通玄		
梵網戒經資講抄		五
教戒律義指要抄		一
梵網戒經本疏引拠		二
即身義圓鏡鈔		二
七		
梵字八囀聲		一
弁惑通衡		二
戒本宗要資講鈔		一
教戒律義問釈		二
八齋戒得道抄		一
光明真言勧発記		一
宝篋印陀羅尼假名抄		一
行者霊驗記		二
法華會義引拠		四
梵網本疏引據增補		一
同古迹資講鈔		五
僧亮汰		
大日經住心品科註		三

書名	冊数
釈論本疏序科註	二
菩提心義科註	三
仁王経序科註	一
阿字義杖記科註	二
薬師経科註	四
舎利礼文科註	一
心経科註	一
礼懺金胎科註	三
五供養偈科註	一
錫杖経科註	二
父母恩重経科註	二
尊勝陀羅尼科註	三
地蔵延命経科註	二
木槵子経科註	一
珠数経科註	一
念誦経科註	一
八	
大随求陀羅尼科註	三
十一面観音経科註	一
却温神咒経科註	一
光明真言科註	二
同照闇鈔	四
理趣経科入	一
同純秘抄	三
観音経選註	三
不思儀疏鈔	三
起心論序註	一
菩提心論三摩地秘記	一
同教相記	二
僧覚彦　名浄厳	

書名	冊数
法華秘略要鈔	十一
法華略要	一
光明真言観誦要門	二
梵網経集解頭略	一
悉曇三密鈔	八
弁惑指南	四
法華新注首略	十二
種子真言集	一
真言大課誦	三
朝暮課誦	一
諸真言要集	四
普通真言蔵	三
真言二時作法	一
真言施餓鬼作法	一
授法撮要	二
秘密観行要覧	二
九	
法華要略妙義	一
大辧財天秘訣	三
妙極堂誡儀	一
通用字輪巻	一
念珠略詮	一
随求陀羅尼異本義	一
答四問篇	一
三大義鈔物	
法界一観篇	二
摩多躰文	一
毘沙門天別行儀軌	一
即身義冠註	二
二教論通解	一
同娑誐羅鈔	一
真言風庫集	二

書名	註	巻数
十八道作法		二
五部秘經校正		
大日經奥疏指校正		
不思儀疏指		
秘密諸儀軌指		
理趣經不斷經		
住心品冠注玄談附		九
僧契仲		
	名空心 俗姓下川氏 号圓珠菴	
古事紀抄		
日本紀校		三十
同竟宴歌頭書		二
厚顏鈔		三
万葉集代匠記		二十
同總釈		二
古語拾遺抄		二
古今集餘材鈔		二十
和歌拾遺六帖		
拾遺考要		
後選考		
三四代抄		二
新勅撰考	一名雜新勅撰 又新勅撰評抄	五
百人一首改觀鈔		五
類字名所補翼抄	旧名勝地一覧	七
同名所外集		九
勝地吐懐編		二
同異本		四
勢語臆斷		四
源注拾遺		十
漫吟集	自集ノ本ハ一巻有廿巻ノ本ハ門人ノ輯ナルヘシ	二十
河社		五
雜記		一
雜々記		一
和字正濫鈔		五
同要畧		二
年中行事抄		二
冨士百首	二版アリ	一
首書新撰菅家萬葉集		二
真頭俳諧哥		一
三十六人歌仙贊哥		一
宮才人帖	師ノ輯叠也	一
僧盛典		
韻鏡易解		四
韻鏡九弄和解		二
讀書暗心論		二
入定冥祥録		五
冠註籃盬大全		五
伊呂波童蒙抄		三
聖道夜料編		二
韻鏡易解新增大全		五
韻鏡易解易引		一
人定記		二
悉曇字記指南鈔		小
韻鏡易解字子		一
印判秘決集		一
阿弥陀如来出現記		一
籃盬初心抄		二

書名	冊数
僧諦忍	
大光普照集	三
念仏無上醍醐篇	三
念仏醍醐秘要藏	一
阿弥陀如来和讃集注	三
西方十楽手鑑	二
念仏神力傳	二
同追加	一
日本最初念仏法語諺註	一
弘法大師念仏法語直解	一
善導大師行状記	二
合掌叉手本義篇	一
梵網経要解	六
諦忍語録	一
天狗名義考	一
	十二
以呂波問弁	一
盂供施餓鬼問弁	一
蓮花標名録	一
空華随筆	二
僧行願	
号大進　又号如意　後住小野宗侍院　任僧正	
続一切経音義　校閲	十
文鏡秘府論附註	十五
法華経異釈	二
蘇曼多羅声明略釈 (?)	一
註梵字次第記	二
梵漢韻学須知	一
註阿字義	三
精進如意義	一

書名	冊数
花間笑語	四
大進夜話	四
青表紙	五
堪忍袋	一
僧白隠	
名慧鶴　駿州原駅人　俗姓長沢氏　明和五年十二月十一日寂 (?)　年八十四　同六年六月八日　勅謚　神機独妙禅師	
夜船閑話	一
闡提記聞	三
槐安国語	四
遠羅天釜	三
左之母艸	三
荊叢毒蘂	六
宝鑑貽照	一
	十二
寒林貽宝	一
布鼓	五
壁生艸	一
粉引歌	一
毒爪牙	一
薬塩集	二
兎専使稿 (?)	
八重葎	一
同二編　一名十句観音霊験記	三
三編八重葎	二
息耕録普説	一
西賀摇[illegible]	一
辻談義	一
僧大典	
名顕常　字蕉中　一号梅荘	
昨非集	一

書名	卷數
小雲栖稿	十二
同 咏物詩	二
同 手簡	二
同 二編	二
同 三編	一
同 四編	一
萍遇錄	一
諸宗傳畧	一
四昏越俎	四
皇朝叓苑	四
拊本人九事蹟考	一
世說鈔撮	四
同 補	二
同 集成	六
世說匡謬	
唐詩集注	七
	十四
唐詩解頤	七
唐詩擷英補	一
唐詩礎績編	一
金玉詩韻 唐	一
同 明	
峨嵋山月畫說	一
詩語解	二
文語解	五
初學文譚	一
尺牘式	三
同 補遺	一
聯句式	一
歐蘇手簡 校	二
宋三大師尺牘 同	二
學語編	二
九族称呼图	

書名	卷數
三韻通考 校	二
茶經詳說	一
地藏本願經和解	一
續文叓	一
拜說	一
杜律発揮	三
北禪詩艸	六
同 文章	四
初學文軌	二
煎茶訣	一
文脉明辨粹鈔	四
同 附錄	四
平安贅佽記	一
世說新語補 校正	
列女傳 同	
	十七
僧玄光	
獨菴護法集	十四
独菴独語 自警語	
聽語 独菴稿	
俗談 叟稿	
般若心經畫讃 以上七部	
續孝感編	二
儒釈筆陳	一
拾遺三宝感應傳	三
善悪報恩編	十
蒙山對客	二
蒙山對客首昏	三
擬山海經	五
善哉宝訓	二

辨々惑指南　二
永覚晩録首尓　六
睡菴曽稿　一

僧輿隆

華厳探玄記大畧鈔　四十九
五教章破塵記　一
金碑饒舌集　一
諸説弁謬　一
楞厳経問訳畧選　一
楞厳経頭嵌幽玄記　十
倶舎頌疏俗詮　三十
倶舎講花指謬　二十四
因明論惣摂録　一

十六

禅門五派録　一
護身法秘軌　一
持明蔵軌　一
異部宗輪述記冠注　二
二十唯識纂釈　四
三十唯識操觚篇　十七
唯識述記纂釈　三十
雑集論述記纂釈　三十
梵網述記纂註　四
梵網古迹記義畧　八
観経妙宗鈔冊心記　五
盂蘭盆折中閒玄記　三
仏典疏鈔目録　二
維摩経注義心録　十一
起信義記要心畧鈔　八
悉曇字記畧秘訣　一

同開玄章　一
同相傳記　一
声明軌記　三
佛足千輻輪相記　一
浄土論梵語釈　三
法華玄義述聞　三十
法花文句述聞　三十
法花科注復宗記　四十
梵語釈文　一
梵語釈例　一
三蔵梵語集　百
慧琳音義梵語畧　三
可洪音義梵語畧　一
十二吉祥天経梵語釈　一
盂蘭盆経梵語釈　一
法花和鈔　九

十六

法花纂靈記　七
悉曇傳本　十五
十不二指要講録　二
中臣祓纂説傳　十
六根祓會説傳　六
三種祓會説傳　二
法花開題　一
祓神秘傳　三
祓具秘傳　六
神道童子訓　一
神国雜記　一
神事稿　三
神代巻畧注　一
神道問弁　三
諸祓秘傳　三
心御柱集説傳　一

最要中臣本心録　二
百人一首傳心録　二
伊勢物語口訣抄　七
伊語秘傳集　一
神道加持經畧註　一
源氏秘訓傳　三
源語秘傳録　三
源氏四河入海　三十
和歌八十玉籤　一
和歌八代心要　十
古今集至要　七
百人一首三家秘傳　二十
万葉集義訣　十
以呂波本記　二
咏歌大槩註解　二
徒然艸玉葉秘屑　四
十六
神道加持考　一
三種神器傳　四
三社神託故実傳　二
祓詞廣記　二
續感應録　四十
曆學便蒙　二
周易啓蒙旁通記　二
日本遷都考　一
廿五菩薩和讃文心要鈔　五
徒然艸秘決　一
和歌仙傳　三

僧面山

觀音懺法　二

永平家訓　二
永平得度畧作法　一
吉祥草　一
天童如浄行録　一
釈氏洗浄法　一
洞上唱礼法　一
同僧堂清規行法鈔　五
同考訂　二
建撕記　一
梵網素本口訣　一
洞上夜明簾　一
頌古稱提　二
宝鏡三昧吹唱　一
正法眼蔵渉典録　十
續唱礼法　一
若州永福和尚説戒　二
十九
羅漢講式
同應驗傳　二
天堂浄禅師攴畧　一
諸堂安像記　一
得度或問　一
句中玄　一
衆寮箴規聞解　二
大智禅師偈頌聞解　三
普勧坐禅儀聞解　一
亀鑑文聞解　一
典坐教訓聞解　一
學道用心集聞解　二

僧大潮　名元皓

書名	巻数
松浦詩集	三
魯寮詩偈	一
同文集	四
同尺牘	二
西溟餘稿	三
明四大家文選抄	三
僧無隱　名道費	
心學典論	二
無孔笛	三
雜華集	三
金龍尺牘	一
無隱語録	
慶堂頌古	一
	二十
同偈頌	一
僧潮音	
指月夜話	七
弁天三部經畧疏	四
護仏神論	一
語録	二
觀音感通傳	三
聖徳太子傳話	一
不動經要解	二
五憲法旨合	一
務海南針	一
潮音禪師録	二
大成經破文荅釈篇	一
僧高泉　名性潡　福州人也	
扶桑禪林僧宝傳	十
續扶桑僧宝傳	三
東渡諸祖傳	二
東国高僧傳	十
洗雲集	十
翰墨禅	二
法苑畧集	二
仏国高泉禪師録	八
高泉禪師語録	二
有馬温泉記	一
山堂清話	三
	二十一
僧恵空	
実語童子教諺解	三
年済拾唾	二
徒然艸参考	八
梨窓随筆	二
閑窓和筆	二
首書心經科考	四
首書圓通章	一
諸法音鈔	十
原人論発微録	二
盂蘭盆經便蒙	一
観音經霊験記	一
講餘録	一
節用集大全	十五
自信録	一

書名	卷數
暇目操觚	一
無盡燈	一
淨土策進	一
病中法語	一
待然艸百年精粹	一
元亨釈書和解	十三
淨信錄	一
專修專念抄	二
他力頌解	二
伊呂波字考錄	二
僧聞證	
三輪玄義誘蒙	四
唯識論畧解	十
同玄譚	一
同三十頌畧解	一
百法問荅私考	十二
	二十二
畧述法相義	三
三畧畧解	三
啓蒙雜記	一
俱舍論綱要	二
小乘拔萃	二
五經箇註	一
科註往生論	一
科註畧論	一
科註大原問荅	一
大原問荅弁釈	一
釈論標槩	二
大經異訳對映	一
當曼叓相便覧	二
無門關時習	一
外宗義	一
六即誘蒙	一

書名	卷數
發微事考	一
蕅聚畧解	一
羯摩畧解	一
六物畧解	一
淨土便蒙	五
圓覺經畧解	三
四教義畧解	三
盂蘭盆經畧解	一
僧文雄 字綜然 号無相	
磨光韻鏡	二
同後編	五
韻鏡律正	
韻鏡至要錄	一
	二十三
翻切伐柯編	一
三音正偽	二
古今韻括	
廣韻字府	
九弄弁	一
經史莊嶽音	
字彙莊嶽音	四
和字大觀鈔	二
專雜甄陶篇	一
非出定後語	
磨光韻鏡餘論	三
僧法忍	
正源林	三十
神代私記秘要集	

書名	巻数
經圓論	
裝束指掌	
天經或問不審正義	
天台四教義要云撮抄	十
阿弥陀經疏記決疑	
和讃法の玉章	
傍咏本願和讃	一
日本孝教	十
ぬしかゞ見	三
女中鏡	
女中掟	
女中大學	
續人名	十
月の光	一
安心要決	一
安心往生鏡	一
續人名　息子巻	一
同　遊女屋巻	一
同　遊女巻	一
同　御成敗巻	一
同　農巻	
僧　大我	
新撰念仏和讃	一
唯稱安心鏡	二
唯称問律決	二
辟魔決	一
阿弥陀經畧纂	二
吉水辟邪訓疏	一
專修念仏祈禱論	一
專修解或論	一
真宗大僧正傳	一
義奴傳	一
楠石論	一
紫朱論	一

二十四

書名	巻数
浄業論	一
知足論　本仏神儒道	三
辨惑編　審天命人情	一
大學考　正制儀親氏	二
春遊興	一
秋遊興	一
費蕃戯歌集	二
玉石論	二
金鍮論　判聖賢愚品	一
仁義論	一
圓教論	一
芝遊談	一
東海行	一
僧性均	
無量壽經欣厭鈔	四
松戸隨筆	一
真宗勸戒集	一
追薦要決	一
新撰發心傳	二
蓮門詮要編	二
明遍僧都一紙法語謗注	一
台宗復宗決	一
俱舍論頌疏資講鈔	二十
西域通路志	五
辟難驗非	一
追薦要決資講鈔	二
性學開蒙注	二
二十唯識頌解	二
梵網古迹玄譚	一

二十五

書名	巻数
法相義微考	三
制識集後編	二
阿弥陀經欣厭鈔	三
台浄念仏復宗訳	一
折衝齋雷父斉弁記	一
遺身往生傳	一
僧雪岜厳 名実頓 又号巌雪 字覚道 号玩世道人	
唐詩訳説 古詩之部	四
同律之部	五
同絶句之部	三
唐詩笑	一
勢陽風雅	二ノ
詩海錦帆	八
詩門一覧	
増補唐詩礎	
浄土百咏	一
同二編	
閑居放言	
唐詩結綱	四
大東名勝詩集	二
孰字千字文	一
僧西順	
九代抄	七
十一代抄抜啓	四
廿一代名歌集要	六
夫木抄抜啓	四
同拾穂抄	十五
續古今新葉風雅抜啓	三
歌林名所考	五
僧似雲	
年並艸 写本	二十
續	
葛城百首	一
十百首	二
詞林拾葉	一
窓の曙	二
磯の波	二
奥州紀行	二ノ
西行舊跡記	一
似雲類題 一 并後	二
僧佚山 字黙隠	
小篆千字文	二
補爾千字文	一
三躰廣千字文	一
古篆論語	十
傳家宝孤白	二
篆躰異同歌補爾	一
僧恵岳	
万葉集選要抄 常州雨引山前住 名俊道	九
万葉集撮要	一

万葉集傍註　二十

枕辞異名註

萬笈堂書目

蔵書目録　英遵撰　五冊

[illegible]

堂梓行

活字板目録　英遵撰　二冊

[illegible]

日本金石年表　柴邊　一冊

古板本目録　柴邊　一冊

釋氏叢書目録　柴邊　一冊

物語目録　柴邊　一冊

本朝近代詩家詩文目録

二編嗣出

南宋

[illegible]

書肆　嵩山房主人謹記

天保七年五月

江戸書林　本石町十軒店　英　大助

銀町三丁目　小林新兵衛

日本漢文史籍叢刊

第五輯

目錄

[General Information]
□□=14664141
SS□=14664141